

どんな要因がアカデミック・ハラスメントを不快にするのか 2023

京都大学文学部 社会学研究室

2023 年度 社会学実習 報告書

太郎丸 博 編

2024 年 3 月

目次

調査の概要・データの概観・分析結果	太郎丸 博	1
アカハラに関する男女の意識の相違	ファッロヒー ラムティン	27
水4 社会学（実習） 期末レポート	阿南 佳汰	39
サポートの種類の多さがハラスメントの不快感 に与える影響の分析	栗田 朋香	44
アカハラ被害の分類と不快感の関連	根本 千裕	50
アカデミック・ハラスメント加害者の属性が、 被害者の不快感に与える影響について一権力の観点から 大学生・大学院生における性別とアカハラ に対して感じる不快感の差	佐伯 涼翔 寺田 陶華	56 74
学生の研究意欲によるアカハラ不快感の違い	小坂 優	83
アカハラの種類と被害者の性別による不快感の違い 加害者の地位と名声は、アカハラの不快感に どの程度影響するか	小山 柊 小林 夕莉	92 99
日頃の大学との関わりが不快感に及ぼす影響	松元 萌里香	110
大学生におけるアカデミックハラスメント被害の相談行動 に影響を与える要因の調査:大学の先生や相談窓口の利用に 関する性差と学年差の分析	森 万結佳	115
加害者の知名度がアカハラの不快感に与える影響	深尾 輝	120
加害者と被害者の性別がアカハラの不快感にもたらす影響	石丸 灯	128
被害者の学年とアカデミック・ハラスメントの 不快感の関係について	前田 凜	135

被サポート感がアカハラの不快感に与える影響 に関する一考察	漕江 仁衣菜	140
アカデミック・ハラスメントの不快感に 対する当事者意識の影響	谷 叶望	149
アカハラの不快感と被/加害者の性別の 組み合わせとの関係について	谷本 雄紀	160
アカハラ被害者の進路希望と不快感の関係	梅木 星南	170
学部生と大学院生によるアカデミック・ハラスメント の受け取り方の違い	尤 怡辰	173
アカデミック・ハラスメントのタイプと生徒の ジェンダーの不快感への影響の検討	李 欣慰	182
加害者の立場・知名度とアカハラ不快感の関連	林 小都音	189
調査票		197
単純集計表		242

調査の概要・データの概観・分析結果

太郎丸博

2024-03-28

1 問題: どのような要因がハラスメントを不快にするのか

アカデミック・ハラスメント（以下アカハラと略称）とは、「大学の構成員が、教育・研究上の権力を濫用し、他の構成員に対して不適切で不当な言動を行うことにより、その者に、修学・教育・研究ないし職務遂行上の不利益を与え、あるいはその修学・教育・研究ないし職務遂行に差し支えるような精神的・身体的損害を与えることを内容とする人格権侵害をいう」（東京大学役員会 2006）。このようなアカハラを減らすことは、重要な社会的課題である。そのためには、どのような場合にアカハラが起きやすいのかについて知る必要がある。アカハラについてはほとんど研究がないが、セクシュアル・ハラスメント（以下セクハラと略称）の原因については一定の研究結果がある。アカハラとセクハラは重なる部分も多く、セクハラに関する知見は、アカハラにもある程度応用できると思われる。セクハラの原因として加害者のパーソナリティが指摘されることもあるが（Fast and Chen 2009; Halper and Rios 2019）、加害者の無知や想像力の欠如が原因となることも知られている（牟田 2013）。つまり、自分の行為が相手にとってどれだけ不快なのかがわかっていない、ということがセクハラの原因となりうる。それゆえ、どのような行為がどの程度ひとを不快にするのか理解することは、セクハラ防止に役立つ。同じように、どのようなアカハラ行為がどの程度ひとを不快にするのか理解することは、アカハラ防止にも役立つと考えられる。

2021 年度と 2022 年度の調査実習でセクハラについてわかったこと

上記のような趣旨にもとづき、2021 年度と 2022 年度の調査実習では、セクハラに加害者の特徴と被害の種類を示すヴィネットを提示し、どの程度不快かを評価しても

らう、要因配置サーベイ実験を大学生向けに行った (太郎丸 2022, 2023; 太郎丸 and 張 2023; 太郎丸, 横澤, and 沼田 2022)。2021 年度の調査結果から、a) 加害者が学生の場合よりも教授の場合のほうが、b) 親しい場合よりは親しくない場合のほうが、c) 加害者が女性の場合よりも男性の場合のほうが、d) 加害者が同性愛者の場合よりも異性愛者の場合のほうが、e) 対面でのセクハラよりもオンラインでのセクハラのほうが、有意に平均不快感が高いことが示された。また、性的意図が推測されるような加害者のほうが不快感が高まる可能性も検討されたが、そのような傾向は見られなかった。2022 年度の調査結果では、2021 年度の a), b), c) の傾向を再確認するとともに、f) 回答者がハラスメントを受けたときに周りからのサポートを期待できない場合、g) 回答者の感情抑制規範が強いほど、不快感が強まることも分かった。また、h) 加害者の年齢の効果 (35 歳と 55 歳の違い) は、職位の効果 (教授と非常勤講師) よりも大きいことが明らかになった。

2023 年度の実習では、上記のようなセクハラの不快感の促進／抑制要因がアカハラでも同じように働くのか検証した。また、アカハラの場合、学業にコミットメントしている人のほうが不快感が大きいと考えられるので、これについても検証してみた。これまでの研究でも、回答者はすべて学生で、ヴィネットで示される加害者は学生か教員だったので、セクハラであると同時にアカハラでもあるようなハラスメントの不快感を調べてきたと言える。今回の調査では、通常セクハラとは考えられないようなハラスメントに対する質問も多数盛り込んで、性的なアカハラと性的でないアカハラの共通性と違いを浮き彫りにすることも目的としている。

2 授業と調査の概要

仮説と要因、ワーディングの決定

授業ではまず、アカハラの基礎知識に関する文献や、昨年度の分析結果を読んでもらった。その後、どのような条件下でアカハラの不快感は弱められたり、強められた

りするのか、行為の主体や被害者との関係性、場所など、さまざまな要因について、学生にブレイン・ストーミングしてもらった。さまざまな要因が提案されたが、その中から自明性や社会学的意義などを考慮して、私が最終的に以下の 4 つの要因を選んだ。

1. 加害者の性別（男／女）
2. 加害者の年齢（37 歳／52 歳）
3. 加害者の職位（非常勤講師／教授）
4. 被害の種類（お尻を触られた／異性の好みを聞かれた／自分の書いたレポートを淡々と批判された／自分の書いたレポートを大声で批判された／「お前はバカだ」と言われた／卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた／研究の相談をしたが無視された。／奨学金の推薦書を書いてもらえなかった／無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた／就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった／自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された／自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた／態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた）。

アカハラの種類については、長澤 et al. (2019) を参考にした。2021, 2022 年度の調査との違いは、

1. 2021, 2022 年度調査では、加害者が学生の場合と教員の場合を想定したが、2023 年度調査では、加害者はすべて教員とした。これは年齢の効果と職位の効果を識別しやすいからである。また、性的でないアカハラの場合、加害者は教職員と考えられる場合が多いからでもある。もちろん性的でも性的でなくても学生がハラスメントの加害者となる可能性はあるので、悩んだのだが、前回とは違う設計を試してみることにした。
2. 加害者との親しさという次元を、2023 年度調査では削除した。2021、2022 年度調査では、親しいと不快感が下がる場合が多いが、逆に無視するようなハラスメントの場合は親しい相手だとむしろ不快感が上がる、という結果が繰り返し確認されており、これ以上親しさの効果を調べる価値はあまりないと判断した。
3. 2021 年度調査では被害の種類は 3 種類、2022 年度は 10 種類、2023 年度は 13 種類であり、被害の種類をさらに増やした。これは被害の種類によって、他の変数が不快感に及ぼす効果が変わってくる、つまり、交互作用効果があると考えられる学生が多数いたからである。

リード文や選択肢のワーディングは、2021、2022 年度と同じ、回答者も 2021、2022 年度と同様に男女の学生とした。これはこれまで行ってきた調査データとの比較可能性を高めるためである。

調査の概要

上記のような要因やワーディングの検討のために1回プリテストを行っている。受講学生たち自身に回答してもらったので、厳密にはプリテストとは言えないだろうが、彼らも対象者の母集団に含まれているので、十分参考にはなった。その際に回答に要する時間も計っている。本調査とほぼ同じ内容で18個のヴィネットに回答してもらい、所要時間は表1のようになった。26/29 = 89% が6分以内で回答している。受講学生は真面目に授業に取り組んでいれば質問の内容をあらかじめおおむね予想できたはずなので、本調査で一般の回答者が要する時間はもっと長いと予想されるが、18個ぐらいまでなら尋ねても大丈夫そうだという感触をえた。

表1 プリテストでの回答時間の分布

回答時間	人数
0～3分	11
4～6分	15
7～9分	3

3 データ

調査票は6種類作り、回答者の誕生月で割り当てた（表2参照）¹。2月のように日数の少ない月もあるし、月によって出生率の差もあるので、完全に等確率ではないが、回答者が同じ確率で3つの調査票に割り当てられているという帰無仮説は棄却されない ($X^2 = 10.1, df = 5$)。

¹ 正確には、[Google Form](#) のセクションと回答によって質問や質問順を分岐させる機能を使い、誕生月によって、ヴィネットを評価してもらう質問をする6つのセクションのいずれかに、回答者を割り振っている。

表 2 回答した大学生の基本属性

性別	学年	大学	調査票
女 :230	1 年生 :31	京都大学:174	A 票 1,7 月生まれ :81
男 :213	2 年生 :33	大阪大学: 25	B 票 2,8 月生まれ :53
その他: 8	3 年生 :159	同志社 :17	C 票 3,9 月生まれ :76
NA's :3	4 年生 :76	東大 :16	D 票 4,10 月生まれ:89
	研究生、交換留学生等: 15	早稲田 :14	E 票 5,11 月生まれ:82
	大学院生 :140	(Other) :149	F 票 6,12 月生まれ:73
		NA's :59	

調査対象者は大学生で、大学院生や研究生も含む。京都大学の学生が 44% で、次に多かったのが大阪大学の 6% だった。2023 年度に京都大学文学部の社会学実習を履修した学生に、友人・知人に調査依頼するように指示した。また、私が担当する講義の受講生にも回答を依頼した。回答は、2023/10/11 から 30 のあいだに回収された。回答者の属性の分布は表 2 のとおりである。

表 3: 回答を依頼した友人知人数の分布（分析の単位は受講学生）

依頼人数	受講学生数
5～19 人	13
20～39 人	3
40～59 人	5
60～79 人	2
80～300 人	7

SNS 等でも回答を依頼し、拡散されているので、正確な依頼数は不明だが、概算で総数 1871 人（一受講生あたり平均 62.4 人）に依頼し、有効回答数は 454 人で、回収率は 24%であった。表 3 は、受講学生（30 人）を分析の単位として集計した、

依頼した友人・知人数の分布である。大半の受講学生は 59 人以下に依頼しているが、300 人以上に依頼した者も 1 人いる。

実験計画の概要

性別、学年などのすべての調査票に共通の質問をした後

あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」

～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

というリード文に続いて以下の例のようなヴィネットを一つの調査票あたり 16 提示した。以下はヴィネットの例である。

- 無名の 52 歳の教授（女）に、「お前はバカだ」と言われた。
- 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

ヴィネットは、上で述べたような 4 つの次元からなる。論理的には $3 \times 2 \times 2 \times 2 \times 13 = 312$ 通りの組み合わせがあるが、回答者の負担やサンプル・サイズを考慮して、16 ヴィネット $\times$ 6 種類の調査票 = 96 種類のヴィネットを選んだ。加害者の性別、地位、被害の種類とその他の変数の交互作用が推定でき、次元間の相関ができるだけゼロに近づくようにヴィネットは選んだ。次元間相関の絶対値は最大で 0.11、平均で 0.03 であった。実験計画の作成には、R (R Core Team 2022) の AlgDesign パッケージ (Wheeler 2019) を用いた。

回答者レベルのアカハラ時不快感に影響する要因として、アカハラ時に期待できるサポートと学業へのコミットメントの 2 種類を尋ねた。

期待できるサポート

アカハラ時に期待できるサポートは、

もしもあなたがハラスメント被害にあったら、次の人たちの中にあなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか

という問いに続いて、

- あなたの家族
- あなたの友人や恋人
- 大学の先生や相談窓口の人
- その他の知り合い等

と提示し、5 件法でたずねた。数値が大きくなるほど期待が大きくなるように 0～4 の整数を割り振った。これらを足し合わせたものを期待サポートと呼ぶことにする ($\alpha = 0.66$)、これらの項目の平均値と相互の相関係数は表 4、表 5 のとおりである。

表 4 期待できるサポート項目の平均値と標準偏差

	家族	友人恋人	先生等	その他
平均	3.33	3.63	2.64	2.44
標準偏差	1.14	0.79	1.18	1.26

表 5 期待できるサポートの項目間相関係数（ペアワイズ）

	家族	友人恋人	先生等	その他
家族	1.00	0.50	0.22	0.26
友人恋人	0.50	1.00	0.28	0.39
先生等	0.22	0.28	1.00	0.43
その他	0.26	0.39	0.43	1.00
女性ダミー	0.08	0.06	0.03	0.03
院生ダミー	-0.20	-0.08	0.02	0.03
京大ダミー	0.14	0.08	-0.03	0.00

学業コミットメント

学業へのコミットメントを測定する項目として、以下の 5 つを用意した。

1. 登校頻度：「ふだんどの程度大学に行っていますか」 0 = “ほとんど行っていない”、1 = “週に 1, 2 日行っている”、2 = “週に 3, 4 日は行っている”、3 = “平日はほとんど毎日行っている”

2. 出席頻度: 「普段、履修している授業に出席していますか」、0 = “ほとんどの授業に出席していない”, 1 = “出席している授業は一部だけで、半分以上の授業にはほとんど出席していない”, 2 = “あまり出席していない授業もあるが、半分以上の授業にはほとんど出席している”, 3 = “ほぼすべての授業にほぼ毎回出席している”
3. 研究興味: 「大学での研究や勉強に興味がありますか」、0 = “興味を持ってない”, 1 = “どちらかと言えば興味を持ってない”, 2 = “どちらとも言えない”, 3 = “どちらかと言えば興味を持てる”, 4 = “興味を持てる”
4. 取得単位: 「単位は順調に取れていますか」、0 = “ほとんど単位はとれていない”, 1 = “とれていない単位が結構ある”, 2 = “少し取れていない単位もあるが、おおむね順調に取れている”, 3 = “単位は順調にとれている”, 欠損値 = “単位をとる必要がない（聴講生、博士課程の院生等の中には単位の要らない人あり）”
5. 研究職志望: 「将来、研究職（大学教員や研究所の研究員など）に就きたいですか」、0 = “研究職に就く気はない”, 1 = “まだ決めていないが、研究職にも興味がある”, 2 = “すでに研究職に就いている、内定している”

表 6 はこれらの相関行列であるが、登校頻度は出席頻度と相関するものの、登校頻度とその他の項目との相関は 0.1 未満である。因子分析（最小残差法 minres (Harman and Jones 1966)）の一因子解でも因子負荷量は 0.13 と小さく、クロンバックのアルファも登校頻度を除いたほうが上がることが分かったので（これらの分析結果は割愛）、登校頻度を除く 4 項目を Z 得点に変換した後、平均した。ただし、欠損値がある場合は、測定されている残りの値の平均値で代用した。これは博士課程の学生や聴講生など、単位をそろえる必要のない学生を、有効サンプルに含めるためである（彼らは取得単位が欠損値である）。4 項目のクロンバックのアルファは、0.56 である。

表 6 学業コミットメント項目の相関係数（ペアワイズ）

	登校頻度	出席頻度	研究興味	取得単位	研究職志望
登校頻度	1.00	0.22	0.06	0.04	0.00
出席頻度	0.22	1.00	0.26	0.41	0.13
研究興味	0.06	0.26	1.00	0.17	0.39
取得単位	0.04	0.41	0.17	1.00	0.10
研究職志望	0.00	0.13	0.39	0.10	1.00
女性ダミー	-0.01	0.18	-0.07	0.12	-0.15
院生ダミー	-0.17	0.21	0.17	0.22	0.38

	登校頻度	出席頻度	研究興味	取得単位	研究職志望
京大ダミー	0.11	-0.26	-0.07	-0.08	-0.01
期待サポート	0.00	0.03	0.07	0.06	-0.05

4 分析方法

従属変数であるアカハラ被害時の不快感には、「まったく不快でない」から「とても不快である」までの 6 つの選択肢に順次 -2.5, -1.5, -0.5, 0.5, 1.5, 2.5 の値をふり、大きくなるほど不快感が大きくなるようにした。

多峰性の検討

以下ではまず、不快感の分布の多峰性 (multimodality) について検討する。社会学で扱う連続変数の分布には様々な形があるが、経験則から言えば、分布の山の頂点は一つであることが多い。これを単峰、または単峰性という。これに対して、分布の山が複数ある場合、多峰、または多峰性という。多峰の場合、サンプルの中に複数の性質の異なる集団があることが疑われる。その場合、全体の平均値や最頻値を計算しても、分布の代表値として意味があるのかがあやしくなってくる。こういった問題は独立変数を統制することで解消する可能性もある。例えば、複数の性質の異なる集団とは有業者と無業者のことで、これらの違いがアカハラ時の不快感に影響を与えており、そのせいで多峰分布になっている可能性もある。この場合、分散分析や回帰分析で有業者ダミーを独立変数とし、それぞれのグループの平均的な不快感や残差の分散を推定すれば、不快感の分布は適切に記述できるだろう。しかし、回帰分析しても残差が多峰性を示す可能性はある。いずれにせよ、回帰モデルを組む前に、従属変数の多峰性について検討しておくことは、データの理解を深めるうえで重要と思われる。

多峰性はヒストグラムを書くことでおおむね確認できるが、サンプリングの際の偶然によって多峰性が生じてしまう可能性もある。今回、個々のヴィネットに回答しているのは、53～89 人なので、回答が「まったく不快でない」または「とても不快である」のどちらかに偏っている場合、回答がまばらなところで偶然多峰性が生じてしまう場合もあろう。そのようなサンプリング等の偶然によって生じた軽微な多峰性は無視してよいだろうが、偶然とは考えられない多峰性がどの程度生じているのか知りたい。そこで多峰性の検定を行いたいのだが、よく知られている多峰性の検定は、連続変数を前提にしており、今回の不快感の評価のように 6 択の変数（つまり離散変数）に応用すると、おかしい結果が出てしまう。そこで、対数線形モデルを使って多峰性の検定をする。

i 番目のヴィネットで ($i = 1, 2, \dots, 96$)、不快感が J ($J = -2.5, -1.5, \dots, 2.5$ の人の数を n_{ij} とすると、

$$\log \hat{n}_{ij} = \beta_0 + \beta_1 \cdot J + \beta_2 \cdot J^2 + \beta_3 \cdot J^3 \quad (1)$$

ただし、 $\hat{n}_{ij}$ は n_{ij} の期待値を示す。このモデルにおいて、 $\beta_2 > 0$ （つまり下に凸の放物線）または $\beta_3 \neq 0$ のとき、 n_{ij} は多峰分布している、と操作的には定義する。この定義では一般的には直感に反する（つまり、山は一つだがこの定義では多峰となる）結果が出てしまう可能性もあるが、このデータでは該当するものは少ないと思われるので、目安として用い、目視で確認して最終的に判断する。

ちなみに、太郎丸 (2023) ではもっと複雑な定義をし、ブートストラップ検定をしていたが、あのやり方は間違っていた。5%水準で単峰であるという帰無仮説を棄却していたつもりだったが、実際には p 値を過小に見積もっていた（つまり、帰無仮説を棄却しすぎており、実際には多峰と判断できる変数はもっと少なかった）。ブートストラップ法の誤用である。

また、今思うと **Finite Mixture Model**（ググると有限混合モデルと訳されることが多い様子だ）、あるいは潜在クラス回帰モデルと呼ばれるモデルを使うほうが適切という気もするが、今後の課題としたい。

回帰分析

回帰分析にはマルチレベル・モデル (REML) を用いる。推定には R (R Core Team 2022) の lme4 (Bates et al. 2015), lmerTest (Kuznetsova, Brockhoff, and Christensen 2017) パッケージを用いた。分析結果のまとめには、knitr (Xie 2023)、texreg (Leifeld 2013)、ggplot2 (Wickham 2016) といったパッケージを用いた。

アカハラ時の不快感は男女で違う可能性があるが、それについては、学生たちの書いた原稿にゆずり、ここでは、京都大学と他大学の学生の違い、および学部生と大学院生の違いについて検討する。京都大学と他大学の違いを検討するのは、ときどき「京都大学の学生は特殊だ！京大の学生のデータを使って分析しても、ほかの大学の学生には一般化できない！」といった批判を耳にするからである。私がこれまで学生の卒論のデータや調査実習のデータの分析結果を見てきた印象では、規範意識やモノの見方や感じ方に京大とそれ以外の大学のあいだにはっきりした差があらわれたことはないので、京大生特殊論は神話だと思うのだが、この神話を信じ込んでいる社会学者が少なからずいる様子なので、太郎丸 (2023) 同様にここでも確認しておく。学部生と大学院生を比較するのは、大学院生のほうが指導教員との関係が密接で、進路や奨学金、研究費などの獲得で教員の影響を受けやすいはずなので、学部生とはアカハラ時の不快感に複雑な差異が生じる可能性も考えられるからである。

ステップワイズ法で交互作用効果を検討

最後に、探索的にすべての独立変数間の交互作用効果を検討する。ステップワイズ法で効果が見られる交互作用効果を探すが、マルチレベル・モデルでは時間がかかりすぎるし、lmerTest パッケージの場合、ステップワイズ法が実装されていない（後退

法は実装されている)。そこで、最小二乗法 (OLS) でモデルは推定し、BIC を最小にするモデルを選ぶ。

5 分析結果

まず、96 のヴィネットに対する不快感のヒストグラムを示したのが、図 1～図 6 である。峰が二つ以上あるヴィネットはけっこうあるが、大半は一方の山が他方の山に比べて非常に小さいか、二つの峰の間の谷は浅いものが多いので、無視しても実害なさそうに見える。しかし、正規分布でないのはもちろん、分散が均一とは言い難い。これは回帰分析の際に悪影響を与えるかもしれない。

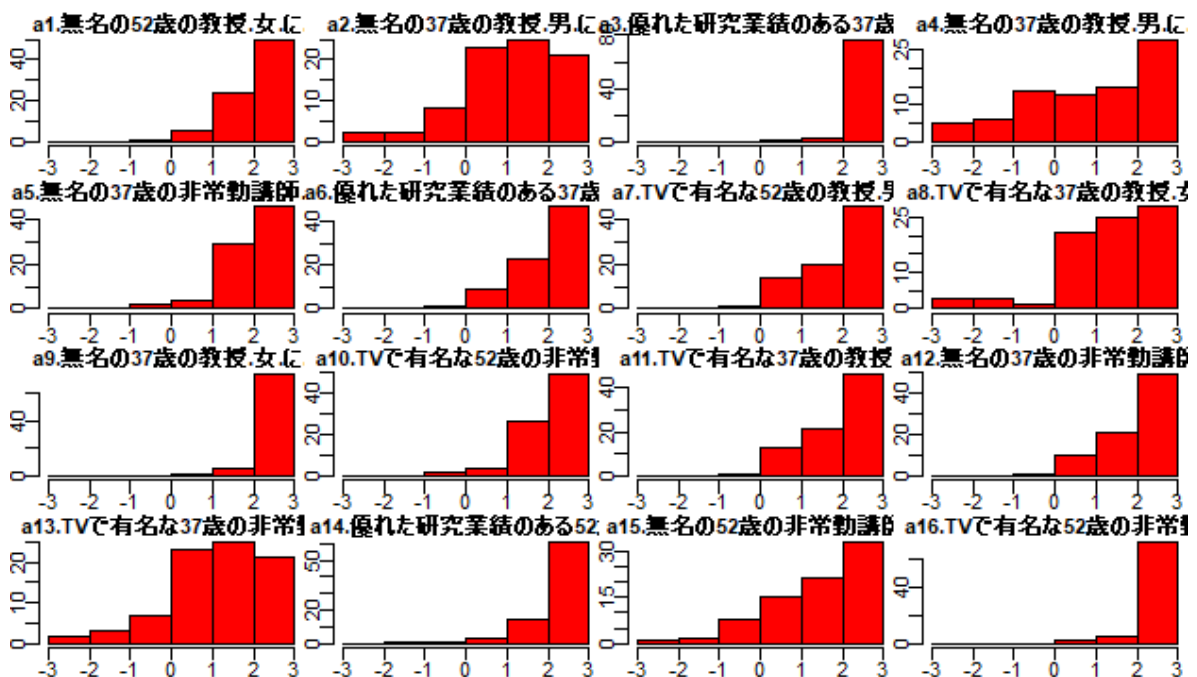


図 1: A 票のヴィネットのヒストグラム

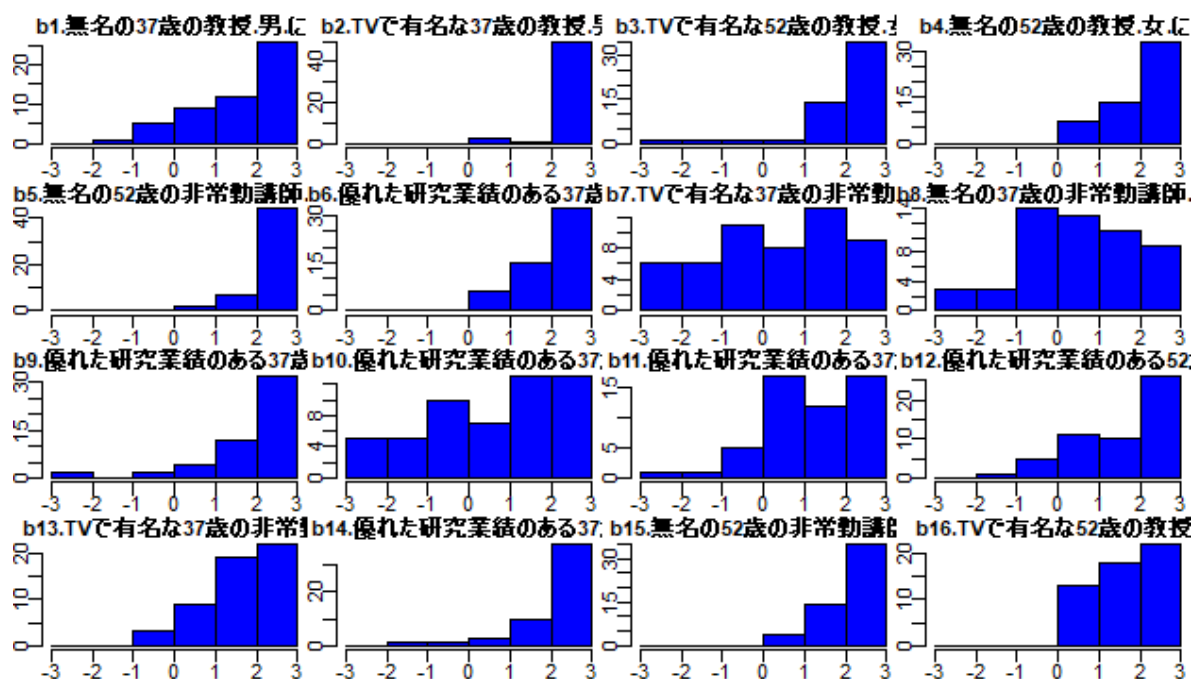


図 2: B 票 のヴィネットのヒストグラム

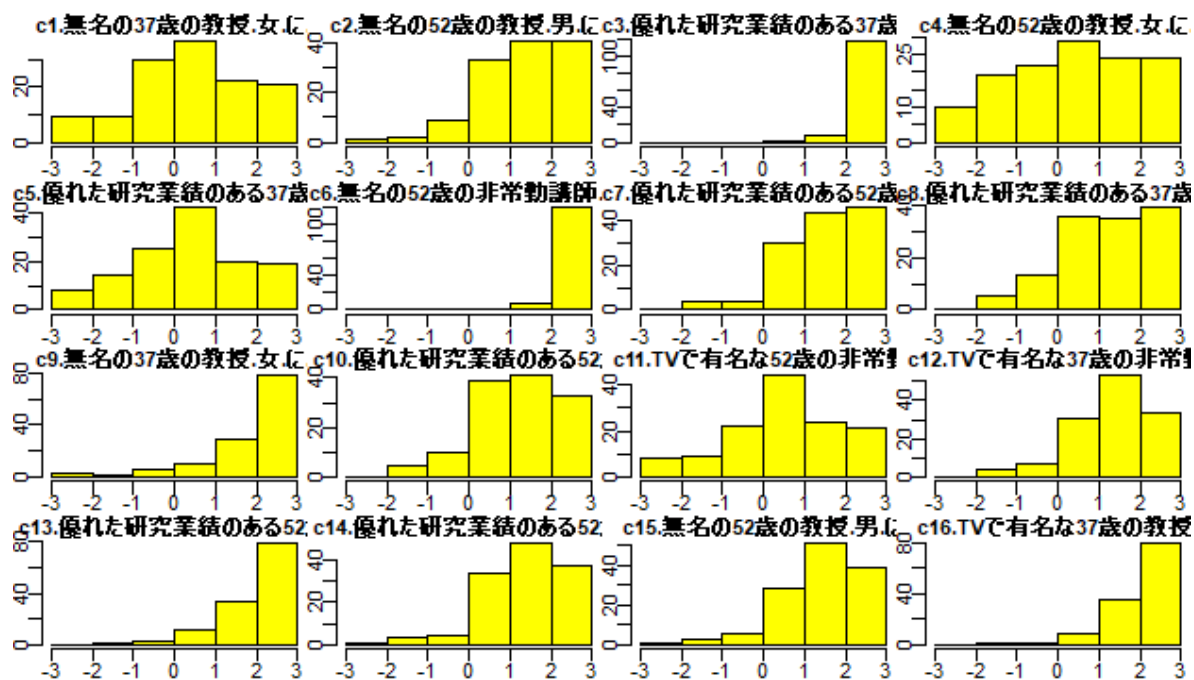


図 3: C 票 のヴィネットのヒストグラム

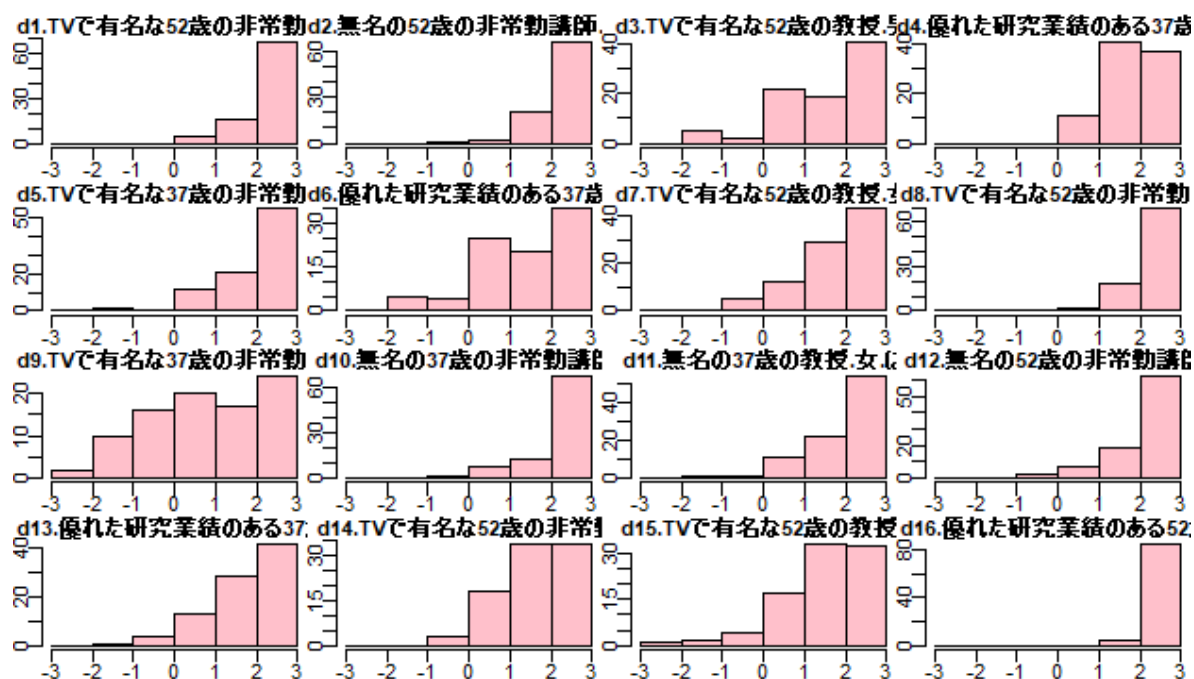


図 4: D 票 のヴィネットのヒストグラム

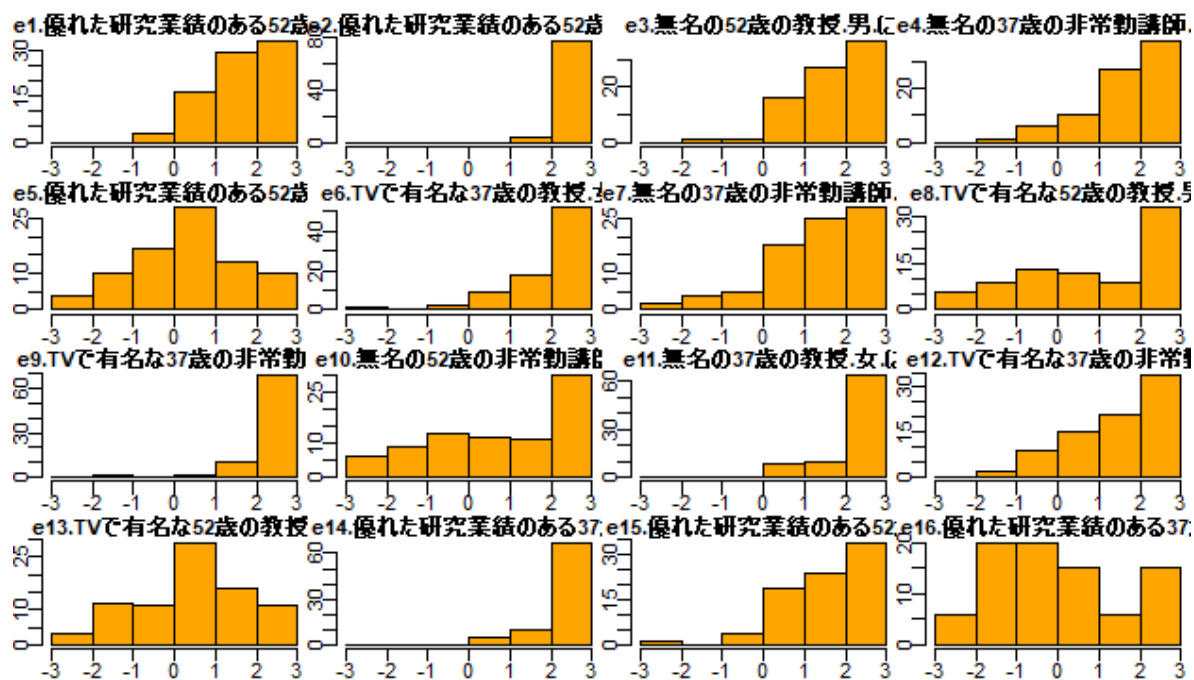


図 5: E 票 のヴィネットのヒストグラム

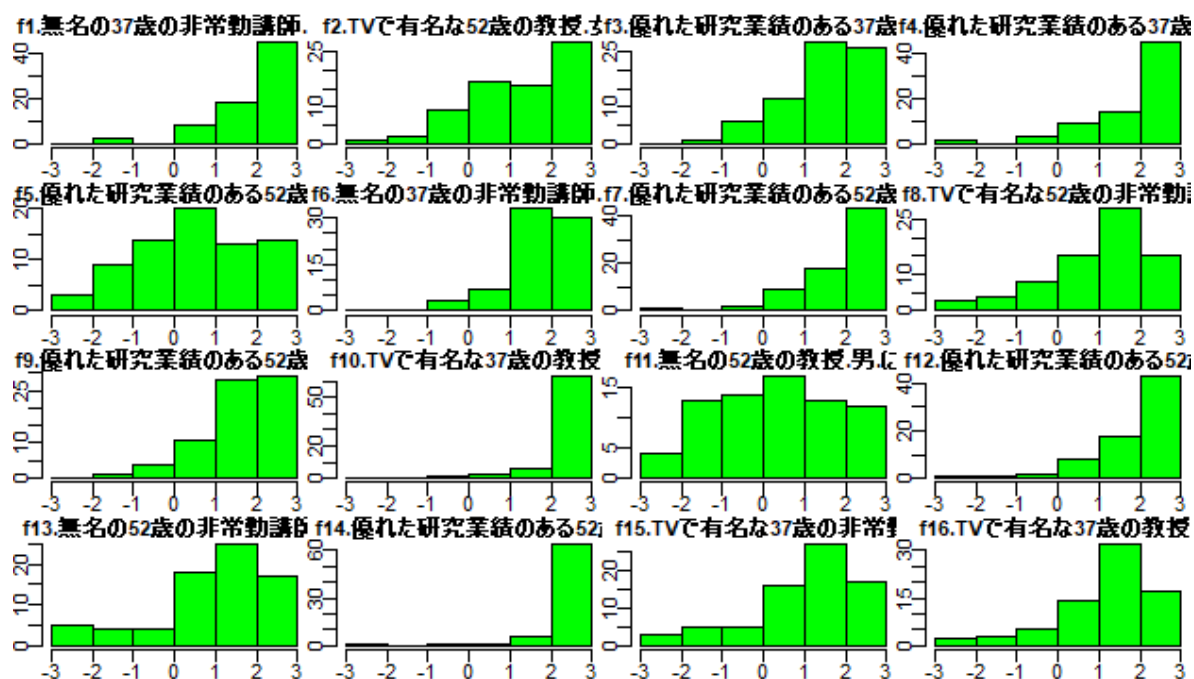


図 6: F 票 のヴィネットのヒストグラム

そこで、方法の節で説明したように、式 (1) の二乗項が 1%水準で有意で正か、または三乗項をモデルに追加することで 1%水準で有意にモデルが改善するヴィネットを調べた（尤度比検定した）ところ、e11, e16, f13, f14, f16 が上記の多峰性の操作的な定義を満たした（推定結果は割愛）。グラフの形を目視で確認すると、e16, f13, f14 は多峰に見えるが、e11, f16 は多峰には見えない。分布が極端に偏っているせいで二次曲線よりも三次曲線のほうがフィットするようである。

有意水準を 5% ではなく 1% としているのは、検定を 96 回も繰り返すので、全体としての第一種の過誤の確率が上昇してしまうからである。例えばすべてのヴィネットの評価が互いに独立に分布していると仮定した場合、三乗項は母集団ですべてゼロであっても、期待値で $96 \times 0.05 = 4.8$ 回、三乗項は有意になってしまう。有意水準を 1% に設定すれば、 $96 \times 0.01 = 0.96$ 回まで下げられる。

上の多峰性の操作的定義には該当しないが、b7, b10, b11 も山が二つあることがはっきり見える。四次曲線も当てはめてみたが、いずれも四乗項は有意にはならなかった。谷の深さも数人程度なので、無視してよいだろう。

まとめると、e16, f13, f14 は多峰である可能性が高いが、それ以外は多峰とは言い切れない、という結果である。

大学による違い

京都大学とその他の大学の学生で、回帰分析の結果にどの程度違いがあるのか検討してみた結果が表 7 と表 8 である。

表 7 アカハラ時の不快感の回帰分析（切片のみ、大学別）

	全体	京都大学	他の大学
切片	1.54 (0.03) ***	1.45 (0.05) ***	1.61 (0.04) ***
BIC	21241.12	9225.42	12026.66
対数尤度	-10607.32	-4600.70	-6000.95
N	6833	3000	3833
回答者数	384	167	217
Level 2 分散	0.29	0.33	0.24
Level 1 分散	1.19	1.14	1.23

まず表 7 をみると、切片は京大のほうが他の大学よりも有意に大きい ($z = -2.59$, $p = 0.005$)。ランダム効果の分散を比べると、Level 1 の分散は他の大学のほうが大きく ($F = 0.92$, $p = 0.009$)、Level 2 の分散は京大の方がやや大きい ($F = 0.72$, $p = 0.013$)²。レベル 2 の分散の大きさは、アカハラされたときに感じる不快感の回

² ランダム効果は正規分布することが仮定されているので、F 分布で分散比を検定してもよいことにはなるが、実際には正規分布に近似しているとは限らない。分散比の F 検定はロバストではない、つまり正規分布からの乖離が p 値のバイアスにつながりやすいと言われているの

答者による違い（多様性）を示す。レベル 1 の分散は、アカハラされたときに感じる不快感の状況（ヴィネット）による違い（多様性）を示す。京大ではじゃっかん不快感が低く、回答者による多様性が大きい傾向がみられる。昨年度のセクハラของデータでも同じ傾向はあるものの、京大とその他の大学のあいだにここまではっきりした違い、つまり有意差はなかった。

表 8 アカハラ時の不快感の回帰分析（大学別）

	全体	京都大学	他の大学
切片	1.47 (0.18) ***	1.41 (0.32) ***	1.42 (0.22) ***
男性: 女性が基準	-0.11 (0.03) **	-0.13 (0.06) *	-0.11 (0.04) *
性別その他	-0.05 (0.13)	-0.10 (0.21)	-0.04 (0.17)
2～4 年生: 1 年生が基準	-0.11 (0.07)	-0.14 (0.12)	-0.08 (0.08)
院生等	-0.09 (0.07)	-0.16 (0.13)	-0.04 (0.09)
京大ダミー	-0.06 (0.04)		
期待サポート	-0.11 (0.16)	-0.04 (0.29)	-0.13 (0.18)
学業コミットメント	0.01 (0.02)	-0.01 (0.03)	0.02 (0.03)
加害者優れた業績: 無名が基準	-0.05 (0.02) **	-0.05 (0.03)	-0.05 (0.02) *
〃 TV で有名	0.00 (0.02)	0.01 (0.03)	-0.01 (0.02)
加害者 52 歳	0.06 (0.01) ***	0.06 (0.02) **	0.06 (0.02) **
加害者教授	-0.02 (0.01)	-0.06 (0.02) **	0.01 (0.02)
加害者男	0.07 (0.01) ***	0.04 (0.02) *	0.10 (0.02) ***
異性の好み: 奨学金が基準	-0.72 (0.09) ***	-0.81 (0.13) ***	-0.64 (0.13) ***
お尻	0.85 (0.07) ***	0.82 (0.10) ***	0.89 (0.10) ***
淡々批判	-0.80 (0.08) ***	-0.92 (0.11) ***	-0.69 (0.12) ***
大声批判	0.66 (0.07) ***	0.63 (0.10) ***	0.68 (0.10) ***
バカ	0.71 (0.07) ***	0.65 (0.10) ***	0.75 (0.10) ***
テーマ変	0.38 (0.07) ***	0.26 (0.10) *	0.47 (0.09) ***
相談無視	0.27 (0.06) ***	0.30 (0.09) ***	0.25 (0.08) **
無給掃除	0.13 (0.08)	0.13 (0.11)	0.14 (0.11)

で、ブートストラップ法などを使用したほうが正確なのかもしれない。しかし、ここでは探索的に違いを見ているだけなので、検定を厳密に行うことにはあまり意味がない。それゆえ簡便な方法である F 検定をしている。

	全体	京都大学	他の大学
就活推薦	0.12 (0.05) **	0.11 (0.06)	0.14 (0.06) *
盗用	0.95 (0.07) ***	0.94 (0.10) ***	0.97 (0.10) ***
情報漏洩	0.77 (0.07) ***	0.69 (0.09) ***	0.85 (0.10) ***
髪引っ	1.21 (0.06) ***	1.22 (0.09) ***	1.20 (0.09) ***
BIC	16499.29	7537.07	9732.46
対数尤度	-7733.39	-3304.48	-4387.89
N	6801	2984	3817
回答者数	382	166	216
切片分散 (Level 2)	1.13	1.09	1.17
異性の好みの傾き分散	2.47	2.17	2.76
お尻 //	1.42	1.24	1.62
淡々批判 //	1.77	1.35	2.06
大声批判 //	1.15	0.96	1.30
バカ //	1.31	1.00	1.51
テーマ変 //	1.30	1.26	1.30
相談無視 //	0.63	0.58	0.69
無給掃除 //	1.61	1.58	1.69
就活推薦 //	0.32	0.30	0.35
盗用 //	1.32	1.23	1.41
情報漏洩 //	1.23	0.99	1.42
髪引っ //	1.03	0.92	1.15
Level 1 (ヴィネット) 分散	0.24	0.22	0.25

表 8 は、京大とその他の大学に関して、独立変数で平均不快感を予測した結果である。京大もその他の大学も係数はほとんど同じである。京大の係数と他大学の係数に有意差があるのは、「加害者教授」だけである ($z = -2.32$, $p = 0.021$ 、他の計算結果は割愛)。これもしらみつぶしに 24 回も検定を繰り返しているのも、実際には帰無仮説のほうが正しいのかもしれない。

表 8 の全体の係数を見ると、被害者（回答者）が女性、加害者が男性のほうが有意に不快感が高い。これはセクハラの場合と同じである。期待サポートは有意にならない。ランダム切片モデルで推定すると有意になるのだが（計算結果は割愛）、表 8 の

ようにランダム傾きモデルでは有意にならないので、ロバストとは言えない。加害者の年齢が 52 歳のほうが 37 歳の場合よりも不快感が高いのは予測通りだが、教授ダミーは有意にならなかった。有名性については、予測とは反対に加害者に「優れた研究業績のある」場合のほうが「無名」の場合よりも不快感が有意に低くなっている。ただ、有意になっているといっても年齢も有名性も係数の絶対値は 0.1 未満であり、大差はない。

学部と院の違い

次に学部生と大学院生のサンプルに関して回帰分析した結果が表 9 である。

表 9 アカハラ時の不快感の回帰分析（学部生、大学院生 別）

	学部生	院生等
切片	1.43 (0.24) ***	1.27 (0.27) ***
男性: 女性が基準	-0.14 (0.04) ***	-0.08 (0.07)
性別その他	-0.00 (0.15)	-0.13 (0.24)
京大ダミー	-0.06 (0.04)	-0.09 (0.07)
期待サポート	-0.06 (0.23)	-0.24 (0.23)
学業コミットメント	-0.01 (0.02)	0.04 (0.04)
加害者優れた業績: 無名が基準	-0.06 (0.02) **	-0.06 (0.04)
〃 TV で有名	-0.00 (0.02)	0.02 (0.04)
加害者 52 歳	0.04 (0.02) *	0.13 (0.03) ***
加害者教授	-0.05 (0.02) **	0.03 (0.03)
加害者男	0.05 (0.02) ***	0.12 (0.03) ***
異性の好み: 奨学金が基準	-0.76 (0.11) ***	-0.60 (0.18) **
お尻	0.81 (0.08) ***	0.92 (0.15) ***
淡々批判	-0.63 (0.09) ***	-1.16 (0.16) ***
大声批判	0.65 (0.08) ***	0.61 (0.14) ***
バカ	0.62 (0.08) ***	0.85 (0.15) ***
テーマ変	0.31 (0.08) ***	0.54 (0.13) ***

	学部生	院生等
相談無視	0.29 (0.07) ***	0.22 (0.11) *
無給掃除	0.08 (0.09)	0.21 (0.17)
就活推薦	0.15 (0.05) **	0.04 (0.10)
盗用	0.86 (0.08) ***	1.18 (0.13) ***
情報漏洩	0.75 (0.08) ***	0.80 (0.14) ***
髪引っ	1.15 (0.07) ***	1.34 (0.12) ***
N	4723	2078
回答者数	267	115
切片分散 (Level 2)	1.08	1.25
異性の好みの傾き分散	2.32	3.08
お尻 //	1.37	1.73
淡々批判 //	1.67	1.99
大声批判 //	1.08	1.30
バカ //	1.14	1.76
テーマ変 //	1.20	1.39
相談無視 //	0.69	0.50
無給掃除 //	1.47	2.30
就活推薦 //	0.30	0.44
盗用 //	1.39	1.26
情報漏洩 //	1.11	1.62
髪引っ //	1.02	1.16
Level 1 (ヴィネット) 分散	0.19	0.34

表 10 学部／大学院別回帰分析の係数（表 9）の差の検定

	学部係数－院係数	Z 値	p 値
切片	0.15	0.43	0.667
男性: 女性が基準	-0.06	-0.79	0.431
性別その他	0.13	0.44	0.657
京大ダミー	0.04	0.46	0.642
期待サポート	0.18	0.55	0.583
学業コミットメント	-0.04	-1.02	0.309
加害者優れた業績：無名が基準	0.00	-0.07	0.941
// TV で有名	-0.03	-0.59	0.555

	学部係数－院係数	Z 値	p 値	
加害者 52 歳	-0.09	-2.78	0.005	**
加害者教授	-0.08	-2.46	0.014	*
加害者男	-0.07	-1.95	0.051	
異性の好み：奨学金が基準	-0.15	-0.72	0.471	
お尻	-0.11	-0.65	0.518	
淡々批判	0.53	2.91	0.004	**
大声批判	0.04	0.26	0.796	
バカ	-0.23	-1.36	0.174	
テーマ変	-0.23	-1.47	0.142	
相談無視	0.07	0.58	0.564	
無給掃除	-0.13	-0.71	0.481	
就活推薦	0.11	1.02	0.308	
盗用	-0.32	-2.06	0.040	*
情報漏洩	-0.05	-0.30	0.763	
髪引っ	-0.19	-1.31	0.191	

表 10 は、表 9 の学部と院の係数の差を検定した結果である。学部の係数から院の係数を引いているので、差が正ならば学部のほうが係数が「大きい」ということである。ただ解釈する際には表 9 を見返したほうがいい。「加害者 52 歳」の係数の差は -0.09 で有意であるが、表 13 を見ると、学部の係数は 0.04、院の係数は 0.13 である。つまり学部生も院生も加害者が 37 歳の場合よりも 52 歳の場合のほうがやや不快感が高いが、院生のほうがその効果が大きい、という結果である。同様に「淡々批判」は正の有意差があるが、学部の係数は -0.63、院の係数は -1.16 である。切片はほぼ同じなので、大学院生は淡々と批判されたときの平均不快感が、学部生よりも低い、と解釈できる。しかし、盗用されたときや加害者が教授の場合の平均不快感は大学院生のほうが有意に大きい、という結果である。

最後にすべての独立変数間の交互作用効果をすべて仮定したモデル (OLS) から出発した後退ステップワイズ法でモデルを選択した結果が表 11 の左のモデル (OLS) であり、これに回答者個人レベルでのランダム効果 (レベル 2) を加えたのが表 11 の右の

モデルである。これを見ると、期待サポート、加害者の地位、加害者の年齢がモデルから除外されている。残った独立変数を見てみると、学業コミットメントと学年、学業コミットメントと京大ダミーの交互作用効果がモデルに残っている。

回帰係数の大きさはどちらのモデルでもほぼ同じである。ただし、標準誤差が異なるので、一方では有意になっても他方では有意になっていない場合もある。マルチレベル・モデルでは交互作用効果はどれも有意にならない。ランダム傾きを仮定すると切片の標準誤差が大きくなるため、個人レベルの係数の標準誤差も大きくなりやすいせいであろう。

表 11 不快感の回帰分析の結果（ステップワイズ法で変数選択したモデル、OLS とマルチレベル・モデル）

	OLS	マルチレベル・モデル
切片	2.01 (0.13) ***	1.47 (0.18) ***
男性: 女性が基準	-0.16 (0.03) ***	-0.11 (0.04) **
性別その他	-0.04 (0.10)	-0.06 (0.13)
2～4 年生: 1 年生が基準	-0.06 (0.05)	-0.12 (0.07)
院生等	-0.20 (0.06) ***	-0.12 (0.08)
京大ダミー	-0.16 (0.03) ***	-0.07 (0.04)
期待サポート	-0.63 (0.11) ***	-0.08 (0.16)
学業コミットメント	-0.14 (0.06) *	0.06 (0.07)
加害者男	0.08 (0.03) **	0.08 (0.01) ***
異性の好み: 奨学金が基準	-0.71 (0.06) ***	-0.71 (0.09) ***
お尻	0.85 (0.07) ***	0.85 (0.07) ***
淡々批判	-0.76 (0.06) ***	-0.79 (0.08) ***
大声批判	0.72 (0.07) ***	0.65 (0.07) ***
バカ	0.75 (0.07) ***	0.70 (0.07) ***
テーマ変	0.41 (0.06) ***	0.37 (0.07) ***
相談無視	0.28 (0.06) ***	0.26 (0.06) ***
無給掃除	0.20 (0.07) **	0.14 (0.08)
就活推薦	0.14 (0.06) *	0.12 (0.05) **
盗用	0.98 (0.07) ***	0.94 (0.07) ***

	OLS	マルチレベル・モデル
情報漏洩	0.80 (0.06) ***	0.76 (0.07) ***
髪引っ	1.24 (0.06) ***	1.20 (0.06) ***
2～4 年生×学業コミットメント	0.26 (0.06) ***	-0.04 (0.08)
院生等×学業コミットメント	0.16 (0.06) *	-0.01 (0.08)
京大×学業コミットメント	-0.16 (0.03) ***	-0.03 (0.03)
R^2	0.28	
N	6801	6801
BIC		16508.41
対数尤度		-7742.36
回答者数		382
切片分散 (Level 2)		1.14
異性の好みの傾き分散		2.46
お尻 //		1.41
淡々批判 //		1.77
大声批判 //		1.15
バカ //		1.31
テーマ変 //		1.29
相談無視 //		0.62
無給掃除 //		1.63
就活推薦 //		0.32
盗用 //		1.31
情報漏洩 //		1.23
髪引っ //		1.03
Level 1 (ヴィネット) 分散		0.24

ランダム効果の分布の検討

最後に、表 8 の全体の推定結果から得られた、Level 1 (ヴィネット) と Level 2 のランダム効果の分布を見てみよう (図 7)。傾きのランダム効果は「異性好み」、「お尻」、「淡々批判」、「大声批判」の 4 つだけしか見えていないが (2 行目との 3 行目の 4 つのパネル)、おおむね左右対称の単峰である。レベル 1 の残差も同様である。しかし、切片のランダム効果は山が 3 つあり、左にすそ野が長く伸びる分布にな

っている。つまり、例外的に不快感が全般に低い人がいるなど、不快感の感じ方のタイプがいくつかある可能性があるということである。これが、上で述べた多峰性を作り出している原因の一つかもしれない。

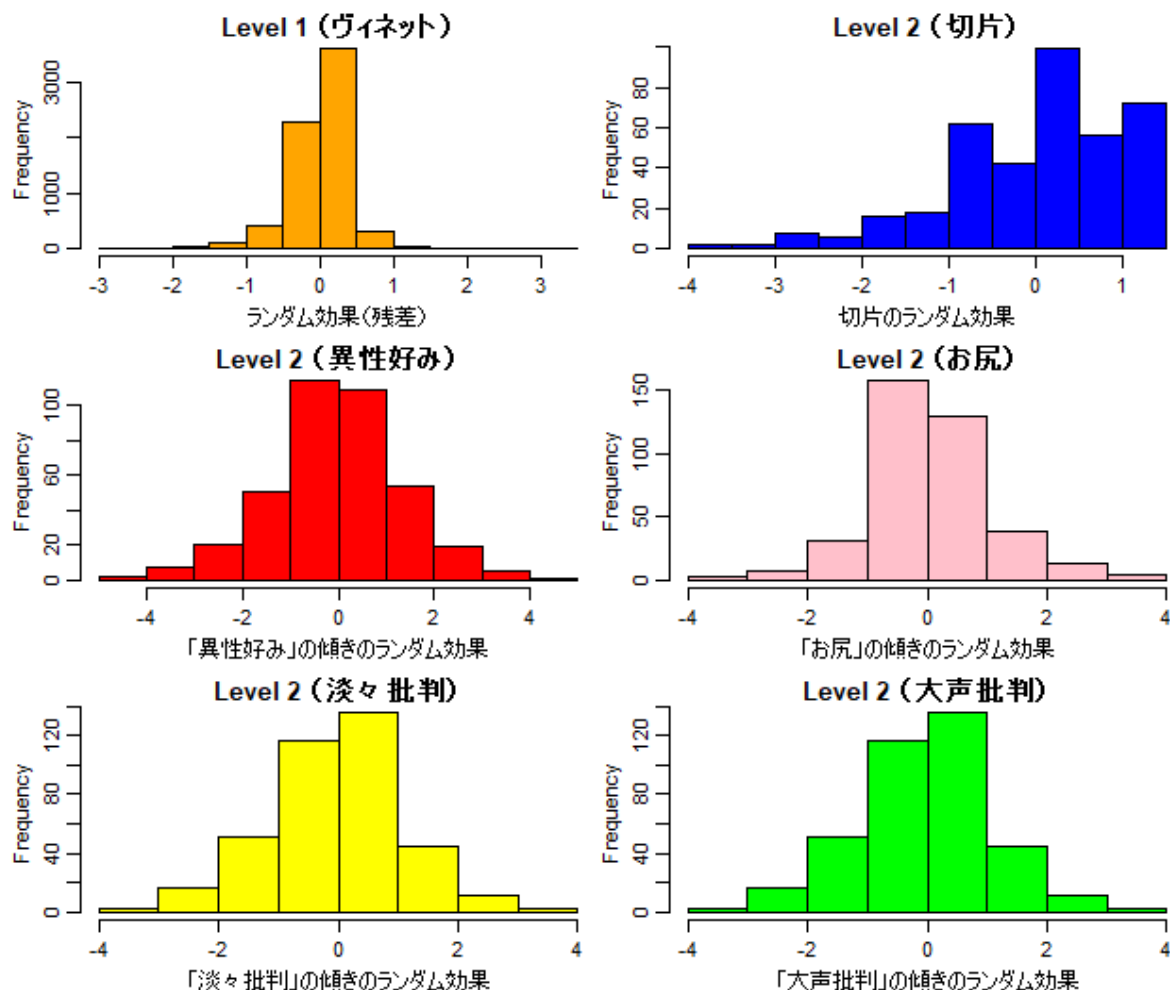


図7 表8（全体のモデル）のランダム効果のヒストグラム

6 まとめと議論

以下が分析結果の要約である。

1. 分布に多峰性はほとんど見られなかったが、顕著に分布が「とても不快」に偏っている場合が多かった。
2. 京都大学と他大学の回答傾向にほとんど違いはなかった。京都大学の学生の中には不快感を低めに回答する人もおり、それが回答者間のばらつきを大きくしていた。

3. 学部生と大学院生のあいだには若干の回帰係数の違いが見られたが、特に一貫した傾向は見られなかった。

実質的な議論は学生たちの書いた章に譲るが、最後に今後の課題を思いつくまま列挙しておく。

4. 現在、不快感は 6 択で評価してもらっているが、最頻値はしばしば「とても不快」であり、天井効果によって不快感が正確に測れていない恐れがある。7 択や 11 択にする、あるいは何か別のベンチマークを想起させる、など何らかの工夫が必要かもしれない。
5. 今回は 13 種類の被害をヴィネットで提示したが、何が提示されるかによって不快感は大きく変わる。しかし、この 13 の被害が現実のアカハラをバランスよく網羅しているという保証はない。実際に起きているアカハラの種類を網羅するような方法が必要である。
6. 今回はランダム傾きモデルを用いたが、13 ものランダム効果を推定することになる。それは $13 \times 7 = 91$ もの分散・共分散を推定することであるが、これほど多くのランダム効果を推定した例を私は知らない。時間がかかるだけで問題なく計算は収束するのだが、本当に正しく推定できているのか、不安が残る。またランダム傾きを仮定すると切片の分散がランダム切片モデルよりも大きくなり、そのせいで個人レベルの独立変数の標準誤差が大きくなる。

文献

- Bates, Douglas, Martin Mächler, Ben Bolker, and Steve Walker. 2015. "Fitting Linear Mixed-Effects Models Using lme4." *Journal of Statistical Software* 67(1):1–48. doi: [10.18637/jss.v067.i01](https://doi.org/10.18637/jss.v067.i01).
- Fast, Nathanael J., and Serena Chen. 2009. "When the Boss Feels Inadequate: Power, Incompetence, and Aggression." *Psychological Science* 20(11):1406–13. doi: [10.1111/j.1467-9280.2009.02452.x](https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2009.02452.x).
- Halper, Leah R., and Kimberly Rios. 2019. "*Feeling Powerful but Incompetent: Fear of Negative Evaluation Predicts Men's Sexual Harassment of Subordinates.*" *Sex Roles* 80(5):247–61.
- Harman, Harry H., and Wayne H. Jones. 1966. "Factor Analysis by Minimizing Residuals (Minres)." *Psychometrika* 31(3):351–68. doi: [10.1007/BF02289468](https://doi.org/10.1007/BF02289468).
- Kuznetsova, Alexandra, Per B. Brockhoff, and Rune H. B. Christensen. 2017. "lmerTest Package: Tests in Linear Mixed Effects Models." *Journal of Statistical Software* 82(13):1–26. doi: [10.18637/jss.v082.i13](https://doi.org/10.18637/jss.v082.i13).

- Leifeld, Philip. 2013. "[texreg: Conversion of Statistical Model Output in R to LaTeX and HTML Tables](#)." *Journal of Statistical Software* 55(8):1–24.
- 牟田和恵. 2013. 『部長, その恋愛はセクハラです!』 集英社.
- 長澤徹・野村恭子・竹之下真一・平池春子・土谷明子・大久保孝義・沖永寛子.
2019. 「医療系総合大学教員におけるアカデミック・ハラスメント尺度の開発」『日本衛生学雑誌』 74(0):1–8. doi: [10.1265/jjh.18033](#).
- R Core Team. 2022. [R: A Language and Environment for Statistical Computing](#).
Vienna, Austria: R Foundation for Statistical Computing.
- 太郎丸博 (編). 2022. 『[どんな要因がハラスメントを不快にするのか](#)』 2021
年度社会調査実習報告書.
- 太郎丸博 (編) 2023. 『[どんな要因がハラスメントを不快にするのか 2022](#)』
2022 年度社会調査実習報告書.
- 太郎丸博・横澤翠子・沼田詩暖. 2022. 「[セクシュアル・ハラスメントにおける不快感の促進要因](#)」『第 72 回 数理社会学会大会報告要旨集』, 66–69.
- 太郎丸博・張亮. 2023. 「[セクシュアル・ハラスメントにおける不快感の抑制要因](#)」『第 74 回数理社会学会大会研究報告要旨集』, 37–40.
- 東京大学役員会. 2006. 『[東京大学アカデミックハラスメント防止宣言](#)』 東京大学.
- Wheeler, Bob. 2019. [AlgDesign: Algorithmic Experimental Design](#). R package
version 1.2.0.
- Wickham, Hadley. 2016. [Ggplot2: Elegant Graphics for Data Analysis](#). Springer-
Verlag New York.
- Xie, Yihui. 2023. [Knitr: A General-Purpose Package for Dynamic Report Generation in r](#).

アカハラに関する男女の意識の相違

6030351465 ファットロヒー・ラムティン

はじめに

近年社会問題として日本で注目を集めた問題の一つがアカデミック・ハラスメント（以降：アカハラ）である。アカハラとは、教育や研究の場で、教員や職員などが、優位な立場や権力を利用して不当な言動をとり、相手に不利益を与える行為のことである。

御興（2012）はそれとパワー・ハラスメントの違いについて以下のように述べる：

“アカデミック・ハラスメントとパワー・ハラスメントの相違は、研究・教育に係わる事項かそうではないかという点にある。パワー・ハラスメントの場合には、職場の上司から部下という形で職務上の権限を利用して行われるものなのでハラスメントか否かの判断はしやすいが、アカデミック・ハラスメントの場合は、研究・教育という個人の自由裁量権がかなり大きい事項を扱うので、パワー・ハラスメントより分かりにくい。”

アカハラの生起実態と背景要因に関しては様々な研究がなされており、多数の要素との相関関係も検討されてきた（例：小田部他、2010）が、被害者に値する学生のハラスメントに関する意識がまだ研究の対象とされていないため、本論では ①アカハラにあった時に、大学生が家族や友達の中、相談相手がいると意識しているか ②アカハラにあうとしたら、どのような場面は不満度がより高いかを明らかにすることを目的とする。

石黒（2018）によると男女を問わず、日本人の若者は家族のメンバーとの関係が希薄になっている代わりに友達との関係が緊密になりつつあるが、男性に比べ、女性の方がトラブルにあった時に友達から相談や情報など、サポートを得られることによってハードルをよりスムーズに乗り越える。

石黒のデータをアカハラに適応すると、仮説（仮説1）として日本人の学生がアカハラにあったときに、男女を問わず、家族よりも友達の方が相談の相手になる人がいるが、

男性に比べ女性の方が友達の中、相談の相手になってくれる人があるという意識が強いと予測できる。

アカハラの場合として、本論では加害者に値する先生の立場と年齢、性別と知名度をそれぞれ学生の性別で検討する。仮説（仮説2）として学生の性別を問わず、先生が異性の場合、セクハラになりやすいかつ、被害者の名誉もきずつきやすくなるため、そして先生が若く、立場も弱い場合や知名度が低い場合、上下関係の実感が希薄になるため、学生がアカハラに耐えられず、結果として不満度が上がると予測できる。

方法

本論では「大学教員の不快な行いに関する調査」という調査票でデータを収集し、分析をしていく。

質問項目は、学生の性別を「男」、「女」と「その他」の中から回答してもらう。相談相手の有無に関して、「もしもあなたがハラスメント被害にあったとしたら、次にあげる人たちの中に、あなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人があると思いますか。」という項目を「あなたの家族の中」、「あなたの友人や恋人の中」、「大学の先生や相談窓口の人の中」と「その他の知り合い等の中」について「いると思う」、「たぶんいる」、「どちらともいえない」、「たぶんいない」と「いないと思う」の5つの中から一つ回答してしてもらうが、今回の研究の目的に応じて、家族と友人について聞く項目のみを分析の対象にした。ハラスメントの種類を以下の13種類の行為を、加害者の知名度（TVで有名な、無名の、優れた研究業績のある）、加害者の性別（男、女）と加害者の立場と年齢（37歳の教授、37歳の非常勤講師、52歳の教授、52歳の非常勤講師）で「とても不快である」「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「まったく不快ではない」の6件法で測定する：

①「お前はバカだ」と言われた ②奨学金の推薦書を書いてもらえなかった ③態度が悪いと言われ髪をつかまれ足をけられた ④異性の好みを聞かれた ⑤就職活動で必要

な推薦書を書いてもらえなかった ⑥自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた ⑦自分の書いたレポートを大声で批判された ⑧無給で先生の部屋を掃除するように命じられた ⑨お尻を触られた ⑩自分の書いたレポートを淡々と批判された ⑪卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた ⑫自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された ⑬研究の相談をしたが無視された)

なお、分析の際不満度を数量化し、数量的に分析を行った。そして、今回の分析では男女別で結果をみることになったため、性別の項目を無回答、あるいは「その他」と答えた者が分析から排除された結果、男生 213 人と女生 230 人からなる合計で 443 人の大学生のデータを分析した。なお、アンケートでは対象者は「学部生」(学年別で1年生から4年生まで)、「大学院生」(学年別で尋ねられていない)、と「研究生、聴講生と交換留学生など」に分けられているが、本論では学生を学年別で分析しない。分析には統計データ分析のアプリ R を使った。

分析ではまず仮説 1 を検証するために回答者の性別を聞く項目と家族と友人で相談の相手の有無を聞く項目の間にクロス表分析を行う。そして、仮説 2 を検証するために、先生の性別でアカハラからの不満度の平均値を回答者の性別を分けて比較する。その後、先生の知名度、先生の立場と年齢別で学生の不満度の平均値がいかにかわるのかを男女別で確認する。

結果

まず仮説 1 の分析は以下のである：

次のページのクロス表 1 が男女別で友人における相談相手の有無を示した表である。

なお、各セルの 4 値が上から順番に人数、行比率の分析、列比率の分析と全体の比率を表す。

クロス表 1：もしアカハラにあったら友達の中に相談できる人がいるか

性別	いると思う	たぶんいる	どちらともいえない	たぶんいない	いないと思う	合計
女性	176	40	9	2	3	230
	0.732	0.174	0.039	0.009	0.013	0.519
	0.470	0.48	0.750	0.200	0.429	
	0.397	0.090	0.020	0.005	0.007	
男性	156	42	3	8	4	213
	0.732	0.197	0.14	0.038	0.019	0.481
	0.470	0.512	0.250	0.800	0.571	
	0.352	0.095	0.007	0.018	0.009	
合計	332	82	12	10	7	443
	0.749	0.185	0.027	0.023	0.016	

この表をみると、友人の中、相談の相手になってくれる人がいる回答者が男女で同様に73%であることがわかる。「たぶんいる」と回答した者も含めると、男性92%、女性90%であり、僅かな2%の差が出るが、両方が非常に高い値を表す。また、いないと回答している者も男女で同様に1%にすぎないため、もし大学生がアカハラの被害にあったら、友達がかなり頼りになる存在であるといえる。

男女別の家族における相談相手の有無を次のページのクロス表2で確認できる:

クロス表2：もしアカハラにあったら家族の中に相談できる人がいるか

性別	いると思う	たぶんいる	どちらともいえない	たぶんいない	いないと思う	合計
女性	160	32	17	16	5	230
	0.696	0.139	0.074	0.70	0.022	0.519
	0.533	0.533	0.486	0.495	0.333	
	0.361	0.072	0.038	0.036	0.011	
男性	140	28	18	17	10	213
	0.657	0.131	0.085	0.080	0.047	0.481
	0.467	0.467	0.514	0.515	0.667	
	0.316	0.063	0.041	0.038	0.023	
合計	300	60	35	33	15	443
	0.677	0.135	0.079	0.074	0.034	

この表をみると、家族の中、相談の相手になってくれる人がいる回答者が女性で 69%、男性で 65%であり、「たぶんいる」と回答した者も含めると女性と男性でそれぞれ 82%と 78%、両方の場合 4%の差があることがわかる。また、いないと回答した人が女性で 2%、男性で 4%にすぎないが、「たぶんいない」と回答した者も含めるとそれぞれ 9%と 12%になる。つまり、微妙に女性の方が男性より家族の中、相談の相手があり、男性ではだいたい 4 人の中、一人が家族に相談の相手になってくれる人がいないといえる。つまり、男女とも家族よりも友人の方が相談の相手になりえると思っている。女性ではこの差が僅かな 8%だが、男性では 14%になり、友情の方がかなり家族よりサポートの資源となっている。さらに、興味深いことに友情関係では男性の方が女性よりもサポートを得られるに対して、家族関係では男性よりも女性の方がサポートを得られると意識している。なお、家族でも友人でも相談の相手がいないと意識している者が男性では 4 人 (1%)、女性では一人 (0.4%) しか存在しておらず、男性の方が 2.5 倍程度の割合であるが、男女でも非常に少ない。

仮説 2 の分析の結果は以下の通りになる：

下の図 1 が先生の性別で学生のアカハラに対する不満の平均値が男女別でいかに変わるのかを表す。

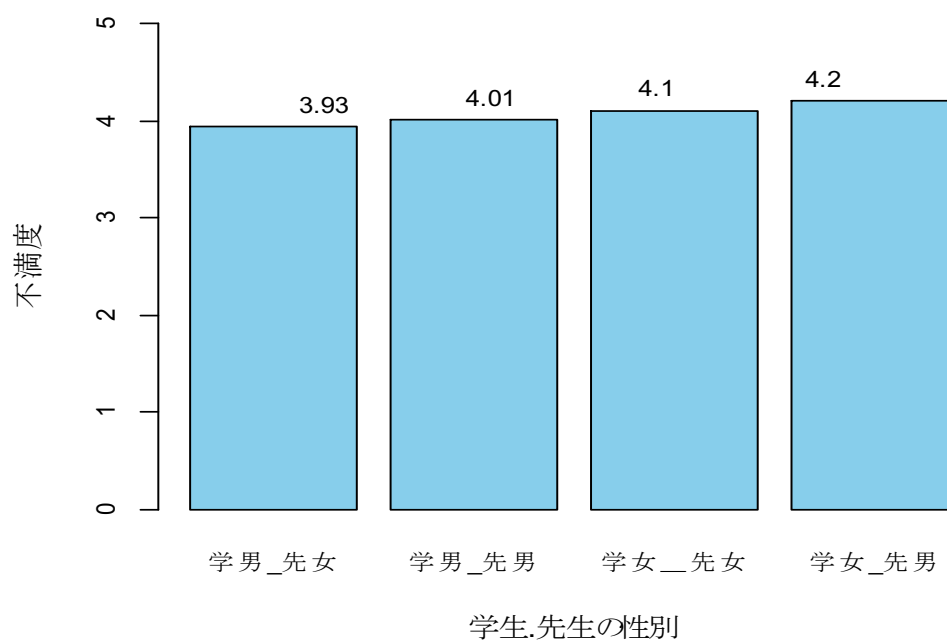


図 1：先生の性別からみた学生の不満度

図をみてもわかるように、学生が男女でも、加害者が男性の方が不満度が微妙に高まり、この差が男性の学生（0.08）より女性（0.11）の方が僅かに大きいですが、男女でもこの差が小さい。もう一つの興味深いことが加害者の性別を問わず、女性の被害者が男性より不満度が高いと言える。この差は先生が男性の場合 0.2、女性の場合 0.16 であるため、加害者の性別よりも被害者の性別の方が不満度に影響があると思える。

下の図 2 が先生の知名度でアカハラに対する学生の不満度の平均値が男女別でいかに変わるのかを提示する。なお、横軸の一字目の男/女が学生の性別、2 文字目が先生の知名度を示し、有は先生が「TV で有名」、無は先生が「無名」、そして業は先生が「優れた研究業績のある」ことを表す。

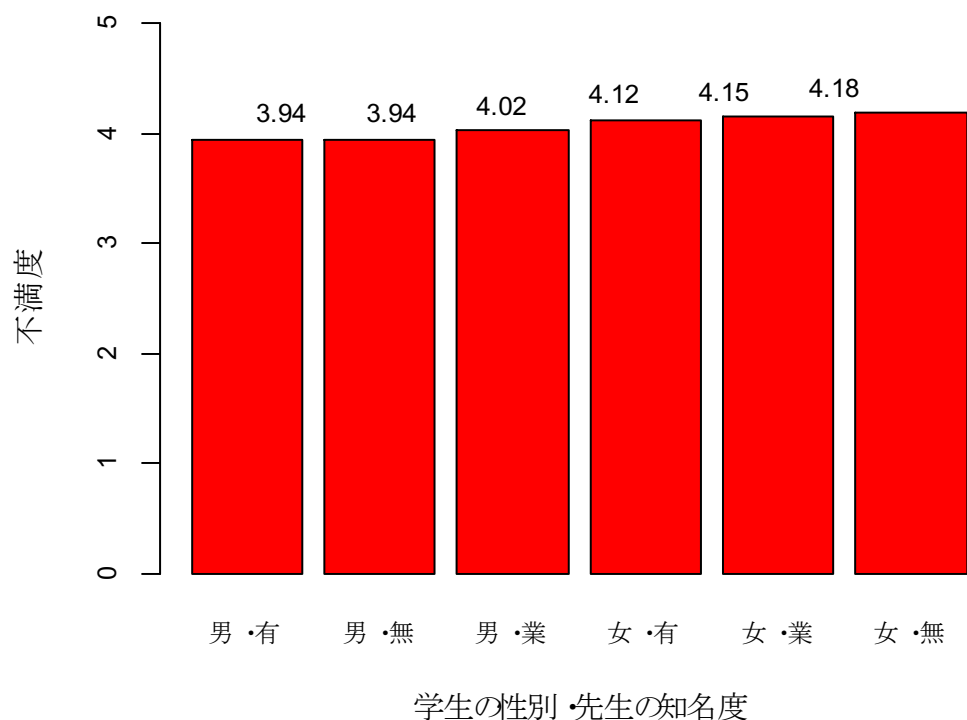


図2：先生の知名度からみた学生の不満度

この図から以下のことがわかる：

第一に、ここでも学生の性別に関わりなく、アカハラからの不満度は先生が有名な場合、他の場合より不満度が低い。男性の学生が無名の先生より優れた業績のある先生の場合不満度が上がるに対して、女性には逆に業績のある先生より無名の先生の方が不満をもたらす。男性の学生では先生が有名と無名の場合不満度がほぼ変わりなく（わずかな 0.001）、業績がある先生であれば差が 0.08 になる。女性の学生では先生が業績のある人であれば 0.3、無名の場合さらに 0.3 差が出る。つまり、男性の学生が先生の性別と同様に先生の知名度で不満度の平均値に最大 0.08 の差が出るが、女性の学生が不満度の平均値に出る最大の差が 0.06 なので、先生の性別で出る差（0.11）のほぼ半分に過ぎない。言い換えれば、女性の学生ではアカハラからの不満

度が先生の知名度よりも先生の性別に影響されるが、男性では同じ程度の影響がみえる。なお、男女でも両方の要素の影響が弱い。

第二に、ここも先生の知名度を問わず、学生が女性の場合男性より不満度が高い。この差は先生が有名の場合 0.17、業績がある場合 0.13、そして有名の場合 0.24 まで達する。

下の図 3 と図 4 がそれぞれ男性と女性の学生では先生の立場と年齢でアカハラからの学生の不満度の平均値がいかに変わるのかを表す。両方の図では、横軸の 2 桁の数字が先生の年齢、漢字が先生の立場を示し、教は先生が「教授」、講は先生が「非常勤講師」の場合を表す。

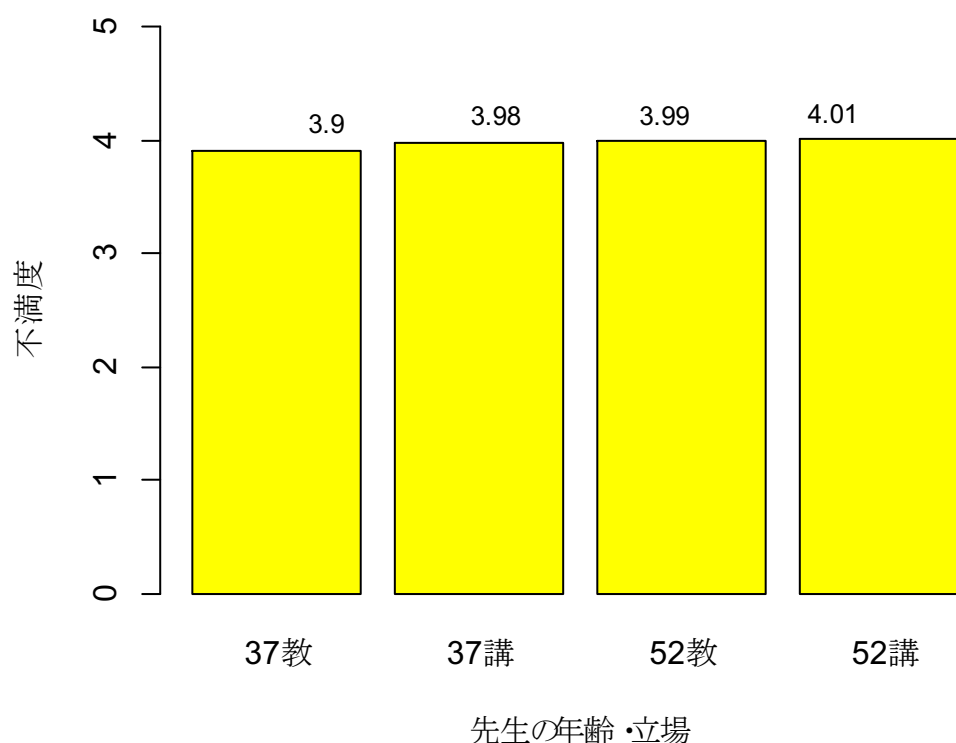


図 3：先生の立場・年齢からみた男性の学生の不満度

この図を見ると、男性の学生には先生の立場よりも先生の年齢が重要であり、先生

が年配の場合、不満度があがることがわかる。そして、先生の年齢を問わず、非常勤講師の場合、教授より不満度が高い。だが、全体的に不満度が最低限の場合（加害者が 37 歳の教授）と最大限の場合（加害者が 52 歳の非常勤講師）、不満度の平均値に出る差が僅かな 0.1 であるため、あまり大きくない。

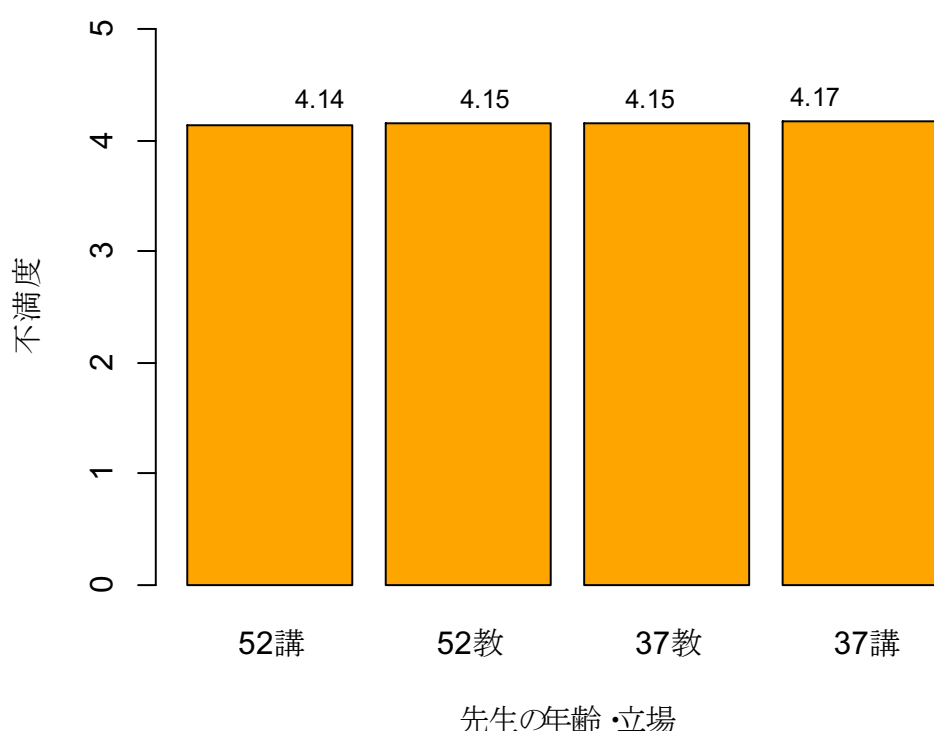


図 4：先生の立場・年齢からみた女性の学生の不満度

上の図 4 をみてわかるように、女性の方が複雑なパターンがある。まず男性の学生と同様に女性にも先生の立場より、年齢の方が重要であるが、男性の学生は先生が年上の方が不満度が上がるに対して、女性は逆にお年上の先生より若い先生の方が不満度が高い。そして、面白いことに（0.01 という非常に小さい差だが）52 歳の先生では教授の方が不満度の増加に影響があるに対して、37 歳の先生では教授よりも非常勤講師の方が不満度の増加をもたらす。ただし、ここも差が 0.02 という非常に小さい差しかみえない。つまり、不満度の平均値にもたらされる先生の年齢と立場からの

最大の影響は女性の学生でも僅かな 0.03 という非常に小さい値である。また、ここでも先生の立場と年齢に関わりなく、男性の学生より女性の方が不満度が高い。

結果のまとめは以下に通りになる：

男性の学生ではこの3つの要素でいうと加害者の性別<知名度<立場と年齢という順番に不満度への影響が強くみえる。これは女性では立場<知名度<性別という順番であるが、男女でも一番影響が強い要素に、不満度の平均値に最大 0.1 ぐらいの差しか出ず、三つの要素のアカハラからの不満度への影響が弱い。

考察：

本論で日本の大学生のアカハラに対する意識について貴重な情報を手に入れられた。

第一に、日本人の大学生はアカハラにあうときに家族よりも友人の方が頼りになることが確認できたため、仮説1が検証された。ただし、男性より女性の方が友人からサポート得られると予測したが、実際に男性の方が友人からサポートを得られたに対して、女性が家族からサポートを得られることがわかった。

第二に、学生の性別を問わず、加害者が男性の場合不満度が上がり、これも異性からのアカハラがより深い不満度をもたらすと予測した仮説を反証する。先生の知名度に関して、学生が男女とも有名な先生で不満度が下がることが確認できた。その後男女でわかれ、男性では無名の先生より業績のある先生の場合不安度が増加するが、女性の学生ではその逆である。先生の立場と年齢についても学生の性別を問わず、年齢の方が重要であったが、男性では年上の先生の場合不満度があるに対し、女性は若い先生で不満度が増加する。これは仮説通り女性では若い先生からのアカハラなら上下関係の実感がなくなり、セクハラにも達しやすいため不満度があがると解釈できるが、男性のデータを理解できるためにより深い研究が必要である。加害者の立場に関しても仮説通り、教授よりも非常勤講師の方が不満度が高いため（女性の学生の 52

歳の先生からのアカハラの非常に小さい差以外に)、立場が弱い人だと不満がより感じられることが考えられる。この3つの要素でいうと男性の学生では加害者の性別<知名度<立場と年齢という順番に不満度への影響が強くみえるが、一番影響が強かった立場と年齢でも平均値に最大 0.11 までの差しか出てこない。これは女性では立場<知名度<性別という順番であり、順番が逆でも、一番強かった加害者の性別で平均値が 0.11 であった。つまり、強い影響が男女でもみえない。

最後に、全体として、男女はアカハラに対する不満の傾向の上下がほぼ同様であるが、全ての場合、男性よりも女性の方がアカハラに対して不満を感じるということがわかった。男女の差が全ての場合 0.13 を超えるため、アカハラのケースでは加害者の条件よりも被害者の性別の方が感じられる不満度に影響があると考えられる。

本論の終わりに、この論文の限界について述べる。まず、アンケートとサンプリングに関して、今回のデータのサンプルは 450 人程度であったため、この論文から出た結論がどの程度代表性かはわからない。とりわけ本調査では対象者のほとんどが関西在住の学生であったため、日本全国に当てはめられかは疑える。特に相談の相手の有無に関して、対象地域の都会度によって家庭内・友情関係の親密度が異なるため、関西（主に京都）と都会度の違う地域について同じことを知るにはより幅広い対象の調査が不可欠である。さらに、今回の調査では回答者の立場が主に大学院生と学部生であったので、被害者の身分からみたアカハラからの不満度を考察する研究も有意義であろう。その際、特に大学院生の中の身分分けが必要になるが、それは今後の課題となる。とはいえ、このような限界が存在しても、まだこの研究からアカハラに関して貴重な情報を手に入れられ、本論がこの分野に新しい道を開けたと思える。

参考文献：

小田部貴子、丸野俊一、舩田亮太、2010、『アカデミック・ハラスメントの生起実態とその背景要因の分析』、九州大学心理学研究、11: 45-56

御輿久美子、2012、『アカデミック・ハラスメントについて』、大阪薬科大学紀要、6:
5-9

石黒格、2018, “変わりゆく日本人のネットワーク ICT 普及期における社会関係の変化”,勁草書房

1,Introduction

近年、大学ではアカデミックハラスメント（以下アカハラ）が問題となっている。アカハラとは、教育や研究の場で、教員が有意な立場や権力を悪用し、相手に不利益を与える行為である。アカハラが学習者の健全な学習及び研究を妨害していることは明らかであり、アカハラを防止するために対応策をとることは必須と言える。しかし、大学には民間企業のような労働基準監督署などの公的な機関のチェックはなく、大学にアカハラの相談窓口が設置されている場合でも、その後の教員との関係が悪化することを恐れて、相談窓口を利用しづらいということが現実である。そのため、アカハラにはどのような問題が構造的に含まれているのかを考えるために、詳しい実態を調査するべきである。

本稿では、アカハラの中でも、教員の年齢が高い場合と低い場合の学生がアカハラに対して感じる不快感の差に着目し、どのようなアカハラをされた場合により不快感が上がるのかについて調べていく。

今回、「研究に関係あるアカハラについては、教員の年齢が高い方が学生の不快感が低く、研究に関係ないアカハラについては、教員の年齢が低いほうが学生の不快感が低い」との仮説を立てた。本稿ではそれを検証していく。この仮説を立てた理由として、「教員の年齢が高いほうが学問や研究に対する経験値が高く、こだわりがふかいと考えられるため、研究に関するアカハラを年齢の高い教員から受けた学生は、このような状況を考慮し、不快感が相対的に低くなるのではないか」ということが挙げられる。一方で、「研究に関係のないアカハラに関しては、自分よりも年齢が離れば離れるほど、そして権力が大きければ大きいほど不快感が相対的に高くなるのではないか」ということも理由として挙げられる。

2,Method

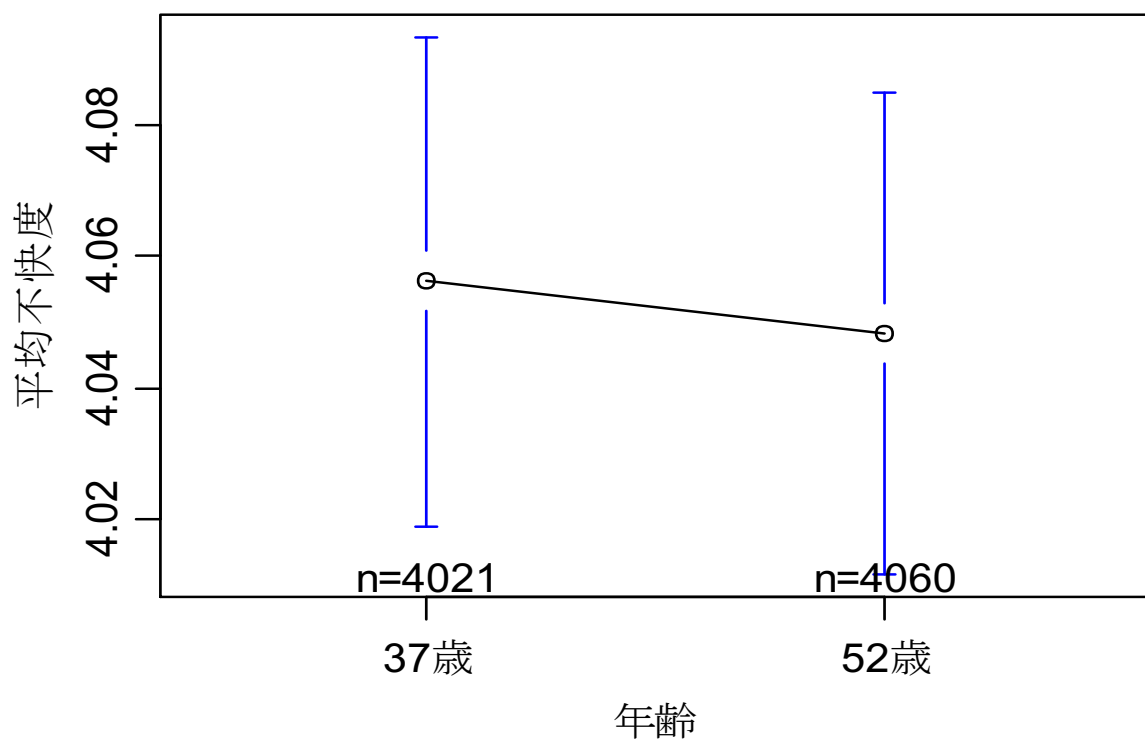
今回、使用するデータは、2023 年度京都大学文学部社会学（実習）の授業において調査したものである。質問では、いくつかの種類のアカハラにおいて、実際に回答者がハラスメント被害にあったときに、加害者の年齢（37 歳または 52 歳）に対して、「とても不快である」「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「全く不快ではない」の 6 つの選択肢から回答してもらう。アカハラの種類は研究に関係のあるものとなないものの 2 種類に分けた。研究に関係のあるアカハラは「自分の書いたレポートを淡々と批判された」「自分の書いたレポートを大声で批判された」「研究の相談をしたが無視された」「就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった」「自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された」「卒論・修論・投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた」と定義し、「『お前はバ

カだ』といわれた」、「態度が悪いと言われ髪をつかまれ足をけられた」「異性の好みを聞かれた」「自分の個人情報をほかの学生に言いふらされた」、「無休で先生の部屋を掃除するように命じられた」、「お尻を触られた」を研究に関係のないアカハラと定義した。

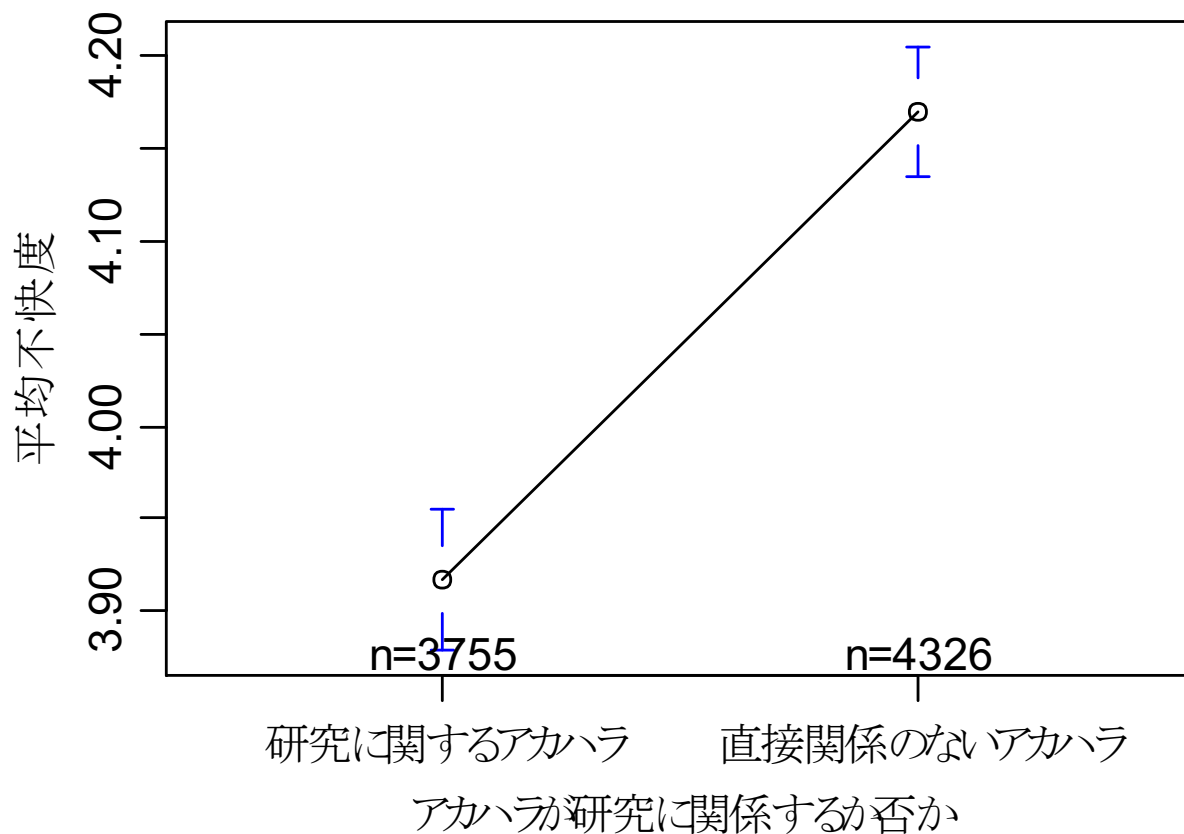
今回の研究対象は、性別の「その他」を排除した、男性 213 人、女性 230 人、計 443 人であり、分析ソフトは R を使用した。

3,Result

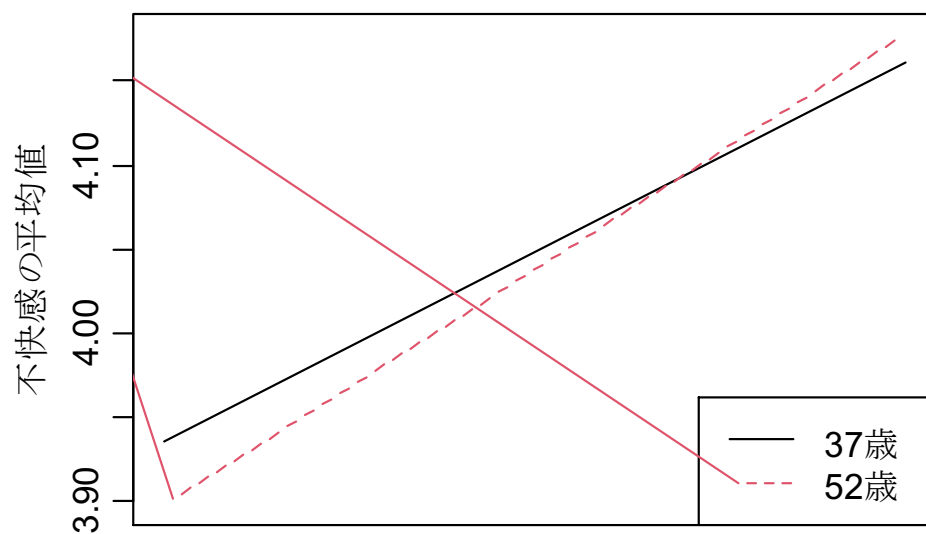
まず、研究に関するアカハラと研究に関係のないアカハラを区別せずに、教員の年齢ごとのアカハラの不快感について、不快感の平均値の差を検定した。以下のグラフが検定の結果である。



次が、教員の年齢を区別せずに、研究に関するアカハラか関係のないアカハラかを区別したときのアカハラの不快感について、不快感の平均値の差を検定した。いかのグラフが検定の結果である。



また、年齢が高い教員と年齢が低い教員における、研究に関するアカハラかそうではないアカハラかによって、不快感がどのように変化するか、また、そこに有意差があるかどうかを検定した。



表：教員の年齢別の回帰係数の差の検定

	37 歳	52 歳	

(Intercept)	3.94 ***	3.90 ***	
	(0.03)	(0.03)	
relevel(type2, "研究に関するアカハラ")直接関係のないアカハラ			0.23 ***
0.28 ***			
	(0.04)	(0.04)	

R ²	0.01	0.01	
Adj. R ²	0.01	0.01	
Num. obs.	4021	4060	

=====
 *** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

4,Discussion

まず、不快度の平均値において、教員の年齢が高いよりも低いほうが不快度が高いという結果が出た。これは私の仮説とは異なった。ここから考えられることとして、若い教員の方が研究者としての実績を出していないことにより、年配の教員よりも自分の中で格付け的なものが下がり、自分と学術的なレベルが相対的に近しいのにハラスメントを受けたことに怒りを覚えたのではないかということが推測される。

また、直接研究に関わるアカハラよりも直接研究に関わらないアカハラの方が不快度が高かったことに関しては、仮説が正しいことが示された。これは上記でも述べたが、学生が教員を学術的な分野において尊敬しているため、研究に関わることであれば、多少ハラスメント的要素が含まれていてもそこまで不愉快に思わないが、研究に関係のないアカハラに関しては同じ人間として対等にそして客観的にハラスメントされたことを意識しているのではないかと思う。

3つめの、交互作用のグラフに関しては、一応仮説通りの結果となった。しかし、回帰係数の差を分析したところ、有意差はなかった。これに関しては、調査対象人数の433人が少なかったことが原因でより精度の高い分析ができなかった可能性があると思うが、真偽のほどは不明である。

本稿のまとめとして、仮説通りのグラフは出たが、有意な水準ではなかった。よって、教員の年齢ごとに対応策を練るよりも、むしろ、ハラスメントの種類ごとなどに対策を練るほうが効果的であると考え

<参考文献>

media.voista.jp/harassment/academic-harassment/

サポートの種類の多さがハラスメントの不快感に与える影響の分析

栗田 朋香

1 Introduction

1.1 序論

御興久美子によるとアカデミック・ハラスメントは 1990 年代から使われ始め、女性に対する性差別や研究の妨害行為などの意味合いで用いられていた（御興 2017）が、2000 年代には女性に限らず、高等教育の場で行われる研究妨害や人権侵害をアカデミック・ハラスメントというようになった。近年はアカデミック・ハラスメントが起きるとニュースとして大きく取り上げられるなど注目を集めている。

ハラスメントに関して、令和元年 6 月 5 日に女性の職業生活における活躍の推進等に関する法律等の一部を改正する法律が公布され、労働施策総合推進法、男女雇用機会均等法及び育児・介護休業法が改正され、職場におけるパワーハラスメント防止のために、雇用管理上必要な措置を講じることが事業主の義務となった。この法改正からもわかるように、政策ではハラスメントを防ぐ体制の整備にむけ、事業主に対するアプローチを行っている。

ハラスメント研究に関しても同様のことが言える。アカデミック・ハラスメントの場合は大学独自の構造や権力関係、属性に着目している。研究の場合も大きな構造に着目しており、ハラスメントを受ける側の状況に関するものは少ない。心理学に関する研究の場合、被害を受ける側の個人に着目した研究は少数見受けられるが、パーソナリティなど内的側面に着目した研究であった。

厚生労働省の「職場のハラスメントに関する実態調査」によるとパワハラを経験した人の割合は約 30%、セクハラを経験した人の割合は 10%に上る。特にパワハラは 4 人に 1 人は経験がある（厚生労働省 2021）ということであり、かなり大きい数字であることがわかる。つまり、ハラスメントは誰でも経験するという状況がある。それに構造はすぐには変わらないため、ハラスメントが起きない構造を作るのが根本的な解決策であることに変わりはないが、個人がハラスメントからどう自分の身を守るか、どうハラスメントの被害を減らすかに関しても議論すべきだと考えられる。

そこで着目したいのがサポートの有無や種類・数である。サポートの種類や数が増えると精神的負担が減るという先行研究は高齢者や高校生まで幅広い年代を対象に、心理や福祉、教育といった様々な学問分野で見受けられる。ではサポートはハラスメントの被害、精神的負担も軽減する可能性があるのではないだろうか。アカハラが被害者に与える精神的被害は非常に大きいこと（李 2011）を踏まえると小さくする方法がわかることは大きな価値がある。

また、葛文綺の「大学における有効なハラスメント防止・相談体制の構築に関する研

究」の「大学のハラスメント防止・相談体制に関する質問紙調査」では、313 校回収の質問紙調査により、多くの大学で教職員が兼任で相談に当たっていること、専門相談員の不足が多く大学で課題として挙げられている（葛 2019）ことから、大学のハラスメントサポート体制はいまだ整っていないとは言えない。このことから不快感が減少した理由をサポートの種類という観点から仮説を立て、もしサポートの充実の有効性を示すことができれば、今後の大学のハラスメント対策を考える際の一助となるだろう。

1.2 仮説

分析方法は Method の欄にゆずるが、調査を分析した結果、図 1 のように学年が上がるとハラスメントの不快感が減少していくことがわかった。この事実をサポートと関連付け、「学年が上がってサポートの数が増加したため、ハラスメントの不快感が低下した」と予測し次の仮説を立てた。

仮説 1 サポートの数が増えるほどハラスメントの不快感は低下する

仮説 2 学年が上がるとサポートの数が増える

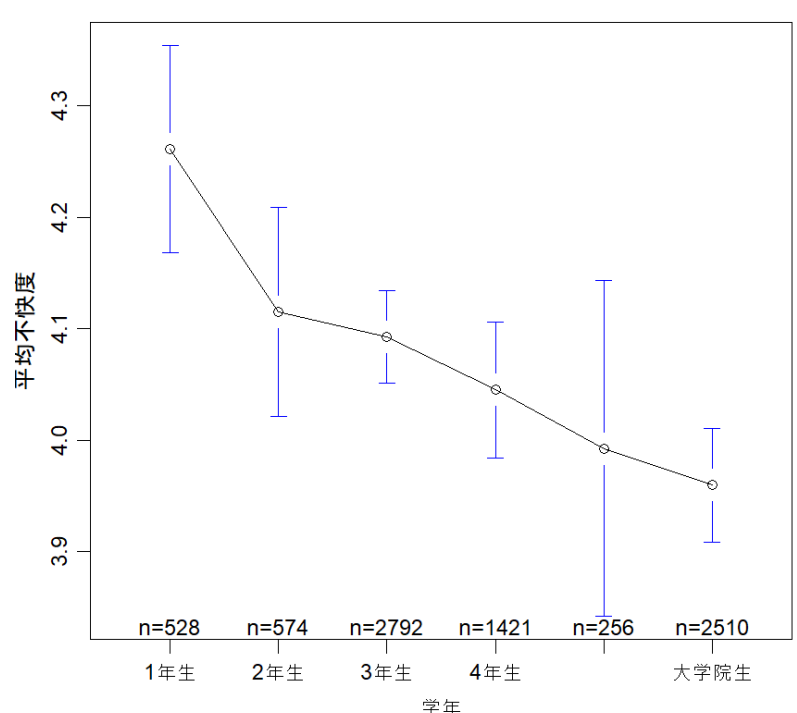


図 1 学年と平均不快感

2 Method

この分析では、本レポート集の冒頭で紹介されているデータを使用する。

2.1 データをどのように処理したか

データは 6 択の選択肢の中で、不快感が高いほど数値が大きくなるように「とても不快である」に 5、「不快である」に 4、「どちらかといえば不快」に 3、「どちらかといえ

ば不快ではない」に2、「不快ではない」に1、「まったく不快ではない」に0というように数値を与えた。学年は6択の選択肢の中で以下表1のように変換した。ハラスメント被害にあった際に期待できるサポートに関しては以下表2のように変換した。またそれぞれの質問に対し「いると思う」に5、「たぶんいない」に4、「どちらともいえない」に3、「たぶんいる」に2、「いないと思う」に1という数字を与え、回答者ごとに質問に対し「いると思う」、「たぶんいる」と答えた数を計算した。例えば、4つの質問の中で2つの質問に「いると思う」、1つの質問に「たぶんいる」、1つの質問に「たぶんいない」と回答した人の場合、計算結果は3となる。

表 1 不快感の変換

変換前	変換後
1 とても不快である	5
2 不快である	4
3 どちらかといえば不快	3
4 どちらかといえば不快ではない	2
5 不快ではない	1
6 まったく不快ではない	0

表 2 サポートに関する質問

変換前	変換後
いると思う	5
たぶんいる	4
どちらともいえない	3
たぶんいない	2
いないと思う	1

2.2 分析内容

学年ごとに平均値の比較を行った後、仮説ごとに平均値の比較を行った。その結果どちらもエラーバー（95%信頼区間）の範囲が重なっていたため、平均値に有意差があるかは不明であった。したがって平均値の差の検定を行った。

3 Result

仮説1 サポートの数が増えるほどハラスメントの不快感は低下する

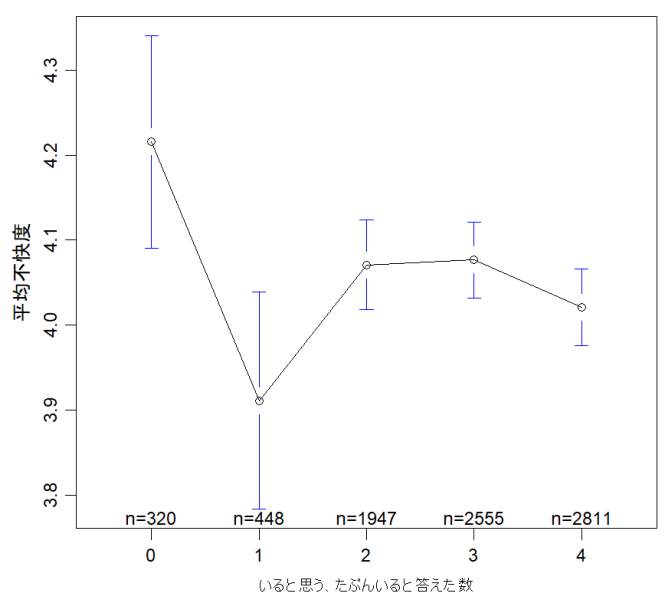


図 2 サポートの数と平均不快感

平均値の比較の結果、サポートの数が増えるほど不快感の平均は低くなっていく事がわかる。

表 3 サポートの数と平均不快感の回帰分析結果

	Estimate	Std. Error	t value	Pr(> t)
(Intercept)	4.21563	0.06689	63.027	$2 \times 10^{-16}***$
count4or51	-0.30491	0.08757	-3.482	0.000501***
count4or52	-0.14475	0.07217	-2.006	0.044938*
count4or53	-0.13891	0.07095	-1.958	0.050279
count4or54	-0.19464	0.07059	-2.757	0.005842**

Residual standard error: 1.196 on 8076 degrees of freedom

(35503 observations deleted due to missingness)

Multiple R-squared: 0.00194, Adjusted R-squared: 0.001445

F-statistic: 3.924 on 4 and 8076 DF, p-value: 0.003479

なお表中の*であるが、*** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ を示している。サポートの数が1,2,4のとき不快感に与える影響は有意となった。サポート数が3のときも有意ではないもののp値は0.050279となっており、不快感に与える影響は他の項目ほどではないが大きいと言える。いずれの項目も不快感を低下させる。具体的には、サポートが1つあると不快感が0.30491低下する。

仮説2 学年が上がるとサポートの数が増える

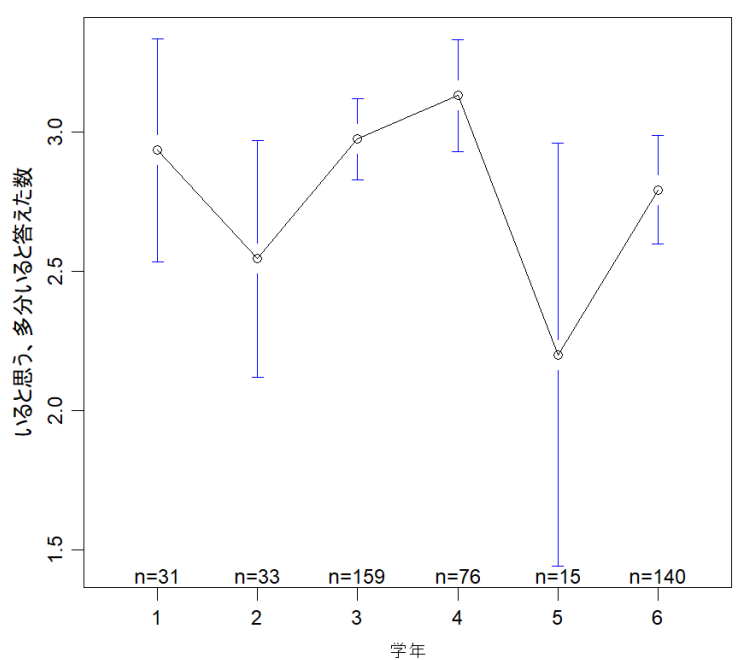


図 3 学年とサポートの数

いると思う、たぶんいると答えた数を学年ごとに平均値の比較を行った。結果を上表の○に示す。学年が1年生から4年生へと上がるにつれて、いると思う、多分いると答えた数は増加している。研究生は顕著に平均値が低くなっている。しかし、エラーバー（95%信頼区間）の範囲が重なっていたため、平均値に有意差があるかは不明であった。したがって平均値の差の検定を行った。結果を下表4に記す。

表 4 サービスの数と学年の回帰分析結果

	Estimate	Std. Error	t value	Pr(> t)
(Intercept) gakunen2	2.93548	0.18899	15.533	< 2 × 10 ⁻¹⁶
	-0.39003	0.26319	-1.482	0.1391***
gakunen3	0.03936	0.20659	0.191	0.8490
gakunen4	0.19610	0.22424	0.874	0.3823
gakunen5	-0.73548	0.33095	-2.222	0.0268*
gakunen6	-0.14263	0.20887	-0.683	0.4950

Residual standard error: 1.052 on 448 degrees of freedom

Multiple R-squared: 0.03505, Adjusted R-squared: 0.02428

F-statistic: 3.254 on 5 and 448 DF, p-value: 0.006744

学年がサポートの数に与える主効果について1-4年生、大学院生の場合は有意であるとは言えなかった。5の研究生などに関しては有意と認められた。

4 Discussion

4.1 結果のまとめ

以上の分析より仮説1 サポートの数が増えるほどハラスメントの不快度は低下するという仮説は支持された。しかし仮説2 学年が上がるとサポートの数が増えるという仮説は支持されなかった。

4.2 考察と展望

以上の結果より、ハラスメントの不快度はサポートの数が増えるほど低下するが、学年上がるほどサポートの数が増加していくわけではないと言える。サポートの数が不快度に与える影響を見たとき、サポートの数が1つのとき最も不快度を軽減させるという点も注目すべき点である。ハラスメントそのものを防ぐべきではあるが、もしハラスメントにあってしまったとき、一人でも相談できる人がいるだけで不快度が大きく下がる。ハラスメントを相談できる環境づくりの重要性を改めて示唆しているといえる。また研究生など（研究生、聴講生、交換留学生など）は特にサポートが少ないことも留意すべきである。今回の調査の母数が少ないということもあるが、仮説2の検証ではサポートの数の平均値が最も低かった。研究生、聴講生、交換留学生のいずれも長期間大学に在籍するわけではなくサポートを得られる関係性を築きにくい状況があることを考えるとサポートが少なくなるのも妥当だと考えられる。研究生・聴講生・交換留学生などの支援を充実させる必要がある。

今回はサポートしてくれる人の種類に着目したため、家族や恋人には相談できないが相談できる友人は多くいるなど、サポートの種類は少ないがサポートの数は多いという例が抜け落ちてしまっている。今後はそのような事も踏まえた調査を行うと、より実態にあった検証ができるだろう。

〈参考文献〉

- 葛文綺, 2019, 『大学における有効なハラスメント防止・相談体制の構築に関する研究』2016-2018 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (16K04354), 愛知学院大学.
- 御興久美子, 2017, 「平成 28 年度人権講演会 アカデミック・ハラスメントとは?」『大阪薬科大学紀要』11: 5-15.
- 厚生労働省, 2021, 『令和 2 年度 厚生労働省委託事業 職場のハラスメントに関する実態調査報告書』.
- 李敏子, 2011, 「ハラスメントが学生にもたらす心理的問題への対応」『椋山女学園大学 学生相談室活動報告』(6) : 9-19.

アカハラ被害の分類と不快度の関連

根本 千裕

1. 問題意識とリサーチクエスチョン

大学教育において、教員と学生または学生間の人間関係は、健全な研究活動の展開に必要不可欠である。一方で、教員と学生の間には構造的な権力関係があり、または学生間でも年齢や経歴による序列が生まれやすいなど、ハラスメントが生じやすい環境であるとも考えられる。このような研究教育の場での力関係を利用した不公平な行為は、アカデミック・ハラスメントと定義される(以下アカハラ)。ハラスメントの内容としては、学習・研究活動への妨害、卒業・進級妨害、指導義務の放棄や指導上の差別、不当な経済負担の強制、研究成果の収奪、暴言や暴力などがあげられている(アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク 2024)。アカハラを対象とする研究は数少なく、またどういった行為がハラスメントと認識されやすいのかは未だ明らかになっていない。

そこで本稿では「どのようなアカハラ行為の不快度が高いのか」をリサーチクエスチョンとして分析を行う。ある行為がハラスメントであるかどうかという判断は被害者の価値観による側面も大きいと考えられ、アカハラの被害経験がないと答えた学生の方が経験のある学生よりも楽観的性質を持つということが指摘されている(小田部ほか 2010)。よってより核心的なアカハラ対策をするためには、アカハラ行為を分析し、アカハラと認められやすい行為の傾向を明らかにすることが必要であると考えます。

2. 仮説

アカハラは、研究機関という不公平な力構造を有する場で行われるハラスメント行為であるが、行為自体はその構造を反映していない場合がある。例えば、「おしりを触られる」という行為は学外でもハラスメント行為としてとらえられる。しかし、被害者がアカデミアの力構造の中被害の声を上げにくいのであれば、それはアカハラであると認識されるのである。よって本稿では①研究機関での力関係を利用したハラスメント行為と②研究機関での力関係の文脈で扱われる一般的なハラスメント行為の二つにハラスメント行為を分類し、「②に分類されるハラスメント行為ほど不快度が高い」という仮説を検証する。

3. 使用するデータと変数

使用するデータは本授業で行った「大学教員の不快な行いに関する調査」の集計データである。

目的変数の不快度は「1 とても不快である」から「6 まったく不快ではない」の6点尺度である。分析では「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」に5~0の数値を割り当て、数字が大きいほど不快度が高くなるように調整して用いた。

説明変数の行為の種類は、行為の性質と権力構造に依存したものであるかの二つの基準に即して(1)力関係を利用したハラスメント(2)職務の不正利用(3)人格、身体への攻撃(4)セクハラ(5)受け手により判断が変わる行動の5つに分類

した。この分類は長澤ほか(2019)を参考にしたものであり、説明は以下である。

(1) 力関係を利用したハラスメント

権力構造を利用したハラスメントである。

「研究の相談をしたが無視された」、「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」、「就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった」、「卒論・修論・投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた」、「無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた」の5項目を分類した。

(2) 職務の不正利用

不均等な力関係を利用したものではないが、職務上知りえた情報を不正に利用したものである。

「自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された」、「自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた」の2項目を分類した。

(3) 人格、身体への攻撃

「お前はバカだ.といわれた」、「態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられて」の2項目を分類した。

(4) セクハラ

「異性の好みを聞かれた」、「おしりを触られた」の2項目を分類した。

(5) 受け手により判断が変わる行動

行為の受け手によってハラスメントであるかの判断が変わる行為である。

「自分の書いたレポートを大声で批判された」、「自分の書いたレポートを淡々と批判された」の2項目を分類した。

この5分類のうち、①研究機関での力関係を利用したハラスメント行為に該当するのは(1)、②研究機関での力関係の文脈で扱われる一般的なハラスメント行為の二つにハラスメント行為に該当するのは(3)と(4)である。また、(2)と(5)は①の要素を含むものである。また、(4)のセクハラは不快感に性差が出ると考えられるため、男女に分けての分析も行う。

4. 分析の結果

4-1 変数の分布

まず不快感の回答の分布を表1に示す。最も多い値は5で全体の49.2%に相当し、次いで4が24.1%となっている。低い不快感(0、1、2)の割合は比較的 low それぞれ1.6%、3.2%、6.1%である。

表1：不快感の度数分布表

value	frequency	percentage
-----:	-----:	-----:
0	129	1.6
1	257	3.2
2	495	6.1
3	1275	15.8

	4	1951	24.1
	5	3974	49.2

次に、ハラスメント行為の分布を表2に示す。5つの分類の中で最も回答が多かったのが(1)力関係を利用したハラスメントで全体の8.5%である。(3)人格・身体への攻撃(4)セクハラ(5)受け手により判断が変わる行為はそれぞれ15.6%であり、一番少ない(2)職務の不正利用は全体の14.6%である。

表2: ハラスメント行為の度数分布表

行為	freq	percentage
:-----	-----:	-----:
(1)力関係を利用したハラスメント	16798	38.5
(2)職務の不正利用	6356	14.6
(3)人格・身体への攻撃	6810	15.6
(4)セクハラ	6810	15.6
(5)受け手により判断が変わる行為	6810	15.6

4-2 行為が不快感に与える影響の分析

ここではハラスメント行為が不快感に与える影響を検討する。ハラスメント行為の分類を説明変数、不快感を目的変数として多重回帰分析を行った。モデル1は(1)力関係を利用したハラスメントを基準変数として、その他のハラスメント行為が不快感に与える影響を分析したものである。(1)の不快感の予測値は3.91である。ハラスメント行為が(2)職務の不正利用の場合0.69、(3)人格・身体への攻撃の場合0.82 予測値が増加する。また、ハラスメント行為が(4)セクハラの場合0.19、(5)受け手により判断が変わる行為の場合0.36 予測値は減少する。これらはすべて統計的に有意である。

=====		
Model 1		

(Intercept)		3.91 ***
	(0.02)	
harass5(2)職務の不正利用		0.69 ***
	(0.04)	
harass5(3)人格・身体への攻撃		0.82 ***
	(0.04)	
harass5(4)セクハラ		-0.19 ***
	(0.04)	
harass5(5)受け手により判断が変わる行為		-0.36 ***

(0.04)

R ²	0.13
Adj. R ²	0.12
Num. obs.	8081
=====	
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05	

4-3 行為が不快感に与える影響の男女比較

次に、ハラスメント行為が不快感に与える影響に男女差があるかどうか検討する。モデル2は回答者が女性の場合、モデル3は回答者が男性の場合の不快感への影響の分析である。(1)力関係を利用したハラスメントの不快感の予測値は女性3.94、男性3.87である。ハラスメント行為が(2)職務の不正利用の場合女性0.73、男性0.64、(3)人格・身体への攻撃の場合、女性0.86 男性0.76 予測値が増加する。また、ハラスメント行為が(5)受け手により判断が変わる行為の場合、女性0.26 男性0.46 予測値は減少する。これらはすべて統計的に有意である。(4)セクハラに関しては、男性では0.36 有意に減少したものの女性にはあまり減少がみられず、また予測値は有意ではなかった。

	Model 1	Model 2	Model 3

(Intercept)	3.91 *** (0.02)	3.94 *** (0.03)	3.87 *** (0.03)
harass5(2)職務の不正利用	0.69 *** (0.04)	0.73 *** (0.05)	0.64 *** (0.06)
harass5(3)人格, 身体への攻撃	0.82 *** (0.04)	0.86 *** (0.05)	0.76 *** (0.06)
harass5(4)セクハラ	-0.19 *** (0.04)	-0.03 (0.05)	-0.36 *** (0.06)
harass5(5)受け手により判断が変わる行為	-0.36 *** (0.04)	-0.26 *** (0.05)	-0.46 *** (0.06)

R ²	0.13	0.13	0.12
Adj. R ²	0.12	0.13	0.12
Num. obs.	8081	4071	3834
=====			
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05			

5. 考察

まず、全体的な不快感への影響について検討する。4-2 より、ハラスメント行為が不快感に与える影響の大きさは(3)人格・身体への攻撃>(2)職務の不正利用>(1)力関係を利用したハラスメント>(4)セクハラ>(5)受け手により判断が変わる行為の順で小さくなることが分かった($p < 0.001$)。

次に、性別ごとに分類別の影響を分析した。4-3 より、男性において影響力の大きさは、全体的な傾向と同じく(3)人格・身体への攻撃>(2)職務の不正利用>(1)力関係を利用したハラスメント>(4)セクハラ>(5)受け手により判断が変わる行為の順で小さくなる($p < 0.001$)。女性回答者の場合、(3)人格・身体への攻撃>(2)職務の不正利用>(1)力関係を利用したハラスメント>(5)受け手により判断が変わる行為の順で小さくなるが、(4)セクハラの行為は(1)力関係を利用したハラスメントと-0.03 しかなく、また予測値は統計的に有意でなかった。

以上から、全体的に(3)人格・身体への攻撃>(2)職務の不正利用>(1)力関係を利用したハラスメント>(4)セクハラ>(5)受け手により判断が変わる行為の順で小さくなることが分かった。しかし、モデルを男女に分けると、女性の場合(1)力関係を利用したハラスメントと(4)セクハラの差は小さく、また有意でなかった。回答者全体の半数以上が女性であることを考えると、セクハラに分類されるハラスメントに関しては慎重に扱う必要がある。5 分類のうち、①研究機関での力関係を利用したハラスメント行為に該当するのは(1)、②研究機関での力関係の文脈で扱われる一般的なハラスメント行為の二つにハラスメント行為に該当するのは(3)と(4)である。また、(2)と(5)は①の要素を含んでいると考えられる。全体の傾向は(3)>(2)>(1)>(4)>(5)であったので、仮説「②に分類されるハラスメント行為ほど不快感が高い」つまり

「(3),(4),(2),(5)>(1)」は支持されていないように見える。しかし、(5)は受け手によりハラスメントであるか判断が変わるものであり、結果より単に(5)に高い不快感をつける人がいなかったものだと考えられるため、②に分類するのが不適切である。また(4)セクハラは前述したとおり、統計的に有意ではあったものの性別に大きく左右されるものであり、より詳細な調査が必要であると考えられる。(1)(2)(3)に限った場合、不快感の与える影響力の大きさは(3)>(2)>(1)である。以上より、分析により得られた結果は仮説と異なるものの、考察により仮説と矛盾するものではないと主張する

6. まとめ

今回の分析により、研究機関という場に特有の上下関係に依存したハラスメント行為よりも、状況に限らずハラスメントとして認識される行為の方が、不快感が高いことを示した。このようなアカハラは、権力構造によらない分、直接的かつ個人を対象にした行為になるため、被害者はアカデミアの力関係と個人的人間関係の二重構造のハラスメントを受けることになると考えられる。そのため、不快感が比較的高く評価されるのではないかと推察される。今回の

分析の改善点は、分類の恣意性と回答の選択肢の不均衡さである。ハラスメント行為の分類において、全く違う分類に属するはずの項目あるいは分類ごとにまたがる項目があることが考えられる。この分類は個人の判断に基づいた恣意的なものであり、客観性に欠ける。また分類ごとの選択肢の個数が不均等である。(1)力関係を利用したハラスメントには5項目が含まれるものの、残りの分類は2項目しか含まれておらず、広範的な分析を行うには不足であったと思われる。

7. 参考文献

特定非営利活動法人アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク,最終更新年不明,「アカハラとは?」, 特定非営利活動法人アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク NAAH,(2024年1月22日取得,

<http://naah.jp/index/>)

小田部貴子,丸野俊一,舩田亮太,2010,「アカデミック・ハラスメントの生起実態とその背景要因の分析」『九州大学心理学研究』11:45-56.

長澤徹,野村恭子,竹之下真一,平池春子,土谷明子,大久保孝義,沖永寛子,2019,「医療系総合大学教員におけるアカデミック・ハラスメント尺度の開発」『日本衛生学雑誌』74,(2024年1月22日取得,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjh/74/0/74_18033/_article/-char/ja/)

アカデミック・ハラスメント加害者の属性が、

被害者の不快感に与える影響について

ー権力の観点からー

佐伯 涼翔

1. はじめに

1-1 背景と目的

今日の日本では、ハラスメントという概念が普及し、様々な種類のハラスメントの概念が生み出されている。今回はその中でも、大学内で起こり得るアカデミック・ハラスメント、通称「アカハラ」に注目していく。

アカデミック・ハラスメントとは、東京大学アカデミック・ハラスメント防止委員会の「全学アカデミック・ハラスメント防止体制指針」（平成 23 年）によると、「大学の構成員が、教育・研究上の権力を濫用し、他の構成員に対して不適切で不当な言動を行うことにより、その者に、修学・教育・研究ないし職務遂行上の不利益を与え、あるいはその修学・教育・研究ないし職務遂行に差し支えるような精神的・身体的損害を与えることを内容とする人格権侵害」ことを指す。

最近でも、NHK NEW WEB の記事（2023）によると、東京大学の 60 代の教授が、大学院生から求められていた論文の指導に、提出期限の間際まで応じていなかったことがアカデミックハラスメントに当たるとして、2023 年 3 月 20 日付けで停職 1 か月の懲戒処分を受けたということが起きた。

また、ダイヤモンド・オンラインの記事（2017）では、NPO「アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク」の代表・御興久美子氏によると、2017年当時は、アカハラの相談件数は増えており、新規のアカハラの相談件数は、年間250～300件ほどであったとしている。そしてその増加の原因は、アカハラという言葉が世間に認知されてきたことだとしている。

現在でも、アカハラの認知の拡大と共に、相談件数は増えていることが考えられるため、アカハラの防止は今後も必須だろう。しかし、その防止のためには、アカハラの定義を明確にする必要があるが、アカハラと定義される内容は、被害者側の受け取り方や主観的不快感に大きく依存するため、定義が難しいと言えるだろう。

そのため、東京大学アカデミック・ハラスメント防止委員会の定義にあるように、アカハラは「教育・研究上の権力を濫用」することによって起こることから、本稿ではアカハラの「権力」についての定義を明確にすることで、アカハラの防止に貢献しようと思う。

権力とは、加害者の持つ属性に左右されると考えられる。具体的には、非常勤講師より、教授の方が権力があると考えられるといったようにだ。つまり、加害者の属性が、どの程度被害者に不快感を与えるかが分かれば、加害者の権力がどの程度、被害者のアカハラへの不快感に影響を与えるかが分かり、権力についてのアカハラの定義を一步前進させることができる可能性があるだろう。

したがって、本レポートでは、加害者の属性として「知名度」「地位」「年齢」「性別」に着目し、それら加害者の属性によりアカハラの不快感がどのように変化するか分析・考察する。

1-2 仮説

前節で述べたように、本レポートではアカハラ加害者の属性に、「知名度」「地位」「年齢」「性別」の観点から着目する。

アカハラ加害者の属性として、第一に「権力」に着目する。アカハラが加害者から被害者に向けて一方的・強制的に行われる行為であることを踏まえると、その背後に権力関係を想定することは十分に妥当性があると思われる。また、加害者と被害者の権力の差が大きくなるほど被害者は加害者の影響力や報復を恐れて抵抗することが難しくなるため、セクハラの不快感が増すことが考えられる。

今回の調査では、加害者の知名度カテゴリは「無名・有名・業績」の3つである。無名な教員よりも、TVで有名、もしくは優れた研究業績のある教員の方が権力があると想定されるため、アカハラの不快感も加害者がTVで有名、もしくは優れた研究業績のある方が高くなると想定できる（仮説 [1]）。

今回の調査では、加害者の地位カテゴリは「非常勤講師・教授」の2つである。継続雇用である教授に対して非常勤講師はパートタイムの仕事であることを踏まえると、非常勤講師よりも教授の方が権力が高く、アカハラの不快感も加害者が教授の方が高くなると想定できる（仮説 [2]）。

また、大学においては一般的に年齢が高い教員ほど学界において多くの業績を上げており、したがって大きな権力を持つ人が多いことが想定される。今回の調査における加害者の年齢カテゴリは「37歳・52歳」の2つであるから、加害者が37歳よりも52歳の方がアカハラの不快感が高くなることが想定できる（仮説 [3]）。

今回の調査では、加害者の性別カテゴリは「男性・女性」の2つである。近年、女性の大学教員の割合は増えているが、2021年の朝日新聞と河合塾の共同調査「ひらく日本の大学」（朝日デジタル, 2021）によると、女性の教員割合は26%であり、依然として男性の大学教員の方が多いことから、大学では男性教員の方が権力を持っており、アカハラの不快感が高いと言える（仮説 [4] ）。

以上を踏まえ、本レポートでは以下の仮説を検証する。

仮説 [1] 加害者が無名より有名もしくは業績がある方が、不快感が高い

仮説 [2] 加害者が非常勤講師より教授の方が、不快感が高い

仮説 [3] 加害者が高齢な方が、不快感が高い

仮説 [4] 加害者が女性より男性の方が、不快度が高い

2 方法

2-1 変数

(i) ロングフォーマットへの変換

ワイドフォーマットで読み込んだ調査データを、ロングフォーマットへと変換した。

(ii) 回答者の限定

本レポートでは調査対象者を大学生に限定するため、「大学には在籍していない」と

回答した人のデータを削除した。

(iii) 「不快感」の数値化

不快度が高いほど、数値が大きくなるように「とても不快である」に5、「不快である」に4、「どちらかといえば不快」に3、「どちらかといえば不快ではない」に2、「不快ではない」に1、「まったく不快ではない」に0というように数値を与えた。

(iv) 変数の設定

回答者の属性や加害者の属性、不快感をカテゴリー分けするため、以下のように変数を設定した（表1）。

表1 設定した変数の一覧表

変数名	意味	内訳
timestamp	回答日時	
sex	回答者の性別	男/女/その他
gakunen	回答者の学年	1-4 年/研究生等/大学院生
birthmonth	回答者の誕生月	1-12 月
Id	回答者に振り分けた id	
unpleasure.n	不快度	0-5
close	加害者の知名度	業績/有名/無名
status2	加害者の地位	非常勤/教授
age	加害者の年齢	37 歳/52 歳

sex.offender	加害者の性別	男/女
type	アカハラの具体的内容	バカ/奨学金/髪/異性/情報/大声 で批判/就職活動/盗用/お尻/ 淡々と批判/テーマ/相談/掃除*1

各ビネットに、加害者の属性が書かれており、それを知名度、地位、年齢、性別でそれぞれ分類した。

加害者の知名度に関して、「TV で有名な」加害者を「有名」、「無名の」加害者を「無名」、優れた研究業績のある」加害者を「業績」、と名付けて分類した。

加害者の地位に関して、「教授」を「教授」、「非常勤講師」を「非常勤」と名付けて、分類した。

加害者の年齢に関して、「37 歳」の加害者を「37 歳」、「52 歳」の加害者「52 歳」と名付けて、分類した。

加害者の性別に関して、「男」の加害者を「男」、「女」の加害者を「女」と名付けて、分類した。

*1

それぞれ

バカ：『「お前はバカだ」と言われた』

奨学金：『奨学金の推薦書を書いてもらえなかった』

髪：『態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた』

異性：『異性の好みを聞かれた』

情報：『自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた』

大声で批判：『自分の書いたレポートを大声で批判された』

就職活動：『就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった』

盗用：『自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された』

お尻：『お尻を触られた』

淡々と批判：『自分の書いたレポートを淡々と批判された』

テーマ：『卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。』

相談：『研究の相談をしたが無視された』

掃除：『無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた』

2-2 分析の手順

本研究では、加害者の知名度、地位、年齢、性別が、アカハラの不快感にどのような影響を及ぼすかを調査する。まず、加害者の知名度、地位、年齢、性別ごとの、不快感の平均値を図示して、差を比較する。そして、平均値の95%信頼区間の重なるの確認と、それだけは不十分な場合は、平均値の差の検定を行うことで、その差が有意かを検証する。

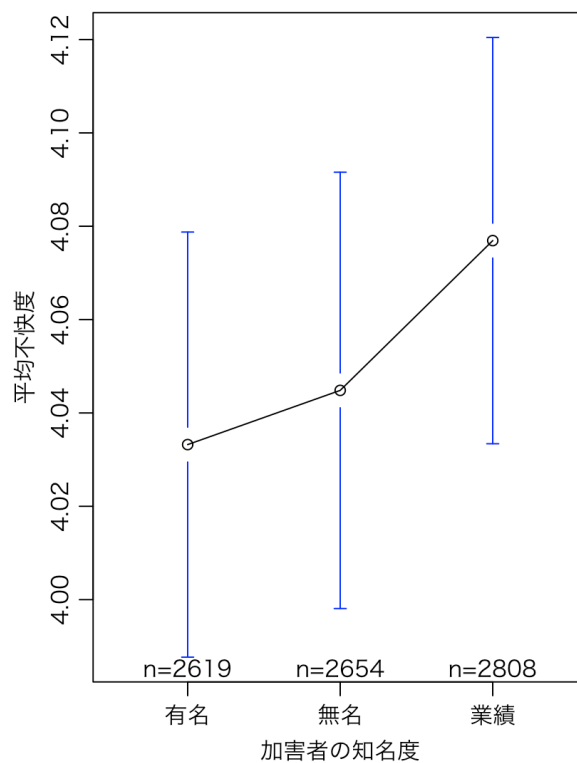
3 分析の結果

3-1-1. 仮説[1]の検証

本節では、仮説 [1] 「加害者が無名より有名もしくは業績がある方が、不快感が高い」を検証するため、加害者の「知名度」ごとの不快感の平均値を図示し、平均値の 95%信頼区間の重なりを確認することで、その差が有意かを調べる。

加害者の「知名度」ごとの不快感の平均値を図示したものが図 1 である。図 1 より、アカハラを受けた際の不快感の平均値は加害者が「有名」<「無名」<「業績」の順に高くなっていることが分かる。しかし、平均値の 95%信頼区間を示す青いエラーバーがそれぞれ重なっているため、どの組み合わせでも、平均値に有意差がないと言える。

図 1 加害者の知名度ごとの不快感の平均値



3-1-2. 仮説[1]の考察

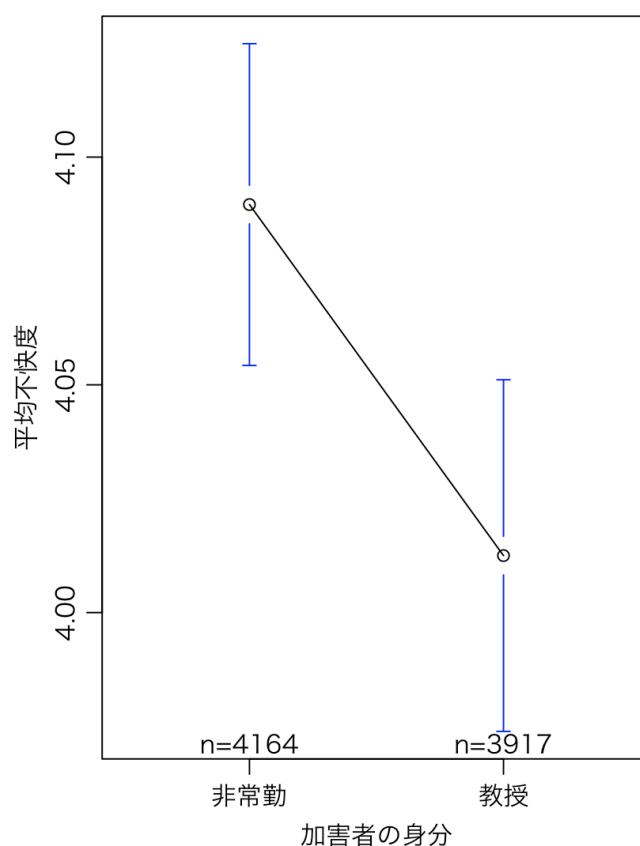
以上の検証結果から、仮説 1 のうち、「加害者が無名より業績がある方が、不快感が高い」は支持されたものの、その差は有意でなく、「加害者が無名より有名な方が、不快感が高い」については、逆の結果が得られ、一部支持されなかったが、その差も有意でなかった。

「無名」と「業績」、「無名」と「有名」、の両方の場合で、不快感の平均値に有意差が認められなかったことから、教員の知名度は、被害者の不快感に大して影響を与えないことが想定できる。

3-2-1. 仮説[2]の検証

本節では、仮説 [2] 「加害者が非常勤講師より教授の方が、不快感が高い」を検証するため、加害者の「身分」ごとの不快感の平均値を図示し、平均値の 95%信頼区間の重なりを確認することで、その差が有意かを調べる。

図 2 加害者の身分ごとの不快感の平均値



加害者の「身分」ごとの不快感の平均値を図示したものが図 2 である。図 2 より、アカハラを受けた際の不快感の平均値は加害者が「教授」より、「非常勤」の方が高くなっていることが分かる。平均値の 95%信頼区間を示す青いエラーバーは重なっていないように見える。しかし、これだけで差が有意かどうかは判断しかねるので、平均値の差の検定を行う。

表 2 加害者の身分ごとの不快感の平均値の差の検定

Two Sample t-test

data: d0.l\$unpleasure.n[d0.l\$status2 == " 非 常 勤 "] and
d0.l\$unpleasure.n[d0.l\$status2 == "教授"]

t = 2.893, df = 8079, p-value = 0.003826

alternative hypothesis: true difference in means is not equal to 0

95 percent confidence interval:

0.02484756 0.12928795

sample estimates:

mean of x mean of y

4.089577 4.012510

平均値の差の検定の結果を示したものが、表 2 である。表 2 より p 値は「0.003826」より、5 %水準において有意であると言える。つまり、「2 つのサンプルの母平均は等しい」という帰無仮説を設定した場合、p 値が有意水準 5%以下になったため、その帰無仮説を棄却し、対立仮説「2 つのサンプルの母平均は等しくない」を採択する、つまり、平均値の差は有意であると分かった。

また、95%信頼区間は 0.02484756 から 0.12928795 までであり、信頼区間が 0 を含まないことから、統計的に有意な差があると言えるだろう。

3-2-2. 仮説[2]の考察

以上の検証結果から、仮説 2「加害者が非常勤講師より教授の方が、不快感が高い」は支持されず、仮説とは逆に、「加害者が教授より非常勤講師の方が、不快感が高く」、その差は有意という結果が得られた。

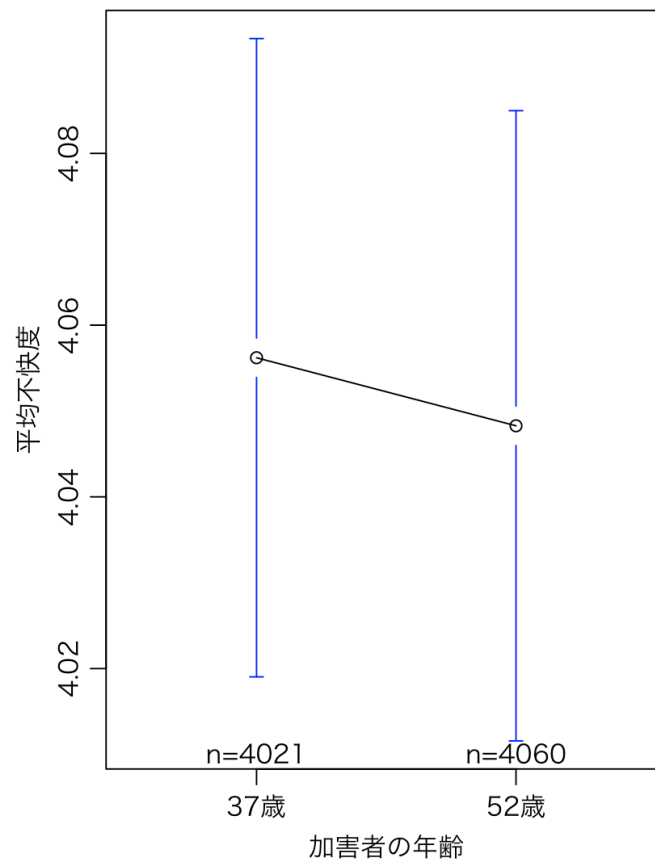
以上から、「非常勤講師よりも権力を持つと考えられる教授にアカハラをされると、権力差により抵抗できず、不快感が高い」という仮説は成り立つとは言えない。逆に、教授よりも権力を持たないと考えられる、非常勤講師によるアカハラの方が不快感の平均値が高く、その差が有意であることから、権力差の大きい教授からアカハラを受けるのは仕方がないと諦めているが、権力差の小さい非常勤講師によるアカハラは、権力差に裏打ちされた正当性がなく、不快感を感じるのではないかと考察する。

3-3-1. 仮説[3]の検証

本節では、仮説 [3] 「加害者が高齢な方が、不快感が高い」を検証するため、加害者の「年齢」ごとの不快感の平均値を図示し、平均値の 95%信頼区間の重なりを確認することで、その差が有意かを調べる。

加害者の「年齢」ごとの不快感の平均値を図示したものが図 3 である。図 3 より、アカハラを受けた際の不快感の平均値は加害者が「52 歳」より、「37 歳」の場合の方が高くなっていることが分かる。しかし、平均値の 95%信頼区間を示す青いエラーバーがかなり重なっているため、平均値に有意差がないことが分かる。

図3 加害者の年齢ごとの不快度の平均



3-3-2 仮説[3]の考察

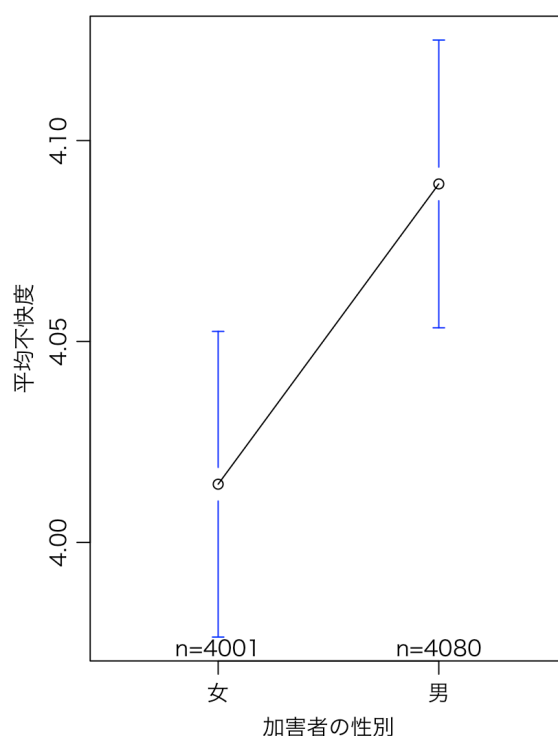
以上の検証結果から、仮説3「加害者が高齢な方が、不快感が高い」は支持されず、仮説とは逆に、「加害者が若い方が、不快感が高い」という結果が得られたが、その差は有意ではないことが分かった。

平均値に有意差がなかったことから、教員の年齢は、被害者の不快感に大して影響を与えないことが想定できる。

3-4-1. 仮説[4]の検証

本節では、仮説 [4] 「加害者が女性より男性の方が、不快感が高い」を検証するため、加害者の「性別」ごとの不快感の平均値を図示し、平均値の 95%信頼区間の重なりを確認することで、その差が有意かを調べる。

図 4 加害者の性別ごとの不快感の平均



加害者の「性別」ごとの不快感の平均値を図示したものが図 4 である。図 4 より、アカハラを受けた際の不快感の平均値は加害者が「女」より、「男」の場合の方が高くなっていることが分かる。平均値の 95%信頼区間を示す青いエラーバーは重なっていないように見えるが、これだけで差が有意かどうかは判断しかねるので、平均値の差の検定を行う。

表 3 加害者の性別ごとの不快感の平均値の差の検定

Two Sample t-test	
data:	d0.l\$unpleasure.n[d0.l\$sex.offender == " 男 "] and d0.l\$unpleasure.n[d0.l\$sex.offender == "女"]
t =	2.8059, df = 8079, p-value = 0.005029
alternative hypothesis:	true difference in means is not equal to 0
95 percent confidence interval:	
	0.02251942 0.12691920
sample estimates:	
mean of x	mean of y
4.089216	4.014496

平均値の差の検定の結果を示したものが、表 3 である。表 3 より p 値は

「0.005029」より、5 %水準において有意であると言える。つまり、「2 つのサンプルの母平均は等しい」という帰無仮説を設定した場合、p 値が有意水準 5%以下になったため、その帰無仮説を棄却し、対立仮説「2 つのサンプルの母平均は等しくない」を採択する、つまり、平均値の差は有意であると分かった。

また、95%信頼区間は 0.02251942 から 0.12691920 までであり、信頼区間が 0 を含まないことから、統計的に有意な差があると言えるだろう。

3-4-2. 仮説[4]の考察

以上の検証結果から、仮説 4「加害者が女性より男性の方が、不快度が高い」は支持され、その差は有意という結果が得られた。

よって、「女性よりも権力を持つと考えられる男性にアカハラをされると、権力差により抵抗できず、不快感が高い」という仮説は部分的には成り立つと言えるだろう。しかし、加害者が男性の場合の方が不快感が高く、女性の場合の方が不快感が低い原因として、権力差以外のものも考えられる。

4. 議論と今後の課題

以上の通り、本レポートでは、仮説 [1] 「加害者が無名より有名もしくは業績がある方が、不快感が高い」、仮説 [2] 「加害者が非常勤講師より教授の方が、不快感が高い」、仮説 [3] 「加害者が高齢な方が、不快感が高い」、仮説 [4] 「加害者が女性より男性の方が、不快感が高い」という 4 つの仮説を立て、平均値の差の比較や検定を用いてその真偽を検証した。

仮説 [1] は、加害者の知名度に関して、「有名」 < 「無名」 < 「業績」の順に不快感の平均値が高かったため、「無名より業績がある方が、不快感が高い」という一部は支持されたものの、「有名よりも無名な方が、不快感が高い」という、一部仮説と反する結果が出た。仮説 [2] に関して、加害者が「教授」よりも「非常勤」の場合の方が不快感の平均値が高くなり、仮説と逆の結果が出た。仮説 [3] は、加害者の年齢に関して、加害者が「52歳」よりも「37歳」の場合の方が不快感の平均値が高くなり、仮説と逆の結果が出た。仮説 [4] は、加害者の性別に関して、加害者が「女性」よりも「男性」の場合の方が不快感の平均値が高くなり、仮説は支持された。

仮説が支持され、有意差が認められたのは仮説[4]だけであり、またその仮説[4]の要因として権力差の大小以外も考えられるため、「アカハラは権力差が大きければ抵抗できず、不快感が高い」とは言えないと思われる。逆に、仮説[2]と[3]に関しては、

仮説と逆の結果が得られたことから、逆に「権力差が小さい方が不快感が高い」とも考えられる。その原因として、権力差が大きいと、理不尽に感じて抵抗する気が起きず、仕方がないと諦めるため不快感が低い、逆に権力差が小さい場合に、理不尽なことを要求されると、なぜ大した権力を持たない人にそのようなことをされないといけないのかと、不満を持ち、不快感が高くなるのではとも考えることができる。

また、有意差が認められ、不快感に影響を与えたと考えられる属性は、地位と性別であり、知名度と年齢には有意な差が見られなかったことから、それらは不快感には影響を与えなかったと考えられる。

ここから、「アカハラは、権力の濫用が前提であり、地位と性別に関する加害者の権力の大小は被害者の不快感に影響を与えるが、その権力が大きいほど被害者の不快感が高いとは限らず、権力差が小さい場合でも不快感が高いということは起こり得る」というように、定義を一步前進できたと考える。

しかし、アカハラを加害者の持つ権力の観点から説明できるのは、一部であり、今後の課題として、他の観点からもアカハラを見ることが重要であろう。また今回は、加害者の属性が与える被害者の不快感への影響を調べたが、加害者のアカハラの内容が与える被害者の不快感への影響も調べることで、加害者の属性とアカハラの内容のどちらの方が不快感への影響が大きいかなどが分かり、加害者の属性の影響について、さらに深く知れただろう。

5. 参考文献

全学アカデミック・ハラスメント防止体制指針.平成 23 年 7 月 27 日, アカデミック・ハラスメント防止委員会 改正 https://har.u-tokyo.ac.jp/files/user/img/AH_boushi_sisin.pdf

東京大学教授がアカハラ停職 論文指導に期限間際まで応じず. NHK. 2023-4-14, NHK NEWS WEB <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230414/k10014038871000.html>

「学校辞めるか死ぬか選べ」大学教授の“アカハラ”恐怖の実態. ダイヤモンド社. 2017.9.14 5:00, ダイヤモンド・オンライン, <https://diamond.jp/articles/-/142169>

大学の女性教員は 26% 世界から遅れる日本、リケジヨ確保に支援金, 阿部朋美 三島あずさ, 朝日新聞, 2021 年 9 月 21 日 12 時 00 分, 朝日新聞デジタル, <https://www.asahi.com/articles/ASP9K5690P9GUTIL046.html>

大学生・大学院生における性別とアカハラに対して 感じる不快感の差

寺田 陶華

1. はじめに

近年、「アカデミック・ハラスメント」の事例が報道によって明るみに出るようになり、多くの大学・研究機関で対策が取られている。京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程（京都大学,2005）の中では、アカデミック・ハラスメントとは、

「教員がその職務上の地位又は権限その他人間関係等の優位性を不当に利用して他の教員又は学生等に対して行う業務の適正な範囲を超えた研究若しくは教育上又は修学上の不適切な言動」

であると定義されている。優秀な研究者を養成するための機関でこのような行為が行われることは断じて許されるべきことではない。

アカデミック・ハラスメント（以下アカハラ）は、現在でこそ男性も女性も被害者となり得るものであると認識されているが、1990年代においては、主に女性が被害を受けるものとされていた（土屋 2019）。この原因の一つとして、教授など、大学・研究機関において強い権威を持つポストに男性が多くついでおり、意図しないうちに「上位の男性」対「下位の女性」という構図ができてしまっていたことがあると述べられている。

しかし、当時も学生などいわゆる弱い立場には、女性だけでなく男性も多く存在していた。それにも関わらず、男性に対するアカハラが大きく問題となっていなかったのは、女性に比べて、男性が、自身がアカハラ被害を受けているという認識を

持てておらず、告発に至らなかったのではないだろうかとも考えることができる。

男女問わず、アカハラ被害を受けた際にスムーズな告発を促すためには、男女間のアカハラ被害の認識に差があるのか確かめ、差があれば、被害を認識するのが苦手である方の性別にアプローチをする必要があると考えられる。本稿では、アカハラといえるような行為を受けた際に感じる不快感の性差を、行為の種類別に分析していく。

分析の前に、結果に関して以下の仮説を立てる。

- ・アカハラといえるような行為を受けた時、女性よりも男性の方が不快だと感じにくい。
- ・自身の学業、研究に直接影響を及ぼすようなアカハラ行為は、そうでないアカハラ行為よりも、男女間で感じる不快感の差が小さい（男女ともに同じくらい不快だと感じる）。

2. 方法

本稿では、2023 年度社会学実習の授業で実施した「大学教員の不快な行いに関する調査」に対する回答をデータとして分析に使用する。

各項目についての、「とても不快である」「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「まったく不快ではない」という回答を、それぞれ 5～0 の数値に変換し、従属変数とした。

アカハラのタイプ（「お前はバカだ」と言われた、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった、態度が悪いと言われ髪をつかまれ足をけられた、異性の好みを聞かれた、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった、自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた、自分の書いたレポートを大声で批判された、無給で先生の部屋を掃除するように命じられた、お尻を触られた、自分の書いたレポートを淡々と批判された、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた、自分の書いたレポート

の内容を無断で盗用された、研究の相談をしたが無視された)、加害者の知名度 (TV で有名な、無名の、優れた研究業績のある)、加害者の立場 (37 歳の教授、37 歳の非常勤講師、52 歳の教授、52 歳の非常勤講師)、加害者の性別 (男、女)、回答者の学年 (1,2 年、3,4 年、大学院生)、回答者の性別 (男、女) を独立変数とした。

なお、性別を「その他」と回答した回答者と、学年を「研究生、聴講生、交換留学生 など」と回答した回答者は、全体に対して非常に数が少なかったため、今回の分析では除外している。また、「大学には在籍していない」と答えた回答者も、今回の調査の目的とは外れるため除外している。

1 つ目の分析 (以後分析 1) はすべてのタイプのアカハラに対する不快感の平均値を、回答者の学年と性別の観点から比較した。2 つ目の分析 (以後分析 2) では、アカハラのタイプを、学業や研究に直接影響を及ぼすものとそうでないものに分類し、学業や研究に直接影響を及ぼすアカハラに対する不快感の平均値を、回答者の性別を分けて比較した。学業や研究に直接影響を及ぼすアカハラは、自分の書いたレポートを大声で批判された、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された、自分の書いたレポートを淡々と批判された、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた、研究の相談をしたが無視された、の 5 つとした。小田部,丸野,舩田 (2010) の研究では、就職・進学に必要な推薦書を書いてもらえなかったという項目を、「学習・研究の妨害」となるアカハラに分類していたが、就職活動はあくまで学生が個人で行う学校外での活動であるため、学業や研究に直接関係するものではないと考え、今回は除外した。3 つ目の分析 (以後分析 3) では、学業や研究に直接影響を及ぼさないタイプのアカハラ (分析 2 で分析の対象としなかったもの) に対する不快感の平均値を、回答者の性別を分けて比較した。最後に、有意差があるかどうか確かめるために回帰分析を行い、比較しやすくするために回帰係数の差の検定を行った。

3. 結果

分析 1 において、学年、男女別の不快度の平均値は以下の図 1 のようになった。

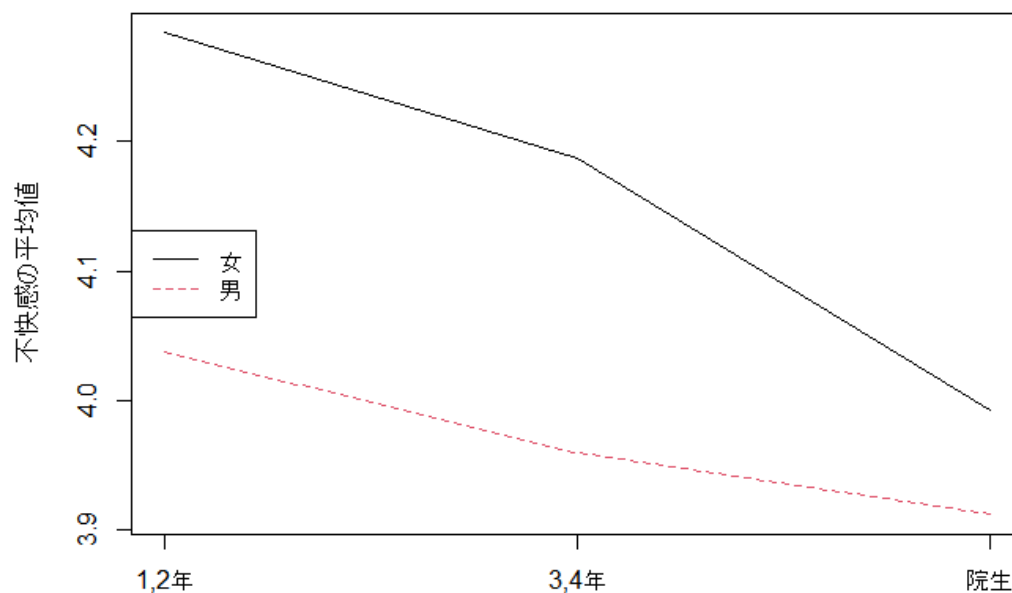


図 4 学年、性別によるアカハラに対する平均不快感

図 1 より、男女ともに、学年が上がるにつれてアカハラに対して感じる不快度の平均値は小さくなっていった。すべての学年において、女性よりも男性の不快度の平均値の方が小さくなっていた。

分析 2 において、男女別にみた学業や研究に直接影響を及ぼすタイプのアカハラに対する不快度の平均値は以下の図 2 のようになった。

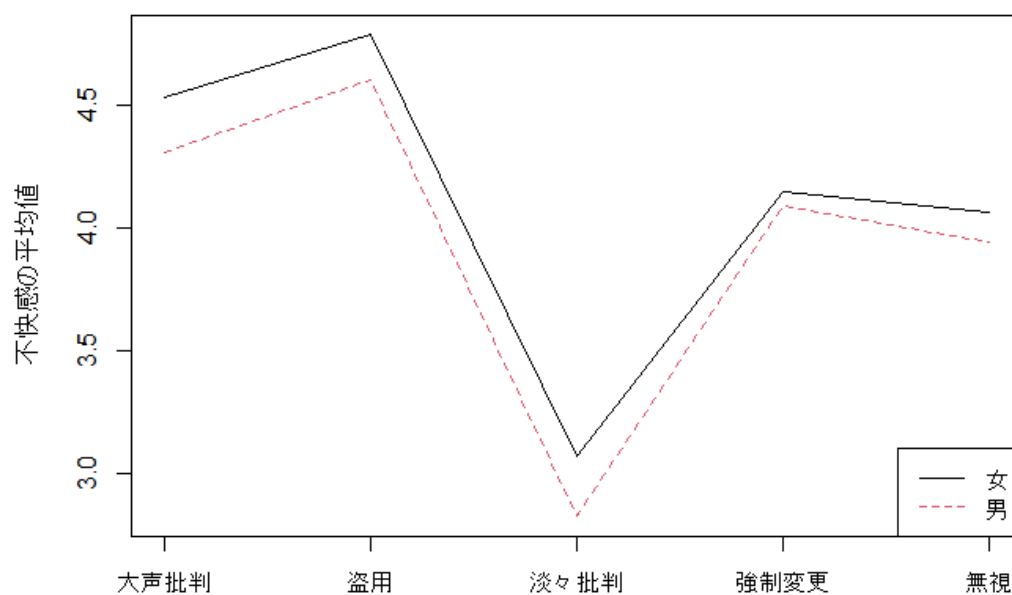


図 5 男女別にみた学業や研究に直接影響を及ぼすタイプのアカハラに対する不快度の平均値

全ての項目において、男性の感じる不快度の平均値のほうが女性のそれよりも小さかった。男女ともに「自分の書いたレポートを淡々と批判される」という項目では、他の項目に比べ感じる不快度が非常に小さくなっていた。また、他の項目に比べ、「卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた」という項目では、不快度の平均値の男女差が小さかった。

分析 3 において、男女別にみた学業や研究に直接影響を及ぼさないタイプのアカハラに対する不快度の平均値は、以下の図 3 のようになった。

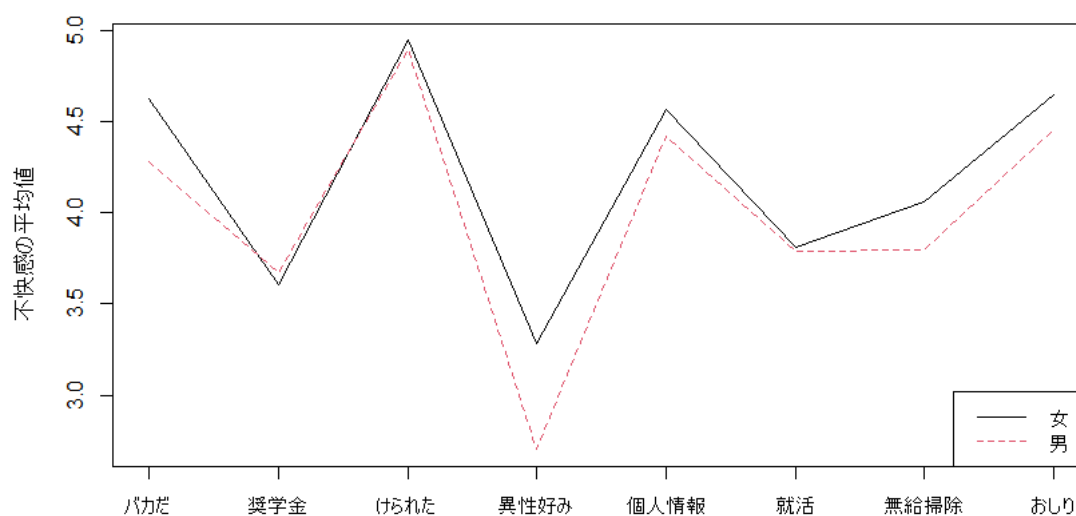


図 6 男女別にみた学業や研究に直接影響を及ぼさないタイプのアカハラに対する不快感の平均値

「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」という項目でのみ、男性の感じる不快感の平均値が女性より大きく、それ以外の項目では分析 2 と同様に男性の感じる不快感の平均値は女性のそれよりも小さかった。「異性の好みを聞かれた」という項目では、男女の感じる不快感の差が最も大きかった。

回帰分析の結果は、以下の表 1 のようになった。

表 5 回帰分析の結果

	女	男
(Intercept)	4.03 *** (0.08)	3.88 *** (0.09)
status52 歳非常勤	-0.02 (0.05)	0.07 (0.05)
status37 歳教授	0.02 (0.05)	-0.06 (0.05)

status52 歳教授	-0.00	0.06
	(0.05)	(0.05)
sex.offender 男	0.07 *	0.08 *
	(0.04)	(0.04)
famous 無名の	-0.01	-0.01
	(0.04)	(0.05)
famous 優れた研究実績のある	-0.10 *	-0.01
	(0.04)	(0.05)
relevel(type, "就活")バカだ	0.78 ***	0.47 ***
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")奨学金	-0.17	-0.12
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")けられた	1.14 ***	1.08 ***
	(0.08)	(0.09)
relevel(type, "就活")異性好み	-0.57 ***	-1.12 ***
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")個人情報	0.74 ***	0.59 ***
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")大声批判	0.70 ***	0.49 ***
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")無給掃除	0.19 *	-0.05
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")尻触られ	0.81 ***	0.64 ***
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")盗用	0.96 ***	0.78 ***
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")淡々と	-0.76 ***	-1.01 ***
	(0.08)	(0.08)
relevel(type, "就活")強制変更	0.33 ***	0.26 **
	(0.09)	(0.09)
relevel(type, "就活")無視	0.17 *	0.12
	(0.08)	(0.09)
gakunen43,4 年	-0.10 *	-0.03
	(0.05)	(0.06)
gakunen4 院生	-0.30 ***	-0.13 *
	(0.05)	(0.06)

R ²	0.26	0.27
Adj. R ²	0.26	0.27
Num. obs.	3223	3530

=====

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 2 は、回帰係数の差の検定の結果である。

表 6 男女の回帰係数の差の検定結果

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.145	1.169	0.242	
status52 歳非常勤	-0.085	-1.195	0.232	
status37 歳教授	0.076	1.049	0.294	
status52 歳教授	-0.068	-0.919	0.358	
sex.offender 男	-0.011	-0.218	0.827	
famous 無名の	0.004	0.056	0.956	
famous 優れた研究実績のある	-0.087	-1.373	0.170	
relevel(type, "就活")バカだ	0.310	2.400	0.016	*
relevel(type, "就活")奨学金	-0.047	-0.373	0.709	
relevel(type, "就活")けられた	0.054	0.445	0.657	
relevel(type, "就活")異性好み	0.545	4.374	0.000	***
relevel(type, "就活")個人情報	0.154	1.243	0.214	
relevel(type, "就活")大声批判	0.215	1.633	0.102	
relevel(type, "就活")無給掃除	0.240	1.832	0.067	
relevel(type, "就活")尻触られ	0.170	1.298	0.194	
relevel(type, "就活")盗用	0.179	1.386	0.166	
relevel(type, "就活")淡々と	0.245	2.080	0.037	*
relevel(type, "就活")強制変更	0.077	0.627	0.531	
relevel(type, "就活")無視	0.053	0.438	0.661	
gakunen43,4 年	-0.071	-0.915	0.360	
gakunen4 院生	-0.175	-2.101	0.036	*

表 1、表 2 より、「異性の好みを聞かれた」「『お前はバカだ』と言われた」「自分の書いたレポートを淡々と批判された」といったアカハラで有意に男女差が大きくなっている。逆に、男女差が小さいといえるアカハラは、「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」

「研究の相談をしたが無視された」「態度が悪いと言われ髪をつかまれ足をけられた」といったものである。大学院生の不快度の男女差は、学部生に比べて小さい。

4. 考察

今回の調査の結果より、男性の方が女性よりも、アカハラの被害を受けた時の不快だと感じにくいことが分かった。また、アカハラのタイプが、自身の学業や影響に直接影響を及ぼすかどうかは、感じる不快度とは関係があるとはいえないことも明らかになった。

今回の調査では、「自分の書いたレポートを淡々と批判された」というタイプのアカハラで、他の項目に比べ、男女ともに感じる不快感が小さくなっていたが、このことから、多くの大学生は、レポートの内容について淡々と批判されることは、指導の一環であり、アカハラとはいえないと認識していることが推測できる。

今回は、大学三年生の学生が調査の実施者であったため、回答者に大学院生よりも学部生が多かった。しかし、一般的に大学院生の方が、教授や講師と、長い期間にわたり密接な関係を築いて研究に取り組むことが多いと考えられるため、大学院生の回答者を増やすと、結果も変わってくるのではないかと感じた。

5. 参考文献

小田部貴子,丸野俊一,舩田亮太,「アカデミック・ハラスメントの生起実態とその背景要因の分析」,『九州大学心理学研究』,2010,11,p45-56.

京都大学,2005,「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程」.

https://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000993.html

(閲覧日：2023年12月27日)

土屋正臣,「日本におけるアカデミック・ハラスメント研究の動向」,『城西現代政策研究』,2019,12(1),p55-60.

学生の研究意欲によるアカハラ不快感の違い

小坂優

1. 導入

1.1 研究の背景

「アカデミック・ハラスメント」とは、「研究・教育機関における権力を利用した嫌がらせ」として理解される(2011, 湯川)。最近では、2023年に、東京大学の60代の教授が、大学院生から論文の指導を求められていたにも関わらず、論文提出期限の間際まで応じていなかったことが、アカデミック・ハラスメントとして認められ、東京大学は、当該の教授を1ヵ月の停職という懲戒処分にしたという事例がある(NHK, 2023)。研究・教育機関においては、教員が学生よりも権力を持つ構造となることが多い。大学内でも同様であり、大学生にとって、自分よりも立場が上であり、権力を持つ、教員との関係性は単位取得や進路決定に大きく関わるため、関係性の悪化を恐れた結果、ハラスメント行為に対する抗議ができない場合も多くなると考えられる。

また、中川(2023)による研究では、2001～2021年度の京都大学におけるカウンセリング施設の利用状況統計のうち、ハラスメント相談部分のデータ分析をしている。それによると、学生のうちハラスメントについての相談の累積件数は、学部生で172件、修士課程で367件、博士課程では239件となった。京都大学の課程別在籍者数は、学部がおよそ13,000人、修士課程がおよそ5,000人、博士課程が4,000人であるので、比率で考えると学部生よりも大学院生の方が、ハラスメントについての相談を多くしていることがわかった。アカハラは、教育機関に特有のハラスメント問

題であり、学部生と比べると在学期間が長い大学院生にとっては、特に対処されるべき問題であるといえる。

1.2 このレポートで取り組む問題

このレポートにおいては、先行研究より明らかになった、大学院生がハラスメント相談をする割合が高いということに着目し、「学生の研究意欲がアカハラの不快感に影響を与えるのか」について分析する。また、研究意欲が高い学生にとって、良い教員のもとで学ぶことは重要であり、そのような教員からのアカハラは時としてしかるべき対応として受け入れられる可能性も検討する。

1.3 仮説

以上を踏まえ、以下の2つを仮説として立てる。

仮説 1: 研究意欲が高いほど、アカハラの不快感は高くなる。

仮説 2: 教員の地位が高いほど、アカハラの不快感は低くなる。

2. 方法

2.1 使用した質問項目

- ・回答者の性別、学年をたずねた。
- ・具体的なアカハラ場面が想像できるような質問文を加害者の知名度（優れた、無名の、TVで有名な）、年齢（37歳、52歳）、地位（教授、非常勤講師）、性別（男、女）、ハラスメントの行為（13種類）という条件項目を組み合わせたものに対して、どれくらい不快感を感じるかをたずねた。
- ・「あなたは大学での研究や勉強に興味を持てますか」「あなたは将来、研究職、大

学教員や研究所の研究職などに就きたいですか」という研究に対しての質問をした。

2.2 質問項目の加工方法

(1) アカハラの不快感を、以下のように数値化した。

「1 とても不快である」には5、「2 不快である」には4、「3 どちらかといえば不快」には3、「4 どちらかといえば不快ではない」には2、「5 不快ではない」には1、「6 まったく不快ではない」には0

(2) 研究職への興味度を、以下のように数値化した。

「すでに研究職に就いている、内定している」には3、「研究職に就きたい」には2、「まだ決めていないが、研究職にも興味がある」には1、「研究職に就く気はない」には0

(3) 現在の研究への興味度を、以下のように数値化した。

「興味が持てる」には4、「どちらかと言えば興味が持てる」には3、「どちらとも言えない」には2、「どちらかと言えば興味が持てない」には1、「興味が持てない」には0

(4) 学年を、以下のように分類した。

「1年」、「2~4年」(2年生、3年生、4年生)、「院生等」(研究生、聴講生、交換留学生など、大学院生)

3. 結果

まず、学生の意欲がアカハラ不快感にどのように影響するかを検討するために、①被害者の学年、②研究職への興味度、③研究意欲についてのアカハラの平均不快感

の結果を示す。③の研究意欲は、回答者ごとに「研究職への興味度」と「現在の研究への興味度」をそれぞれ数値化したものを足し合わせ、合成変数を形成した。

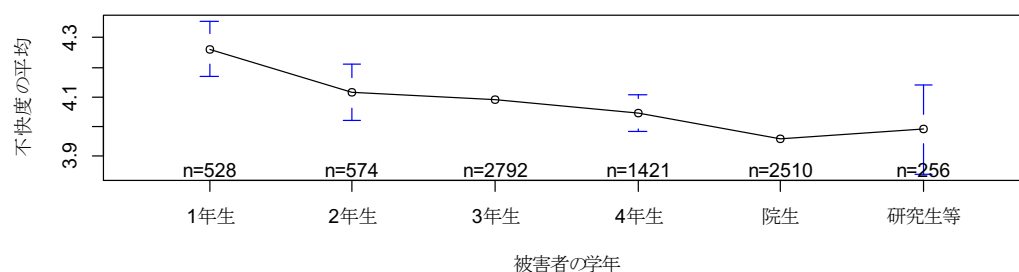


図 7 被害者の学年ごとの平均不快度

①の被害者の学年について、図 1 より、被害者の学年が上がるほど、平均不快度が下がること示された。これについて回帰分析を行った結果、有意であることが示された。

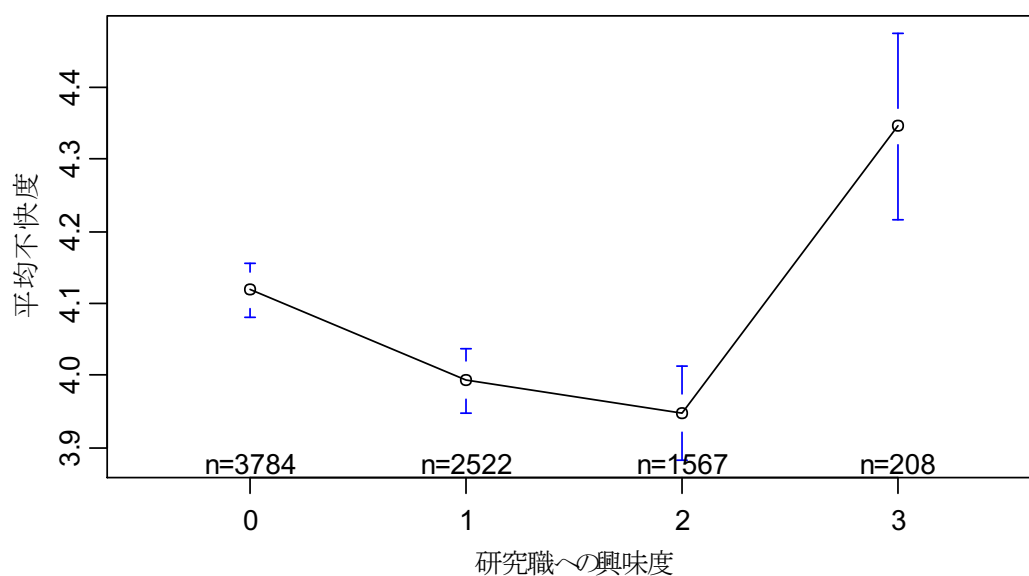


図 8 研究職への興味度別の平均不快度

②の研究職への興味度について、回帰分析を行った結果、興味度が高くなるほどアカハラの平均不快度が下がること有意に示された。また、表 1 に示すように被害者の学

年が上がると、研究への興味度は上昇する傾向にある。

Table: 表 1: 研究職への興味度と学年のクロス表

	1 年	2~4 年	院生等
0	21	149	42
1	8	87	44
2	2	27	62
3	0	5	7

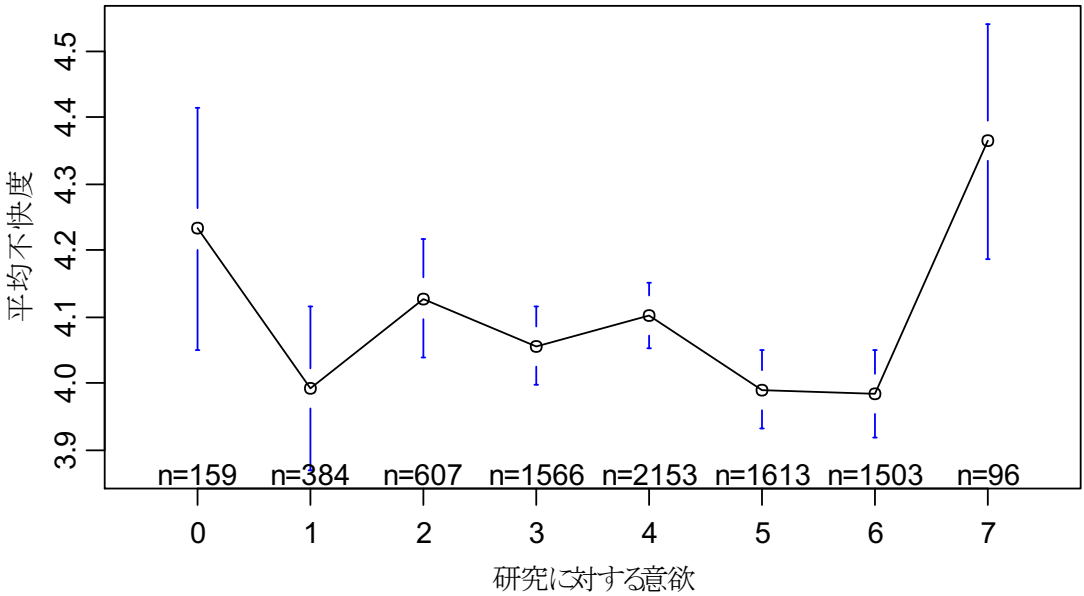


図 9 研究意欲ごとの平均不快感

③の研究意欲の合成変数に関しては、図 3 のように示すことができ、回帰分析を行うと研究意欲が上がるとアカハラの不快感が下がることが有意に示されるが、表 2 のようにマルチレベルモデルの推定を行うと、有意な差がないことが示された。

表 2: 加算変数を使った回帰分析 (マルチレベルモデル)

Model 1	Model 2	Model 3
---------	---------	---------

(Intercept)	4.27 ***	4.23 ***	4.23 ***
	(0.05)	(0.07)	(0.07)
kenkyusyoku.n	-0.02	-0.03	-0.04
	(0.02)	(0.02)	(0.03)
gakunen32~4 年	-0.18 **	-0.18 **	-0.18 **
	(0.05)	(0.05)	(0.05)
gakunen3 院生等	-0.28 ***	-0.28 ***	-0.28 ***
	(0.06)	(0.06)	(0.06)
genzai.n		0.01	
		(0.01)	
kenkyuiyoku			0.01
			(0.01)

R^2	0.00	0.00	0.00
Adj. R^2	0.00	0.00	0.00
Num. obs.	8081	8081	8081
=====			
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05			

次に教員の地位がアカハラの不快感にどのように影響するかの結果を示す。

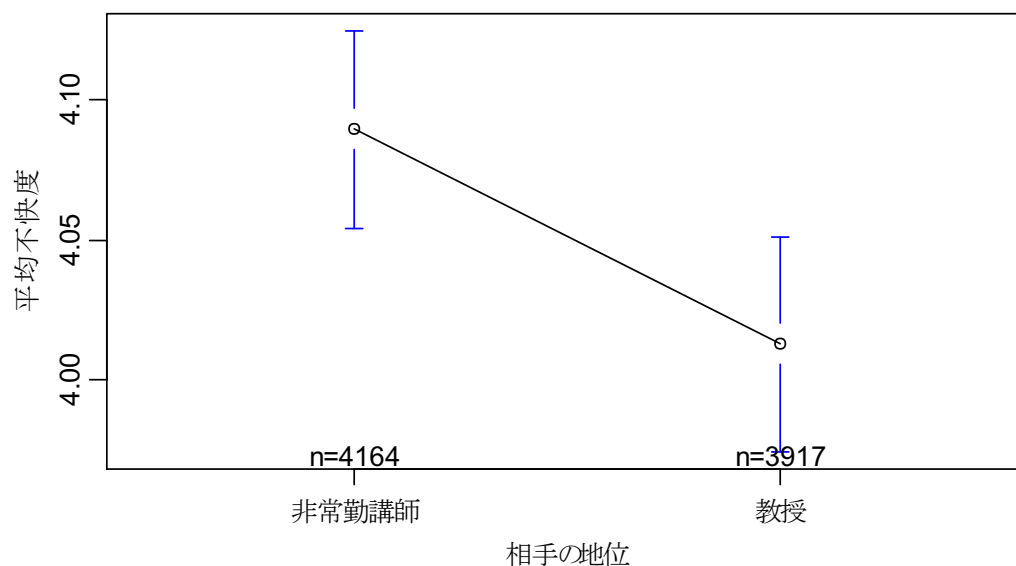


図 10 相手の地位別の平均不快感

図 4 より、加害者が非常勤講師である方が、教授であるよりも、アカハラの不快感が高くなる。これは、回帰分析によっても有意であると示されている。

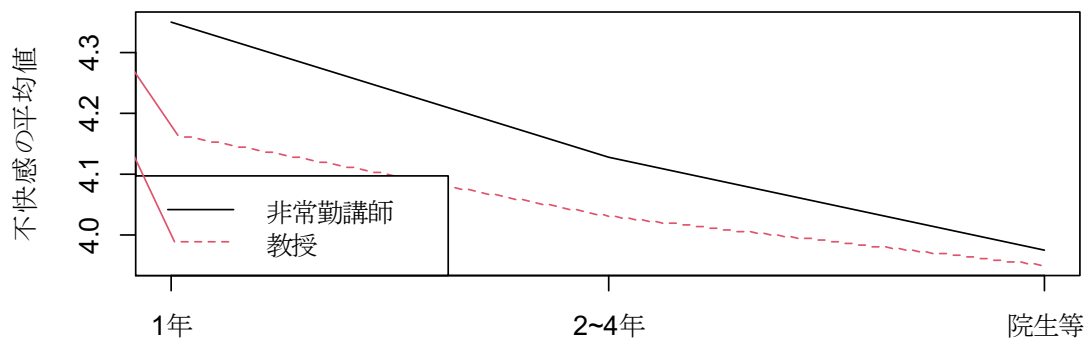


図 11 加害者の立場別の、被害者の学年と平均不快感の推移

また、加害者の立場が非常勤講師の場合の方が、教授の場合よりも平均不快感が高く、どちらも被害者の学年が上がると平均不快感が下がることも示される。

4. 議論

4.1 分析結果の考察

学部生よりも大学院生の方が、研究意欲が高いだろうという仮定の下、検討を行ったが、被害者の学年が上がるとアカハラの不快感が下がり、また研究職への興味度が上がるとアカハラの不快感が下がった。よって、仮説 1 として立てた、「研究意欲が高いほど、アカハラの不快感は高くなる。」は支持されなかった。これは、中川 (2023) による先行研究で学部生よりも大学院生の方が、ハラスメント相談をする割合が高いということを補強するものとはならなかった。一方で、学部 1 回生のアカハラに対する平均不快感が高いことに注目すると、高校生活では想像し得なかったアカハラという問題について敏感であると推測できる。学年が上がるにつれて大学内での学生と教員の関係性に慣れていき、アカハラが日常的な風景になっていることも指摘でき、アカハラ自体に対する問題意識が薄れていることが要因として考え

られる。

また、教員の立場についていえば、仮説2の「教員の地位が高いほど、アカハラの不快感は低くなる。」は支持された。これには、「教授」という名称のもつ影響力の強さがうかがえる。大学生にとって、「教授」という存在は、権威的なものであり、自分とはかけ離れた知見を持つ人物から、一定のハラスメントを受けても、それ相応の対応だと認識してしまうことが指摘できる。

4.2 本研究の意義・今後の課題

本研究において、学部生よりも大学院生の方が、アカハラに対する平均不快感が低いことが示されたことは、大学院生のハラスメント相談割合が高いことの補強とはならなかったが、逆に言えば、学生がアカハラを相談する動機づけと、学生が教員からのある行為に不快さを感じ、アカハラとして認識することは、別のレベルで扱うべき項目であることが示されたという意義がある。また、学年が上がるにつれてアカハラに鈍感になってしまっている、あるいはアカハラに対して抗議することに不利益を感じていると推測することができ、大学内でのアカハラの常態化について今後検討するべきであると結論付けられる。

5. 参考文献

中川純子, 2023, 「学生相談機関が兼担するハラスメント相談の様相 --ハラスメント全学相談窓口の22年間を振り返る--」『京都大学学生総合支援機構紀要』2:65-74.

湯川やよい, 2011, 「アカデミック・ハラスメントの形成過程--医療系女性大学院生のライフストーリーから」『教育社会学研究』88(0): 163-184.

NHK, 2023, 「東京大学教授がアカハラ停職 論文指導に期限間際まで応じず」,

NEW WEB, (2024 年 1 月 20 日取得,

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230414/k10014038871000.html>).

アカハラの種類と被害者の性別による不快感の違い

小山 柊

1. はじめに

アカデミックハラスメント(以下アカハラと呼称)は「大学を始めとした教育機関にて、所属する職員が自身の権力を不当に公使することで、ほかの職員や学生に対し精神的または肉体的苦痛を与えること」である。そして、近年こうしたアカハラの被害の報告が増加している。また、アカハラは被害者が女性であることが多いがその要因は実際に女性に対してアカハラが多く行われているということ以外に、女性の方が男性よりアカハラの種類によっては不快感に感じやすい(特に精神的苦痛を与えるもの)という要因があるのではないかと考えられる。本稿ではこのような問題関心から、設定した仮説を検証し、議論していく。

仮説

以下の仮説を検証する

- ① アカハラにおいて、女性の方が、精神的なハラスメントの不快感が高い。
- ② アカハラにおいて、男性の方が、金銭に関わるハラスメントの不快感が高い。

仮説が考えられる背景

奨学金をもらっている割合が男の方が高いなどの先行研究から男性の方が金銭やその後のキャリアに影響が強いハラスメントの不快感が高いのではないかと考えられる。また、現代社会において、女性の方がセクハラや、性差別、攻撃的な発言などを受けることが多いので、女性はよりそれらのハラスメントに敏感で不快感も高いのではないかと推測される

2. 分析方法

回答者には質問に対して不快度を「1 とても不快である」、「2 不快である」、「3 どちらかといえば不快」、「4 どちらかといえば不快ではない」、「5 不快ではない」、「6 まったく不快ではない」の六段階で評価してもらった。この不快度については分析の際には変数名を「unpleasure.n」とし、それぞれを5、4、3、2、1、0と数値化して 処理した。

行われた調査において、質問項目は

お尻を触られた／異性の好みを聞かれた／自分の書いたレポートを淡々と批判された
／自分の書いたレポートを大声で批判された／「お前はバカだ」と言われた／卒論、
修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた／研究の相談をしたが無視さ
れた／奨学金の推薦書を書いてもらえなかった／無給でその先生の部屋を掃除するよ
うに命じられた／就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった／自分の書いたレ
ポートの内容を無断で盗用された／自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらさ
れた／態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた

が存在したがそのうち、精神的苦痛に直結すると考えられる、「お尻を触られた」

「異性の好みを聞かれた」自分の書いたレポートを大声で批判された」「お前は馬鹿
だと言われた」の4つのアカハラを「mental」というグループ(mental 群)とし、金銭
に関係する「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」、「無給でその先生の部屋を
掃除するように命じられた」、「就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった」
の3つのアカハラを「money」というグループ(money 群)として、それぞれにおける
平均不快度を回答者の性別ごとに分析した。回答者の性別に関しては、「Q1 あなたの

性別は?」に対する結果、「1 女」、また は、「2 男」を用いた。（性別間の違いを検討するため、回答者の性別が「その他」である回答は除外した

3. 分析結果

3.1 平均値の比較

仮説 を検証するために、男女別の mental 群と money 群に対する平均不快感の比較を行った。結果は以下のようになった。

性別が男であるときの平均不快感

男性, mental グループの平均不快感: 3.875118

男性, money グループの平均不快感: 3.755479

性別が女性である時の平均不快感

女性, mental グループの平均不快感: 4.238727

女性, money グループの平均不快感: 3.818182

また、これを図に表したものが図 1～4 である。 エラーバーは 95%信頼区間の範囲を示している。男女別の mental 群と money 群についてそれぞれ平均値の差の検定を行ったところ mental 群については p 値が $8.336e-11$ となり、男女の mental 群の平均値の間には 有意な差があることが示された。

次に money 群に関しては、p 値が 0.2602 となり男女の money 群の平均値の間には有意な差は見られなかった。

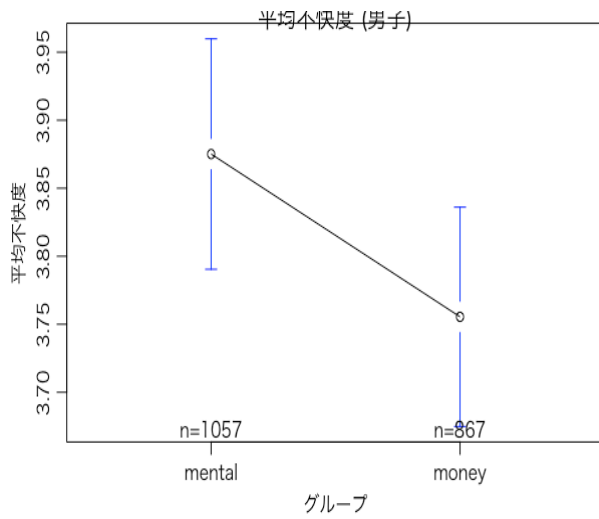


図 12 男性の平均不快感

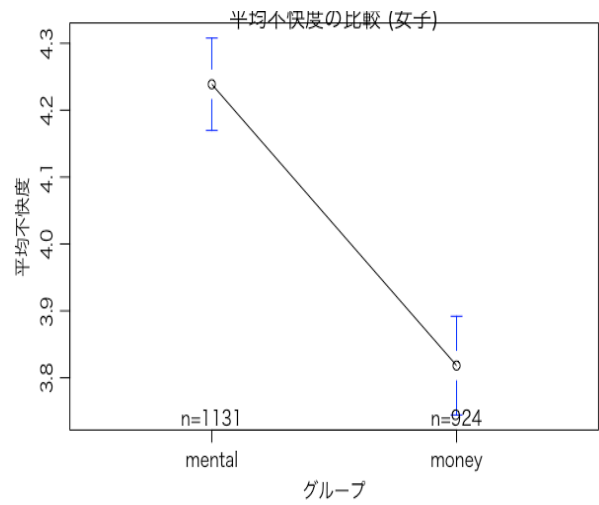


図 13 女性の平均不快感

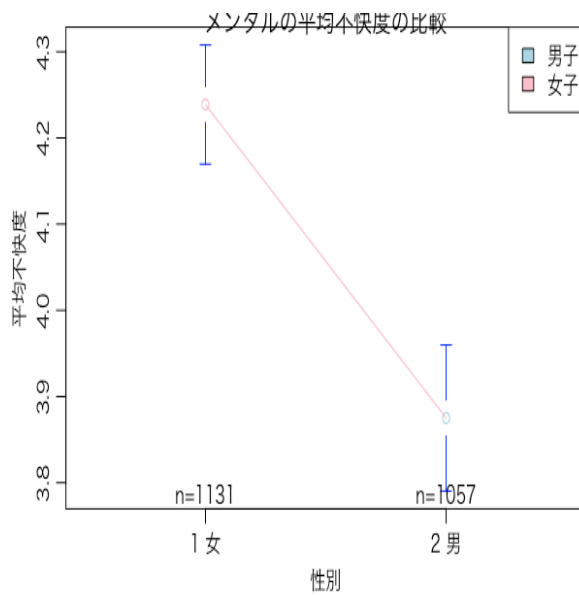


図 3 mental の男女別平均不快感

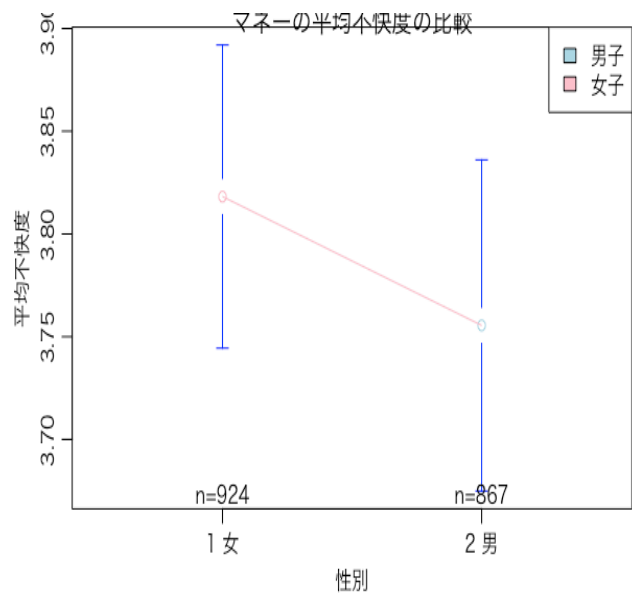


図 4 money の男女別平均不快感

3.2 回帰分析

従属変数を平均不快感とし、独立変数を性別とした回帰分析を行なった。

Model 1 では mental 群の平均不快感と性別についての回帰モデルを作成しており、mental 群において男性の平均不快感より 0.36、女性の平均不快感の方が高く、有意な差であると言える。Model 2 では money 群の平均不快感と性別についての回帰モデルを作成しており、money 群において男性の平均不快感より 0.06、女子の平均不快感の方が高くこれは有意な差とは言えないことが示された。

=====

Model 1

(男不快感) 3.88 ***

(0.04)

(女性との差) 0.36 ***

(0.06)

R^2 0.02

Adj. R^2 0.02

Num. obs. 2188

=====

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

=====

=====

Model 2

(男性不快感) 3.76 ***

(0.04)

(女性との差) 0.06

(0.06)

R² 0.00

Adj. R² 0.00

Num. obs. 1791

=====

*** $p < 0.001$; ** $p < 0.01$; * $p < 0.05$

4. 議論

これらの結果から、女性の方が精神的アカハラの不快感が男性よりも高いという仮説①はおおむね支持され、男性の方が金銭に関するアカハラの不快感が女性よりも高いという仮説②は否定されることがわかった。女性の方が精神的アカハラにより不快感を感じることは、女性に対するそれらのハラスメントが横行しており、女性がそれに対する認知が高いことやそれらに対して敏感であることの表れであるのかもしれない。しかしこの分析を全面的に信用することはできない。回答のほとんどが京大生であり、サンプルの母数が少ないことがその一つの要因である。また、回帰分析の際の決定係数の値が小さかったため、今回の仮説以外の影響が平均不快感の変化に関わっていることが示唆されている。そのため、仮説をより検証するためにはさらにくわしい調査と分析が必要になるだろう。

参考文献

小田部貴子、丸野俊一、舩田亮太、2010、『アカデミック・ハラスメントの生起実態
とその背景要因の分析』、九州大学心理学研究、11: 45-56

加害者の地位と名声は、アカハラの不快感にどの程度影響するか

文学研究科 M1 小林夕莉

1. はじめに

ハラスメントは、日本社会において近年ますます注目を集めている事象である。1989年に「セクハラ（セクシュアル・ハラスメント）」がユーキャン新語・流行語大賞に選ばれて以降、性別や地位、勤務時間など、何らかの社会的優位性をもとに不当な言動や嫌がらせを行うことが、「ハラスメント」として多様化し、定着してきた。中でも大学におけるハラスメントは、教育の場におけるハラスメントであることからしばしば「アカデミック・ハラスメント」と呼ばれる。京都大学（2023）のガイドラインでは、「セクシュアル・ハラスメント」「アカデミック・ハラスメント」「パワー・ハラスメント」「ハラスメント」に分類されている。セクシュアル・ハラスメント（以下セクハラ）については、「性的な関心や欲求に基づく発言や行動」、パワー・ハラスメント（以下パワハラ）は、教職員間における就労上の不適切な行動として定義されており、アカデミック・ハラスメント（以下アカハラ）が研究・教育に関わるものとして強調されている。

一方、アカハラに関する認識は、セクハラ・パワハラに比べて未だ浸透していない。成瀬ら(2016)は、日本のハラスメント対策について「『セクシュアル・ハラスメント』を中心に行われてきたために、性的な事柄が関係しない嫌がらせや人権侵害の問題への対応が出遅れてきた」と指摘している。厚生労働省のハラスメント対策総合サイト「あかるい職場応援団」³でも、パワハラ・セクハラに加え、「妊娠・出産・育児休業等ハラスメント」、「カスタマーハラスメント」、「就活ハラスメント」が定義づけられているが、アカハラに関する言及はない。これらの行為がハラスメントに該当するかは、被害者の

³ 厚生労働省「ハラスメント基本情報」ハラスメントの定義. <https://www.no-harassment.mhlw.go.jp/foundation/definition/about> (最終閲覧日：2024年1月23日)

意識に委ねられている。また、加害者の地位とセクハラ不快感について太郎丸編(2022,2023)は、加害者の地位の高さが不快感を高めることを示しているが、アカハラに与える影響については明らかでない。したがってどのような環境、加害者／被害者の属性および行為が、アカハラ被害者の不快感を増幅させるかを調査することは非常に重要である。

そこで本研究では、アカデミック・ハラスメント（以下、アカハラ）の加害者の地位（役職）および名声（社会的認知度・学術的業績の高さ）が、アカハラに対する不快感にどの程度影響するか明らかにする。その際に検討する仮説は以下の通りである。

仮説

- ① アカハラ加害者の名声（社会的認知度・学術的業績の高さ）が低い（＝無名の研究者である）ほど、アカハラの不快感が高い。
- ② アカハラ加害者の地位(役職)が低いほど、アカハラの不快感が高い。

2. 質問事項と操作

説明変数

回答者の学年（1年／2年・3年・4年／大学院生／研究生・聴講生・留学生等）と性別（男／女）を説明変数として用いた。また、質問項目は以下の $3 \times 2 \times 2 \times 2 \times 1 \times 3$ 次元で設定した。

加害者の名声（celeb）： 無名の／優れた研究業績のある／TVで有名な

加害者の年齢（age）： 37歳／52歳

加害者の地位（position）： 教授／非常勤講師

加害者の性別（sex.offender）： 女／男

加害の種類（type）：

お尻を触られた（＝“お尻”）／異性の好みを聞かれた（＝“異性好み”）／自分の書いたレポートを淡々と批判された（＝“淡々批判”）／自分の書いたレポートを大声で批判さ

れた（＝“大声批判”）／「お前はバカだ」と言われた（＝“バカ”）／卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた（＝“テーマ”）／研究の相談をしたが無視された（＝“相談”）／奨学金の推薦書を書いてもらえなかった（＝“奨学金”）／無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた（＝“掃除”）／就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった（＝“就職活動”）／自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された（＝“盗用”）／自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた（＝“個人情報”）／態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた（＝“髪”）

従属変数

上記のヴィネットを用いて、不快度を質問し、1人あたり16の質問に回答した。表1左のように提示した選択肢について、右の数値に変換し、従属変数とした。

表1 アカハラ不快度の変換

処理前（質問に対する選択肢）	処理後（数値化）
1 とても不快である	5
2 不快である	4
3 どちらかといえば不快	3
4 どちらかといえば不快ではない	2
5 不快ではない	1
6 まったく不快ではない	0

得られたデータはロングフォーマットに変換し、自由回答である質問11「回答中で答えにくかった点や感想があれば自由に書いてください」を削除した。回帰分析にあたっては、在籍する大学（＝京都大学）に対するダミー変数を用いた。

3. 結果

（1）加害者の名声

まず、加害者の名声(celeb)が与える不快度の平均値を比較した図が、下の通りである（図1）。図1によれば、平均不快度は「優れた業績のある」加害者で最も高く、平均値が4.08だった。「無名の」がそれに続き、「TVで有名な」が最も低い結果となった。し

かしながら、平均不快度の差が小さく、有意差があるかどうかは疑わしい。

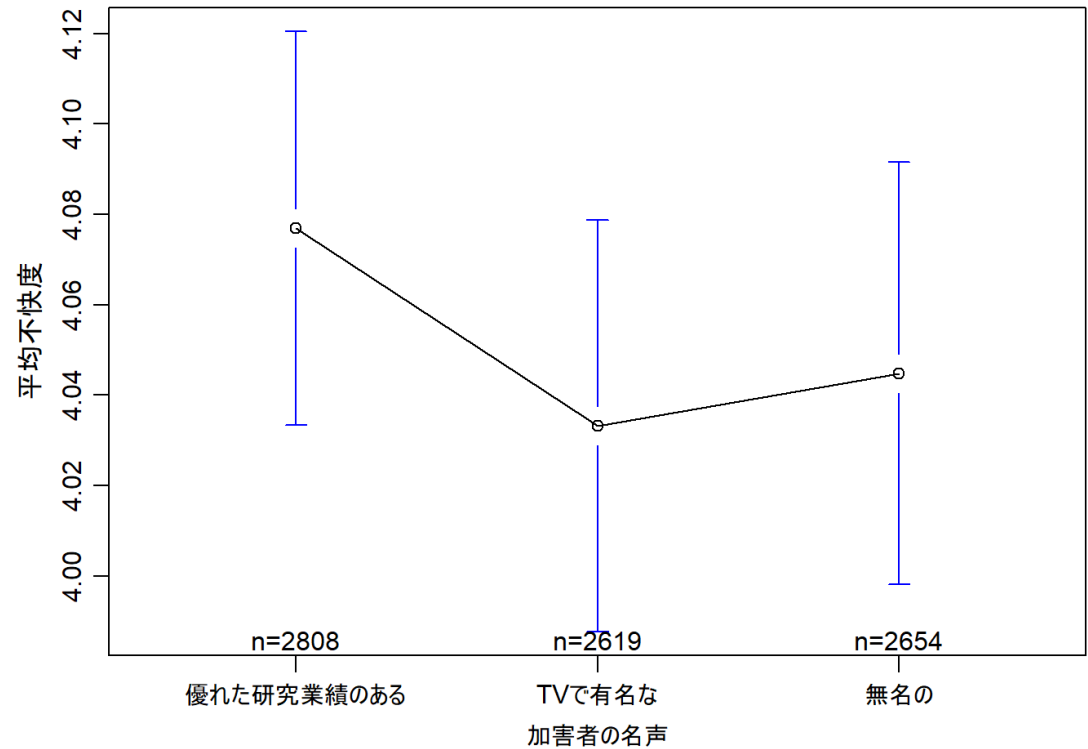


図1 加害者の名声と平均不快度

RStudio により筆者作成。エラーバーは 95%信頼区間を示す。

この結果について、単回帰分析によって検証すると、表2の通りとなった。Interceptが『優れた研究業績のある』を示している。この結果から、優れた研究業績があることと、無名であること・TVで有名であることの差異がアカハラの不快感に与える影響は小さく、有意な差は得られなかった。

表2 celeb：単回帰分析の結果

	Model 1
(Intercept)	4.08 ***
	(0.02)
celebTV で有名な	-0.04
	(0.03)
celeb 無名の	-0.03
	(0.03)
R^2	0.00
Adj. R^2	-0.00
Num. obs.	8081

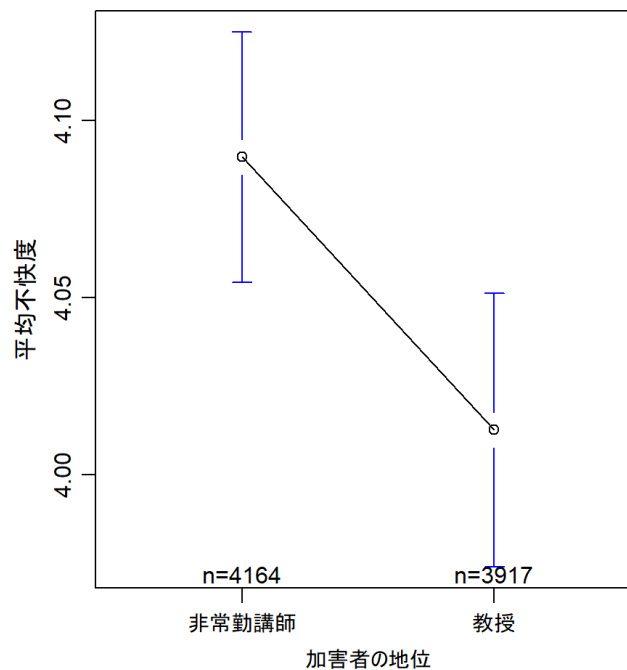
***p < 0.001; **p < 0.01; *p < 0.05

（２）加害者の地位

次に、加害者の地位(非常勤講師／教授)がアカハラの不快感に与える影響を調査する。図２は、加害者の地位とアカハラの平均不快感を比較したグラフである。図２によれば、平均不快感は「非常勤講師」のほうが「教授」よりも高い結果となった。

図２ 加害者の地位と平均不快感

RStudio により筆者作成。エラーバーは 95%信頼区間を示す。



これについて男女別にマルチレベル・モデル分析を行った結果、表３の通りとなった。表３からは、celeb、position とともに有意な差がなく、むしろ加害者の性別や加害行為の内容によって不快感が説明づけられていることが示されている。

表３ マルチレベル・モデル分析（男女/女性/男性）

被害者の性別	男女	女	男
(Intercept)	3.18 *** (0.12)	3.39 *** (0.14)	2.86 *** (0.23)
celebTV で有名な	0.02 (0.03)	0.04 (0.04)	0.01 (0.04)
celeb 無名の	0.04 (0.03)	0.07 (0.04)	0.01 (0.04)
position 教授	-0.01	0.00	-0.02

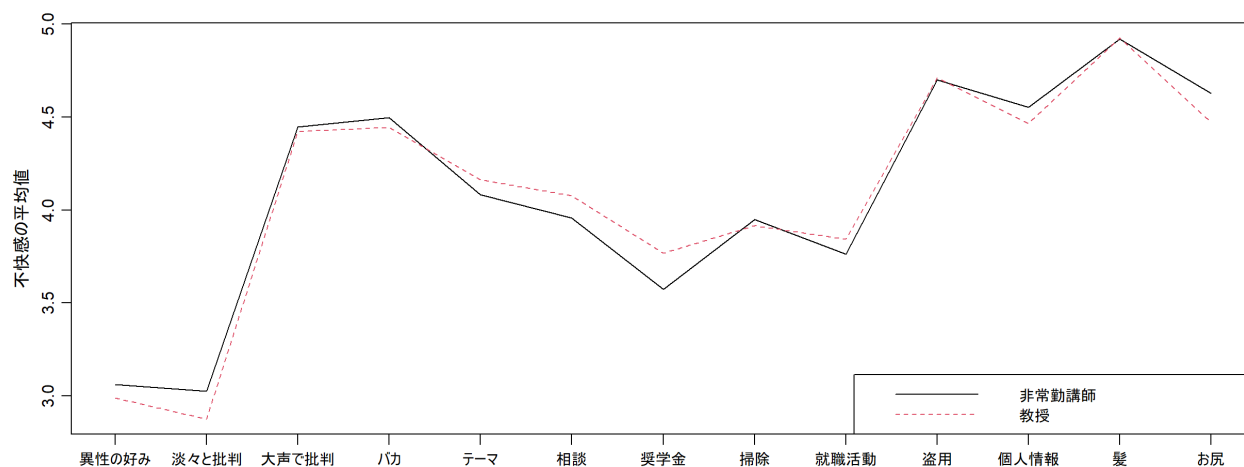
被害者の性別	男女	女	男
	(0.02)	(0.03)	(0.03)
sex.offender	0.09 ***	0.09 **	0.09 **
男	(0.02)	(0.03)	(0.03)
age52 歳	0.04	-0.01	0.09 **
	(0.02)	(0.03)	(0.03)
type 淡々批判	-0.03	-0.14	0.09
	(0.05)	(0.08)	(0.08)
type 大声批判	1.41 ***	1.26 ***	1.58 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.09)
type バカ	1.47 ***	1.34 ***	1.61 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.09)
type テーマ	1.15 ***	0.94***	1.36***
	(0.06)	(0.08)	(0.08)
type 相談	1.00 ***	0.79***	1.22 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.08)
type 奨学金	0.69***	0.40 ***	0.97 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.08)
type 掃除	0.90 ***	0.77 ***	1.05 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.09)
type 就職活動	0.84 ***	0.57 ***	1.11 ***
	(0.05)	(0.08)	(0.08)
type 盗用	1.67 ***	1.49 ***	1.87 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.08)
type 個人情報	1.54 ***	1.37 ***	1.71 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.08)
type 髪	1.96 ***	1.71 ***	2.21 ***
	(0.05)	(0.08)	(0.08)
type お尻	1.56 ***	1.42 ***	1.72 ***
	(0.06)	(0.08)	(0.08)
sex2 男	-0.16 **		

被害者の性別	男女	女	男
	(0.06)		
sex3 その他	0.04		
	(0.21)		
gakunen3	-0.09	-0.12	-0.15
2,3,4 年	(0.11)	(0.13)	(0.23)
gakunen3 院生など	-0.24 *	-0.31 *	-0.25
	(0.12)	(0.14)	(0.23)
京大 TRUE	-0.16 **	-0.17 *	-0.14
	(0.06)	(0.08)	(0.09)
Adj. R^2			
Num. obs.	7057	3367	3578
Num. groups: id	397	191	199
Var: id (Intercept)	0.25	0.22	0.28
Var: Residual	0.84	0.78	0.90

=====
 *** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

以上の結果から、地位(position)と他の要素が交互作用効果を持っているのではないかと考えた。そこで、今回は加害行為について、その交互作用を検証した。その結果が図3であり、マルチレベル・モデル分析の結果が表4の通りである。図3からは、非常勤講師と教授の間に不快感の差が見られる項目がほとんどないことが窺える。しかしながら、「お尻を触る」「異性の好みを聞く」「淡々と批判する」では非常勤講師に対する不快度が高く、「相談」「奨学金」では教授の不快度の平均値が高かった。マルチレベル・モデル分析の結果（表4）からは、「教授」と「奨学金」でのみ5%水準で有意であることが認められた。

図3 非常勤講師/教授別の不快度の平均値



RStudio をもとに筆者作成。

表4 position と type の交互作用効果に関するマルチレベル・モデル分析

position × type		position × type		position × type	
(Intercept)	3.23 *** (0.09)		(0.09)		(0.09)
position 教授	-0.05 (0.09)	type 奨学金	0.56 *** (0.09)	type お尻	1.60 *** (0.10)
type 淡々と批判	0.00 (0.09)	type 掃除	0.98 *** (0.10)	age52 歳	0.03 (0.03)
type 大声批判	1.43 *** (0.10)	type 就職活動	0.76 *** (0.09)	sex.offender 男	0.08 ** (0.03)
type バカ	1.46 *** (0.09)	type 盗用	1.67 *** (0.09)	sex2 男	-0.15 *** (0.03)
type テーマ	1.08 *** (0.09)	type 個人情報	1.51 *** (0.10)	sex3 その他	0.05 (0.10)
type 相談	0.92 ***	type 髪	1.91 ***	gakunen3 2,3,4 年	-0.11 * (0.05)

position × type		position × type	
gakunen3	-0.25	position 教	0.01
院生など	***	授:type 個人情報	
	(0.05)		(0.13)
京大 TRUE	-0.15	position 教	0.05
	***	授:type 髪	
	(0.03)		(0.12)
position 教	-0.10	position 教	-0.08
授:type 淡々批判	(0.12)	授:type お尻	
			(0.13)
position 教	-0.00	R^2	0.27
授:type 大声批判	(0.13)	Adj. R^2	0.27
position 教	0.02	Num. obs.	7057
授:type バカ	(0.13)		
position 教	0.11	*** p < 0.001; ** p < 0.01;	
授:type テーマ		* p < 0.05	
	(0.13)		
position 教	0.14		
授:type 相談			
	(0.13)		
position 教	0.27 *		
授:type 奨学金			
	(0.13)		
position 教	-0.07		
授:type 掃除			
	(0.13)		
position 教	0.11		
授:type 就職活動			
	(0.12)		
position 教	0.08		
授:type 盗用			
	(0.13)		

4. 考察

本研究では、アカハラ加害者の権力について、地位・名声の2つの指標をもとに、①アカハラ加害者の名声（社会的認知度・学術的業績の高さ）が低い（＝無名の研究者である）ほど、アカハラの不快感が高い。②アカハラ加害者の地位(役職)が低いほど、アカハラの不快感が高い。という2つの仮説の検証を行った。その結果、名声については「優れた研究業績を持つ」「無名の」「TVで有名な」順にわずかに平均不快感が高く、地位に関しては教授よりも非常勤講師の方がやや平均不快感が高くなる結果となった。そのため、仮説①は支持されず、仮説②のみ支持された。また仮説②についてマルチレベル・モデル分析を行った結果、有意差があるとは言えなかった。つまり、アカハラ加害者の名声や地位は、アカハラに対する不快感にほとんど影響を与えず、むしろ加害行為の内容によって不快感が左右される。この結果はセクハラを事例とした先行研究とは異なる点である。また、加害者の地位と加害行為の交互作用効果は、「教授」と「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」でのみ有意差が示された。このことから、学生が「(非常勤講師はそれほどでもないが、)教授に奨学金の推薦書を書いてもらうべきである」という認識を持っていることが示唆される。

本研究の課題は、これらの結果を引き起こした要因について十分に検討することができなかった点である。列挙されたアカハラが明確な犯罪（例：髪を引っ張る、大声で批判する、盗用、お尻を触るなど）を含んでおり、回答者が一様に高い不快感を示した結果、回答に加害者の地位や名声などの要素が反映されづらかったことが考えられる。実際、本研究の平均不快感は先行研究（太郎丸 2022, 太郎丸 2023）と比較すると、全体的に平均不快感が高く、5段階中4前後であった。北仲らはパワハラやアカハラについて、「業務上の行為、教育指導上の行為がその対象となるために、ハラスメントの線引きが難しいことが挙げられる」と指摘し、その具体例として「理系の研究室での長時間労働称揚の態度」や「講義が手抜きであるとか、いやな気持ちにさせる、わかりにくい」などを挙げている（北仲 et.al 2022）。より現実在即した状況を設定して不快感を調査することで、学生と教員の指導・修

学に対する認識のミスマッチや、加害者・被害者の要因が不快感に与える影響について、更に多くの知見が得られることを期待している。

文献

- 北仲千里・横山美栄子・金子雅臣・進藤聡彦，2022，「アカデミック・ハラスメントの構造 — 指導？ハラスメント？—」．『教育心理学年報』 61:304-313． DOI：
<https://doi.org/10.5926/arepj.61.304>
- 京都大学，2023，『京都大学におけるハラスメントの防止と対応について』．京都大学．
- 太郎丸博，2022，『どんな要因がハラスメントを不快にするのか』京都大学文学部社会学研究室
太郎丸博． DOI：<http://hdl.handle.net/2433/269364>
- 太郎丸博，2023，『どんな要因がハラスメントを不快にするのか 2022』京都大学文学部社会学
研究室 太郎丸博． DOI：<http://hdl.handle.net/2433/281577>
- 成瀬麻夕・川畑智子，2016，「日本の大学におけるハラスメント関連資料から見た特徴 テキ
スト分析を用いたセクシュアル・ハラスメント事例の検討」．『現代社会学研究』 29:43-62．
DOI：<https://doi.org/10.7129/hokkaidoshakai.29.43>

日頃の大学との関わりが不快感に及ぼす影響

松元 萌里香

1. はじめに

1.1 研究の背景

近年様々な種類のハラスメントが問題視されている。「ハラスメント」という言葉が日本で社会問題として取り出さされるようになったのは1980年代からである。1989年には初めて「セクシュアル・ハラスメント(以下セクハラ)」を論点とした裁判が起こった。セクハラを発端に「〇〇ハラスメント」に対する人々の問題意識が芽生えていった結果、男女雇用機会均等法第11条においてセクハラ、労働基準法や育児・介護休業法においてマタニティーハラスメント/パタニティハラスメント/ケアハラスメント、さらに2022年4月にはパワハラ防止法が施行された。多くのハラスメントが法令に定義されている現代であるが未だに制定されていないハラスメントの中にアカデミックハラスメント(以下アカハラ)が存在する。アカハラは「研究教育の場における権力を利用した嫌がらせ」(NAAH)として説明される。教育研究の場という限られた空間におけるハラスメントであるため他のハラスメントよりも取りざたされる機会が少ないのであろう。研究実績の差や教授と学生という立場の違いにおいてどうしても権力関係が分かりやすい教育研究の場は実際にハラスメントが起こっていても気が付きにくいのではないかと考えられる。このアカハラについて本論では学生の日頃の大学との関わりを軸にアカハラに対する不快感の違いを分析する。

1.2 研究意義・目的

アカハラの公開処分事例は圧倒的に指導教員から学生が被害を受ける事例が多く、教員と学生とが毎日接触し、それが密になればなるほど起こりうるという特徴がある(御興 2017)。各大学で教員と学生が交流する機会が多い一方で実際にアカハラの当事者になりうるのはその中の一部のもので大半は経験しないであろう。したがって仮に学生が学問への興味があまりなく、教員との交流の機会が少なければ少ないほどアカハラについて当事者意識のない者が多く存在してしまうということであろうか。学問や大学への関わり度合いとアカハラに対する不快感の関係について分析し、当事者ではなくとも当事者意識をもちうるのかを考察したい。

1.3 仮説

上述のことから以下の二つを仮説とし、検証する。

仮説①：大学の研究や勉強に興味を持てる人の方がアカハラに対する不快感が高い

仮説②：大学の登校・出席頻度が高い方がアカハラに対する不快感が高い。

2. 方法

2.1 調査データ

本稿では、先に紹介をされている、アカハラの不快感に関するアンケートの結果を使用する。

2.2 データの処理方法

まず調査データをロングフォーマットに変換した上で、質問項目を加工した。その後不快感の平均値を算出し、棒グラフ化するとともにマルチレベルモデル推定を行い有意性を確認した。

2.3 変数

A) 不快感を数値化した変数の作成

「あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか」という形式で質問をし、得られた不快感「まったく不快ではない」「不快ではない」「どちらかといえば不快ではない」「どちらかといえば不快」「不快である」「とても不快である」に 0~5 の数値を割り振り、変数名を `unpleasure.n` とした。

B) 大学への研究や勉強への興味

「Q7.大学への研究や勉強に興味を持てるか」という質問項目に対する答えの選択肢「興味を持てる」「どちらかと言えば興味を持てる」「どちらとも言えない」「どちらかと言えば興味を持てない」「興味を持てない」の5つをそのまま用いた。

C) 大学や講義への登校・出席頻度

「Q5.あなたは普段どの程度学校に行っていますか」という質問項目に対する4つの回答の選択肢「平日はほとんど毎日行っている」「週に3,4日は行っている」「週に1,2日行っている」「ほとんど行っていない」に順に3~0の数値を割り振った。「Q6.あなたは普段履修している授業に行っていますか」という質問項目に対する4つの回答の選択肢「ほぼすべての授業に毎回出席している」「あまり出席していない授業もあるが、半分以上の授業にはほとんど出席している」「出席している授業は一部だけで半分以上の授業にはほとんど出席していない」「ほとんど出席していない」に順に3~0の数値を割り振った。数値化した2つの回答の数値を足し合わせた“`School.attendance`”変数を作成し、その数値が0以上2未満の場合は「登校・出席頻度が低い」、2以上3未満の場合は「どちらかと言えば低い」、3以上4未満の場合は「どちらともいえない」、4以上5未満の場合は「どちらかと言えば高い」、5以上の場合は「登校・出席頻度が高い」を示す `category` 変数を新たに作成し、これを大学や講義への出席頻度とした。

3. 分析結果

3.1 学問への興味と不快感の関係

大学での研究や学問への興味の度合いと不快感の平均を棒グラフにあらわした結果を図1で示す。

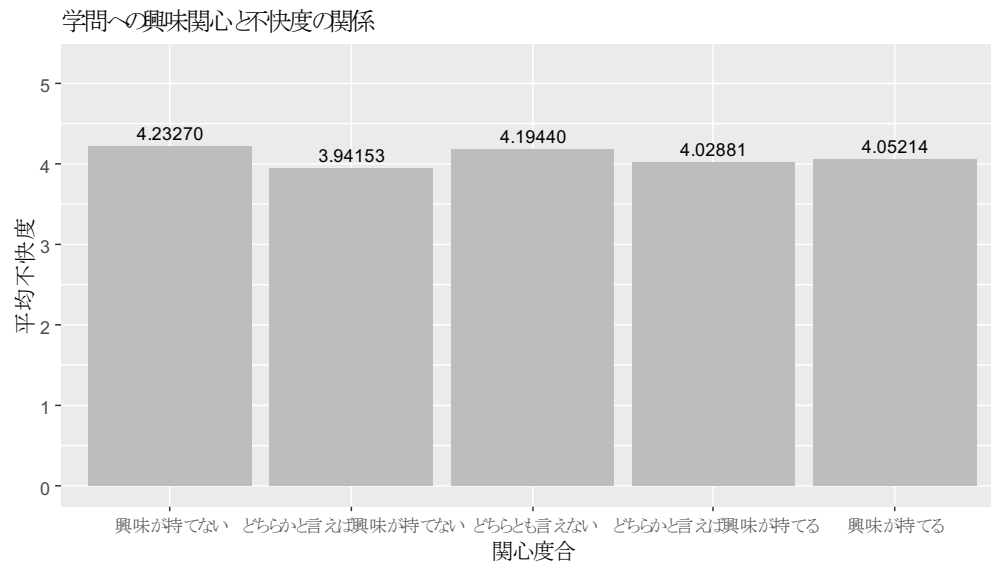


図 1：学問への興味関心と不快感の関係

図 1 からアカハラに対する平均不快感は大学の研究や勉強に興味を持てない人が最も高く、次にどちらとも言えない人でその次に興味を持てる人という結果になった。マルチレベルモデルで推定すると表 1 のようになる。

表 1：学問への興味関心に関するマルチレベルモデル推定

=====					
(Intercept)	3.9090	0.1095	446.7014	35.692	<2e-16

q7 どちらかと言えば興味を持てる	0.1344	0.1196	446.4343	1.124	
0.2617					
q7 どちらとも言えない	0.2910	0.1479	446.3116	1.968	
0.0497 *					
q7 興味を持てない	0.3001	0.2413	419.9790	1.244	
0.2144					
q7 興味を持てる	0.1466	0.1158	446.8219	1.266	
0.2061					

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1

q7 の異なる水準は unpleasure.n に影響を与えることが示唆されている。例えば、

“q7 どちらとも言えない”および“q7 興味を持てない”の水準では unpleasure.n が増加する傾向があり、これらの変化は統計的に有意である。しかし、他の水準では統計的

な有意性が見られない。

3.2 大学や授業への登校・出席頻度と不快感の関係

大学や講義への登校・出席頻度と不快感の平均を棒グラフにあらわした結果で示す。

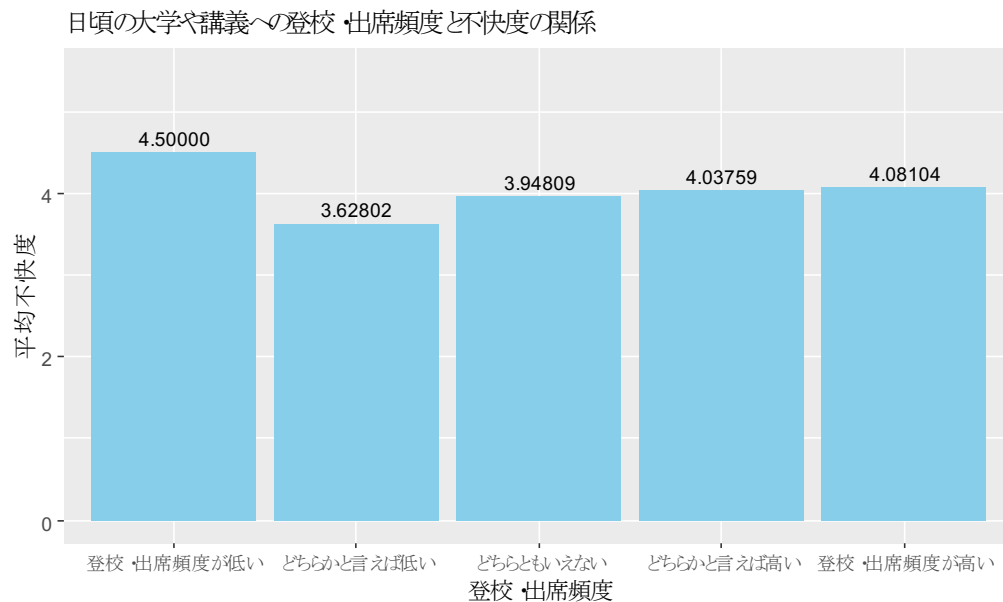


図2：日頃の大学や講義への登校・出席頻度と不快感の関係

日頃登校・出席頻度が低いものが最も不快感が高く、次に登校・出席頻度が高いものが不快感が高くなった。マルチレベルモデルで推定すると表2のようになる。

表2：登校・出席頻度に関するマルチレベルモデル推定

=====				
(Intercept)	4.03759	0.02917	138.398	< 2e-16 ***
category どちらかと言えば興味がない	-0.40957	0.08799	-4.655	3.3e-06 ***
category どちらともいえない	-0.08950	0.05504	-1.626	0.10395
category 大学の授業に興味がある	0.04345	0.03334	1.303	0.19254
category 大学の授業に興味がない	0.46241	0.17484	2.645	0.00819 **

Signif. codes: 0 '***' 0.001 '**' 0.01 '*' 0.05 '.' 0.1 ' ' 1				

Residual standard error: 1.194 on 8060 degrees of freedom

Multiple R-squared: 0.005095, Adjusted R-squared: 0.004602

F-statistic: 10.32 on 4 and 8060 DF, p-value: 2.468e-08

モデル全体として、category が"どちらかと言えば興味がない"や"大学の授業に興味がある"

ない"場合、アカハラへの不快感が低くなる傾向があると結論できる。ただし、モデル全体の説明力は低く、R-squared が 0.005 となっている。

4. 考察

仮説では学問への興味がある人の方が不快感が高く、大学や講義への登校・出席頻度が高い方が不快感が高くなると予想していたが、統計的に有意なものとして分析されたものとして学問への興味を持っていない人、また登校・出席頻度が低いものが最も不快感が高いという結果になった。図 3 より興味が持てない人と登校・出席頻度が低い人の出現回数に差があることから、ひとりの意見が大きく反映されていることは否めない。考えられる理由の一つに学問に対して興味が持てないと教育現場における権力関係に圧倒されることはなく却って妥当に状況を判断できるのではないかと想像する。また、大学へ頻繁に足を運ぶ人ならば良く目の当たりにする光景であっても大学や講義への登校・出席頻度が低ければどのアカハラの項目もかなり不快に思ってしまうのではないかと考えられる。一方で興味を持っている人や登校頻度が高い人も比較的不快感は高かったため、アカハラの当事者でなかったとしても不快感を持つ傾向にあると言える。今後の課題として登校頻度や学問への興味とアカハラの行為の内容による不快感の違いも仮説が立証されなかった理由の実証として考えていきたい。

学問への興味関心	出現回数
興味が持てる	4200
どちらかと言えば興味が持てる	2603
どちらとも言えない	607
どちらかと言えば興味が持てない	496
興味が持てない	159

登校・出席頻度	出現回数
登校・出席頻度が高い	5479
どちらかと言えば高い	1676
どちらともいえない	655
どちらかと言えば低い	207
登校・出席頻度が低い	48

図 3：各カテゴリーの出現回数

5. 参考文献

- ・御興久美子, 2017, 「平成 28 年度 人権講演会 アカデミック・ハラスメントとは?」, Bulletin of Osaka University of Pharmaceutical Sciences 11 (2017)
- ・NAAH, “アカデミックハラスメントとは”. <http://naah.jp/index/harassment/> (2024-01-22)

大学生におけるアカデミックハラスメント被害の相談行動に影響を与える要因の調査: 大学の先生や相談窓口の利用に関する性差と学年差の分析

森万結佳

1. 導入

1.1 研究背景

様々な悩みを抱えながらも誰にも相談できずにいる大学生は多く、大学の学生相談室が大学生の心理的サポートの役割を十分に果たしていないことが問題視されている。実際に、日本私立大学連盟学生委員会（2015）によると、自分のことを何でも話せる友人がいないと答えた学生は 15.9% に上っている。不安・悩みの相談相手として、1 位は友人(70.3%)、ついで家族(45.0%)と続く一方で、大学の教職員は 5.0%、学生相談室は 2.2% と低いのが現状である。大学生にとって、身近な人物を相談相手として選び、フォーマルな援助者よりもインフォーマルな援助者を相談相手として好む傾向があるのだ。(木村 2017) とはいえ、アカデミックハラスメントの問題は、大学機関が直接関連している事柄でもあるため、大学生に対するサポートを強化し、大学生の相談相手としてのプレゼンスを高めるべきである。

1.2 研究内容

そこで今回は、どのような属性の学生にとってアカデミックハラスメント被害の相談先候補として大学の先生や相談窓口の人が考慮に入りづらいのか調査を行う。分析における仮説として、①「男性の方が女性よりも大学の先生や相談窓口の人をアカデミックハラスメント被害の相談先としていない」、②「低学年であるほど大学の先生や相談窓口の人をアカデミックハラスメント被害の相談先としていない」を設定した。①の仮説の根拠として、男性の方が女性より学生相談室の利用経験のある人が少なく、また学生相談室の利用希望が低いという研究結果がある。(木村 et al. 2010) また、②の仮説の根拠として、高学年であるほど大学の先生とのつながりが多く大学の相談窓口を熟知していて、アカデミックハラスメントの相談先として利用するのではないかと考えた。

2. 分析手法

2.1 数値の処理

・課題データ中の、今回用いた回答データは以下の通りである。

Q1 あなたの性別は？

Q2 あなたの学年等は？

Q3 もしもあなたがハラスメント被害にあったとしたら、次にあげる人たちの中に、あなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか。

[3 大学の先生や相談窓口の人の中]

・以下のように、性別・学年・相談先の有無を数値化して処理した

性別：「1 女性」→「1」、「2 男性」→「2」

学年：「1 年生」→「1」、「2 年生」→「2」、「3 年生」→「3」、「4 年生」→「4」、「大学院生」→「5」

相談先の有無：「いると思う」→「4」、「たぶんいる」→「3」、「どちらともいえない」→「2」、「たぶんいない」→「1」、「いないと思う」→「0」

・性別における「3 その他」（8 名）及び無回答（3 名）、学年における「研究生、聴講生、交換留学生など」（15 名）は今回の調査対象ではないので除外した。なお、それぞれの除外対象の属性を重複して持ち合わせている学生はいなかったため、除外したのは合計 26 名である。よって、今回の分析対象データは 428 個である。

2.2 データの処理

(1)「性別」x 値、「大学の先生や相談窓口の人における相談先の有無」を y 値として回帰分析を行った。

(2)「学年」を x 値、「大学の先生や相談窓口の人における相談先の有無」を y 値として回帰分析を行った。

※小数点第五位以下は四捨五入して処理した

3.分析結果

(1)「性別」を x 値、「大学の先生や相談窓口の人における相談先の有無」を y 値とした回帰分析の結果

回帰統計

重相関 R	0.0347					
重決定 R2	0.0012					
補正 R2	-0.0011					
標準誤差	1.1690					
観測数	428.0000					

分散分析表

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F	
回帰	1.0000	0.7011	0.7011	0.5130	0.4742	
残差	426.0000	582.1868	1.3666			
合計	427.0000	582.8879				

	係数	標準誤差	t	P-値	下 限 95%	上 限 95%
切片	2.7887	0.1775	15.7126	0.0000	2.4399	3.1376
性別	-0.0810	0.1130	-0.7162	0.4742	-0.3032	0.1412

重相関 R や重決定 R² からも読み取れるように、相関係数や決定係数は非常に低い。回帰モデルがデータをうまく説明できていないことが示唆される。P 値も 0.05 よりも非常に大きいので、説明変数(の係数は統計的に有意ではない。

(2)「学年」を x 値、「大学の先生や相談窓口の人における相談先の有無」を y 値として回帰分析の結果

回帰統計

重相関 R	0.0322					
重決定 R ²	0.0010					
補正 R ²	-0.0013					
標準誤差	1.1691					
観測数	428.0000					

分散分析表

	自由度	変動	分散	観測された分散比	有意 F	
回帰	1.0000	0.6059	0.6059	0.4432	0.5059	

残差	426.0000	582.2820	1.3669			
合計	427.0000	582.8879				
	係数	標準誤差	t	P-値	下 限 95%	上 限 95%
切片	2.5550	0.1792	14.2575	0.0000	2.2028	2.9072
学年	0.0314	0.0472	0.6658	0.5059	-0.0614	0.1243

「性別」と同じく、相関係数や決定係数は非常に低い。P 値も 0.05 よりも非常に大きいため、やはり説明変数の係数は統計的に有意ではないことが分かる。

4 考察

4.1 分析結果の考察

「性別」・「学年」どちらの属性も「大学の先生や相談窓口の人における相談先の有無」には関連がないことが分かった。「性別」に関しては、「男性の方が女性よりも大学の先生や相談窓口の人をアカデミックハラスメント被害の相談先としていない」とは言いえないことが分かった。仮説に用いていた先行研究では、様々な悩み事を相談する場としての学生相談室に関して調査が行われていた。一方で、今回の調査ではアカデミックハラスメントのみを調査対象とした点や質問項目に「大学の先生」が相談先として加わっている点が仮説の不立証に影響したのかもしれない。また、「学年」に関しても、「低学年であるほど大学の先生や相談窓口の人をアカデミックハラスメント被害の相談先としていない」という仮説が立証できないことが明らかになった。この原因として、大学の先生とのつながりが多く大学の相談窓口の存在を知っていたとしても、大学の先生や相談窓口の人が相談先の候補に入るわけではないことがあげられる。

4.2 今後の展望

今回の調査から、どのような性別・学年の学生にとってアカデミックハラスメント被害の相談先候補として大学の先生や相談窓口の人が考慮に入りづらいのか明らかにすることができなかった。この調査結果から、アカデミックハラスメントの相談先としての大学機関はどのような性別・学年の学生に対してもプレゼンスを高める必要があるのではないかと考える。

5.参考文献

日本私立大学連盟学生委員会, 2015.「私立大学学生白書」
木村真人, 2017.「悩みを抱えていながら相談に来ない学生の理解と支援―援助要請研究の

視座からー」『教育心理学年報第 56 巻』 186-201.

木村文香・松田英子, 2010. 「学生相談室の利用実態に関する調査報告 ー改革前の認知度と利用への意向ー」『情報と社会』 20 121-130.

加害者の知名度がアカハラの不快感に与える影響

深尾 輝

1. はじめに

近年、「アカデミック・ハラスメント（以下「アカハラ」）」が問題視されるようになり、多くの大学や研究機関においてハラスメント相談窓口の設置などの対策が取られている。それにも関わらず、大学や研究機関でのアカハラ被害の事例は日々明らかとなっており、京都大学においても 2023 年 12 月 26 日に京都大学大学院工学研究科に所属する 60 代教授が学生に対して人格を否定するような発言を行ったり、学内調査の取り下げを求めたりしたとして 2 ヶ月の懲戒処分を受けた。アカハラに関して、「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程」（京都大学 2005）において「教員がその職務上の地位又は権限その他人間関係等の優位性を不当に利用して他の教員又は学生等に対して行う業務の適正な範囲を超えた研究若しくは教育上又は修学上の不適切な言動」と定義されている。またアカハラの内容に関して、「アカデミック・ハラスメント及びパワー・ハラスメントに関するガイドライン参考資料」（大阪大学）によると、①良好な環境における研究・教育・修学の侵害、②不当な評価や処遇に加えて、③身体または精神的な侵害も含まれており、その内容は多岐にわたる。上記の定義にもあるように、アカハラは教員間、教員-学生間に起こるものであるが、その両者において「その職務上の地位又は権限その他人間関係等の優位性」が背景に存在するため、加害者と被害者の大学や研究機関内での立場関係を考慮する必要がある。またアカハラ被害に遭った時に特に何もしない理由として 6 割近くの人が「泣き寝入り」している（村上 2003）。この泣き寝入りに関しては、「行動すると研究を続けるのに不利になると思ったから」のように、自分より地位が高く、権限を持つ加害者に対して何らかの行動を取ることで自体が解決しないあるいは更に悪化すると考え、被害者が「仕方がない」としてアカハラ被害を受け入れる場合やそもそもアカハラだ感じていない場合が多いのでは無いかと感じる。更に、それは加害者の地位や権限が高ければ高いほどよく見られる事

例だと感じる。

以上より、本稿では次のような仮説を立てる。

仮説 1：加害者の知名度が高いほどアカハラの不快感が低くなる

仮説 2：研究・学問が直接関わるアカハラ行為の方が、そうでないアカハラ行為よりも、加害者の知名度の高低間で感じる不快感の差が大きい（加害者の知名度が高いほどアカハラの不快感が低くなる）

1 つ目に関しては、大学や研究機関における当人の評価や評判（とそれに基づく当人の役職含む地位や権限）が当人の研究実績や活動によって決まることが多いと考え「知名度」に着目した。加害者の知名度が高いほど、アカハラの被害者は「仕方がない」としてアカハラ行為を不快に感じにくい、または被害者がそもそもアカハラだと認識していないのではないかと考えられる。また 2 つ目に関しては、加害者の地位や権限が最も強く働くのは研究や学問の領域だと考え、先述した「身体または精神的な侵害」のようなタイプのアカハラは「誰にされようが不快で仕方がないとは思わないのではないか（加害者の権威性を与える影響が小さいのではないか）」と考え、上記の仮説を立てた。

2. 方法

本稿では 2023 年度社会学（実習）の授業で実施した「大学教員の不快な行いに関する調査」に対する回答をデータとして分析に使用する。データの概要については本稿の与件外であるため割愛する。本調査は大学に所属する者を対象としているため、有効回答数は「大学に所属していない」と回答した者を除いた 454 である。このデータを「不快感」を従属変数とするロングフォーマットに変換し、各項目に対して不快感が高いほど数値が大きくなるように「とても不快である」に 5、「不快である」に 4、「どちらかといえば不快」に 3、「どちらかといえば不快ではない」に 2、「不快ではない」に 1、「まったく不快ではない」に 0 といった数値を与えて処理した。

質問項目における加害者の知名度（TV で有名な、無名の、優れた研究業績のある）をそれぞれ「TV 有名、無名、優れ業績」とし、「TV 有名」と「優れ業績」の場合を「知名度が高い」、「無名」の場合を「知名度が低い」とした。

アカハラタイプ（就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった/奨学金の推薦書を書いてもらえなかった/態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた/異性の好みを聞かれた/「お前はバカだ」と言われた/自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた/自分の書いたレポートを大声で批判された/自分の書いたレポートを淡々と批判された/自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された/無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた/お尻を触られた/卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理矢理変えさせられた/研究の相談をしたが無視された）をそれぞれ「就活推薦、奨学金、髪引っ、異性好み、バカ、情報漏洩、大声批判、淡々批判、盗用、無給掃除、お尻、テーマ変、相談無視」とし、「奨学金、大声批判、淡々批判、盗用、テーマ変、相談無視」を「研究や学問に直接関わるアカハラ」、「就活推薦、髪引っ、異性好み、バカ、情報漏洩、無給掃除、お尻」を「研究や学問に直接関わらないアカハラ」とした。

分析の手順としては、まず、アカハラ加害者の知名度を質問項目の通り分類し平均不快感を比較した上で、加害者の「知名度が高い」と「知名度が低い」に分けて平均不快感を比較した（以下分析1）。次に、アカハラタイプを「研究や学問に直接関わるアカハラ」と「研究や学問に直接関わらないアカハラ」に分け、それぞれのタイプに対する平均不快感を加害者の「知名度が高い」と「知名度が低い」に分けて比較した（以下分析2）。最後に、有意差があるかどうかを確かめるために回帰分析を行い、比較しやすくするために回帰係数の差の検定を行った。

3. 結果

分析1において、図1はアカハラ加害者の知名度を質問項目の通り分類し平均不快感を比較した結果である。図1より加害者が「優れた業績のある」場合に平均不快感は最も高くなり、「TV で有名な」場合には平均不快感が最も小さくなる傾向があることが分かった。

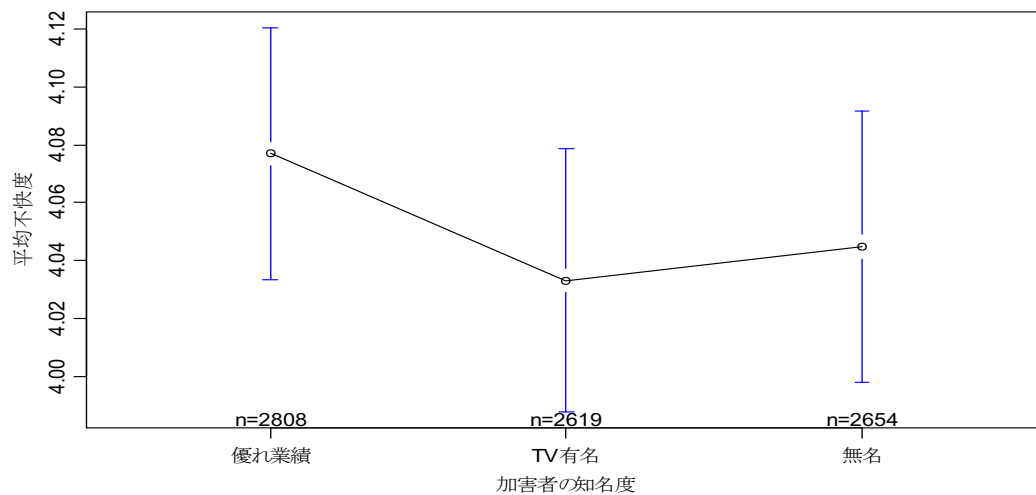


図 1：加害者の知名度別の平均不快感

図 2 は加害者の「知名度が高い」と「知名度が低い」に分けて平均不快感を比較した結果である。図 2 より加害者の「知名度が低い」場合よりも「知名度が高い」場合の方が平均不快感は高くなる傾向があることが分かった。

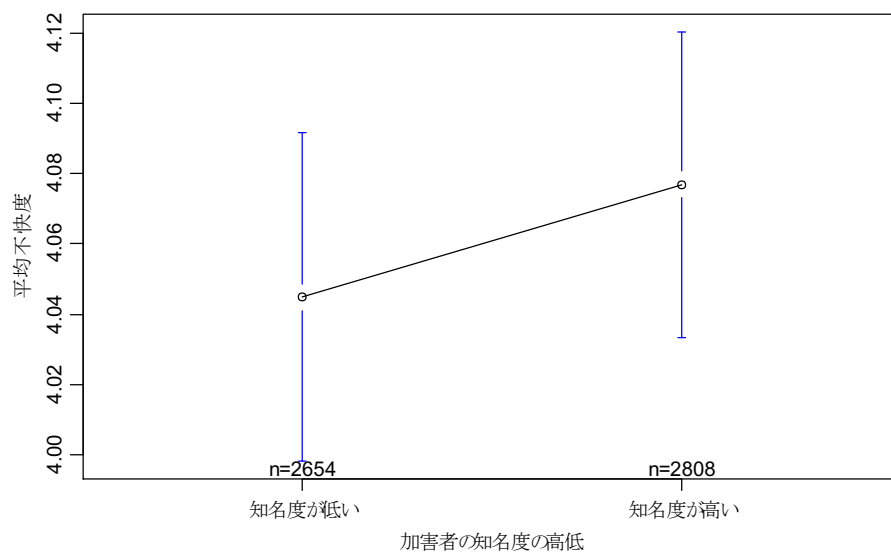


図2：加害者の知名度の高低別の平均不快感

次に、分析2において、図3はアカハラのタイプを「研究や学問に直接関わるアカハラ」と「研究や学問に直接関わらないアカハラ」に分け、それぞれのタイプに対する平均不快感を加害者の「知名度が高い」と「知名度が低い」に分けて比較した結果である。図3より、加害者の「知名度が高い」場合と「知名度が低い」場合の両者とも、「研究や学問に直接関わらないアカハラ」の方が「研究や学問に直接関わるアカハラ」よりも平均不快感が高かった。また、「研究や学問に直接関わらないアカハラ」と「研究や学問に直接関わるアカハラ」の両者とも、加害者の「知名度が高い」方が「知名度が低い」よりも平均不快感が高くなる傾向があることが分かった。

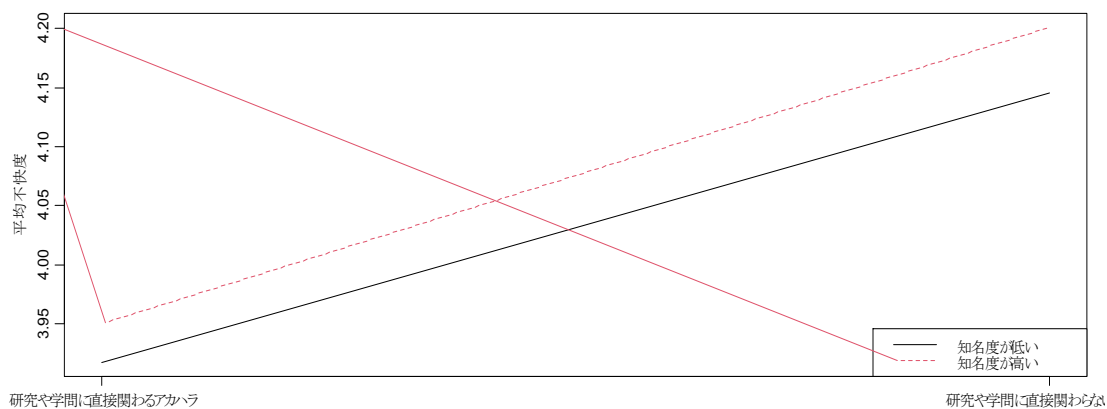


図3：アカハラのタイプによる加害者の知名度の高低別の平均不快感

最後に加害者の「知名度が高い」と「知名度が低い」にグループを分けて、それぞれに対して「不快感」を従属変数、アカハラのタイプ（研究や学問に直接関係するか否か）を独立変数として回帰分析を行った。図3より加害者の知名度の高低による平均不快感の差が小さいと考えられる「研究や学問に直接関わるアカハラ」をハラスメントの種類の基準カテゴリとした。

その結果が以下の表 1 である。

表 1：加害者の知名度の高低別の回帰分析の結果

	加害者の知名度が高い	加害者の知名度が低い		
(Intercept)	3.95 *** (0.03)	3.92 *** (0.04)		
relevel(type2, "研究や学問に直接関わるアカハラ")研究や学問に直接関わらないアカハラ	(0.04)	(0.05)	0.25 ***	0.23 ***
R ²	0.01	0.01		
Adj. R ²	0.01	0.01		
Num. obs.	2808	2654		

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 1 より、「研究や学問に直接関わるアカハラ」に対する「研究や学問に直接関わらないアカハラ」の効果は加害者の知名度の高低に関わらず有意であった。また加害者の「知名度が高い」方が係数は大きくなっている。しかしながら、これはサンプリングの際の偶然で、加害者の「知名度が高い」場合の係数が大きくなっているだけで、「母集団では加害者の知名度の高低による差はない」という可能性を否定しきれない。そこで、加害者の知名度の高低別の回帰係数の差を検定する必要がある。その結果が以下の表 2 である。

表 2：加害者の知名度の高低別の回帰係数の差の検定

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)		0.034	0.705	0.481
relevel(type2, "研究や学問に直接関わるアカハラ")研究や学問に直接関わらないアカハラ	0.022	0.345	0.730	

表 2 より、「研究や学問に直接関わるアカハラ」と「研究や学問に直接関わらないアカハラ」において、加害者の知名度の高低間で感じる不快感に有意差はなかった。

4. 考察

今回の調査の結果より、加害者の知名度が高いほどアカハラの不快感の平均値は高くなることが分かった。また、「研究や学問に直接関わるアカハラ」と「研究や学問に直接関わらないア

カハラ」において、加害者の知名度の高低間で感じる不快度に有意差はなかったことが分かった。従って、仮説 1 と仮説 2 の両者とも支持されなかった。

仮説 1 に関しては、加害者の知名度が高いほど加害者に対する信頼感が高くなり、加害者に対する信頼感が高いほど「信頼していた人にアカハラ行為を受けた」というショックからアカハラ行為に対する不快感が高くなりやすいといった「信頼感」を媒介変数とする、信頼感という変数を媒介した加害者の知名度からアカハラへの不快感への効果が存在している可能性があると考えられる。

仮説2に関しては、①そもそも前提としていた「加害者の地位や権限が最も強く働くのは研究や学問の領域だ」という部分が異なる可能性、②調査の実施者の大半が社会学（実習）を受講している文学部社会学専修の3回生であったため、回答者に実際に研究を経験した人が少なく、実際にアカハラ被害を受けた場面を想像できないまま、本調査に回答している可能性があると考えられる。

本稿では加害者の知名度がアカハラの不快感に与える影響に関して、加害者の知名度の高低、アカハラが研究や学問に直接関わるか否かに分けてその関連を検証した。今後の課題としては、先述した通り「アカハラ加害者への信頼感」を媒介変数とする、信頼感という変数を媒介した加害者の知名度からアカハラへの不快感への効果が存在している可能性を検証する必要性がある。また、実際に研究を経験している（経験したことがある）大学院生に母集団を限定して分析を行うと、異なる結果となる可能性がある。更に、今回は言及しなかった加害者の性別や年齢、地位など、知名度以外の要素とも組み合わせて不快感への影響を分析する必要がある。

参考文献

- ・京都大学,2023,教職員に対する懲戒処分について.

教職員に対する懲戒処分について (2023 年 12 月 26 日) | 京都大学 (kyoto-u.ac.jp)

(閱覽日：2024 年 1 月 22 日)

・ 京都新聞,2023,京都大学の学生に人格否定発言、「アカハラ」で工学研究科教授に停職 2 ヶ月

[京都大学の学生に人格否定発言、「アカハラ」で工学研究科教授に停職 2 カ月 | 京都新聞 \(nordot.app\)](#)

(閲覧日：2024 年 1 月 22 日)

・ 京都大学,2005,京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程.

[京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程 \(kyoto-u.ac.jp\)](#)

(閲覧日：2024 年 1 月 22 日)

・ 大阪大学,AH・PH ガイドライン参考事例 12.21 部局通知.

[AH・PH ガイドライン参考事例 12.21 部局通知 \(3\).pdf](#)

(閲覧日：2024 年 1 月 22 日)

・ 村上英吾,2003,「研究者養成過程における権力性と性差別」,『技術マネジメント研究 = Yokohama journal of technology management studies』2：14-26.

[2_14\(murakami\).pdf](#)

(閲覧日：2024 年 1 月 22 日)

加害者と被害者の性別がアカハラの不快感にもたらす影響

石丸 灯

Introduction

アカデミック・ハラスメント（アカハラ）とは一般に大学におけるハラスメント全般を指すものだが、その背景には性差別といった社会構造が指摘されている。上野(1997)によれば、アカデミック・ハラスメントの定義とは「広義の職場の性差別のうち、研究職に固有の性差別である」とされる。女性が職場で被っている被害は消して性的なものに限らないが、こうした被害の背景には性差別的なものがあると考えられる。

また、上野(1997)では、アカハラを構成する要素を3点挙げている。第1に研究職の女性が採用差別や昇進差別に加え、就労・介護・育児の両立問題に直面しているという点。第2に、研究室固有の差別性がある。これには、職業としての研究職が制度的に編成されているという大学の特殊性や、それに起因する密室人事、専制支配、相互不干渉と監督責任の不在などが挙げられる。第3に、働く女性が誰しも経験しうる「セクハラ」の問題がある。上述の第2の要素によって、大学ではセクハラが容易に起こりうる環境が作られているといえる。こうして、大学におけるアカハラは性差別の不可分なものであり、セクハラと共通の要因の下で成り立っているといえる。

以上のことから、女性が被害者として想定したアカハラは、加害者が女性の場合よりも男性である場合で不快感が高いと想定した。一方で、男性においては加害者の性別が不快感に及ぼす影響はないか、あっても限定的だと考えた。したがって、以下の仮説を本稿では検証する。

仮説：女性が回答者の場合は、加害者が女性の場合よりも男性の場合のほうで平均不快感が高まるが、男性が回答者の場合は、加害者の性別による平均不快感に違いはない。

Method

実習で行った質問紙調査では、地位や性別などの加害者の特徴とアカハラ行為のタイプを示すヴィネットに基づいて、回答者に「あなたが以下のような体験をしたら」とい質問を行い、それぞれの不快感を評価してもらった。本稿では、この質問紙調査に基づいて以下の3通りの手順で分析を行った。

(ア) 不快感の数値化

以下の通り、不快感に0~5の値を付与した。

- 「1 とても不快である」→5
- 「2 不快である」→4
- 「3 どちらかといえば不快」→3
- 「4 どちらかといえば不快ではない」→2
- 「5 不快ではない」→1
- 「6 まったく不快ではない」→0

(イ) 回答者の性別を男女に分け、ハラスメントタイプごとの不快感の平均値をグ

ラフに表した（分析結果①）。次に、調査したアカハラ全体での不快感の平均値を加害者の性別、被害者の性別ごとに分けて表した（分析結果②）。

(ウ) アカハラのタイプを行為に応じて以下の 11 個に分類した。

"バカと言われた"、"奨学金の推薦書を書いてもらえなかった"、"髪をつかまれ足をけられた"、"異性の好みを聞かれた"、"自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた"、"レポートを大声で批判された"、"レポートを淡々と批判された"、"レポートの内容を無断で盗用された"、"部屋を掃除するように命じられた"、"お尻を触られた"、"就職活動に使う推薦書を書いてもらえなかった"

マルチレベルモデルで推定し、係数の差を検定した（分析結果③、④）。

Results

①

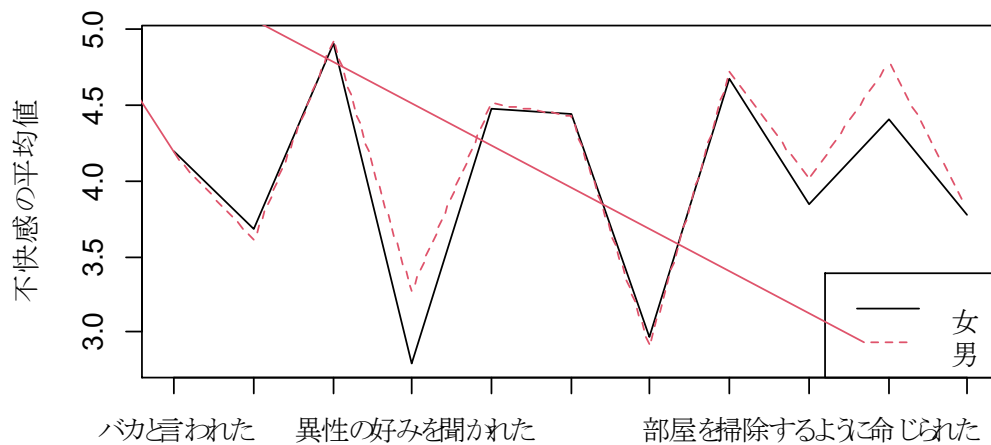


図
1：
加害者の性別（男女）によるハラスメントタイプ

ごとの不快感の差を示したもの（回答者が女の場合）

横軸座標は左から"バカと言われた"、"奨学金の推薦書を書いてもらえなかった"、"髪をつかまれ足をけられた"、"異性の好みを聞かれた"、"自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた"、"レポートを大声で批判された"、"レポートを淡々と批判された"、"レポートの内容を無断で盗用された"、"部屋を掃除するように命じられた"、"お尻を触られた"、"就職活動に使う推薦書を書いてもらえなかった"。

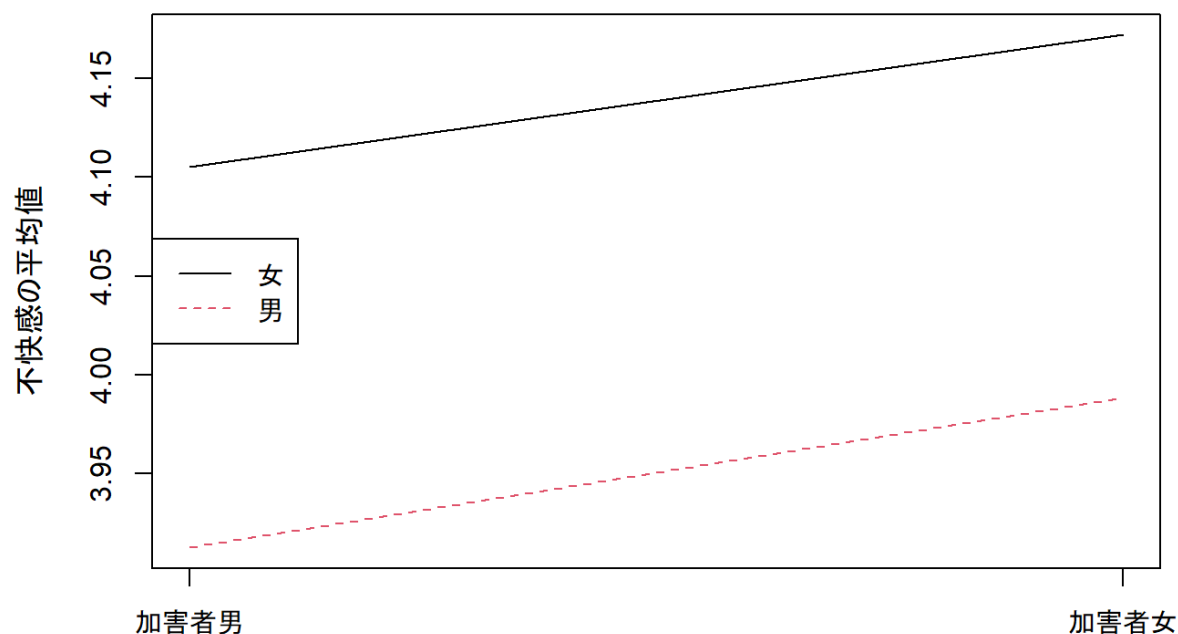


図2：加害者の性別（男女）によるハラスメントタイプごとの不快感の差を示したもの（回答者が男の場合）

横軸座標は図1と同様、左から"バカと言われた"、"奨学金の推薦書を書いてもらえなかった"、"髪をつかまれ足をけられた"、"異性の好みを聞かれた"、"自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた"、"レポートを大声で批判された"、"レポートを淡々と批判された"、"レポートの内容を無断で盗用された"、"部屋を掃除するように命じられた"、"お尻を触られた"、"就職活動に使う推薦書を書いてもらえなかった"。

②

図3：回答者男女による、加害者性別ごとの不快度の平均値を示したもの

③ 表1 加害者の知名度、性別、地位、アカハラタイプごとに被害者の男女別で回帰分析したもの

	1 女	2 男
(Intercept)	4.49 ***	4.29 ***
	(0.08)	(0.12)
famous 無名	0.01	-0.01
	(0.04)	(0.05)
famous 優れた研究業績	-0.11 *	-0.01

	(0.04)	(0.05)
sex.offender 男	0.07	0.08 *
	(0.04)	(0.04)
status52 歳の非常勤講師	-0.03	0.06
	(0.05)	(0.05)
status37 歳の教授	0.01	-0.04
	(0.05)	(0.05)
status52 歳の教授	-0.03	0.06
	(0.05)	(0.05)
relevel(type "バカと言われた")奨学金の推薦書 を書いてもらえなかった	-0.63 ***	-0.42 ***
	(0.07)	(0.08)
relevel(type "バカと言われた")髪をつかまれ足 をけられた	0.72 ***	0.81 ***
	(0.07)	(0.07)
relevel(type "バカと言われた")異性の好みを聞 かれた	-0.99 *** -	-1.39 ***
	(0.07)	(0.07)
relevel(type "バカと言われた")自分の個人情報 を勝手にほかの学生に言いふらされた	0.33 ***	0.32 ***
	(0.07)	(0.08)
relevel(type "バカと言われた")レポートを大声 で批判された	0.28 ***	0.22 ** -
	(0.08)	(0.08)
relevel(type "バカと言われた")レポートを淡々 と批判された	-1.19 ***	-1.28 ***
	(0.07)	(0.07)
relevel(type "バカと言われた")レポートの内容 を無断で盗用された	0.55 ***	0.51 ***
	(0.08)	(0.08)
relevel(type "バカと言われた")部屋を掃除する ように命じられた	-0.20 **	-0.31 *** -
	(0.08)	(0.08)
relevel(type "バカと言われた")お尻を触られた	0.38 ***	0.37 ***
	(0.08)	(0.08)
relevel(type "バカと言われた")就職活動	-0.45 ***	-0.29 ***

	(0.07)	(0.07)
gakunen42~4 年	-0.12 *	-0.17
	(0.06)	(0.11)
gakunen4 大学院生・研究生等	-0.33 ***	1.22 ***
	(0.06)	(0.11)
京大 TRUE	-0.15 ***	-0.14 ***
	(0.04)	(0.04)
R^2	0.26	0.27
Adj. R^2	0.25	0.26
Num. obs.	3367	3578

④上記の男女の回帰係数の差を検定した。

表2 男女の回帰係数の差の検定

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.198	1.405	0.160	
famous 無名	0.019	0.297	0.766	
famous 優れた研究業績	-0.093	-1.470	0.142	
sex.offender 男	-0.009	-0.178	0.859	
status52 歳の非常勤講師	-0.092	-1.304	0.192	
status37 歳の教授	0.057	0.793	0.428	
status52 歳の教授	-0.092	-1.261	0.207	
relevel(type, “バカと言われた”)奨学金の推薦書を書いてもらえなかった	-0.204	-1.898	0.058	
relevel(type, “バカと言われた”)髪をつかまれ足をけられた	-0.092	-0.930	0.352	
relevel(type, “バカと言われた”)異性の好みを聞かれた	0.405	3.887	0.000	***
relevel(type, “バカと言われた”)自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた	0.009	0.087	0.931	
relevel(type, “バカと言われた”)レポートを大声で批判された	0.059	0.529	0.597	
relevel(type, “バカと言われた”)レポートを淡々と批判された	0.096	0.991	0.322	
relevel(type, “バカと言われた”)レポートの内容を無断で盗用された	0.042	0.382	0.702	

relevel(type, “バカと言われた”)部屋を掃除するように命じられた	0.102	0.903	0.367	
relevel(type, “バカと言われた”)お尻を触られた	0.013	0.113	0.910	
relevel(type, “バカと言われた”)就職活動	-0.164	-1.663	0.096	
gakunen42~4 年	0.041	0.340	0.734	
gakunen4 大学院生・研究生等	-0.072	-0.574	0.566	
京大 TRUE	-0.010	-0.186	0.853	

④ 表 3 説明変数に回答者の性別を入れた回帰分析の結果

(Intercept)	4.25***	(0.04)
sex.offender 男	0.07**	(0.02)
famous 無名	-0.01	(0.03)
famous 優れた研究業績	-0.07*	(0.03)
status52 歳の非常勤講師	0.01	(0.03)
status37 歳の教授	-0.02	(0.03)
status52 歳の教授	0.02	(0.03)
sex2 男	-0.18***	(0.02)
sex3 その他	0.08	(0.09)
type 奨学金の推薦書を書いてもらえなかった	-0.54***	(0.05)
type 髪をつかまれ足をけられた	0.75***	(0.05)
type 異性の好みを聞かれた	-1.17***	(0.05)
type 自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた	0.31***	(0.05)
type レポートを大声で批判された	0.25***	(0.05)
type レポートを淡々と批判された	-1.24***	(0.04)
type レポートの内容を無断で盗用された	0.51***	(0.05)
type 部屋を掃除するように命じられた	-0.26***	(0.05)
type お尻を触られた	0.38***	(0.05)
type 就職活動	-0.39***	(0.05)

調査したすべてのアカハラにおいて分析した結果を考察する。図 3 より、回答者の性別が男性の場合、加害者が男性である場合よりも加害者が女性である場合で不快度の平均値が高かった。

回答者の性別が女性の場合でも同様、加害者が男性である場合よりも加害者が女性である

場合で不快度の平均値が高いことが分かった。ただ、表1でわかるとおり、加害者の性別が不快度に与える影響を検定したところ、統計上の有意差は出なかった。以上のことから、加害者の性別による不快度の差はわずかであることがいえる。

次に、アカハラの種類別に分析した結果を考察する。図1、図2より、回答者の性別が男女の場合でアカハラの種類による不快度の高低は似通っており、加害者の性別による不快度の差が大きかった項目はどちらも「お尻を触られた」だった。また、「異性の好みを聞かれた」、「部屋を掃除するように命じられた」、「お尻を触られた」の3項目では、加害者が男性の場合の不快度が女性の場合を大きく上回った。

「バカと言われた」、「髪をつかまれ足をけられた」、「レポートを大声で批判された」、「レポートを淡々と批判された」、「就職活動に使う推薦書を書いてもらえなかった」の5項目では、加害者の性別によって不快度に大きな差が出ず、結果はほぼ同じだった。「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」、「自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた」、「レポートの内容を無断で盗用された」の3項目では、加害者が女性の場合の不快度が男性の場合をいずれもわずかに上回った。

Discussion

以上の結果から、調査したアカハラを総合すると、回答者の性別にかかわらずわずかに加害者が女性の場合で不快度が高くなるが、大きな差はないということが分かった。よって、仮説は棄却される。意外だった点として、回答者の性別によってアカハラの種類ごとの不快度はほとんど変わらなかったという点がある。この背景には、アカハラの種類という要因が回答者側の要因よりも結果に強く影響したということから、アカハラ行為の内容によってその不快感が大きく異なるという点があるのではないだろうか。

また、今後の課題として、男女に当てはまらない性別があることを考慮して回答者や加害者の性別を分析する点があげられる。そうした回答やアカハラの事例は少ないといえ、不快さの高低に影響する要因として無視してはならないものとなっているため、今後の研究に期待したい。

参考文献

- 上野千鶴子編、1997、「キャンパス性差別事情 ストップ・ザ・アカハラ」三省堂。
小田部貴子、丸野俊一、舩田亮太、2010、「アカデミック・ハラスメントの生起実態とその背景要因の分析」『九州大学心理学研究』11: 45-56。
村上英吾、2003、「研究者養成過程における権力性と性差別」『技術マネジメント研究』2: 14-26。

被害者の学年とアカデミック・ハラスメントの不快感の関係について

前田 凜

1. 研究の背景

アカデミック・ハラスメント(以下アカハラ)とは、主に教育・研究現場において生じるハラスメントである。例えば「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程」においては、その内容は「教員がその職務上の地位又は権限その他人間関係等の優位性を不当に利用して他の教員又は学生等に対して行う業務の適正な範囲を超えた研究若しくは教育上又は修学上の不適切な言動」と定められている。北仲(2017)はアカハラの背景に、「教育指導関係であること」「研究や高度に専門的な教育という活動に特有の被害や加害があること」をあげている。これを踏まえれば、大学の中でも学部生よりも研究活動に従事する時間の長い大学院生の方がアカハラの被害に遭いやすそうなこと、すなわち機会的な確率の高さが感覚的に推測できるだろう。

実際に、村上が2001年に横浜国立大学の大学院生を対象に実施した調査(村上, 2003)においては、ハラスメント被害を受けた経験のある回答者の内、被害を受けた時期が学部時代19.4%に対して大学院時代69.4%⁴となっており、大学院生時代の方が被害を受けやすいことが示唆されている。

一方湯川(2011, p178)は、アカハラの形成過程について「学生が、自身を『教員と共に研究する』ことで学びを得る立場ではなく、一方的に『教員から利用される』無力な立場であると認識を変容させるに至り、その認識変容の結果はじめて、教員の諸言動が不快で不当な『アカデミック・ハラスメント被害』として認識・構築される」と述べている。これは、アカハラに遭遇する可能性の高い環境にあるだけでなく、それを不快だ、ハラスメントだと認識する被害者の意識がアカハラ被害の発生に影響することを示している。

以上の点を踏まえると、大学院生のアカハラ被害が多いことについて、①大学院の研究室という環境がアカハラを引き起こしやすい、②大学院生の方が何らかの理由でアカハラの言動を不快に感じやすい(アカハラに敏感である)という2つの要因を考えることができるだろう。しかしこれらの要因について、詳細に分析した研究は少ない。

2. 問題設定

そこで本稿で取り組むリサーチ・クエスションは、被害者の学年によってアカハラの言動に対する不快感がどのように違うかを明らかにすることである。これを通じて先項で挙げた要因②の妥当性を検討することで、特に大学院の研究室という環境要因と被害者のアカハラ認識という主体要因の作用の大きさについて一定の示唆を得ることができるだろう。

⁴ 修士時代58.3%, 博士時代11.1%

う。

3. 仮説

「大学院生の方がアカハラに敏感である」という要因の存在を確かめるため、2つの仮説を立てた。

仮説①：学部生よりも大学院生の方が、アカハラの言動に対して不快感が高まるのではないかな。

研究活動の成果が研究者人生や専門職への就職といった進路につながりやすい大学院生の方が、アカハラに対して敏感になるのではないかな。

仮説②：特に研究活動に直接関わるハラスメントであるほど、両者の不快感の差は広がるのではないかな。

複数の授業を受け、特に学年が若い内は継続的な研究を行っていないことの多い学部生に対し、一つの研究を続けることの重要性が増す大学院生にとって、それを直接阻害するようなハラスメントはより不快感が高くなりやすいのではないかな。

4. データ

本項で使用した質問項目とその加工について述べる。

(1)「Q2 あなたの学年等は？」について、「大学院生」と答えた人を「院生」とし、「1回生」「2回生」「3回生」「4回生」と答えた人をまとめて「学部生」とした。「研究生、聴講生、交換留学生など」については、今回の調査の趣旨に沿わないため除外した。この結果院生と学部生の人数は表1のようになった。

表1:回答者の学年別人数	
学年	人数
院生	140
学部生	299

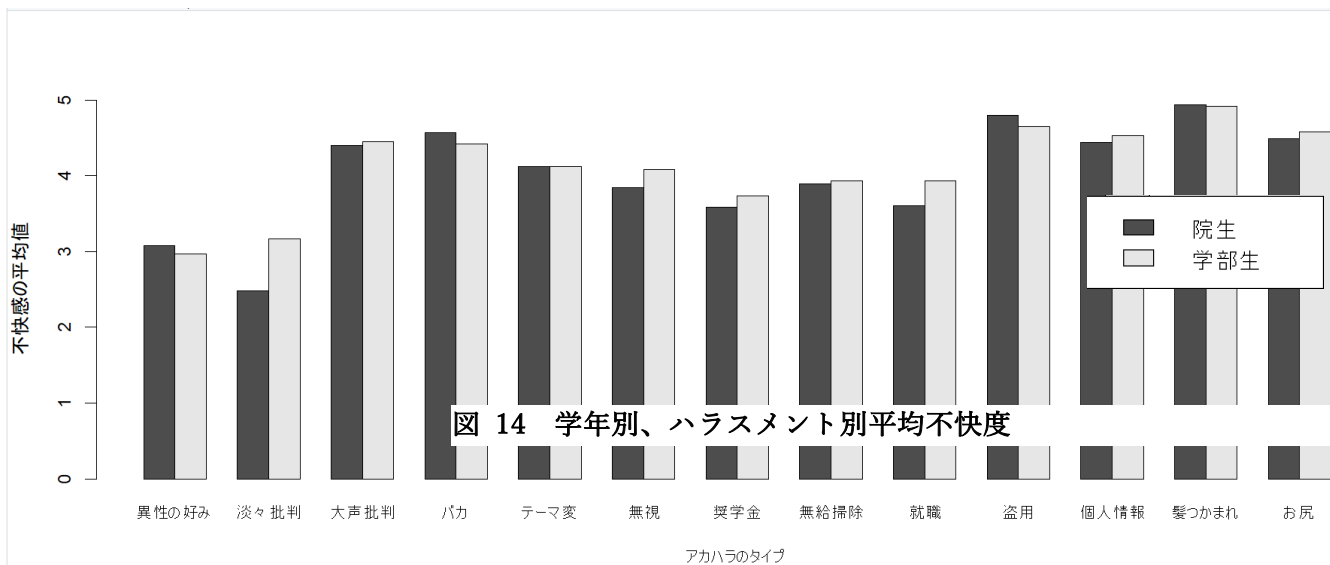
(2) 不快感を尋ねる質問の回答について、「1 とても不快である」を5、「2 不快である」を4、「3 どちらかといえば不快」を3、「4 どちらかといえば不快ではない」を2、「5 不快ではない」を1、「6 まったく不快ではない」を0として数値に変換した。

またアカハラのタイプについて、「異性の好みを聞かれた」「自分の書いたレポートを淡々と批判された」「自分の書いたレポートを大声で批判された」「「お前はバカだ」と言われた」「卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた」「研究の相談をしたが無視された」「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」「無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた」「就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった」「自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された」「自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた」「態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた」「お尻を触られた」をそれぞれ、「異性の好み」、「淡々批判」、「大声批判」、「バカ」、「テーマ変」、「無視」、「奨学金」、「無給掃除」、「就職」、「盗用」、「個人情報」、「髪つかまれ」、「お尻」として処理した。

5. 分析結果

学年別、ハラスメント別の平均不快感は以下の通りである。平均値だけ見ると学部生と院生で大きな差はないが、「異性の好み」「バカ」「盗用」「髪つかまれ」で多少院生の不快感の方が高く、それ以外では学部生の不快感の方が高い。

図の横軸の項目は、左から順に「異性の好み」「淡々批判」「大声批判」「バカ」「テーマ変」「無視」「奨学金」「無給掃除」「就職」「盗用」「個人情報」「髪つかまれ」「お尻」である。



type 大声批判	1.48 ***	1.32 ***
	(0.07)	(0.12)
type バカ	1.44 ***	1.49 ***
	(0.07)	(0.11)
type テーマ変	1.15 ***	1.04 ***
	(0.07)	(0.11)
type 無視	1.11 ***	0.77 ***
	(0.07)	(0.11)
type 奨学金	0.76 ***	0.50 ***
	(0.07)	(0.11)
type 無給掃除	0.96 ***	0.82 ***
	(0.07)	(0.12)
type 就職	0.96 ***	0.53 ***
	(0.07)	(0.10)

type 盗用	1.67 *** (0.07)	1.72 *** (0.11)
type 個人情報	1.55 *** (0.07)	1.36 *** (0.11)
type 髪つかまれ	1.94 *** (0.07)	1.86 *** (0.11)
type お尻	1.61 *** (0.07)	1.41 *** (0.11)
R ²	0.25	0.30
Adj. R ²	0.24	0.29
Num. obs.	5315	2510

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

続いて「学部生」と「院生」での回帰係数の差を検定することにより、両者の不快感の差を検定する。回帰係数の差の検定結果は以下のようになった。

表3：学年ごとの回帰係数の差の検定 学部生と院生

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	-0.107	-1.186	0.236	
type 淡々批判	0.792	6.463	0.000	***
type 大声批判	0.156	1.132	0.258	
type バカ	-0.043	-0.326	0.744	
type テーマ変	0.104	0.819	0.413	
type 無視	0.339	2.691	0.007	**
type 奨学金	0.261	1.976	0.048	*
type 無給掃除	0.137	1.004	0.315	
type 就職	0.433	3.508	0.000	***
type 盗用	-0.045	-0.337	0.736	
type 個人情報	0.193	1.484	0.138	
type 髪つかまれ	0.084	0.667	0.505	
type お尻	0.201	1.494	0.135	

0.1%水準で有意な差が見られたのは「淡々批判」「就職」、1%水準で有意な差があったのは「無視」、5%水準で有意な差があったのは「奨学金」で、いずれも学部生の方が不快感

は高かった。図1で院生の方が不快度の高かった「異性の好み」「バカ」「盗用」「髪つかまれ」に関しては、有意な差は見られなかった。

6. 考察

回帰分析の結果、大学院生の方がよりセクハラを不快に感じやすいという仮説①は支持されなかった。また、仮説②に関して、研究に直接関わるであろう「盗用」や「無視」についても、大学院生の方が不快に感じやすいという一貫した結果は得られず、一部が推定されるのみとなった。これらの結果から、大学院生の方が学部生より不快度を感じやすいという主体要因は部分的にしか支持されず、閉鎖的な研究室や教員との密接な関係の必要性といった環境要因がより大学院生のアカハラ被害の多さにつながっていることが示唆された。

一方でその環境について、北仲(2017)が述べているように、理系と文系では大きな違いがあると考えられる。例えば学生が教員の実験の補助のみをさせられることで自らの研究に取り組めないといった事態は、実験の準備といった雑事が多い理系の研究室で起こりやすいと考えられるし、実験に必要な貴重な装置を教員が独占しているといったことも理系に特有なものと考えられる。

学生の置かれる環境がアカハラ被害に影響を与えているのであれば、このような学問分野ごとの「研究室文化」の差異についてより詳細に分析する必要がある。文系か理系か、またそれに付随して研究室の雰囲気、教員との協力必要性といったより踏み込んだ調査を行い、分析することが今後の課題となるだろう。

参考文献

- 北仲千里・横山美栄子, 2017, 『アカデミック・ハラスメントの解決 大学の常識を問い直す』 寿郎社.
- 京都大学, 2023, 「京都大学におけるハラスメントの防止等に関する規程」, 京都大学ホームページ, (2024年1月23日取得, https://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/kitei/reiki_honbun/w002RG00000993.html).
- 村上英吾, 2003, 「研究者養成過程における権力性と性差別」『技術マネジメント研究』2(1): 14-26 [https://ynu.repo.nii.ac.jp/record/5020/files/2_14\(murakami\).pdf](https://ynu.repo.nii.ac.jp/record/5020/files/2_14(murakami).pdf)
- 湯川やよい, 2011, 「アカデミック・ハラスメントの形成過程——医療系女性大学院生のライフストーリーから——」『教育社会学研究』88(0): 163-184 https://www.jstage.jst.go.jp/article/eds/88/0/88_163/_pdf

被サポート感がアカハラの不快感に与える影響に関する一考察

漕江仁衣菜

1. はじめに

アカデミック・ハラスメント（以下「アカハラ」と略称）は、大学において、主に教員から学生に対して行われるハラスメント行為である。アカハラは学生や研究者の学習環境や研究環境を害する人権侵害であり、大学が研究機関として正常に機能するためには撲滅されなければならない行為であるといえる。そのためにも、もしアカハラを受けた場合には、大学の相談窓口や家族、友人などに相談することが重要になる。その相談内容が間接的に証拠として採用され、事実認定につながる可能性があるからである。また、アカハラを受けていなかったとしても、アカハラを受けた際に相談できる人がいる、自分をサポートしてくれる人がいると思えることは精神的な安心感につながると考えられる。ここで、ある集団の中に、ハラスメント被害にあった際に自分の話を親身に聞いたり援助したりしてくれる人がいると感じられる度合いを「被サポート感」と定義する。

福岡・橋本（1997）においては、家族関係と友人関係の基本的なサポート機能の違いについて、家族では手段的な側面＞情緒的な側面、友人では情緒的な側面＞手段的な側面という基本的なパターンが存在することが指摘されている。ただしアカハラに関してのみいうと、アカハラは大学において行われるため、大学の先生や相談窓口の人のサポート機能が、特に手段的な側面において家族や友人よりも高くなると考えられる。また、同じく福岡・橋本（1997）では、大学生におけるソーシャル・サポートのストレス緩和効果について、男子では友人サポートの効果のみがみられたのに対して、女子では家族サポート、友人サポートの両方で効果がみられたという結果が示されている。その他の先行研究でも、しばしば女性におけるサポート水準の高さが報告されている（雨宮・松田、2015）。

以上の背景をふまえて、本稿では、被サポート感がアカハラの不快感に与える影響について分析する。具体的には、以下の二つの仮説を立てて検討していく。

仮説 1：大学の先生や相談窓口の人に対する被サポート感が大きいほど、アカハラの不快感は小さくなる。

仮説 2：男性よりも女性において、被サポート感がアカハラの不快感に与える影響が大きくなる（被サポート感によりアカハラの不快感が軽減される）。

2. 分析方法

本稿では、従属変数にアカハラの不快感を、独立変数に被サポート感を置いたモデルを設定し、このモデルに基づいて、2023 年度社会学実習の授業で実施した「大学教員の不快な行いに関する調査」に対する回答データを分析する（有効回答数 454）。

まず、データをロングフォーマットに変換し、被サポート感とアカハラの不快感のそれぞれについて、数値が大きくなるほどその度合いが大きくなるように整数を割り振った。具体的には、被サポート感に関連する「もしもあなたがハラスメント被害にあったとしたら、次にあげる人たちの中にあなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか」という質問項目に対する回答について、「いると思う」に 4、「たぶんいる」に 3、「どちらともいえない」に 2、「たぶんいない」に 1、「いないと思う」に 0 と数値を与えた。ここで、「次にあげる人たち」は、家族、友人や恋人(以下「友人」と略称)、大学の先生や相談窓口の人(以下「先生」と略称)、その他の知り合い等(以下「その他」と略称)の 4 項目に分類されている。また、アカハラの不快感に関しては、「1 とても不快である」に 5、「2 不快である」に 4、「3 どちらかといえば不快」に 3、「4 どちらかといえば不快ではない」に 2、「5 不快ではない」に 1、「6 まったく不快ではない」に 0 と数値を与えた。

次に、家族・友人・先生・その他の 4 項目それぞれについて、被サポート感の各数値に対応するアカハラの不快感の平均値を比較したうえで、重回帰分析を行った。また、回答者を性別で分類した上で同様のことを行った（ただし、性別の質問項目に対する無回答と「その他」の回答は、数が少ないため除外した）。

3. 分析結果

3-1. 平均値の比較

各項目に対する被サポート感に対応するアカハラの不快感の平均値を比較した結果、図1から図4のようになった。

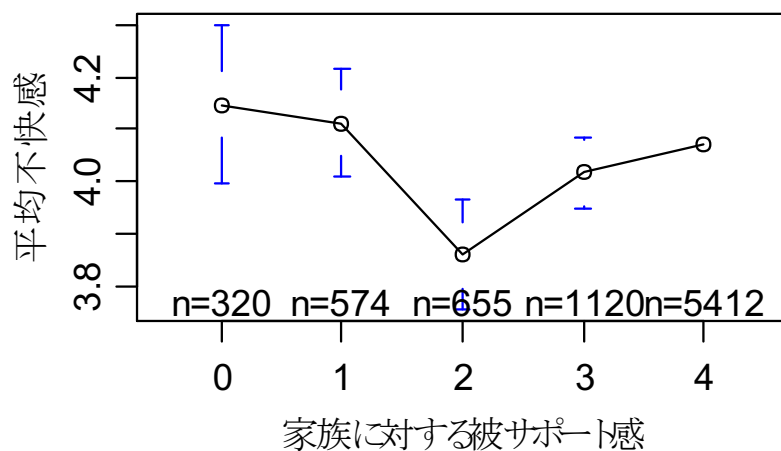


図1 家族に対する被サポート感とアカハラの平均不快感

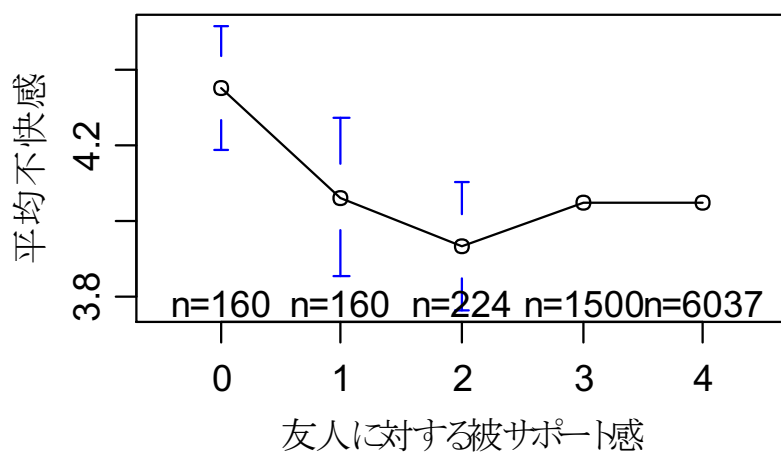


図2 友人に対する被サポート感とアカハラの平均不快感

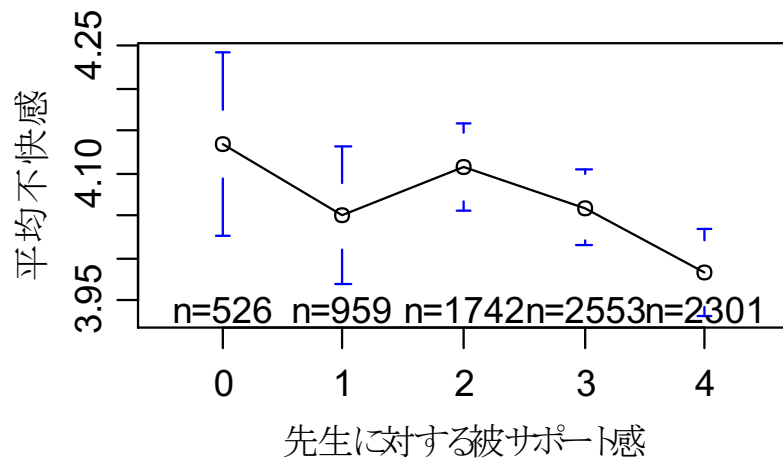


図3 先生に対する被サポート感とアカハラの不快感

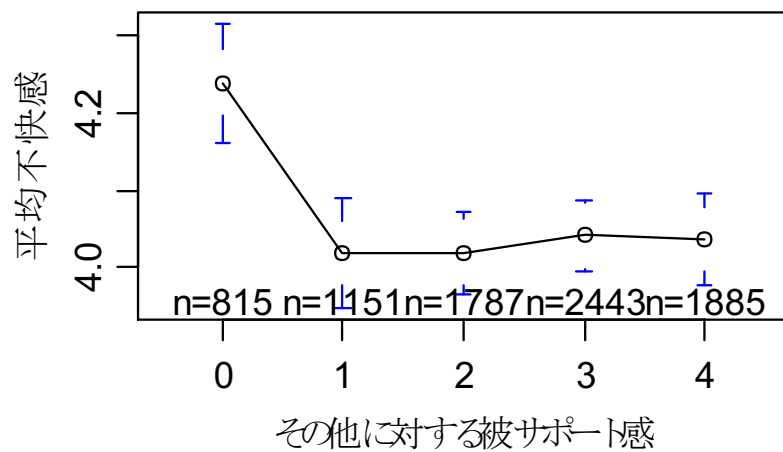


図4 その他に対する被サポート感とアカハラの不快感

以上の平均値の比較から、特に先生に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなる傾向が読み取れる。この結果が有意なものであるか確かめるために、次項で重回帰分析を行う。

3-2. 重回帰分析

重回帰分析を行った結果は表1の通りである。

表1 重回帰分析の結果

	係数
(Intercept)	4.16 *** (0.06)
家族に対する被サポート感	0.03 (0.01)
友人に対する被サポート感	-0.03 (0.02)
先生に対する被サポート感	-0.03 * (0.01)
その他に対する被サポート感	-0.02 (0.01)
R ²	0.00
Adj. R ²	0.00
Num. obs.	8081

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

重回帰分析の結果、先生に対する被サポート感の項目で5%水準の有意差がみられるため、先生に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなるという前項の結果は、有意なものであるといえる。

3-3. 平均値の比較（男女別）

各項目に対する被サポート感に対応するアカハラの不快感の平均値を男女別に比較した結果、図5から図8のようになった。

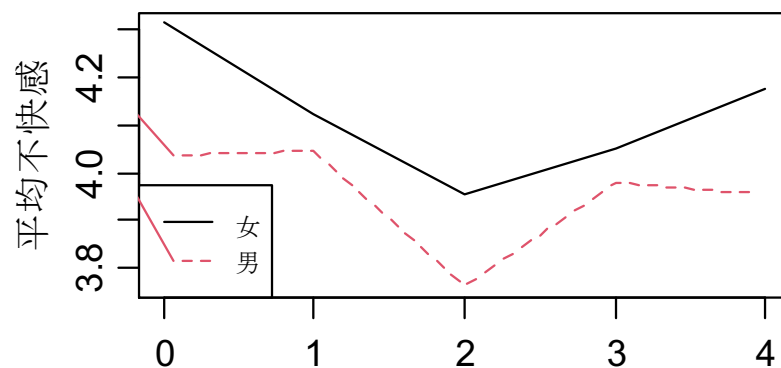


図5 家族に対する被サポート感とアカハラの平均不快感（男女別）

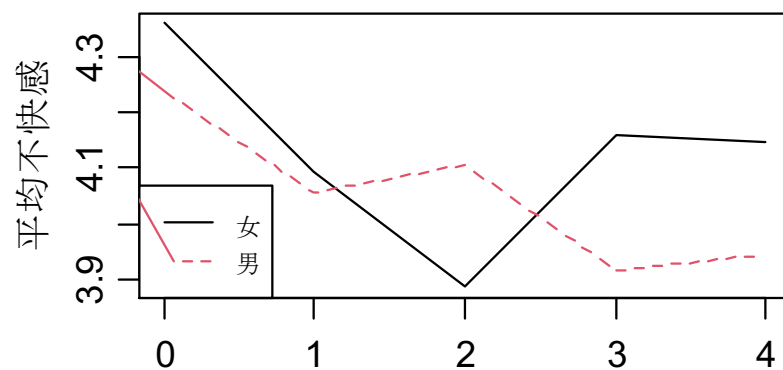


図6 友人に対する被サポート感とアカハラの平均不快感（男女別）

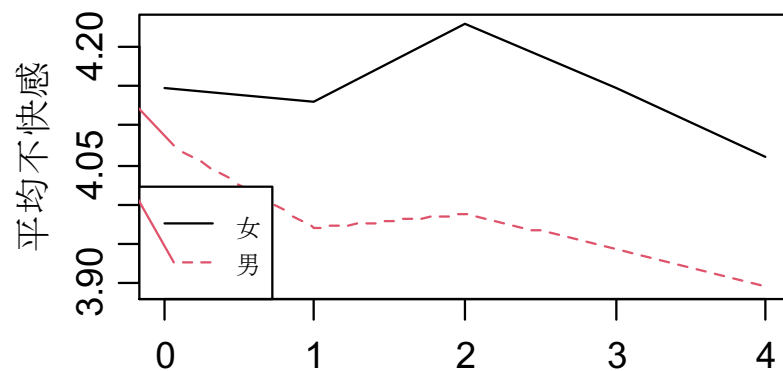


図7 先生に対する被サポート感とアカハラの平均不快感（男女別）

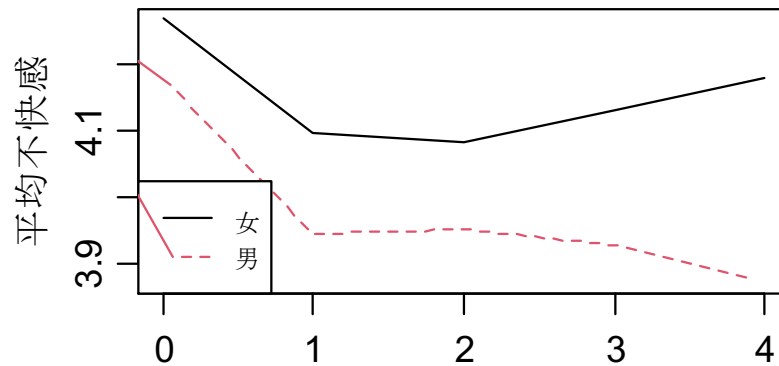


図8 その他に対する被サポート感とアカハラの平均不快感（男女別）

以上の男女別の平均値の比較から、女性に関して、特に先生に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなる傾向が読み取れる。一方男性に関しても、先生に加えて友人、その他に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなる傾向がみられる。この結果が有意なものであるか確かめるために、次項で男女別の重回帰分析を行う。

3-4. 重回帰分析（男女別）

男女別に重回帰分析を行った結果は表2の通りである。

表2 重回帰分析の結果（男女別）

	女性	男性
(Intercept)	4.13 ***	4.12 ***
	(0.09)	(0.09)

	女性	男性
家族に対する被サポート感	0.04 (0.02)	0.02 (0.02)
友人に対する被サポート感	-0.01 (0.03)	-0.02 (0.03)
先生に対する被サポート感	-0.04 * (0.02)	-0.01 (0.02)
その他に対する被サポート感	0.02 (0.02)	-0.05 ** (0.02)
R ²	0.00	0.00
Adj. R ²	0.00	0.00
Num. obs.	4071	3834

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

男女別の重回帰分析の結果、女性では先生に対する被サポート感、男性ではその他に対する被サポート感の項目で有意差がみられる。すなわち、女性に関して、先生に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなるという結果は有意である。また、男性に関して、その他に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなるという結果は有意である。

4. 考察

本稿では、二つの仮説を立てて、被サポート感がアカハラの不快感に与える影響について、平均値の比較と重回帰分析によって分析した。その結果、大学の先生や相談窓口の人に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなるという有意な結果が得られ、仮説1は支持された。これには、冒頭で述べたような、大学の先生や相談窓口の人のサポート機能が、特に手段的な側面において家族や友人よりも高くなるという背景に

加え、もう一つの背景が考えられる。それは、今回分析に使用した調査においてはアカハラの加害者が大学の先生であると想定されているため、大学の先生に対する被サポート感が大きい、すなわち加害者への信頼が大きいほど加害者の行為を正当化しやすくなり、不快感を持ちにくくなるといったことである。

仮説2に関しては、有意な結果が得られず、本稿において支持されたとはいえない。特に、男性において、その他の知り合い等に対する被サポート感が大きい人ほどアカハラの不快感が小さくなるという結果が有意であったことの背景は不明である。これを明らかにするためには、その他の知り合いをより細かく分類するなどして、さらに調査を重ねる必要があるだろう。

今後の課題としては、福岡・橋本（1997）における調査に倣って、被サポート感を情緒的なサポートと手段的なサポートに分類するなど、質問項目を細分化してより詳しい分析を可能にしていくことが考えられる。

文献

- ・雨宮千沙都，松田英子（2015）「大学生の家族および友人への援助要請行動に被援助志向性，ソーシャルサポート，その他の心理的変数が及ぼす影響」江戸川大学紀要，25: 159-165
- ・福岡欣治，橋本幸（1997）「大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果」心理学研究，68(5): 403-409

アカデミック・ハラスメントの不快度に 対する当事者意識の影響

京都大学文学部社会学専修 3 年生 0100333931 谷叶望

初めに
背景

近年「セクシュアル・ハラスメント」や「パワー・ハラスメント」など、あらゆるハラスメントが社会的に問題視され、対策が講じられている。中でも、「アカデミック・ハラスメント」は大学・研究機関という特殊な環境下でのみ発生する、特徴的なハラスメントである。

そもそもアカデミック・ハラスメントとは、文部科学省の定義によると「アカデック・ハラスメント教育、研究の場における、立場、権力を利用して、不適切な言動・指導を行い、その指導等を受ける者に就学・教育・研究上又は就業・職務遂行上の不利益を与え、その環境を悪化させること。(https://www.mext.go.jp/content/20200915-mxt_gaigakuc3-000009913_1.pdf)」⁵とされている。具体的には、教授が学生を必要以上に叱責する、暴力を振るう、権威性を利用し性的な関係を迫るなどがこれに該当する。このように、教育・研究の場以外で行われるとパワハラ・セクハラと見なされるような、直接研究に関与しない行為も、教育・研究においてはアカハラと見なされる。

逆に言えば、性差別や権力濫用に該当するものと違い、直接研究に関与するものはアカハラならではのハラスメントのタイプだと言える。アカハラ研究の初期段階において、上野（1997）はアカハラを職場での性差別のうち、学問の場で起こる性差別と定義し⁶、あくまで性差別に限定している。「研究者養成過程における権力性と性差別」（2003）では、上野の女性にのみ絞る言説に対し男性も被害を受けていると問題を提起しているが、被害経験者に対し最も深刻だった被害事例に関して聞いた結果として最も多いのは、間違った、あるいは不当な言葉を言われるなどといった権力濫用型が最も多く、次にセクハラ系、研究阻害・搾取系が続くと指摘している。⁷以上のアカハラの内、セクハラ系・権力濫用系は想像しやすいが、それらに次いで多い直接研究に係るハラスメントタイプについては、部外者からはその不快さを想像しにくい大学ならではのハラスメントである。江原由美子（1997）は、アカハラの加害者と被害者は単なる組織内での上下関係にあるだけでなく、

⁵ 株式会社リベルタス・コンサルティング、『大学教育改革の実態把握及び分析等に関する調査研究』～大学におけるハラスメント対応の現状と課題に関する調査研究

～, https://www.clib.kindai.ac.jp/search/pdf/guide_quote.pdf（2024 年 1 月 24 日閲覧）

⁶ 上野千鶴子編、キャンパス性差別事情～ストップ・ザ・アカハラ、三省堂、1997 年

⁷ 村上英吾、研究者養成過程における権力性と性差別、技術マネジメント研究、2003、2 号、p.14-26.

研究者集団というさらに上部の階層でも同じ閉鎖的社会に生きており、加害者は二重の権力を行使できると述べ、アカハラの起こる大学という場における権力性の特殊さを指摘している。⁸とはいえ、権力濫用型のハラスメントは、研究阻害・搾取といった直接研究に關与するハラスメントに比べると、研究について縁のない者でも職場の上司の理不尽な言動などによって不快さを類推することができるだろう。直接研究に關与する行為については、セクハラ系・権力濫用系と違い学問の場という外から把握しがたいのである。

そもそも、アカハラについて理解し駆逐するためには、アカハラと見なされる具体的な行動の種類について研究するだけで十分なのだろうか。湯川（2006）は学生がアカハラを受けたと認識するまでの過程について研究し、以下のように述べている。

多忙化した教員の研究・教育活動からの離反，教員同士の確執，研究室内の不平等，研究室間の「預かり」習慣などの日常に埋め込まれたローカルな文脈の累積において，学生が，自身を「教員と共に研究する」ことで学びを得る立場ではなく，一方的に「教員から利用される」無力な立場であると認識を変容させるに至り，その認識変容の結果はじめて，教員の諸言動が不快で不当な「アカデミック・ハラスメント被害」として認識・構築される⁹

よって、単純に学生に不快をもたらす行動を調査するのみでは十分とは言えず、その背景にある文脈を理解しなければ、真にアカハラ、特に直接研究に關与するものを理解し根絶させることはできないだろう。

以上から、アカハラ、特に直接研究に關与するものの不快感は、学問に關心のない者や実際に研究を行っていない者には十分に感じられないのではないかと考えられる。アカハラが発生する学問の環境に身を置く人は、大学生全体で見ても一部であり、日本全体で見ればごく一部の少数者である。大学という閉じた世界で発生する問題であるため、アカハラ被害は世間や学問に興味の薄い人の理解を得にくく、他ハラスメントに比べ改善されにくいのではないかという考えのもと、本レポートでは文脈背景の理解の重要性について分析する。そして、アカハラ問題における当事者以外の人の理解の必要性を訴えることを目的としており、本レポートは社会的意義の十分ある分析だと考える。

仮説

以上の考察を背景に以下の仮説を立て検討する。

- ①院生など実際に研究に勤しんでいる人の方が研究を行っていない学部生より不快感を高く評価する。
- ②研究・学問に対して興味の薄い人の方が不快感を低く評価する。

⁸ 上野千鶴子編，キャンパス性差別事情～ストップ・ザ・アカハラ，三省堂，1997年，p.25

⁹ 湯川やよい，アカデミック・ハラスメントの形成過程——医療系女性大学院生のライフストーリーから——，教育社会学研究，2011年，88巻，p.163-184

③アカハラのタイプが直接研究内容に関与するものの場合、①②がより顕著に表れる。
分析方法

どんな質問項目をどう加工したのか詳しく書く

今回は不快感を従属変数に、データをロングフォーマットに変更した。そして不快感を数値評価可能にするために、以下のように不快感を数値に置き換えた。

1 とても不快である	5
2 不快である	4
3 どちらかといえば不快	3
4 どちらかといえば不快ではない	2
5 不快ではない	1
6 まったく不快ではない	0

また、調査したアカハラのタイプは以下のように表現した。

お尻を触られた	お尻
異性の好みを聞かれた	異性
自分の書いたレポートを淡々と批判された	淡々
自分の書いたレポートを大声で批判された	大声
「お前はバカだ」と言われた	バカ
卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた	テーマ
研究の相談をしたが無視された	無視
奨学金の推薦書を書いてもらえなかった	奨学金
無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた	掃除
就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった	就
自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された	盗用
自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた	個人情報
態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた	髪

直接研究に関与するアカハラとして、ここでは以上のアカハラのタイプの中から「自分の書いたレポートを淡々と批判された」、「自分の書いたレポートを大声で批判された」、「卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた」、「研究の相談をしたが無視された」、「自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された」が該当するとして分析した。

また、回答者の学問に対しての関心による不快感の差を分析するために、「Q7 研究・勉強への興味」への回答を以下のように分類した。

興味を持てる	興味有
どちらかと言えば興味を持てる	
どちらとも言えない	興味薄
どちらかと言えば興味を持ってない	
興味を持ってない	

「どちらとも言えない」を「興味薄」に含めることについては、今回分析したい内容を考慮した上で判断した。研究・学問に対し興味があれば、実際に研究をしていなくともこれまで得た研究現場についての知識から背景を理解し、不快感を高く評価するのではないかと予想しているが、「どうかどちらとも言えない」場合はあくまで興味が無い人であり、そのため回答に影響するであろう文脈の理解がないと判断した。「興味薄」とまとめて分析することにした。

分析手法としては、まず初めに、学年ごとの不快感の平均値の比較を行い、①を検討する。次に、学問・研究・学問に対しての興味の度合いごとの不快感の平均値の比較を行い、②を検討する。最後に、学問に対する興味ごとにモデルを分け、マルチレベル・モデルで分析した後で係数の差を検定し、③を検討する。

結果

図 1 は学年ごとの不快感の平均値の比較のグラフである。これを見ると、学年が上がるごとに不快感は低くなることが分かる。

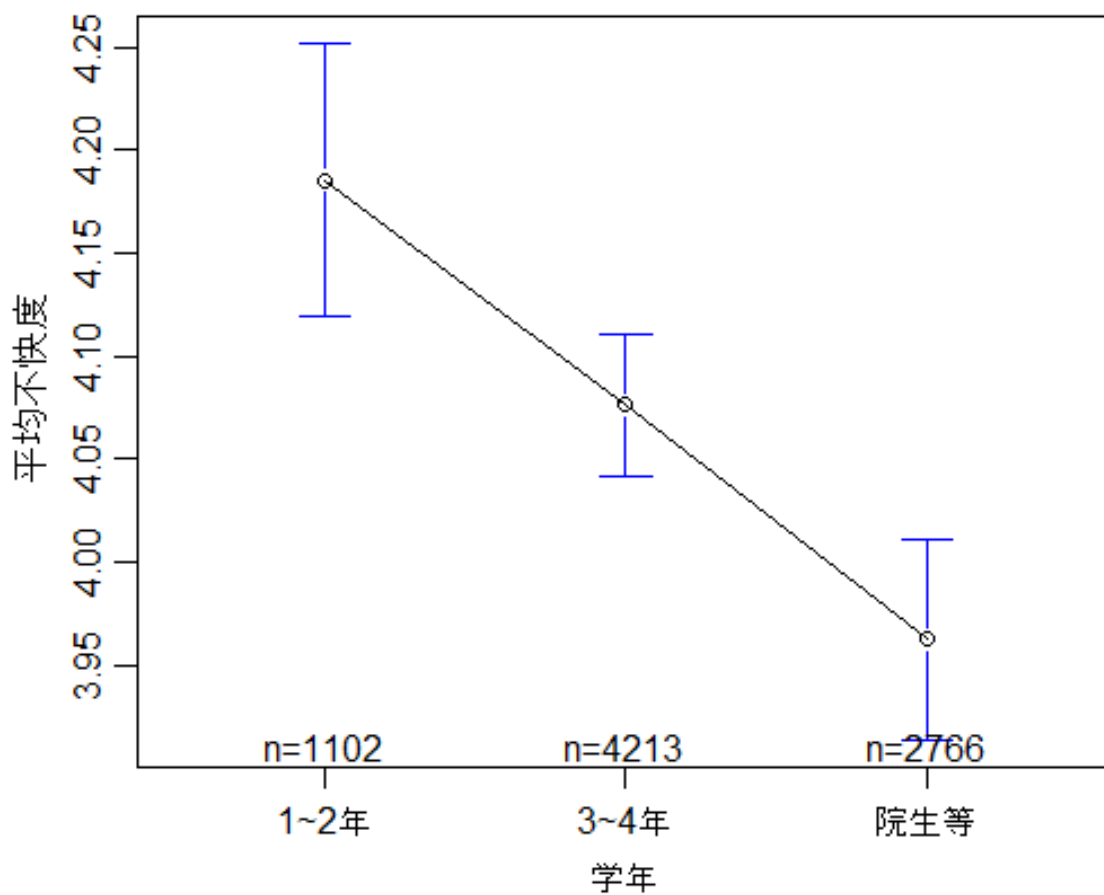


図1：学年ごとの不快感の平均値の比較

図2・3は、学問・研究・学問に対する興味の度合いごとの不快感の平均値の比較である。図2では、「興味薄」のエラーバーが長いことから、大きくばらつきがあると考えられる。そこで改めて質問票の通りに図示したものが図3である。「興味を持てない」、「どちらとも言えない」者の不快感が最も強く、「どちらかと言えば興味を持てない」者の不快感が最も低い。

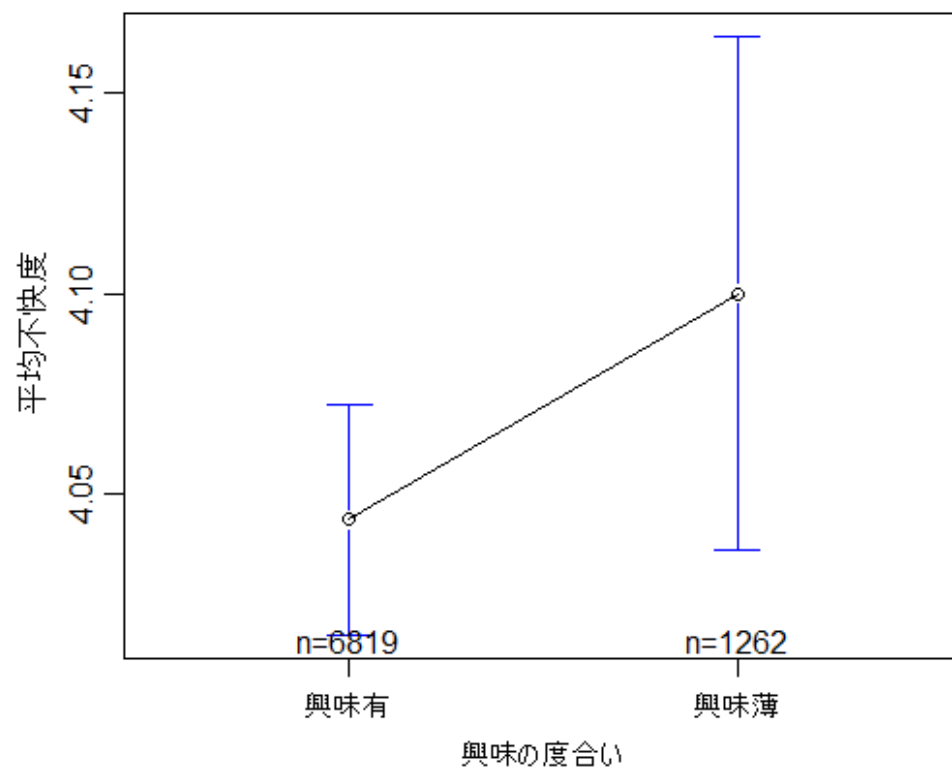


図 2：学問・研究・学問に対する興味の度合いごとの不快感の平均値の比較（1）

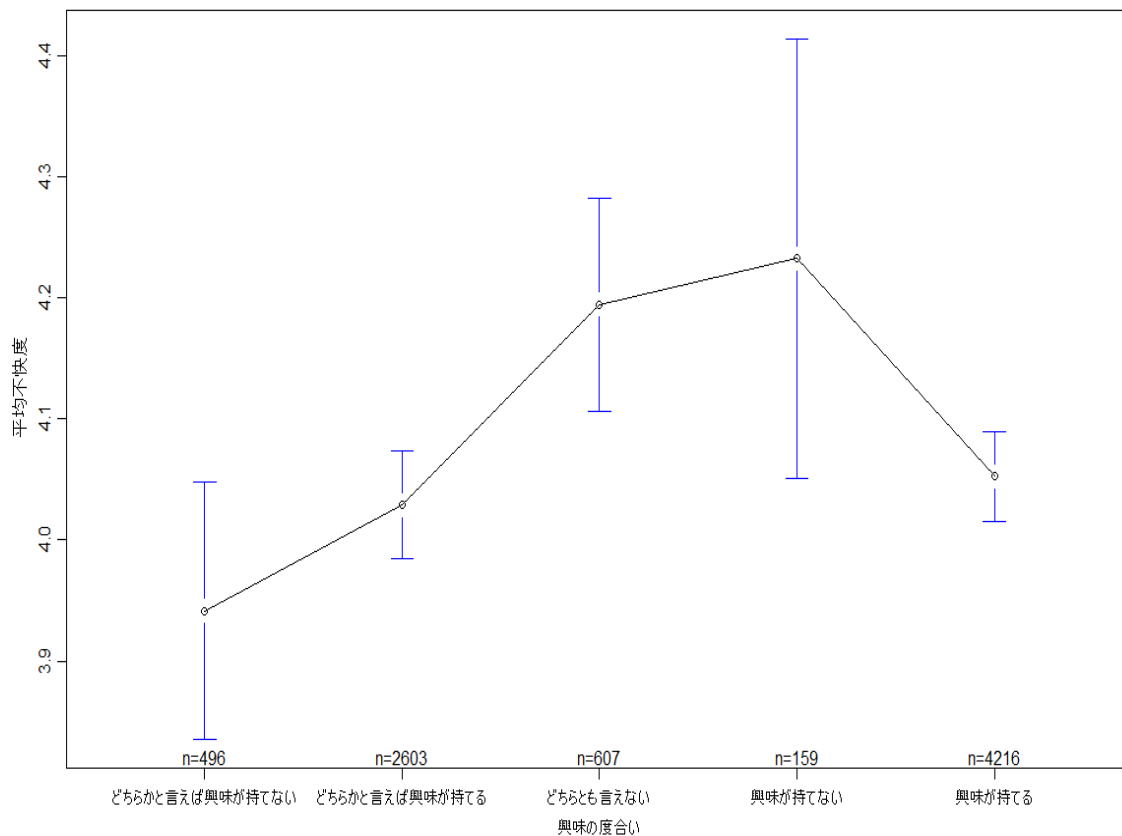


図3：学問・研究・学問に対する興味の度合いごとの不快度の平均値の比較 (2)

表1は、研究・学問に対する興味ごとに分けたマルチレベル・モデル分析の結果である。(1)～(7)は以下のモデルを示している。

(1)	OLSで全ヴィネットを独立変数として推定したモデル。
(2)	(1)に「研究・学問に対する興味」、「学年」を追加したもの。
(3)	(2)から「研究・学問に対する興味」を除き学年でデータを分類したもので、「興味有」の方。
(4)	(2)から「研究・学問に対する興味」を除き学年でデータを分類したもので、「興味薄」の方。
(5)	(2)・(3)・(4)をマルチレベル・モデルで推定したもので、「興味有」・「興味薄」合わせて推定したもの。
(6)	(2)・(3)・(4)をマルチレベル・モデルで推定したもので、「興味有」の方。
(7)	(2)・(3)・(4)をマルチレベル・モデルで推定したもので、「興味薄」の方。

表1：マルチレベル・モデル分析

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
(Intercept)	4.540***	4.627***	4.633***	4.871***	4.580***	4.632***	4.855***
	(0.056)	(0.087)	(0.073)	(0.159)	(0.147)	(0.100)	(0.234)
celeb優れ業績	-0.025	-0.025	-0.002	-0.146+	-0.026	-0.003	-0.149*
	(0.036)	(0.036)	(0.039)	(0.086)	(0.031)	(0.034)	(0.071)
celebTVで有名な	0.035	0.039	0.065+	-0.115	0.015	0.037	-0.112
	(0.035)	(0.035)	(0.038)	(0.086)	(0.031)	(0.034)	(0.072)
age37歳	-0.047	-0.047+	-0.041	-0.044	-0.050*	-0.042	-0.056
	(0.029)	(0.028)	(0.031)	(0.070)	(0.025)	(0.028)	(0.058)
position教授	-0.010	-0.014	-0.016	0.031	0.004	0.003	0.032
	(0.029)	(0.029)	(0.032)	(0.071)	(0.025)	(0.028)	(0.059)
sex.offender男	0.095***	0.093**	0.085**	0.179*	0.112***	0.105***	0.190**
	(0.029)	(0.029)	(0.031)	(0.070)	(0.025)	(0.028)	(0.058)
type異性	-1.539***	-1.537***	-1.485***	-1.760***	-1.534***	-1.486***	-1.737***
	(0.066)	(0.065)	(0.072)	(0.154)	(0.057)	(0.064)	(0.128)
type淡々	-1.620***	-1.617***	-1.714***	-1.105***	-1.592***	-1.695***	-1.057***
	(0.063)	(0.063)	(0.069)	(0.153)	(0.055)	(0.060)	(0.126)
type大声	-0.117+	-0.118+	-0.133+	-0.075	-0.136*	-0.148*	-0.115
	(0.069)	(0.069)	(0.075)	(0.173)	(0.061)	(0.067)	(0.147)
type無視	-0.569***	-0.574***	-0.601***	-0.434**	-0.557***	-0.592***	-0.394**
	(0.065)	(0.065)	(0.071)	(0.155)	(0.057)	(0.063)	(0.128)

type掃除	-0.646***	-0.650***	-0.679***	-0.524**	-0.678***	-0.709***	-0.539***
	(0.069)	(0.069)	(0.076)	(0.170)	(0.061)	(0.067)	(0.141)
type就	-0.771***	-0.770***	-0.800***	-0.629***	-0.748***	-0.784***	-0.575***
	(0.064)	(0.064)	(0.070)	(0.155)	(0.056)	(0.061)	(0.129)
type盗用	0.136*	0.137*	0.169*	-0.063	0.098	0.123+	-0.046
	(0.068)	(0.068)	(0.075)	(0.166)	(0.060)	(0.066)	(0.140)
type個人情報	-0.072	-0.076	-0.076	-0.090	-0.046	-0.045	-0.081
	(0.067)	(0.066)	(0.072)	(0.165)	(0.058)	(0.064)	(0.139)
q7どちらかと言えば興味が持てる		0.010			0.057		
		(0.062)			(0.129)		
q7どちらとも言えない		0.242**			0.288+		
		(0.077)			(0.160)		
q7興味が持てない		0.256*			0.265		
		(0.114)			(0.260)		
q7興味が持てる		0.047			0.091		
		(0.060)			(0.125)		
gakunen33~4年		-0.109*	-0.079	-0.257**	-0.126	-0.095	-0.283
		(0.043)	(0.048)	(0.095)	(0.088)	(0.096)	(0.229)
gakunen3院生等		-0.232***	-0.191***	-0.508***	-0.242*	-0.203*	-0.537+
		(0.046)	(0.050)	(0.119)	(0.094)	(0.099)	(0.279)
SD (Observations)					0.957	0.966	0.882
SD (Intercept id)					0.563	0.551	0.635
Num.Obs.	6142	6130	5159	971	6130	5159	971
R2	0.226	0.233	0.237	0.234			
R2 Adj.	0.224	0.230	0.235	0.221			
R2 Marg.					0.226	0.232	0.222
R2 Cond.					0.425	0.420	0.488
RMSE	1.11	1.11	1.11	1.06	0.93	0.94	0.85

· p < 0.1, * p < 0.05, ** p < 0.01, *** p < 0.001

表 2 は、上記の(6)と(7)の差の検定を行ったものである。この結果から、学問に対する興味の度合いでは不快感にほとんど有意な差が生まれないことが分かる。「type 淡々」のみ有意で、係数が負であるため、興味のある人の方が興味の薄い人よりも不快に感じにくいということが分かる。

表 2：(6)と(7)の差の検定

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	-0.22223333	-0.8726235	3.828683e-01	
celeb優れ業績	0.14532554	1.8362459	6.632130e-02	
celebTVで有名な	0.14934038	1.8728312	6.109170e-02	
age37歳	0.01404515	0.2176760	8.276816e-01	
position教授	-0.02853690	-0.4360087	6.628304e-01	
sex.offender男	-0.08467294	-1.3164978	1.880070e-01	
type異性	0.25077736	1.7490355	8.028488e-02	
type淡々	-0.63801193	-4.5521506	5.310029e-06	***
type大声	-0.03292174	-0.2036703	8.386112e-01	
type無視	-0.19795984	-1.3855103	1.658965e-01	
type奨学金	-0.14778577	-0.9384561	3.480101e-01	
type掃除	-0.16960722	-1.0858540	2.775436e-01	
type就	-0.20885994	-1.4615154	1.438741e-01	
type盗用	0.16950335	1.0943201	2.738146e-01	
type個人情報	0.03555118	0.2326957	8.159977e-01	
gakunen33~4年	0.18810314	0.7578631	4.485330e-01	
gakunen3院生等	0.33384889	1.1260311	2.601524e-01	

考察

今回の分析では、全ての仮説と反対の結果が得られた。①について、院生は当事者意識があり文脈も分かるため、「そのくらい当然、よくあること」と逆に低く評価する可能性がある。あるいは、今回利用したデータの調査対象が大学生であり、加えて回答者には平均より研究の盛んな京都大学という環境に身を置く人が多かったため、学部生も研究に対する理解が多少存在し、直接研究に関与するハラスメントの不快感が高く出たという可能性もある。②について、興味のある人は研究・学問の世界の過酷さを理解している分、アカハラの不快感を「そのくらい当然」と低く評価する可能性がある。また、興味の薄い人はその逆の思考のもと評価した可能性がある。③について、直接研究に関与するハラスメントである「研究内容を淡々と批判された」が唯一有意であることから、研究・学問の世界の理解が不快感に対し、私の仮説と反対の方向に働いたことが確認できる。研究内容の批判くらいは当然あるものとして認識しているということだろう。

また、今回の調査では、自由に意見や感想を募った質問項目で教員との仲の良さなど設問の背景について問う質問が多く寄せられていたので、より詳細な背景文脈があれば院生・興味のある人と学部生・興味の薄い人の間で差が出た可能性もある。

今後の方針として、回答者の属する大学のレパートリーを増やす、あるいは大学生に限らず全国的に同じ調査を行うことが考えられる。これによって研究・学問の世界に縁のない人を抽出し、今回の分析より正確に文脈背景の理解が不快感に与える影響を調べるこ

ができるだろう。

<参考文献>

上野千鶴子編, キャンパス性差別事情～ストップ・ザ・アカハラ, 三省堂, 1997 年
株式会社リベルタス・コンサルティング, 『大学教育改革の実態把握及び分析等に関する調査研究』～大学におけるハラスメント対応の現状と課題に関する調査研究～, https://www.clib.kindai.ac.jp/search/pdf/guide_quote.pdf (2024 年 1 月 24 日閲覧)

土屋正臣, 日本におけるアカデミック・ハラスメント研究の動向, 城西現代政策研究, 2019, 12 巻 1 号, p.55-60.

https://libir.josai.ac.jp/il/user_contents/02/G0000284repository/pdf/JOS-18819001-1206.pdf(2024 年 1 月 24 日閲覧)

村上英吾, 研究者養成過程における権力性と性差別, 技術マネジメント研究, 2003, 2 号, p.14-26.

湯川やよい, アカデミック・ハラスメントの形成過程——医療系女性大学院生のライフストーリーから——, 教育社会学研究, 2011 年, 88 巻, p.163-184.

■はじめに

○研究の背景

近年、大学や大学院をはじめとする教育の現場において「アカデミック・ハラスメント」(以下「アカハラ」)が社会問題化し、対策を講じることが迫られている。アカハラ以外にも「セクシュアル・ハラスメント」(以下「セクハラ」)や「パワー・ハラスメント」(以下「パワハラ」)をはじめ教員と学生の間にはさまざまなハラスメントが成り立ち得るが、中道(2007)¹⁰によるとアカハラはパワハラ的一种であり、パターンは以下の3つである。

1. 意図的に嫌がらせ行為を行う(積極的加害行為者)。
2. 嫌がらせを見て見ぬふりをしたり、加害者の指示に従って嫌がらせに加担してしまう(消極的加害者)。
3. 意図せずあるいは悪意なく行った言動が相手の気持ちを著しく傷つけてしまった(無自覚的加害行為者)。

中道(2007)は、このうち2と3は大学の取り組みや研修を通じて減らすことができ、これらをなくせばほとんどのアカハラはなくなるとしている。ところが、そもそも先ほどアカハラはパワハラ的一种であるとする言及を引用したようにハラスメントとは互いに独立なものではなく、非常に曖昧な概念である以上「アカハラがなくなる」ことを認識することは難しい。そこで本稿では、曖昧さの拭いきれないアカハラ概念の理解を一步進めることを試み、「アカハラと見做されうる問題行動の不快感と被/加害者の性別の組み合

¹⁰ 中道基夫,2007,「キャンパス・ハラスメントの対策とその動向」,『関西学院大学人権研究』11:43-47.

わせとの関係」について分析を行う。

○仮説とこの問題を扱う意義

本稿では「男性から女性に向けられるアカハラが最も不快感が高い」という仮説を立てる。前節にて述べたとおり各種ハラスメントの境界は曖昧である以上、例えば性差別の歴史と切り離せない¹¹セクハラのように、男性の行動が女性を悩ませるという構造はアカハラとしても観察されることは想像に難くないためである。

人が人を悩ませる行動には性別が決して切り離せないことから、本稿を通して得られる示唆は、ハラスメント全般について有意義なものとなることが期待できる。被/加害者の性別の組み合わせとアカハラに対する不快感の関係を観察する本稿の研究からは、教育の現場においてアカハラを未然に防ぐための手がかりとしての意義を見出すことができる。

■データの処理

○サンプルを大学生、大学院生に限定

データを処理するにあたり、まず「あなたの学年等は？」という質問に対し、「大学には在籍していない」という回答を除外し、「1年生」「2年生」「3年生」「4年生」「大学院生」「研究生、聴講生、交換留学生など」と回答したサンプルに限定した。本稿では大学や大学院という教育現場におけるアカハラについて分析するため、「大学には在籍していない」という回答は主旨にそぐわないためである。

○不快感が高いほど大きい数字を割り当てる

¹¹ 牟田和恵,2016,「セクハラ問題から見るジェンダー平等への道—問題化の歴史を振りかえって—」,『ジェンダーと法の理論』,2016 巻,82 号: 111-122.

本調査では架空の大学教員の問題行動を記したヴィネットを用意し、それに対する不快度を「1 とても不快である」「2 不快である」「3 どちらかといえば不快」「4 どちらかといえば不快ではない」「5 不快ではない」「6 まったく不快ではない」の選択肢から一つ回答することを求めたが、分析に際し不快度が高いほど数値が高くなるようにそれぞれ0~5の数値でリコードした。

○性別を「女」「男」に限定

性別の選択肢には「1 女」「2 男」「3 その他」を用意したが、「3 その他」を回答したサンプルがごく少なかったことから除外し、「1 女」「2 男」をそれぞれ「女」「男」という変数として処理した。

○被/加害者の性別を組み合わせで処理

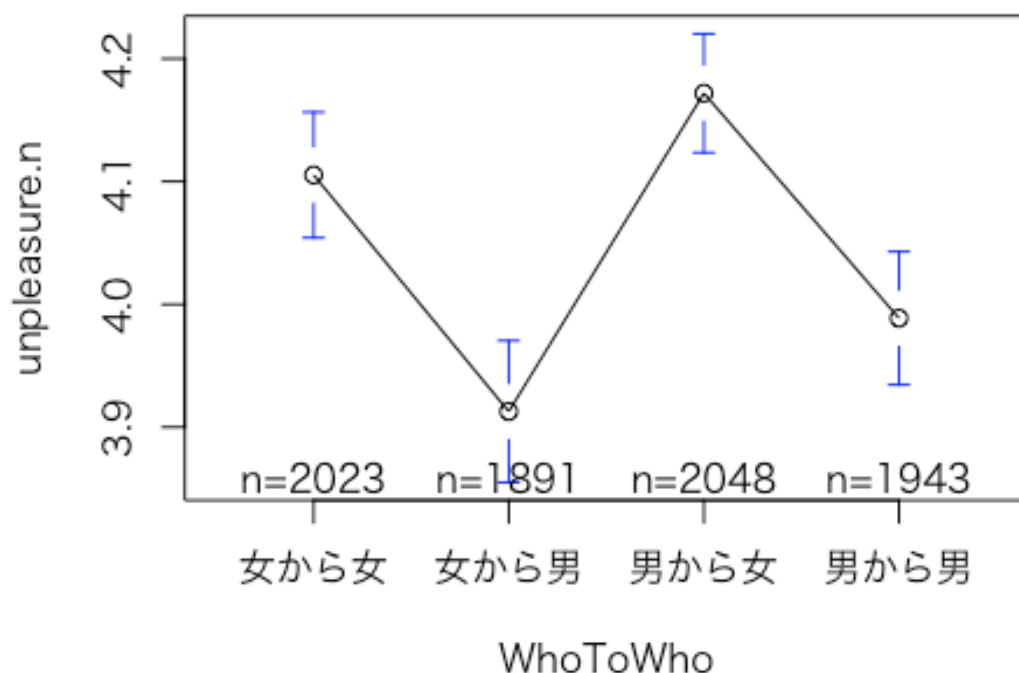
最後に、本稿の目的である「アカハラと見做されうる問題行動の不快感と被/加害者の性別の組み合わせとの関係」の調査のため、回答者(以下「被害者」)と架空のアカハラ加害者(以下「加害者」)の性別をそれぞれ組み合わせ、女性の被害者が女性の加害者からのアカハラの不快度について回答したサンプルに対し「女から女」という変数を作成する要領で「女から男」「男から女」「男から男」の変数も作成した。

■分析の結果

○加/被害者の性別とそれぞれのアカハラ不快度の平均値比較

「女から女」「女から男」「男から女」「男から男」のグループそれぞれについて、アカハラに対する不快度の平均値をプロットしたのが次の図1である。

図1:加/被害者の性別とアカハラ不快感の平均値



この図からは、「男から女」のグループでアカハラ不快感の平均値が最も高く、「女から男」のグループでアカハラ不快感の平均値が最も低い結果になったと読み取ることができる。次節では、図の妥当性を検討するため、4つのグループから2つ組み合わせそれぞれ Welch の t 検定を用いて平均値の差の検定を実施する。

○Welch の t 検定

前節の結果を踏まえ、①「女から女」と「女から男」②「女から女」と「男から女」③「女から女」と「男から男」④「女から男」と「男から女」⑤「女から男」と「男から男」⑥「男から女」と「男から男」の6つの組み合わせについて、それぞれアカハラに対する不快感の平均値の差について Welch の t 検定を実施した結果が以下のとおりである。

① 「女から女」と「女から男」

Welch Two Sample t-test

```
data: unpleasure.n by WhoToWho
t = 4.9003, df = 3823, p-value = 9.965e-07
alternative hypothesis: true difference in means between group 女から女 and group 女から男 is not equal to 0
95 percent confidence interval:
 0.1155088 0.2695804
sample estimates:
mean in group 女から女 mean in group 女から男
      4.105289           3.912745
```

② 「女から女」と「男から女」

Welch Two Sample t-test

```
data: unpleasure.n by WhoToWho
t = -1.8551, df = 4053.4, p-value = 0.06366
alternative hypothesis: true difference in means between group 女から女 and group 男から女 is not equal to 0
95 percent confidence interval:
-0.136958265 0.003786614
sample estimates:
mean in group 女から女 mean in group 男から女
      4.105289           4.171875
```

③ 「女から女」と「男から男」

Welch Two Sample t-test

```
data: unpleasure.n by WhoToWho
t = 3.0688, df = 3940, p-value = 0.002164
alternative hypothesis: true difference in means between group 女から女 and group 男から男 is not equal to 0
95 percent confidence interval:
 0.04211107 0.19111267
sample estimates:
mean in group 女から女 mean in group 男から男
      4.105289           3.988677
```

④ 「女から男」と「男から女」

Welch Two Sample t-test

```
data: unpleasure.n by WhoToWho
t = -6.7546, df = 3765.2, p-value = 1.653e-11
alternative hypothesis: true difference in means between group 女から男 and group 男から女 is not equal to 0
95 percent confidence interval:
-0.3343461 -0.1839147
sample estimates:
mean in group 女から男 mean in group 男から女
      3.912745           4.171875
```

⑤ 「女から男」と「男から男」

Welch Two Sample t-test

```
data: unpleasure.n by WhoToWho
```

```

t = -1.8823, df = 3810.6, p-value = 0.05987
alternative hypothesis: true difference in means between group 女か
ら男 and group 男から男 is not equal to 0
95 percent confidence interval:
-0.155023624 0.003158177
sample estimates:
mean in group 女から男 mean in group 男から男
3.912745 3.988677

```

⑥ 「男から女」と「男から男」

Welch Two Sample t-test

```

data: unpleasure.n by WhoToWho
t = 4.9461, df = 3912.6, p-value = 7.889e-07
alternative hypothesis: true difference in means between group 男か
ら女 and group 男から男 is not equal to 0
95 percent confidence interval:
0.1105807 0.2558147
sample estimates:
mean in group 男から女 mean in group 男から男
4.171875 3.988677

```

有意水準を 0.05 とすると、上記の①～⑥のうち、アカハラに対する不快感の平均値の差が有意であると言えるのは①、③、④、⑥であり、②、⑤については有意な結果が得られなかった。

このことから本稿の仮説「男性から女性に向けられるアカハラが最も不快感が高い」を検討すると、④、⑥の結果から「男から女」は「女から男」と「男から男」よりもアカハラに対する不快感は有意に高いと言えるが、②の結果から「男から女」と「女から

女」とのアカハラに対する不快度の平均値の差は有意であるとは言えないことがわかった。

○被害者男女別のアカハラ不快度の回帰分析

前節にて②「女から女」と「男から女」と⑤「女から男」と「男から男」のそれぞれについてアカハラに対する不快度の平均値の差を検定したが、有意な結果が示されなかった。これを受け、念の為被害者の男女別に加害者の性別ごとにアカハラ不快度がどれほど変化するかを調べる回帰分析を行った。その結果が次の表2である。

表2：被害者男女別のアカハラ不快度の回帰分析

	男	女
(Intercept)	3.91 *** (0.03)	4.11 *** (0.03)
sex.offender 男	0.08 (0.04)	0.07 (0.04)
R ²	0.00	0.00
Adj. R ²	0.00	0.00
Num. obs.	3834	4071
*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05		

表のとおり、やはり被害者の男女それぞれについて、加害者の性別の違いによるアカハラ不快度に有意な差はないことがわかった。

■まとめ

○内容の要約と考察

本稿では、架空のアカハラについて被害者の性別と加害者の性別を組み合わせ、組み合わせごとにアカハラに対する不快度を調べ、Welch の t 検定と回帰分析を行った。結

果として、本稿にて立てた仮説「男性から女性に向けられるアカハラが最も不快感が高い」は有意には支持されなかった。具体的には、被害者は男性と女性のいずれの場合も、加害者が男性であれ女性であれアカハラに対する不快感に有意な差は示されないということがわかった。一方で、加害者が男性と女性のいずれの場合も、被害者の性別によってアカハラの不快感には有意な差が見られた。

○本研究の課題

本稿の結果を受けて興味深かった点は、加害者が男性の場合、被害者は異性である女性の方が不快感が高いのに対し、加害者が女性の場合、被害者は同性である女性の方が不快感が高かった点だ。ここから、女性は男性よりもアカハラに対して不快感を高く感じやすいという考察が可能である。今回の分析からはこの考察を裏付ける有意な結果を導くことができなかったが、本調査はあくまで架空のアカハラに対して不快感を問うたものであるため、そもそもこの結果が妥当であるとも一概には言えない。これは本研究の課題であり、改善策として例えばアカハラの実例を集積し、それぞれに対する不快感を調査することでこの課題が解決され、より妥当な結論を導くことができるかもしれない。

また、善教(2010)¹²は、日本における社会調査の有効回収率の低下の背景には一般的信頼感の低下がある可能性を指摘している。本稿において扱ったデータにも当然ながら回答拒否者のデータは含まれていないため、本稿の結論を社会一般に当てはめることはふさわしくない。しかし、一般性には乏しくとも本稿の執筆に際し行った研究は、教育現場におけるアカハラを未然に防ぐために多少の意義は果たしたと言って差し支えないだろう。

¹² 善教将大, 2010, 「回答拒否者の論理—JGSS を用いた一般的信頼感と『協力の程度』の分析—」, 『研究論文集』 巻 11: 259-271

■参考文献

中道基夫,2007,「キャンパス・ハラスメントの対策とその動向」,『関西学院大学人権研究』
11:43-47.

牟田和恵,2016,「セクハラ問題から見るジェンダー平等への道—問題化の歴史を振りかえって—」,『ジェンダーと法の理論』,2016 巻,82 号: 111-122.

善教将大,2010,「回答拒否者の論理—JGSS を用いた一般的信頼感と『協力の程度』の分析—」,『研究論文集』 巻 11: 259-271.

アカハラ被害者の進路希望と不快感の関係

0100331982 文学部社会学専修 梅木 星南

1.はじめに

2023年12月、京都大学大学院工学研究科の指導教員であった60代の教授が、指導する学生に対し、おとしめたり、人格を否定したりするような発言をするなどハラスメントに当たる行為をしたとして、停職2か月の処分を下されたという報道がなされた。近年、このような学問、研究機関における地位や権限などの差を利用したハラスメント行為は「アカデミック・ハラスメント(以下、アカハラ)」として問題視されており、その防止が求められている。アカハラはその程度にかかわらず総じて許されない行為であることは言うまでもないが、そのなかでも特に大学や大学院の卒業後の進路として研究職を希望している者に対するアカハラは、その者の将来の可能性やキャリアに対して、主に精神的に大きな悪影響を与えうる卑劣な行為である。というのも、研究職を希望している者がアカハラを受けければ、将来の職場環境に対して不安を抱いたり、そもそも研究活動に対する意欲を削がれたりして、研究職というキャリアの可能性を狭めてしまう可能性がある。

そこで、本レポートではアカハラ被害者の進路希望という点に着眼し、以下に述べる仮説を立てて調査を行った。

仮説：研究職を強く希望している者ほど、アカハラの不快感が高い

この仮説の根拠は、先にも述べた通り、研究職を強く希望している者ほど、アカハラを受けければ将来の職場環境と重ねてしまって不安を抱いてしまうということ、研究職を強く希望している者ほど、アカハラを受けると自分は研究職としてやっていけるのか、研究職で自分のやりたいことができるのか、という不安を抱いてしまうと考えられることなどがある。

2.方法

本レポートでは、2023年度京都大学社会学実習の講義の一環で実施した「大学教員の不快な行いに関する調査」において集計した回答データを使用して、分析を行う。

数値の処理について詳説する。アカハラに対する不快感についての質問項目の回答に、不快感が高いほど数値が増大するよう、「とても不快である」「不快である」「どちらかとい

えば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「まったく不快ではない」のそれぞれに、5～0の数値を割り振り、目的変数とした。

また、仮説①を調べるため、進路希望についての質問項目への回答「研究職に就きたい」「まだ決めていないが、研究職にも興味がある」「研究職に就く気はない」「すでに研究職に就いている、内定している」を独立変数として、アカハラの不快感について平均値の比較と検定を行った。

なお、大学などの研究機関に在籍していない者の回答については、本調査の対象外としている。

3.調査の結果

分析の結果を以下の図1に示す。

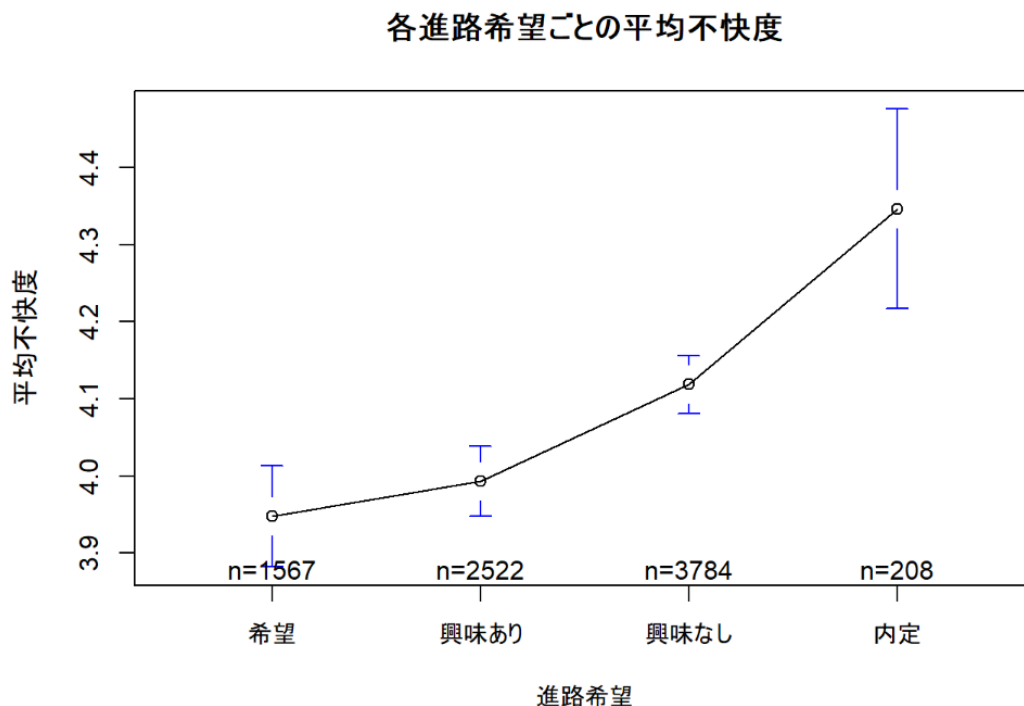


図 15：進路希望とアカハラの平均不快感の関係

研究職を希望している者が最もアカハラへの不快感が低く、内定を獲得している者が最も不快感が高いという結果となった。ただし、内定を獲得している者を除けば、研究職を強く希望するほど不快感が下がる傾向にあることに留意されたい。

また、最も不快感の差が大きかった、内定を獲得している者と研究職を希望している者の不快感について、t検定を実施した結果、統計的に有意傾向が得られた($t = -5.4164$, $df = 325.31$, $p = 1.185e-07$)。

4.得られた結果についての考察

本調査の結果、冒頭に立てた、研究職を強く希望している者ほど、アカハラの不快感が高いという仮説とは裏腹に、研究職に内定を獲得している者を除いて、強く研究職を希望している者ほど不快感が低いという結果となった。しかし、研究職に内定を獲得している者

は、著しくアカハラへの不快感が高くなることも明らかになった。順当に考えれば、内定を獲得している者は研究職への希望も強いはずであるが、内定を獲得していない研究職希望者と比べてアカハラの不快感が著しく上がるのは興味深い結果である。

この結果が得られた要因を考察する。まず、内定獲得者を除いて、強く研究職を希望している者ほどアカハラの不快感が高いという結果について考察する。この要因として考えられる可能性として、アンケートに不快という答えを示すことによって内定の獲得やキャリアに影響が出るのではないかと懸念し、不快感が低く表れている可能性がある。裏を返せば、研究職への興味が薄い者は、研究職の職場で起こるアカハラに対して不快感を表明したところでその後のキャリアに影響がないと考え、比較的不快感を表明しやすく、それがアンケート結果に表れているということである。

続いて、研究職の内定を獲得している者のアカハラへの不快感が著しく高いことについて考察する。これは、内定を獲得している者は、アカハラへの不快感を表明したところですでに獲得している内定を奪われるとは考えにくいと、率直な不快感を表明している可能性がある。これは先の考察とも整合的である。さらに、内定を獲得している者はそれだけ研究職やそこで働くことへの解像度が高くなっていると考えられ、その分アカハラ状況をありありと想像して不快感が高くなっているという可能性も考えられる。以上をまとめると、研究職への進路希望ごとのアカハラ不快感の差は、その後のキャリアへの影響の意識がアンケートの結果に影響している可能性があると考えられる。

アカハラは程度の大小を問わず、許されざる行為である。特に、研究職を希望する者に対してアカハラが発生すると、被害者の研究職への意欲を削ぐことになりかねず、ひいては学術研究という営みそのものに大きく負の影響を与えかねない。本調査の結果とその考察から、学生を指導する教員は、自らの行いがアカハラに該当するか、慎重に検討しながら行動する必要があるといえる。研究職を希望している者に対しての接し方には、その将来を奪わないよう、特に注意が必要であろう。

学部生と大学院生によるアカデミック・ハラスメントの受け取り方の違い

尤 怡辰

1. はじめに

「アカハラ」という言葉は、アカデミック・ハラスメントの略称であり、特定非営利活動法人アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク（2024）は、アカデミック・ハラスメント「研究教育に関わる優位な力関係のもとで行われる理不尽な行為」と定義している。京都大学では、業務の適正な範囲を超えた研究若しくは教育上又は修学上の環境を害する不適切な発言や行動をアカハラの対象としており、学術機関の構成員たるアカハラの受ける側がそれを不適切だと思うとそれはアカハラとなる可能性があるとし唆しているであろう。しかし、このような定義は不明確であり、京都大学の冊子にも「個人の受け取り方によっては、業務上必要な指示や注意・指導を不満に感じたりすることもあります。が、業務の適正な範囲で行われている場合は該当しません」と述べられている（京都大学 2023）。受ける側に関して、ハラスメントの研究では、受ける側の主観を考慮して判断する必要性があるという議論がある（湯川 2011）。

本稿では、代表的な受ける側である学生を対象とし、どのような学生がよりアカハラとなりうる言動をアカハラとして認識することができるのかに着目していきたい。

大学は、ハラスメント委員会の設置、パンフレットの配布、セミナーの開催などの措置を講じて、アカハラの防止対策に取り組んでいる。アカハラに関する知識を持つことは、不快感や被害を認識する上で重要であると考えられる。また、教員と学生間の指導上のコミュニケーションを多く経験する学生は、適切な行動と不適切な行動を識別する判断基準を確立しやすいと考えられる。

学年が高い学生は、大学の措置とアカハラに関する知識に触れる機会が多く、その結果、アカハラに関する知識をより深く身につけていると考えられる。また、研究を頻繁に行い、

研究室での研究活動や教員との関係を経験する大学院生は、指導する側の行為の適切さについての知識と意識をより強く持っていると考えられる。

そのため、本稿では学生を学部生と大学院生に分類し、アカハラとなりうる行為に対する平均不快感を比較することにより、どのような学生がアカハラ行為に不快を感じるかを明らかにする。アカハラ行為は、人格権を否定される暴言・暴力・誹謗中傷・叱責などの行為と、学習や研究をする権利を侵害される研究結果や論文を横取りや雑用の押し付けなどの行為、という2種類に分けて考察する。これら2種類の行為に対して仮説を立てる。

仮説 1：人格権を否定されるアカハラの場合、大学院生のほうが学部生よりも平均不快感が高い。

仮説 2：学習や研究をする権利を侵害されるアカハラの場合、大学院生のほうが学部生よりも平均不快感が高い。

異なる研究教育活動に従事する学生の視点から、高等教育機関で発生するアカハラ行為をどう受け取るのかを研究することは、被害の発生とその背景理解に貢献し、将来の防止対策の策定にも参考となるであろう。

2. 方法

分析に使用するデータは、京都大学文学部 2023 年度社会学演習の授業で行われ、大学生（院生、聴講生など含む）を対象とした大学教員の不快な行いに関する調査である。調査の概要については本レポートの与件外であるため割愛する。

従属変数であるセアカハラに関するヴィネットに対する回答者の不快感を、5=「とても不快である」、4=「不快である」、3=「どちらかといえば不快」、2=「どちらかといえば不快ではない」、1=「不快ではない」、0=「まったく不快ではない」というスケールで数値化する。

ヴィネットからアカハラ行為に関する因子を抽出し、次の5つのカテゴリ変数を作成した。それは、行為を行う側の有名性（「無名」、「優れた業績」、「TV で有名」）、年齢（「37 歳」、「52 歳」）、役職（「非常勤講師」、「教授」）、性別（「男」、「女」）、そして、ハラスメン

トの種類である。ハラスメントの種類のうち、以下のように分類した。

「自分の書いたレポートを淡々と批判された」、「自分の書いたレポートを大声で批判された」、「バカだと言われた」、「髪をつかまれ足をけられた」を、人格権を否定される暴言・暴力・誹謗中傷・叱責などの行為とした。「研究の相談をしたが無視された」、「奨学金の推薦書を書いてもらえなかった」、「無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた」、「レポートの内容を無断で盗用された」、「自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた」、「卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた」を、学習や研究をする権利を侵害される行為とした。仮説と関係のない他の種類のハラスメントについて、セクシュアル・ハラスメント（「異性の好みを聞かれた」、「お尻を触られた」）と就職への妨害行為（「就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった」を）を特定した。以下では、それぞれ省略して、「淡々批判」、「大声批判」、「バカ」、「髪引っ」、「相談無視」、「奨学金」、「無給掃除」、「盗用」、「情報漏洩」、「テーマ変」、「異性好み「お尻」「就活推薦」と表記する。

学年に関しては、1年生から4年生と回答したのを「学部生」、大学院生と回答したのを「大学院生」と分類した。さらに、回答者の性別（「男」、「女」、「その他」）と出身大学（京都大学、その他）を統制した。

回答者 469 名のうち、「大学には在籍していない」と回答していた 15 名と本稿の研究対象ではない「研究生、聴講生、交換留学生など」15 名を除いた 439 名を分析対象とした。

表 1 は、回答者の学年と性別の分布を示す。

表 1 性別と学年のクロス表

	学部生 大学院生	
1 女	154	65
2 男	138	71
3 その他	5	3
合計	297	139

3. 分析結果

3.1. アカハラ行為のタイプによる学部生・大学院生の平均不快感の比較

図1は、アカハラ行為に対する学部生・大学院生の平均不快感を比較している。この図からは、アカハラ行為に対する全体的な平均不快感において、学部生と大学院生の間に差が存在し、学部生の平均不快感が高いことが読み取れる。

図1 アカハラ行為に対する学部生・大学院生の不快感の平均値

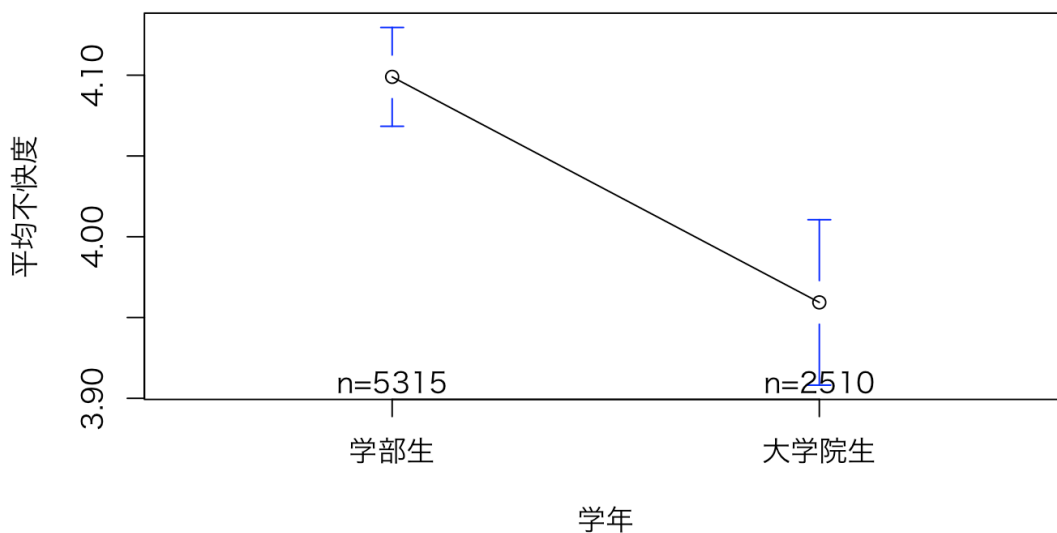


図2では、各種類のハラスメントに対する学部生と大学院生の平均不快感が比較されている。セクハラに関する平均不快感には、学部生と大学院生の間で大きな差は見られない。人格権を否定される暴言・暴力・誹謗中傷・叱責などの行為では、「淡々批判」に対して、大学院生のほうが平均不快感は低く、「バカ」に対して、大学院生のほうが平均不快感は高く、「大声批判」と「髪引っ」に対して、学部生と大学院生の平均不快感が近い。次学習や研究をする権利を侵害される行為に関して、「相談無視」、「奨学金」、「情報漏洩」に対して、大学院生のほうが平均不快感は低くなり、「盗用」に対する不快感は、大学院生が学部生より

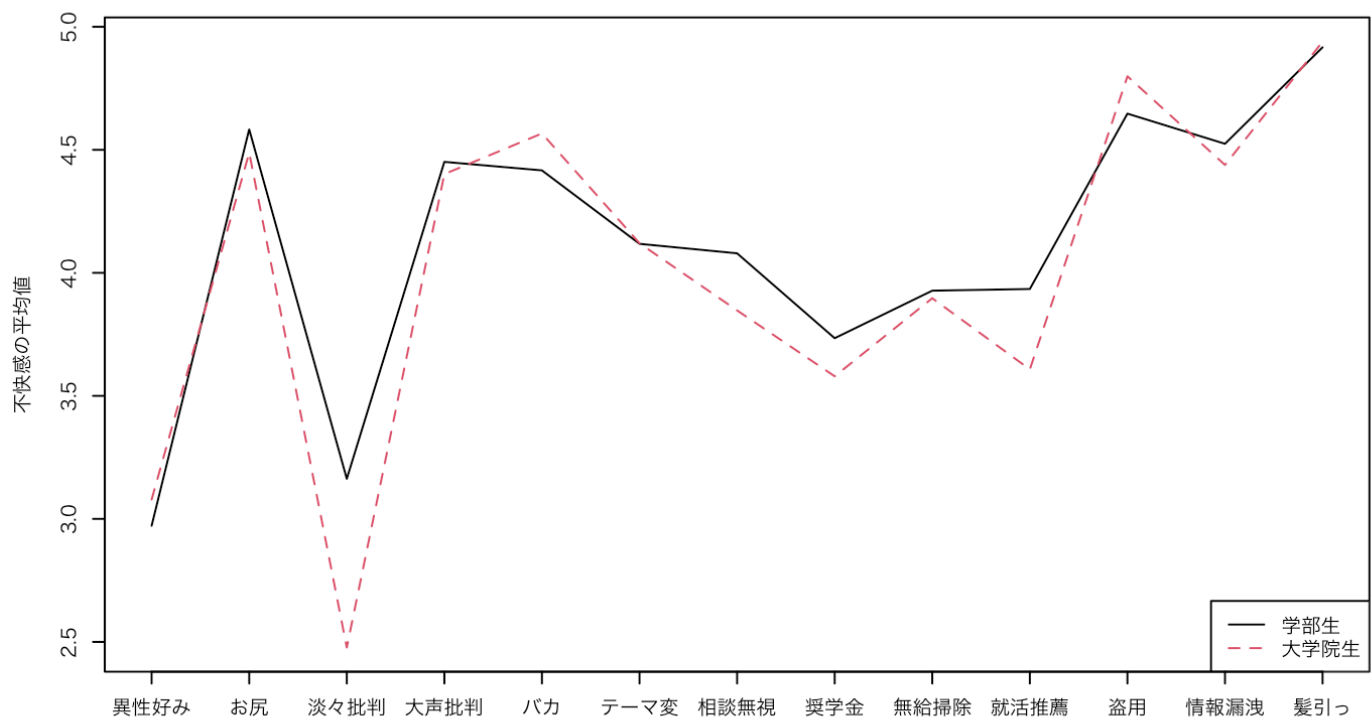
りも高い。「無給掃除」と「テーマ変」に対して大学院生と学部生の平均不快感が近い。

図2 ハラスメントのタイプによる学部生・大学院生の平均不快感

3.2. 回帰分析

受け取り方の違いを検討するために、学部生と大学院生で、回帰分析の結果にどの程度違いがあるのか検討してみた。その結果は表2に示されている。また、回帰係数の検定結果は表3で示す。

図2の結果をもとに、回帰分析ではハラスメントのタイプを示す変数「type」の基準カ



テゴリを「テーマ変」にして分析する。このように、学年別の差が最小のカテゴリを基準カテゴリとすると、ハラスメントのタイプの係数の差はすべてプラスになり、この値が大きいほど差が大きいと解釈できる。

学部生と大学院生の係数を比較した結果、ほぼ同じであるが、「淡々批判」、「就活推薦」の係数は学部生のほうが 5%水準で有意に大きい。回答者の男性の係数は学部生のほうが有意に小さい。京大生であるかどうかを示す係数は学部生の方が有意に大きい。

表2 アカハラ時の不快度の回帰分析（学部生、大学院生別）

	学部生	大学院生
(Intercept)	4.21*** (0.07)	4.17*** (0.11)
celeb 優れ業績	-0.04 (0.04)	-0.05 (0.06)
celebTV 有名	0.01 (0.04)	0.01 (0.06)
age52 歳	0.02 (0.03)	0.09 (0.05)
position 教授	-0.03 (0.03)	0.03 (0.05)
sex.offender 男	0.08** (0.03)	0.09 (0.05)
relevel(type, “テーマ変”)異性好み	-1.14*** (0.07)	-1.14*** (0.12)
relevel(type, “テーマ変”)お尻	0.47*** (0.08)	0.34** (0.13)
relevel(type, “テーマ変”)淡々批判	-0.93*** (0.07)	-1.70*** (0.11)
relevel(type, “テーマ変”)大声批判	0.34*** (0.08)	0.23 (0.13)
relevel(type, “テーマ変”)バカ	0.30*** (0.08)	0.41** (0.13)
relevel(type, “テーマ変”)相談無視	-0.07 (0.07)	-0.31** (0.12)
relevel(type, “テーマ変”)奨学金	-0.37*** (0.07)	-0.55*** (0.13)
relevel(type, “テーマ変”)無給掃除	-0.21** (0.08)	-0.25 (0.13)
relevel(type, “テーマ変”)就活推薦	-0.17* (0.07)	-0.53*** (0.12)

表 2 アカハラ時の不快度の回帰分析（学部生、大学院生別）

	学部生	大学院生
relevel(type, “テーマ変”)盗用	0.53*** (0.08)	0.66*** (0.13)
relevel(type, “テーマ変”)情報漏洩	0.41*** (0.07)	0.32** (0.12)
relevel(type, “テーマ変”)髪引っ	0.82*** (0.07)	0.84*** (0.12)
sex2 男	-0.22*** (0.03)	-0.07 (0.05)
sex3 その他	0.01 (0.11)	0.19 (0.20)
京大 TRUE	-0.06 (0.03)	-0.36*** (0.05)
R ²	0.25	0.31
Adj. R ²	0.25	0.31
Num. obs.	4739	2126

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

表 3 学部生、大学院生別の回帰係数の差の検定

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.043	0.342	0.732	
celeb 優れ業績	0.014	0.193	0.847	
celebTV 有名	0.002	0.023	0.981	
age52 歳	-0.068	-1.194	0.232	
position 教授	-0.061	-1.059	0.290	
sex.offender 男	-0.006	-0.099	0.921	
relevel(type, “テーマ変”)異性好み	0.002	0.014	0.988	
relevel(type, “テーマ変”)お尻	0.130	0.880	0.379	
relevel(type, “テーマ変”)淡々批判	0.770	5.724	0.000	***
relevel(type, “テーマ変”)大声批判	0.111	0.726	0.468	
relevel(type, “テーマ変”)バカ	-0.116	-0.785	0.432	

表 3 学部生、大学院生別の回帰係数の差の検定

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
relevel(type, “テーマ変”)相談無視	0.242	1.755	0.079	
relevel(type, “テーマ変”)奨学金	0.176	1.203	0.229	
relevel(type, “テーマ変”)無給掃除	0.035	0.228	0.820	
relevel(type, “テーマ変”)就活推薦	0.362	2.663	0.008	**
relevel(type, “テーマ変”)盗用	-0.130	-0.877	0.380	
relevel(type, “テーマ変”)情報漏洩	0.086	0.598	0.550	
relevel(type, “テーマ変”)髪引っ	-0.023	-0.163	0.871	
sex2 男	-0.149	-2.570	0.010	*
sex3 その他	-0.177	-0.759	0.448	
京大 TRUE	0.307	4.983	0.000	***

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

以上の結果を踏まえると、仮説 1 と 2 はほとんど支持されなかった。学部生のほうが院生よりもアカハラを不快に感じる傾向が見られるが、おおむね同じ結果という理解が妥当であるように思われるであろう。

4. 考察

本稿では、アカハラ行為に対する学部生と大学院生の受け取り方に違いがあるかという問いに対して検討を行った。その結果、学部生のほうが院生よりも不快を感じるという結果が得られ、前述の 2 つの仮説もほぼ支持されなかった。また、回帰分析係数の検定結果からみると、学部生と大学院生の受け取り方には有意差があるとは言えにくくなる結論に至る。

具体的には、仮説 1 について、人格権を否定されるアカハラにおいて学部生と大学院生

の平均不快感にほとんど有意差が見られなかった。ただし、「淡々批判」に対して、学部生のほう平均不快感が高いという仮説と反した結果が出た。仮説 2 についても、学習や研究をする権利を侵害されるアカハラの場合、学部生と大学院生の平均不快感にも有意差がなかったが「就活推薦」という同じく進路に関するハラスメントに対しては、学部生の平均不快感が有意に高い。

このような結果に至った理由として、以下の 2 点が考えられる。まず、アカハラに対する学生の感じる不快感が、単に知識量と意識の高さの違いだけではなく、より複雑な要因が関わっていると推測される。次に、サンプルの文系と理系の学生の比率も不明であるが、社会学の授業で実施されたため、理系の学生が少ない可能性が高いと推測される。このような偏りが、結果に影響を与えている可能性があると考えられる。

以上の内容を踏まえ、今後の課題としては、調査の実施方法の見直しとアカハラに対する意識の多様性についてさらに深く情報収集を行うのが挙げられる。

参考文献

- 京都大学, 2023, 「京都大学におけるハラスメントの防止と対応について」, (2024 年 1 月 18 日取得, <https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/2304-booklet.j-dfd7e24a043dd65fd7281ffc78a5b033.pdf>).
- 特定非営利活動法人アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク, 2024, 「アカデミック・ハラスメントとは」, (2024 年 1 月 18 日取得, <http://naah.jp/index/harassment/>) .
- 湯川やよい, 2011, 「アカデミック・ハラスメントの形成過程——医療系女性大学院生のライフストーリーから——」『教育社会学研究』 88: 163-184.

アカデミック・ハラスメントのタイプと生徒のジェンダーの 不快感への影響の検討

李欣慰

京都大学文学研究科 社会学研究室 M1

Introduction

本稿の目的は、各ハラスメントタイプとジェンダーの影響を検証することにある。

研究背景

近年、ハラスメントの問題がますます顕在化した。一番目につきやすいのはセクシャル・ハラスメントだが、大学において、アカデミック・ハラスメント（以下、アカハラ）も俎上に載せられた。アカハラとは、「研究教育の場における権力を用いた嫌がらせ」と定義されている（御興・赤松，2004）。その内容には、学習・研究活動妨害、研究成果の搾取、指導義務の放棄、精神的虐待、権力の乱用といった、教員から学生に対する幅広い嫌がらせ行為が含まれる。それらの行為は意図的になされる場合もあれば、無意図的に行われる場合もある（小田部・丸野・舩田，2010）。こうしたアカハラが、教育・研究機関においてしばしば生じてあり、学生への心理的影響が莫大である（村上，2003）。

湯川は、アカハラは一般的に、大学での性的言動以外の不快な言動全般を示す用語として用いられていることを察知した（湯川，2006）。日本においては大学のセクハラ・ア

アカハラ問題を扱う主流は、教員・大学との権力関係の中で被害を捉え損なわれた教育や研究の権利を回復しようとする「人権問題としてのハラスメント被害」という視点にたつ（湯川，2014）。ジェンダー研究者たちによるアカデミック・ハラスメントに関する議論（上野 1997，江原 1997，菊地 2002，大理ほか 2006）は，表面上の性的装いの有無にかかわらずセクシュアル・ハラスメントもアカデミック・ハラスメントも「根本的にジェンダーの問題として考察される必要がある」（大理ほか，2006）という点で理解を共有している。しかしポスト構造主義フェミニズムの理論は実証的に検証されにくい。実際、アカハラをされた女子学生は、自らの体験を「ジェンダー問題」とする解釈から距離をとる例がある（湯川，2011）。現実における解釈の複雑さが垣間見えるだろう。実証的な研究が必要である。

アカデミック・ハラスメントに関する実証的な研究がまだ少ないである。ジェンダーと関わる研究が多いが、フェミニズム理論研究のほうが多く、実際のアカハラプロセスにおいてジェンダーの影響を検証する研究が足りない。このレポートは、アカハラに関する量的実証研究である。ジェンダーに関する実証研究が少ない現状を踏まえ、ジェンダーとアカハラのタイプを独立変数とし、重回帰分析を行い、ジェンダーの効果を検証しようとする。

以上を踏まえ、本稿では以下のような仮説について検証する。

仮説 1：アカハラに直面する時、男子生徒と女子生徒の感じる不快感が違う。

仮説 2：各ハラスメントタイプについて、男子と女子生徒の反応が違う。

Methods

本レポートは、google form のアンケート調査の結果を使い、不快度を従属変量とし、学生の性別とハラスメントのタイプに関する項目を取り出して重回帰分析を行う予定である。データ分析は RStudio を通して行う。

元データをロングフォーマットに変更した後、まずは従属変数不快度の項目データを処理する。各オプションに数字をつけてから分析が行われる。数字づけの結果が図で表示される。

unpleasure	unpleasure.n					
	0	1	2	3	4	5
1 とても不快である	0	0	0	0	0	3019
2 不快である	0	0	0	0	1455	0
3 どちらかといえば不快	0	0	0	918	0	0
4 どちらかといえば不快ではない	0	0	320	0	0	0
5 不快ではない	0	145	0	0	0	0
6 まったく不快ではない	75	0	0	0	0	0

図 1. 不快感項目のオプションに数字をつける結果

続いて、各ハラスメントのタイプを整理する。"異性好み"、"バカ扱い"、"推薦書拒絶"、"レポート批判"、"足ける"、"部屋掃除"、"個人情報漏れ"、"内容盗用"、"テーマ変え"という九点のアカハラタイプが洗い出された。

isei	type								
	異性好み	バカ扱い	推薦書拒絶	レポート批判	足ける	部屋掃除	個人情報漏れ	内容盗用	テーマ変え
FALSE	0	1832	4122	5038	3664	2290	2748	1832	2290
TRUE	1832	0	0	0	0	0	0	0	0

図 2. 各ハラスメントタイプの統計

次は学生を男女に分けてグループ別に回帰分析を行う。回帰分析の結果だけが足りない
ので、最後は Welch Two Sample t-test を使い、男女各グループの平均値の差と係数の差
が有意であるかどうかを検証する。

Results

回帰分析の結果が図 3 に示されている。

	女	男
(Intercept)	3.31 *** (0.08)	2.71 *** (0.09)
typeバカ扱い	1.37 *** (0.11)	1.62 *** (0.12)
type推薦書拒絶	0.43 *** (0.09)	1.09 *** (0.10)
typeレポート批判	0.49 *** (0.09)	0.78 *** (0.10)
type足ける	1.64 *** (0.10)	2.18 *** (0.10)
type部屋掃除	0.82 *** (0.11)	1.08 *** (0.12)
type個人情報漏れ	1.25 *** (0.10)	1.73 *** (0.11)
type内容盗用	1.40 *** (0.11)	1.90 *** (0.13)
typeテーマ変え	0.90 *** (0.10)	1.34 *** (0.11)
R ²	0.20	0.23
Adj. R ²	0.20	0.23
Num. obs.	2475	2286

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

図 3. 男女 2 グループの回帰分析結果

結果からみると、女性の不快感が男性を上回っている。どちらも統計的に有意であるが、両者の間の差が有意であるというわけではない。差を検証する必要がある。図4は差を検証する結果である。

```
Welch Two Sample t-test

data:  unpleasure.n by sex
t = 5.7925, df = 5646.3, p-value = 7.31e-09
alternative hypothesis: true difference in means between group 1 女 and group 2 男 is
not equal to 0
95 percent confidence interval:
 0.1144488 0.2315459
sample estimates:
mean in group 1 女 mean in group 2 男
      4.202262      4.029265
```

図4. Welch Two Sample t-test を使った t 検定結果

結果からみると、男女の総体不快感平均値が顕著に違うとはいえない。では各アカハラタイプの影響に男女の差があるか。

	differences of coefficients	z.values	p.values	sig
(Intercept)	0.595	5.064	0.000	***
typeバカ扱い	-0.251	-1.514	0.130	
type推薦書拒絶	-0.657	-4.775	0.000	***
typeレポート批判	-0.290	-2.143	0.032	*
type足ける	-0.544	-3.856	0.000	***
type部屋掃除	-0.261	-1.622	0.105	
type個人情報漏れ	-0.484	-3.285	0.001	**
type内容盗用	-0.505	-3.014	0.003	**
typeテーマ変え	-0.441	-2.867	0.004	**

図5. 男女の回帰係数の差の検定

検定結果から見ると、推薦書拒絶、足蹴る、個人情報漏れ、内容盗用、テーマ変えなどの場合において、男女間に顕著な差がある。

Discussion

全体的にみると、アカハラはジェンダー要素をなくした場だと見なされることができであろう。しかし具体的な場において、ジェンダーの要素が出てきた。女性が男性より、アカハラがない時も比較的高い不快感を抱えている。可能な解説の一つとして、ハラスメントが発生する時、女性が事前的に準備があるため、不快感の変化が男性のように激しいというわけではない。女性が日常的に男性より高い不安感を抱えていることは、一理あると考えられる。こういう心的構えに関して、引き続き研究する必要がある。

Reference

- 御輿久美子・赤松万里，2004，科学研究成果報告書:平成 14 年~平成 16 年 基盤研究 (2)(1)課題番号:14594015 アカデミック・ハラスメントの実態調査研究
- 村上英吾，2003，研究者養成過程における権力性と性差 技術マネジメント研究 F 14526
- 小田部貴子・丸野俊一・舩田亮太，2010，アカデミック・ハラスメントの生起実態とその背景要因の分析 九州大学心理学研究. 11、 pp.45-56、 2010-03-3.
- 湯川やよい，2006，「「アカハラ」概念の再考-問題理解の共有と議論の基盤づくりに向けて-」『現代社会と大学評価』，第 2 号，pp.66-95.

湯川やよい，2014，『アカデミック・ハラスメントの社会学——学生の問題経験と「領域交差」実践』ハーベスト社.

湯川やよい，2011，アカデミック・ハラスメントの形成過程——医療系女性大学院生のライフストーリーから——『教育社会学研究』，第 88 集，pp.163-184.

上野千鶴子，1997，「「アカデミック・ハラスメント」って何?」上野千鶴子編『キャンパス性差別事情 ストップ・ザ・アカハラ』三省堂、pp.1-10.

江原由美子，1997，「〈アカハラ〉を解決困難にする大学社会の構造体質」上野千鶴子編『キャンパス性差別事情 ストップ・ザ・アカハラ』三省堂，pp.13-28.

菊地夏野，2002，「キャンパス・セクシュアル・ハラスメントの困難—ホモソーシャルな大学」『女性学年報』，23 号，pp.71-89.

大理奈穂子・上田智子・辻智子・田宮遊子・中島ゆり，2006，「研究者の社会化と暴力—大学におけるハラスメント—」『F-GENS シンジャーナル』，no.5，pp.364-369.

加害者の立場・知名度とアカハラ不快感の関連

林小都音

1. はじめに

1.1. 背景

近年、大学において生じるハラスメント行為である「アカデミック・ハラスメント（以下「アカハラ」）」の問題性が叫ばれるようになっている。とりわけ報じられることが多いのは、「教授から学生」へのアカハラである。2023 年 12 月、京都大学大学院工学研究科において 60 代の教授が学生に対し人格を否定するような発言などを行ったとして 2 ヶ月の懲戒処分を受けたことは記憶に新しい。しかしこのように議論にあがるものはほんの一部であると考えられる。その理由は、アカハラを訴えることの心理的負担など多岐にわたるだろうが、ここでは教授からのアカハラをアカハラとして認識できていない可能性を提唱したい。とりわけ、被害者である学生が加害者である教授に対して大学の内部の人間であることを意識することで、「この大学に所属している以上仕方ない」などとアカハラの被害を矮小化する傾向があるのではないかと考えられる。

1.2. 仮説

以上の背景より、本レポートでは以下の仮説を立てる。

- ① 加害者の立場が被害者にとって近いほどアカハラの不快感が低くなる。
- ② 加害者の知名度が高いほどアカハラの不快感が低くなる。

2. 方法

2.1. データの処理

分析に使用するデータは、2023 年度社会学実習の授業で実施した「アカハラ調査 231106」である。本調査は大学に所属する者を対象としているため、有効回答数は「大学に所属していない」と回答した者を除いた 454 である。

このデータを、不快度を従属変数とするロングフォーマットに変換し、それぞれの項目について回答してもらった「とても不快である」「不快である」「どちらかといえば不快」「どちらかといえば不快ではない」「不快ではない」「全く不快ではない」について、それぞれ 5～0 の数値を与えた。これにより、不快度に関して数値による評価を可能とした。

2.2. 質問項目

アカハラの不快度を測る質問項目は、

- ・ 加害者の知名度（TV で有名な/優れた研究業績のある/無名の）
- ・ 加害者の年齢（37 歳/52 歳）
- ・ 被害者から見た加害者の立場（教授/非常勤講師）
- ・ 加害者の性別（男、女）
- ・ ハラスメントの内容（就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった/奨学金の推薦書を書いてもらえなかった/態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた/異性の好みを聞かれた/「お前はバカだ」と言われた/自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた/自分の書いたレポートを大声で批判された/自分の書いたレポートを淡々と批判された/自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された/無休でその先生の部屋を掃除するように命じられた/お尻を触られた/卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理矢理変えさせられた/研究の相談をしたが無視された）

の 5 つを変数とし、 $3 \times 2 \times 2 \times 2 \times 13$ 次元で作成した。なお、以下では加害者の知名度に関する文言を「TV 有名/優れた業績/無名の」、加害者の立場に関する文言を「教授/非常勤」と省略して表記する。

2.3. 分析方法

この 5 つの変数から、加害者の①立場と②知名度に着目して分析を行った。具体的には、加害者の立場に関して「教授」を被害者にとって近しい（大学の内部に所属する）もの、

「非常勤講師」を遠い（大学の外部の者である）ものとして、また加害者の知名度に関して「TV 有名/優れた業績」を高いもの、「無名の」を低いものとして扱った。

3.分析結果

3.1. 平均不快感と被害者から見た加害者の立場

アカハラ加害者の立場によって分類し、平均不快感を示したのが図3である。

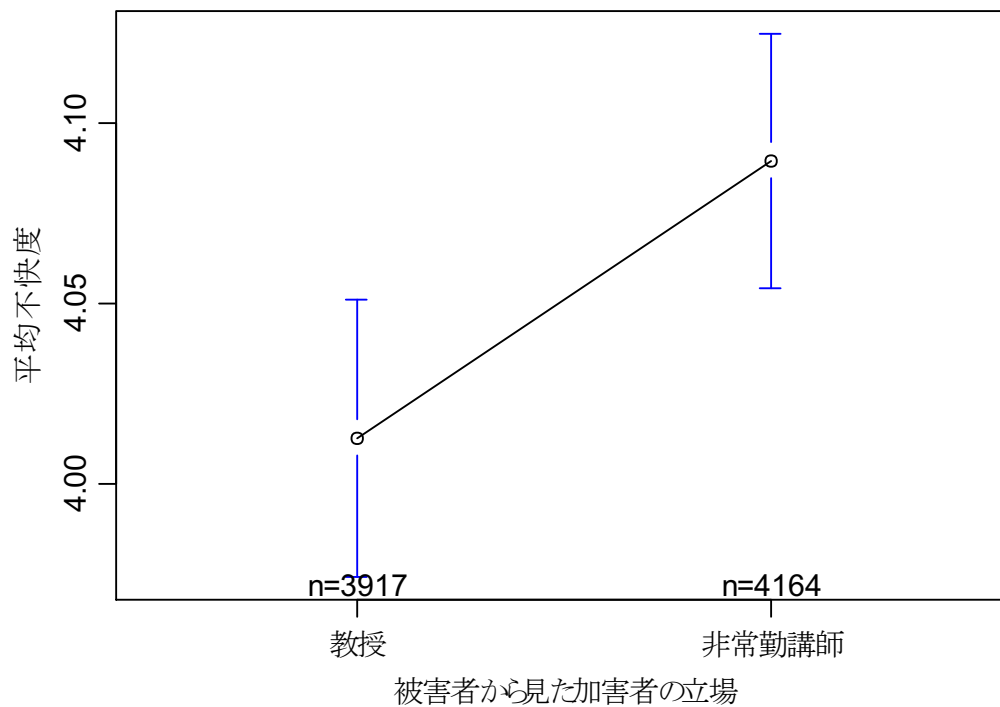


図3：被害者から見た加害者の立場と平均不快感

非常勤講師が加害者の場合よりも、教授が加害者の場合の方が平均不快感が低かった。

これについて回帰分析を行ったところ、その差は有意であった。

3.2. 平均不快感と加害者の知名度

アカハラ加害者の知名度を質問項目の通り分類し平均不快感を比較したものが図 1、加害者の知名度を分析方法にならい「高い/低い」に分類し平均不快感を比較したものが図 2 である。

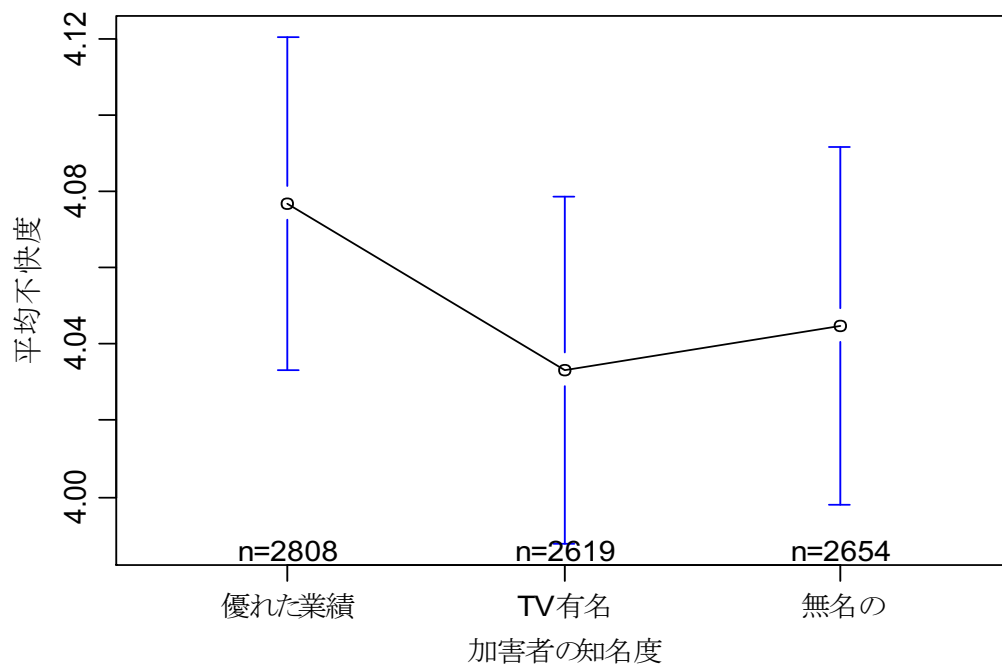


図 1：加害者の知名度と平均不快感

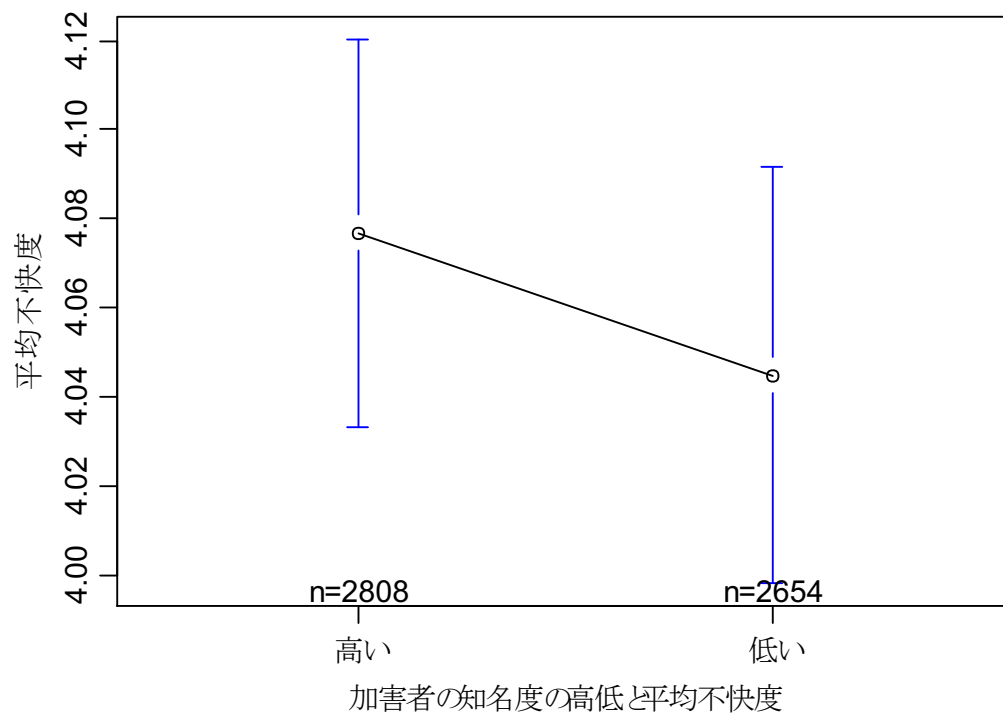


図 2：加害者の知名度の高低と平均不快感

加害者の知名度が高い方が平均不快感は高くなったが、図 1、図 2 について平均値の差の検定と回帰分析を行ったところ、その差は有意でなかった。

3.3. 交互作用効果について

表 1 について、Model 1 が主効果のみの、Model 2 が両者の交互作用効果に関する回帰分析の結果である。

表 1：主効果・交互作用効果に関する回帰分析の結果

	Model 1	Model 2
(Intercept)	4.04 *** (0.03)	4.10 *** (0.03)
status 非常勤講師	0.08 ** (0.03)	-0.05 (0.05)
timeidoTV 有名	-0.04 (0.03)	-0.01 (0.05)
timeido 無名の	-0.03 (0.03)	-0.25 *** (0.05)
status 非常勤講師:timeidoTV 有名		-0.06 (0.06)
status 非常勤講師:timeido 無名の		0.44 *** (0.06)
R ²	0.00	0.01
Adj. R ²	0.00	0.01
Num. obs.	8081	8081

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

以上より、加害者が「無名」であることに関して、交互作用効果が確認できた。

4.結論

以上の分析結果より、②加害者が無名である場合にのみ、①加害者の立場が教授である場合よりも非常勤講師である場合の方がアカハラの不快感が有意に低くなることが実証された。よって仮説は一部支持された。

このような結果となった理由として、(1)各指標に対する回答者の認識、(2)回答学生の属性の影響が考えられる。

(1)について、まずアカハラ加害者の知名度が高いものとして今回用いた「優れた研究業績がある/TV で有名である」という 2 つの指標について、回答者があまり大きな違いを見いだせなかった可能性がある。この両者において、基本的に学生はその加害者本人について以前から知っているという状況にあると考えられるが、その場合加害者の立場はあまり意識されず、不快感の差が大きく出なかったと考えられる。また、本調査において京都大学の学生は回答者全体の 38% を占めていたが、彼らは知名度の高い研究者と接する機会が多く、自身も他大学の学生より研究者の名前を多く知っている可能性がある。そのため、このように加害者を以前から知っているという状況の方が想定しやすかった回答者が多かったという、(2)の理由が絡んでいる可能性も考えられる。

反対に加害者の知名度が低い（無名である）場合、学生は加害者本人を以前からは知らないという状況にあるだろう。その場合、加害者の立場に着目し、違いを見いだして評価することが考えられる。例えば、教授であれば「知らなかったけれどこの大学の内部の人間である以上これからは自分の大学生活に関係がありそうだ」など、アカハラの被害を矮小化することで事を荒立てないように努める。一方、非常勤講師であれば「今期以外では自分の生活には関係がなさそうだ、だから何をしてもいいと思われているのだろうか」などと感じ、不快感が高まるのではないかと考えられる。

また(2)について、今回の調査の回答者のうち大学 3 年生、4 年生、大学院生はそれぞれ全体の 35%、17%、31%（小数第一位以下は四捨五入）であり計 83% を占めていた。大学に所属している期間が長いほど大学内部で起こる事象に対して抵抗を感じず、「仕方ない」などと諦念を交えて受け入れる傾向が考えられる。加害者の立場に関して有意な差が見られた背景には、大学に 3 年以上所属する回答者が大学内外の区別をはっきりと行っている可能性もある。

本調査に用いたアンケートの末尾で設問に対する意見を募ったところ、「(特に「異性の好みを聞かれた」という被害内容について) 加害者との親密度によって不快感が異なるように思った」「それぞれの教員像が想像しづらかった」など多くの貴重な意見をいただいた。先述の反省点とこれらの意見を加味し、アカハラについてさらに正確な調査研究を進めていきたい。

5.文献

- ・星野豊,2020,「大学における研究指導とアカデミックハラスメントの成否」,『筑波法政』83 : 49-61.
- ・北中千里,横山美栄子,2017,『アカデミック・ハラスメントの解決 大学の常識を問い直す』 寿郎社.
- ・三成美保・笹沼朋子・立石直子・谷田川知恵, 2019, 『ジェンダー法学入門第 3 版』
- ・村上英吾,2003,「研究者養成過程における権力性と性差別」,『技術マネジメント研究 = Yokohama journal of technology management studies』 2 : 14-26.
- ・上野千鶴子編,1997,『キャンパス性差別事情 : ストップ・ザ・アカハラ』 三省堂.
- ・湯川やよい,2014,『アカデミック・ハラスメントの社会学 学生の問題経験と「領域交差」実践』 ハーベスト社.

調査票

大学教員の不快な行いに関する調査

この調査は大学生（大学院生、聴講生、研究生、交換留学生なども含む）を対象として、京都大学文学部の社会学実習という授業（担当教員：太郎丸博）で行っているものです。データは教育・研究のためにのみ用い、個人情報が流出することはありません。

* 必須の質問です

1。 Q1 あなたの性別は？

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 女
- ☐ 2 男
- ☐ 3 その他

2。 Q2 あなたの学年等は？ *

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1年生
- ☐ 2年生
- ☐ 3年生
- ☐ 4年生
- ☐ 大学院生
- ☐ 研究生、聴講生、交換留学生など
- ☐ 大学には在籍していない

ハラスメントへのサポート

3. Q3 もしもあなたがハラスメント被害にあったとしたら、次にあげる人たちの *
中に、あなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	いると 思う	たぶん いる	どちら ともい えない	たぶん いない	いない と思う
1 あなたの家 族の中	☐	☐	☐	☐	☐
2 あなたの友 人や恋人の中	☐	☐	☐	☐	☐
大学の 先生や 相談窓 口の人 の中	☐	☐	☐	☐	☐
その他 の知り 合い等 の中	☐	☐	☐	☐	☐

誕生月

4. あなたは何月生まれですか。以下のうちあてはまるものを選んでください。 *

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1月、または、7月生まれ 質問 5 にスキップします
- ☐ 2月、または、8月生まれ 質問 21 にスキップします
- ☐ 3月、または、9月生まれ 質問 37 にスキップします
- ☐ 4月、または、10月生まれ 質問 53 にスキップします
- ☐ 5月、または、11月生まれ 質問 69 にスキップします
- ☐ 6月、または、12月生まれ 質問 85 にスキップします

A あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

5. a1 無名の52歳の教授（女）に、「お前はバカだ」と言われた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

6. a2 無名の37歳の教授（男）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 7。 a3 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 8。 a4 無名の37歳の教授（男）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 9。 a5 無名の37歳の非常勤講師（女）に、「お前はバカだ」と言われた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

10. a6 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（女）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

11. a7 TVで有名な52歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 12。 a8 TVで有名な37歳の教授（女）に、 就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 13。 a9 無名の37歳の教授（女）に、 態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 14。 a10 TVで有名な52歳の非常勤講師（男）に、 「お前はバカだ」と言われた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 17。 a13 TVで有名な37歳の非常勤講師（女）に、 奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 18。 a14 優れた研究業績のある52歳の教授（男）に、 自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

15. a11 TVで有名な37歳の教授（男）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

16. a12 無名の37歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 17。 a13 TVで有名な37歳の非常勤講師（女）に、 奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 18。 a14 優れた研究業績のある52歳の教授（男）に、 自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 19。 a15 無名の52歳の非常勤講師（女）に、 無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 20。 a16 TVで有名な52歳の非常勤講師（女）に、 態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

質問101 にスキップします

B あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

21. b1 無名の37歳の教授（男）に、 無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

22. b2 TVで有名な37歳の教授（男）に、 態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

23. b3 TVで有名な52歳の教授（女）に、 お尻を触られた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

24. b4 無名の52歳の教授（女）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

25. b5 無名の52歳の非常勤講師（男）に、お尻を触られた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

26. b6 優れた研究業績のある37歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

27。 b7 TVで有名な37歳の非常勤講師（女）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

28。 b8 無名の37歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

29。 b9 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（女）に、お尻を触られた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

30. b10 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（男）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

31. b11 優れた研究業績のある37歳の教授（女）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 32。 b12 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（男）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 33。 b13 TVで有名な37歳の非常勤講師（男）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

34. b14 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
☐ 2 不快である
☐ 3 どちらかといえば不快
☐ 4 どちらかといえば不快ではない
☐ 5 不快ではない
☐ 6 まったく不快ではない

35. b15 無名の52歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
☐ 2 不快である
☐ 3 どちらかといえば不快
☐ 4 どちらかといえば不快ではない
☐ 5 不快ではない
☐ 6 まったく不快ではない

36. b16 TVで有名な52歳の教授（女）に、研究の相談をしたが無視された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
☐ 2 不快である
☐ 3 どちらかといえば不快
☐ 4 どちらかといえば不快ではない
☐ 5 不快ではない
☐ 6 まったく不快ではない

C あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

37. c1 無名の37歳の教授（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

38. c2 無名の52歳の教授（男）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 39。 c3 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（女）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 40。 c4 無名の52歳の教授（女）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 41。 c5 優れた研究業績のある37歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 42。 c6 無名の52歳の非常勤講師（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 43。 c7 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（女）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 44。 c8 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（男）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 45。 c9 無名の37歳の教授（女）に、お尻を触られた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 46。 c10 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（男）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 47。 c11 TVで有名な52歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 48。 c12 TVで有名な37歳の非常勤講師（男）に、研究の相談をしたが無視された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 49。 c13 優れた研究業績のある52歳の教授（男）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 50。 c14 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（女）に、研究の相談をしたが無視された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 51。 c15 無名の52歳の教授（男）に、研究の相談をしたが無視された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 52。 c16 TVで有名な37歳の教授（女）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

質問101 にスキップします

D あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

- 53。 d1 TVで有名な52歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 54。 d2 無名の52歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 55。 d3 TVで有名な52歳の教授（男）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 56。 d4 優れた研究業績のある37歳の教授（男）に、研究の相談をしたが無視された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 57。 d5 TVで有名な37歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 58。 d6 優れた研究業績のある37歳の教授（女）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 59。 d7 TVで有名な52歳の教授（女）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

60. d8 TVで有名な52歳の非常勤講師（男）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

61. d9 TVで有名な37歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

62. d10 無名の37歳の非常勤講師（男）に、「お前はバカだ」と言われた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

63。 d11 無名の37歳の教授（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

64。 d12 無名の52歳の非常勤講師（女）に、お尻を触られた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

65。 d13 優れた研究業績のある37歳の教授（男）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 66。 d14 TVで有名な52歳の非常勤講師（男）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 67。 d15 TVで有名な52歳の教授（女）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

68. d16 優れた研究業績のある52歳の教授（女）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

質問101 にスキップします

E あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

69. e1 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（男）に、研究の相談をしたが無視された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 70。 e2 優れた研究業績のある52歳の教授（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 71。 e3 無名の52歳の教授（男）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 72。 e4 無名の37歳の非常勤講師（女）に、研究の相談をしたが無視された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 73。 e5 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 74。 e6 TVで有名な37歳の教授（女）に、「お前はバカだ」と言われた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 75。 e7 無名の37歳の非常勤講師（女）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

76。 e8 TVで有名な52歳の教授（男）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

77。 e9 TVで有名な37歳の非常勤講師（男）に、お尻を触られた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

78。 e10 無名の52歳の非常勤講師（男）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 79。 e11 無名の37歳の教授（女）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 80。 e12 TVで有名な37歳の非常勤講師（男）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 81。 e13 TVで有名な52歳の教授（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 82。 e14 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 83。 e15 優れた研究業績のある52歳の教授（女）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 84。 e16 優れた研究業績のある37歳の教授（女）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

質問 101 にスキップします

F あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の6段階で評価してください。

85. f1 無名の37歳の非常勤講師（男）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

86. f2 TVで有名な52歳の教授（女）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

87. f3 優れた研究業績のある37歳の教授（女）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

88. f4 優れた研究業績のある37歳の教授（男）に、「お前はバカだ」と言われた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

89. f5 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（女）に、異性の好みを聞かれた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 90。 f6 無名の37歳の非常勤講師（女）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 91。 f7 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（女）に、「お前はバカだ」と言われた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 92。 f8 TVで有名な52歳の非常勤講師（女）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 93。 f9 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（男）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 94。 f10 TVで有名な37歳の教授（男）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 95。 f11 無名の52歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 96。 f12 優れた研究業績のある52歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 97。 f13 無名の52歳の非常勤講師（女）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 98。 f14 優れた研究業績のある52歳の教授（男）に、お尻を触られた。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

- 99。 f15 TVで有名な37歳の非常勤講師（男）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

100。 f16 TVで有名な37歳の教授（男）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 1 とても不快である
- ☐ 2 不快である
- ☐ 3 どちらかといえば不快
- ☐ 4 どちらかといえば不快ではない
- ☐ 5 不快ではない
- ☐ 6 まったく不快ではない

あなたの普段の学校生活について教えてください。

101。 Q5 あなたはふだんの程度大学に行っていますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 平日はほとんど毎日行っている
- ☐ 週に3, 4日は行っている
- ☐ 週に1, 2日行っている
- ☐ ほとんど行っていない

102。 q6 あなたは普段、履修している授業に出席していますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ ほぼすべての授業にほぼ毎回出席している
- ☐ あまり出席していない授業もあるが、半分以上の授業にはほとんど出席している
- ☐ 出席している授業は一部だけで、半分以上の授業にはほとんど出席していない
- ☐ ほとんどの授業に出席していない

103. q7 あなたは大学での研究や勉強に興味を持てますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 興味を持てる
- ☐ どちらかと言えば興味を持てる
- ☐ どちらとも言えない
- ☐ どちらかと言えば興味持てない
- ☐ 興味持てない

104. Q8 単位は順調に取れていますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 単位は順調にとれている
- ☐ 少し取れていない単位もあるが、おおむね順調に取れている
- ☐ とれていない単位が結構ある
- ☐ ほとんど単位はとれていない
- ☐ 単位をとる必要がない（聴講生、博士課程の院生等の中には単位の要らない人あり）

105. Q9 あなたは将来、研究職（大学教員や研究所の研究員など）に就きたいですか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 研究職に就きたい
- ☐ まだ決めていないが、研究職にも興味がある
- ☐ 研究職に就く気はない
- ☐ すでに研究職に就いている、内定している

感想と所属大学

106。 Q10 あなたの通っている大学を教えてください。

1 つだけマークしてください。

☐ 京都大学

☐ その他: _____

107。 Q11 回答中で答えにくかった点や感想などあれば自由に書いてください。

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

単純集計表

Q1.あなたの性別は？

	Freq	Valid (%)	Total (%)
女	240	51.5	51.17
男	218	46.78	46.48
その他	8	1.72	1.71
<NA>	3		0.64

Q2.あなたの学年等は？

	Freq	Valid (%)	Total (%)
1年生	31	6.61	6.61
2年生	33	7.04	7.04
3年生	159	33.9	33.9
4年生	76	16.2	16.2
研究生、聴講生、 交換留学生など	15	3.2	3.2
大学には在籍して いない	15	3.2	3.2
大学院生	140	29.85	29.85
<NA>	0		0

Q3.もしもあなたがハラスメント被害にあったとしたら、次にあげる人たちの中に、あなたの話を親身に聞いたり、援助したりしてくれる人がいると思いますか？

1.あなたの家族の中

	Freq	Valid (%)	Total (%)
いないと思う	18	3.96	3.84
いると思う	307	67.62	65.46
たぶんいない	34	7.49	7.25
たぶんいる	60	13.22	12.79
どちらともいえない	35	7.71	7.46
<NA>	15		3.2

2.あなたの友人や恋人の中

	Freq	Valid (%)	Total (%)
いないと思う	8	1.76	1.71
いると思う	340	74.89	72.49
たぶんいない	10	2.2	2.13
たぶんいる	84	18.5	17.91
どちらともいえない	12	2.64	2.56
<NA>	15		3.2

3.大学の先生や相談窓口の人の中

	Freq	Valid (%)	Total (%)
いないと思う	28	6.17	5.97
いると思う	127	27.97	27.08
たぶんいない	54	11.89	11.51
たぶんいる	146	32.16	31.13
どちらともいえない	99	21.81	21.11
<NA>	15		3.2

4.その他の知り合い等の中

	Freq	Valid (%)	Total (%)
いないと思う	44	9.69	9.38
いると思う	107	23.57	22.81
たぶんいない	65	14.32	13.86
たぶんいる	139	30.62	29.64
どちらともいえない	99	21.81	21.11
<NA>	15		3.2

Q4.あなたは何月生まれですか.以下のうちあてはまるものを選んでください.

	Freq	Valid (%)	Total (%)
1月、または、7月 生まれ	81	17.84	17.27
2月、または、8月 生まれ	53	11.67	11.3
3月、または、9月 生まれ	76	16.74	16.2
4月、または、10 月生まれ	89	19.6	18.98
5月、または、11 月生まれ	82	18.06	17.48
6月、または、12 月生まれ	73	16.08	15.57
<NA>	15		3.2

a1.無名の 52 歳の教授（女）に、「お前はバカだ」と言われた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	50	62.5	10.66
不快である	24	30	5.12
どちらかといえば 不快	5	6.25	1.07
どちらかといえば 不快ではない	1	1.25	0.21
<NA>	389		82.94

a2.無名の 37 歳の教授（男）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	21	25.93	4.48
不快である	25	30.86	5.33
どちらかといえば 不快	23	28.4	4.9
どちらかといえば 不快ではない	8	9.88	1.71
不快ではない	2	2.47	0.43
まったく不快では ない	2	2.47	0.43
<NA>	388		82.73

a3 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	77	95.06	16.42
不快である	3	3.7	0.64
どちらかといえば 不快	1	1.23	0.21
<NA>	388		82.73

a4 無名の 37 歳の教授（男）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	28	34.57	5.97
不快である	15	18.52	3.2
どちらかといえば 不快	13	16.05	2.77
どちらかといえば 不快ではない	14	17.28	2.99
不快ではない	6	7.41	1.28
まったく不快では ない	5	6.17	1.07
<NA>	388		82.73

a5 無名の 37 歳の非常勤講師（女）に、「お前はバカだ」と言われた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	46	56.79	9.81
不快である	29	35.8	6.18
どちらかといえば 不快	4	4.94	0.85
どちらかといえば 不快ではない	2	2.47	0.43
<NA>	388		82.73

a6 優れた研究業績のある37歳の非常勤講師（女）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	47	58.75	10.02
不快である	23	28.75	4.9
どちらかといえば不快	9	11.25	1.92
どちらかといえば不快ではない	1	1.25	0.21
<NA>	389		82.94

a7 TV で有名な52歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	46	56.79	9.81
不快である	20	24.69	4.26
どちらかといえば不快	14	17.28	2.99
どちらかといえば不快ではない	1	1.23	0.21
<NA>	388		82.73

a8 TV で有名な37歳の教授（女）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	28	34.57	5.97
不快である	25	30.86	5.33
どちらかといえば不快	21	25.93	4.48
どちらかといえば不快ではない	1	1.23	0.21
不快ではない	3	3.7	0.64
まったく不快ではない	3	3.7	0.64
<NA>	388		82.73

a9 無名の37歳の教授（女）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	73	90.12	15.57
不快である	6	7.41	1.28
どちらかといえば不快	2	2.47	0.43
<NA>	388		82.73

a10 TV で有名な52歳の非常勤講師（男）に、「お前はバカだ」と言われた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	49	60.49	10.45
不快である	26	32.1	5.54
どちらかといえば不快	4	4.94	0.85
どちらかといえば不快ではない	2	2.47	0.43
<NA>	388		82.73

a11 TV で有名な37歳の教授（男）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	46	56.79	9.81
不快である	21	25.93	4.48
どちらかといえば不快	13	16.05	2.77
どちらかといえば不快ではない	1	1.23	0.21
<NA>	388		82.73

a12 無名の 37 歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	49	60.49	10.45
不快である	21	25.93	4.48
どちらかといえば不快	10	12.35	2.13
どちらかといえば不快ではない	1	1.23	0.21
<NA>	388		82.73

a13 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（女）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	21	25.93	4.48
不快である	25	30.86	5.33
どちらかといえば不快	23	28.4	4.9
どちらかといえば不快ではない	7	8.64	1.49
不快ではない	3	3.7	0.64
まったく不快ではない	2	2.47	0.43
<NA>	388		82.73

a14 優れた研究業績のある 52 歳の教授（男）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	61	76.25	13.01
不快である	14	17.5	2.99
どちらかといえば不快	3	3.75	0.64
どちらかといえば不快ではない	1	1.25	0.21
不快ではない	1	1.25	0.21
<NA>	389		82.94

a15 無名の 52 歳の非常勤講師（女）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	33	41.25	7.04
不快である	21	26.25	4.48
どちらかといえば不快	15	18.75	3.2
どちらかといえば不快ではない	8	10	1.71
不快ではない	2	2.5	0.43
まったく不快ではない	1	1.25	0.21
<NA>	389		82.94

a16 TV で有名な 52 歳の非常勤講師（女）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	73	91.25	15.57
不快である	5	6.25	1.07
どちらかといえば不快	2	2.5	0.43
<NA>	389		82.94

B あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

b1 無名の 37 歳の教授（男）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	26	49.06	5.54
不快である	12	22.64	2.56
どちらかといえば不快	9	16.98	1.92
どちらかといえば不快ではない	5	9.43	1.07
不快ではない	1	1.89	0.21
<NA>	416		88.7

b2 TV で有名な 37 歳の教授（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	50	94.34	10.66
不快である	1	1.89	0.21
どちらかといえば不快	2	3.77	0.43
<NA>	416		88.7

b3 TV で有名な 52 歳の教授（女）に、お尻を触られた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	35	66.04	7.46
不快である	14	26.42	2.99
どちらかといえば不快	1	1.89	0.21
どちらかといえば不快ではない	1	1.89	0.21
不快ではない	1	1.89	0.21
まったく不快ではない	1	1.89	0.21
<NA>	416		88.7

b4 無名の 52 歳の教授（女）に、自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	33	62.26	7.04
不快である	13	24.53	2.77
どちらかといえば不快	7	13.21	1.49
<NA>	416		88.7

b5 無名の 52 歳の非常勤講師（男）に、お尻を触られた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	44	83.02	9.38
不快である	7	13.21	1.49
どちらかといえば不快	2	3.77	0.43
<NA>	416		88.7

b6 優れた研究業績のある 37 歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	32	60.38	6.82
不快である	15	28.3	3.2
どちらかといえば不快	6	11.32	1.28
<NA>	416		88.7

b7 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（女）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	9	16.98	1.92
不快である	13	24.53	2.77
どちらかといえば不快	8	15.09	1.71
どちらかといえば不快ではない	11	20.75	2.35
不快ではない	6	11.32	1.28
まったく不快ではない	6	11.32	1.28
<NA>	416		88.7

b8 無名の 37 歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	9	16.98	1.92
不快である	11	20.75	2.35
どちらかといえば不快	13	24.53	2.77
どちらかといえば不快ではない	14	26.42	2.99
不快ではない	3	5.66	0.64
まったく不快ではない	3	5.66	0.64
<NA>	416		88.7

b9 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（女）に、お尻を触られた

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	32	61.54	6.82
不快である	12	23.08	2.56
どちらかといえば不快	4	7.69	0.85
どちらかといえば不快ではない	2	3.85	0.43
まったく不快ではない	2	3.85	0.43
<NA>	417		88.91

b10 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（男）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	13	24.53	2.77
不快である	13	24.53	2.77
どちらかといえば不快	7	13.21	1.49
どちらかといえば不快ではない	10	18.87	2.13
不快ではない	5	9.43	1.07
まったく不快ではない	5	9.43	1.07
<NA>	416		88.7

11 優れた研究業績のある 37 歳の教授（女）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	17	32.08	3.62
不快である	12	22.64	2.56
どちらかといえば不快	17	32.08	3.62
どちらかといえば不快ではない	5	9.43	1.07
不快ではない	1	1.89	0.21
まったく不快ではない	1	1.89	0.21
<NA>	416		88.7

b12 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（男）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	26	49.06	5.54
不快である	10	18.87	2.13
どちらかといえば不快	11	20.75	2.35
どちらかといえば不快ではない	5	9.43	1.07
不快ではない	1	1.89	0.21
<NA>	416		88.7

b13 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（男）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	22	41.51	4.69
不快である	19	35.85	4.05
どちらかといえば不快	9	16.98	1.92
どちらかといえば不快ではない	3	5.66	0.64
<NA>	416		88.7

b14 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	38	71.7	8.1
不快である	10	18.87	2.13
どちらかといえば不快	3	5.66	0.64
どちらかといえば不快ではない	1	1.89	0.21
不快ではない	1	1.89	0.21
<NA>	416		88.7

b15 無名の 52 歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	35	66.04	7.46
不快である	14	26.42	2.99
どちらかといえば不快	4	7.55	0.85
<NA>	416		88.7

b16 TV で有名な 52 歳の教授（女）に、研究の相談をしたが無視された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	22	41.51	4.69
不快である	18	33.96	3.84
どちらかといえば不快	13	24.53	2.77
<NA>	416		88.7

C あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

c1 無名の 37 歳の教授（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	21	16.41	4.48
不快である	22	17.19	4.69
どちらかといえば不快	37	28.91	7.89
どちらかといえば不快ではない	30	23.44	6.4
不快ではない	9	7.03	1.92
まったく不快ではない	9	7.03	1.92
<NA>	341		72.71

c2 無名の 52 歳の教授（男）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	41	32.28	8.74
不快である	41	32.28	8.74
どちらかといえば不快	33	25.98	7.04
どちらかといえば不快ではない	9	7.09	1.92
不快ではない	2	1.57	0.43
まったく不快ではない	1	0.79	0.21
<NA>	342		72.92

c5 優れた研究業績のある 37 歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	19	14.84	4.05
不快である	20	15.62	4.26
どちらかといえば不快	42	32.81	8.96
どちらかといえば不快ではない	25	19.53	5.33
不快ではない	14	10.94	2.99
まったく不快ではない	8	6.25	1.71
<NA>	341		72.71

c3 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（女）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	118	92.91	25.16
不快である	7	5.51	1.49
どちらかといえば不快	2	1.57	0.43
<NA>	342		72.92

c6 無名の 52 歳の非常勤講師（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	120	93.75	25.59
不快である	8	6.25	1.71
<NA>	341		72.71

c4 無名の 52 歳の教授（女）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	24	18.75	5.12
不快である	24	18.75	5.12
どちらかといえば不快	29	22.66	6.18
どちらかといえば不快ではない	22	17.19	4.69
不快ではない	19	14.84	4.05
まったく不快ではない	10	7.81	2.13
<NA>	341		72.71

c7 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（女）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	46	35.94	9.81
不快である	44	34.38	9.38
どちらかといえば不快	30	23.44	6.4
どちらかといえば不快ではない	4	3.12	0.85
不快ではない	4	3.12	0.85
<NA>	341		72.71

c8 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（男）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	39	30.47	8.32
不快である	35	27.34	7.46
どちらかといえば不快	36	28.12	7.68
どちらかといえば不快ではない	13	10.16	2.77
不快ではない	5	3.91	1.07
<NA>	341		72.71

c9 無名の 37 歳の教授（女）に、お尻を触られた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	78	60.94	16.63
不快である	29	22.66	6.18
どちらかといえば不快	10	7.81	2.13
どちらかといえば不快ではない	6	4.69	1.28
不快ではない	2	1.56	0.43
まったく不快ではない	3	2.34	0.64
<NA>	341		72.71

c10 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（男）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	33	25.78	7.04
不快である	41	32.03	8.74
どちらかといえば不快	39	30.47	8.32
どちらかといえば不快ではない	10	7.81	2.13
不快ではない	5	3.91	1.07
<NA>	341		72.71

c11 TV で有名な 52 歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	21	16.41	4.48
不快である	24	18.75	5.12
どちらかといえば不快	44	34.38	9.38
どちらかといえば不快ではない	22	17.19	4.69
不快ではない	9	7.03	1.92
まったく不快ではない	8	6.25	1.71
<NA>	341		72.71

c12 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（男）に、研究の相談をしたが無視された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	33	25.78	7.04
不快である	53	41.41	11.3
どちらかといえば不快	31	24.22	6.61
どちらかといえば不快ではない	7	5.47	1.49
不快ではない	4	3.12	0.85
<NA>	341		72.71

c13 優れた研究業績のある 52 歳の教授（男）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	79	62.2	16.84
不快である	34	26.77	7.25
どちらかといえば不快	11	8.66	2.35
どちらかといえば不快ではない	2	1.57	0.43
不快ではない	1	0.79	0.21
<NA>	342		72.92

c14 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（女）に、研究の相談をしたが無視された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	37	29.13	7.89
不快である	48	37.8	10.23
どちらかといえば不快	34	26.77	7.25
どちらかといえば不快ではない	4	3.15	0.85
不快ではない	3	2.36	0.64
まったく不快ではない	1	0.79	0.21
<NA>	342		72.92

c15 無名の 52 歳の教授（男）に、研究の相談をしたが無視された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	39	30.47	8.32
不快である	51	39.84	10.87
どちらかといえば不快	28	21.88	5.97
どちらかといえば不快ではない	6	4.69	1.28
不快ではない	3	2.34	0.64
まったく不快ではない	1	0.78	0.21
<NA>	341		72.71

c16 TV で有名な 37 歳の教授（女）に、自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	80	62.5	17.06
不快である	36	28.12	7.68
どちらかといえば不快	9	7.03	1.92
どちらかといえば不快ではない	1	0.78	0.21
不快ではない	2	1.56	0.43
<NA>	341		72.71

D あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

d1 TV で有名な 52 歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	68	77.27	14.5
不快である	16	18.18	3.41
どちらかといえば不快	4	4.55	0.85
<NA>	381		81.24

d2 無名の 52 歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	66	74.16	14.07
不快である	20	22.47	4.26
どちらかといえば不快	2	2.25	0.43
どちらかといえば不快ではない	1	1.12	0.21
<NA>	380		81.02

d3 TV で有名な 52 歳の教授（男）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	41	46.07	8.74
不快である	19	21.35	4.05
どちらかといえば不快	22	24.72	4.69
どちらかといえば不快ではない	2	2.25	0.43
不快ではない	5	5.62	1.07
<NA>	380		81.02

d4 優れた研究業績のある 37 歳の教授（男）に、研究の相談をしたが無視された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	37	41.57	7.89
不快である	41	46.07	8.74
どちらかといえば不快	11	12.36	2.35
<NA>	380		81.02

d5 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	55	61.8	11.73
不快である	21	23.6	4.48
どちらかといえば不快	12	13.48	2.56
不快ではない	1	1.12	0.21
<NA>	380		81.02

d6 優れた研究業績のある 37 歳の教授（女）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	35	39.33	7.46
不快である	20	22.47	4.26
どちらかといえば不快	25	28.09	5.33
どちらかといえば不快ではない	4	4.49	0.85
不快ではない	5	5.62	1.07
<NA>	380		81.02

d7 TV で有名な 52 歳の教授（女）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	43	48.31	9.17
不快である	29	32.58	6.18
どちらかといえば不快	12	13.48	2.56
どちらかといえば不快ではない	5	5.62	1.07
<NA>	380		81.02

d8 TV で有名な 52 歳の非常勤講師（男）に、自分の個人情報を勝手にほかの学生に言いふらされた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	69	77.53	14.71
不快である	18	20.22	3.84
どちらかといえば不快	2	2.25	0.43
<NA>	380		81.02

d9 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	24	26.97	5.12
不快である	17	19.1	3.62
どちらかといえば不快	20	22.47	4.26
どちらかといえば不快ではない	16	17.98	3.41
不快ではない	10	11.24	2.13
まったく不快ではない	2	2.25	0.43
<NA>	380		81.02

d10 無名の 37 歳の非常勤講師（男）に、「お前はバカだ」と言われた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	67	75.28	14.29
不快である	13	14.61	2.77
どちらかといえば不快	7	7.87	1.49
どちらかといえば不快ではない	2	2.25	0.43
<NA>	380		81.02

d11 無名の 37 歳の教授（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	54	60.67	11.51
不快である	22	24.72	4.69
どちらかといえば不快	11	12.36	2.35
どちらかといえば不快ではない	1	1.12	0.21
不快ではない	1	1.12	0.21
<NA>	380		81.02

d12 無名の 52 歳の非常勤講師（女）に、お尻を触られた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	62	69.66	13.22
不快である	18	20.22	3.84
どちらかといえば不快	7	7.87	1.49
どちらかといえば不快ではない	2	2.25	0.43
<NA>	380		81.02

d13 優れた研究業績のある 37 歳の教授（男）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	42	47.19	8.96
不快である	29	32.58	6.18
どちらかといえば不快	13	14.61	2.77
どちらかといえば不快ではない	4	4.49	0.85
不快ではない	1	1.12	0.21
<NA>	380		81.02

d14 TV で有名な 52 歳の非常勤講師（男）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	34	38.2	7.25
不快である	34	38.2	7.25
どちらかといえば不快	18	20.22	3.84
どちらかといえば不快ではない	3	3.37	0.64
<NA>	380		81.02

d15 TV で有名な 52 歳の教授（女）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	32	35.96	6.82
不快である	33	37.08	7.04
どちらかといえば不快	17	19.1	3.62
どちらかといえば不快ではない	4	4.49	0.85
不快ではない	2	2.25	0.43
まったく不快ではない	1	1.12	0.21
<NA>	380		81.02

d16 優れた研究業績のある 52 歳の教授（女）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	85	95.51	18.12
不快である	4	4.49	0.85
<NA>	380		81.02

E あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

e1 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（男）に、研究の相談をしたが無視された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	33	40.74	7.04
不快である	29	35.8	6.18
どちらかといえば不快	16	19.75	3.41
どちらかといえば不快ではない	3	3.7	0.64
<NA>	388		82.73

e2 優れた研究業績のある 52 歳の教授（男）に、態度が悪いと言われ、髪をつかまれ足をけられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	78	95.12	16.63
不快である	4	4.88	0.85
<NA>	387		82.52

e3 無名の 52 歳の教授（男）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	37	45.12	7.89
不快である	27	32.93	5.76
どちらかといえば不快	16	19.51	3.41
どちらかといえば不快ではない	1	1.22	0.21
不快ではない	1	1.22	0.21
<NA>	387		82.52

e4 無名の 37 歳の非常勤講師（女）に、研究の相談をしたが無視された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	38	46.34	8.1
不快である	27	32.93	5.76
どちらかといえば不快	10	12.2	2.13
どちらかといえば不快ではない	6	7.32	1.28
不快ではない	1	1.22	0.21
<NA>	387		82.52

e5 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	10	12.2	2.13
不快である	13	15.85	2.77
どちらかといえば不快	28	34.15	5.97
どちらかといえば不快ではない	17	20.73	3.62
不快ではない	10	12.2	2.13
まったく不快ではない	4	4.88	0.85
<NA>	387		82.52

e6 TV で有名な 37 歳の教授（女）に、「お前はバカだ」と言われた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	52	63.41	11.09
不快である	18	21.95	3.84
どちらかといえば不快	9	10.98	1.92
どちらかといえば不快ではない	2	2.44	0.43
まったく不快ではない	1	1.22	0.21
<NA>	387		82.52

e7 無名の 37 歳の非常勤講師(女)に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	28	34.15	5.97
不快である	25	30.49	5.33
どちらかといえば不快	18	21.95	3.84
どちらかといえば不快ではない	5	6.1	1.07
不快ではない	4	4.88	0.85
まったく不快ではない	2	2.44	0.43
<NA>	387		82.52

e8 TV で有名な 52 歳の教授（男）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	33	40.24	7.04
不快である	9	10.98	1.92
どちらかといえば不快	12	14.63	2.56
どちらかといえば不快ではない	13	15.85	2.77
不快ではない	9	10.98	1.92
まったく不快ではない	6	7.32	1.28
<NA>	387		82.52

e9 TV で有名な 37 歳の非常勤講師(男)に、お尻を触られた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	69	84.15	14.71
不快である	10	12.2	2.13
どちらかといえば不快	2	2.44	0.43
不快ではない	1	1.22	0.21
<NA>	387		82.52

e10 無名の 52 歳の非常勤講師（男）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	30	37.04	6.4
不快である	11	13.58	2.35
どちらかといえば不快	12	14.81	2.56
どちらかといえば不快ではない	13	16.05	2.77
不快ではない	9	11.11	1.92
まったく不快ではない	6	7.41	1.28
<NA>	388		82.73

e11 無名の 37 歳の教授（女）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	64	78.05	13.65
不快である	10	12.2	2.13
どちらかといえば不快	8	9.76	1.71
<NA>	387		82.52

e14 優れた研究業績のある 37 歳の非常勤講師（男）に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	67	81.71	14.29
不快である	10	12.2	2.13
どちらかといえば不快	5	6.1	1.07
<NA>	387		82.52

e12 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（男）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	34	41.98	7.25
不快である	21	25.93	4.48
どちらかといえば不快	15	18.52	3.2
どちらかといえば不快ではない	9	11.11	1.92
不快ではない	2	2.47	0.43
<NA>	388		82.73

e15 優れた研究業績のある 52 歳の教授（女）に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	34	41.46	7.25
不快である	24	29.27	5.12
どちらかといえば不快	19	23.17	4.05
どちらかといえば不快ではない	4	4.88	0.85
まったく不快ではない	1	1.22	0.21
<NA>	387		82.52

e13 TV で有名な 52 歳の教授（女）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	11	13.41	2.35
不快である	16	19.51	3.41
どちらかといえば不快	29	35.37	6.18
どちらかといえば不快ではない	11	13.41	2.35
不快ではない	12	14.63	2.56
まったく不快ではない	3	3.66	0.64
<NA>	387		82.52

e16 優れた研究業績のある 37 歳の教授（女）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	15	18.29	3.2
不快である	6	7.32	1.28
どちらかといえば不快	15	18.29	3.2
どちらかといえば不快ではない	20	24.39	4.26
不快ではない	20	24.39	4.26
まったく不快ではない	6	7.32	1.28
<NA>	387		82.52

F あなたが以下のような体験をしたとしたらどの程度不快ですか。「1 とても不快である」～「6 まったく不快ではない」の 6 段階で評価してください。

f1 無名の 37 歳の非常勤講師(男)に、自分の個人情報勝手にほかの学生に言いふらされた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	45	61.64	9.59
不快である	18	24.66	3.84
どちらかといえば不快	8	10.96	1.71
不快ではない	2	2.74	0.43
<NA>	396		84.43

f2 TV で有名な 52 歳の教授（女）に、無給でその先生の部屋を掃除するように命じられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	28	38.36	5.97
不快である	16	21.92	3.41
どちらかといえば不快	17	23.29	3.62
どちらかといえば不快ではない	9	12.33	1.92
不快ではない	2	2.74	0.43
まったく不快ではない	1	1.37	0.21
<NA>	396		84.43

f3 優れた研究業績のある 37 歳の教授（女）に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	26	35.62	5.54
不快である	28	38.36	5.97
どちらかといえば不快	12	16.44	2.56
どちらかといえば不快ではない	6	8.22	1.28
不快ではない	1	1.37	0.21
<NA>	396		84.43

f4 優れた研究業績のある 37 歳の教授（男）に、「お前はバカだ」と言われた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	45	62.5	9.59
不快である	14	19.44	2.99
どちらかといえば不快	9	12.5	1.92
どちらかといえば不快ではない	3	4.17	0.64
まったく不快ではない	1	1.39	0.21
<NA>	397		84.65

f5 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（女）に、異性の好みを聞かれた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	14	19.18	2.99
不快である	13	17.81	2.77
どちらかといえば不快	20	27.4	4.26
どちらかといえば不快ではない	14	19.18	2.99
不快ではない	9	12.33	1.92
まったく不快ではない	3	4.11	0.64
<NA>	396		84.43

f6 無名の 37 歳の非常勤講師(女)に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	30	41.1	6.4
不快である	33	45.21	7.04
どちらかといえば不快	7	9.59	1.49
どちらかといえば不快ではない	3	4.11	0.64
<NA>	396		84.43

f7 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師 (女) に、「お前はバカだ」と言われた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	43	58.9	9.17
不快である	18	24.66	3.84
どちらかといえば不快	9	12.33	1.92
どちらかといえば不快ではない	2	2.74	0.43
まったく不快ではない	1	1.37	0.21
<NA>	396		84.43

f8 TV で有名な 52 歳の非常勤講師(女)に、就職活動に必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	15	20.55	3.2
不快である	28	38.36	5.97
どちらかといえば不快	15	20.55	3.2
どちらかといえば不快ではない	8	10.96	1.71
不快ではない	4	5.48	0.85
まったく不快ではない	3	4.11	0.64
<NA>	396		84.43

f9 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師 (男) に、卒論、修論、投稿論文などのテーマを無理やり変えさせられた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	29	39.73	6.18
不快である	28	38.36	5.97
どちらかといえば不快	11	15.07	2.35
どちらかといえば不快ではない	4	5.48	0.85
不快ではない	1	1.37	0.21
<NA>	396		84.43

f10 TV で有名な 37 歳の教授 (男) に、自分の書いたレポートの内容を無断で盗用された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	63	86.3	13.43
不快である	6	8.22	1.28
どちらかといえば不快	3	4.11	0.64
どちらかといえば不快ではない	1	1.37	0.21
<NA>	396		84.43

f11 無名の 52 歳の教授（男）に、自分の書いたレポートを淡々と批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	12	16.44	2.56
不快である	13	17.81	2.77
どちらかといえば不快	17	23.29	3.62
どちらかといえば不快ではない	14	19.18	2.99
不快ではない	13	17.81	2.77
まったく不快ではない	4	5.48	0.85
<NA>	396		84.43

f12 優れた研究業績のある 52 歳の非常勤講師（女）に、自分の書いたレポートを大声で批判された。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	43	58.9	9.17
不快である	18	24.66	3.84
どちらかといえば不快	8	10.96	1.71
どちらかといえば不快ではない	2	2.74	0.43
不快ではない	1	1.37	0.21
まったく不快ではない	1	1.37	0.21
<NA>	396		84.43

f13 無名の 52 歳の非常勤講師（女）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	17	23.29	3.62
不快である	25	34.25	5.33
どちらかといえば不快	18	24.66	3.84
どちらかといえば不快ではない	4	5.48	0.85
不快ではない	4	5.48	0.85
まったく不快ではない	5	6.85	1.07
<NA>	396		84.43

f14 優れた研究業績のある 52 歳の教授（男）に、お尻を触られた。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	64	87.67	13.65
不快である	6	8.22	1.28
どちらかといえば不快	1	1.37	0.21
どちらかといえば不快ではない	1	1.37	0.21
まったく不快ではない	1	1.37	0.21
<NA>	396		84.43

f15 TV で有名な 37 歳の非常勤講師（男）に、奨学金の推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	17	23.29	3.62
不快である	27	36.99	5.76
どちらかといえば不快	16	21.92	3.41
どちらかといえば不快ではない	5	6.85	1.07
不快ではない	5	6.85	1.07
まったく不快ではない	3	4.11	0.64
<NA>	396		84.43

f16 TV で有名な 37 歳の教授 (男) に、就職活動で必要な推薦書を書いてもらえなかった。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とても不快である	17	23.29	3.62
不快である	32	43.84	6.82
どちらかといえば不快	14	19.18	2.99
どちらかといえば不快ではない	5	6.85	1.07
不快ではない	3	4.11	0.64
まったく不快ではない	2	2.74	0.43
<NA>	396		84.43

あなたの普段の学校生活について教えてください。

Q5 あなたはふだんどの程度大学に行っていますか。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
ほとんど行っていない	8	1.76	1.71
週に1,2日行っている	73	16.08	15.57
週に3, 4日は行っている	135	29.74	28.78
平日はほとんど毎日行っている	238	52.42	50.75
<NA>	15		3.2

Q6 あなたは普段、履修している授業に出席していますか。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
あまり出席していない授業もあるが、半分以上の授業にはほとんど出席している	122	26.93	26.01
ほとんどの授業に出席していない	5	1.1	1.07
ほぼすべての授業にほぼ毎回出席している	307	67.77	65.46
出席している授業は一部だけで、半分以上の授業にはほとんど出席していない	19	4.19	4.05
<NA>	16		3.41

Q7 あなたは大学での研究や勉強に興味を持てますか。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
どちらかと言えば興味を持ってない	28	6.17	5.97
どちらかと言えば興味を持てる	145	31.94	30.92
どちらとも言えない	34	7.49	7.25
興味を持ってない	7	1.54	1.49
興味を持てる	240	52.86	51.17
<NA>	15		3.2

Q8 単位は順調に取れていますか。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
とれていない単位が結構ある	22	4.86	4.69
ほとんど単位はとれていない	2	0.44	0.43
少し取れていない単位もあるが、おおむね順調に取れている	96	21.19	20.47
単位は順調にとれている	313	69.09	66.74
単位をとる必要がない (聴講生、博士課程の院生等の中には単位の要らない人あり)	20	4.42	4.26
<NA>	16		3.41

Q9 あなたは将来、研究職 (大学教員や研究所の研究員など) に就きたいですか。

	Freq	Valid (%)	Total (%)
すでに研究職に就いている、内定している	12	2.64	2.56
まだ決めていないが、研究職にも興味がある	139	30.62	29.64
研究職に就きたい	91	20.04	19.4
研究職に就く気はない	212	46.7	45.2
<NA>	15		3.2

**どんな要因がアカデミック・ハラス
メントを不快にするのか 2023**

京都大学文学部社会学研究室 2023 年
度社会学実習 報告書

2024 年 3 月発行

編集・発行： 太郎丸 博

京都大学文学部社会学研究室

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
